
B A S A R Aで足軽大将やっていました

アベレージ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BASARAで足軽大将やっていました

【Nコード】

N0815U

【作者名】

アベレージ

【あらすじ】

マンホールの穴から異世界に落とされた少年。一度目は日本の戦国時代によく似ていると見せかけて、名前が同じだけの人外が跳梁跋扈する世界。

そして二度目は――。

落下から始まる、とある男子の異世界冒険譚。

タイトル詐欺にご注意ください。

こうして彼はやってきた（前書き）

本作品は主人公以外でBASARA要素が出てくることはほぼありません。したがって、BASARAのキャラが本編に出てきたりすることはありません。

こんなの認めらんねーよ！という方は【戻る】をクリックして下さい

こうして彼はやってきた

轟々と、耳下で唸りを上げる風の音。目の前に広がる真っ白な雲海を突き抜け、どこまでも広がる青色にしばし見とれる。諦観と望郷の思いを籠めた瞳で。

——さて、どうしたものか、と重力の赴くままに考える。

一度目と違い、今の自分なら例えこの距離でも、ましてや下が海であることも吟味して、まあ頑張れば死ぬことはないだろうという確信はある、あるのだが——。

「はあー。パラシュートなしのスカイダイビングキメて死なない自信もてる日が来るなんて……」

随分非常識に染まってしまったものだ。日本で平凡な中学生をやっていたのが遠い遠い昔の出来事のようにだ。

——あれから五年しか、経ってないはずなんだけど。

まあ、しかしながらである。死なない自信があろうとなかろうと、落ちると言う感覚に付きまとう気持ちの悪さはどうしようもない。黒板をひっかく音を気持ち悪いと感じたり、台所でGを見たときの恐怖のような、生理的な嫌悪感のようなもの。

それでも『空』から『落ちる』という行為、いやさ非常識な行為には随分と耐性がついたものである。なんていってもこうして冷静に思考にふけることができているんだから。

—— 前回、あの『世界』に落とされた時分には随分と羞恥を晒してしまったものである。

しかし、工事中のマンホールに誤って落ちたら空の上だった、なんて状況において冷静なままでいれる中学生が日本にどれだけいるのか。

恥かしながら自分の場合は穴という穴からいろんな汁やら具を垂れ流してしまった。実に黒歴史である。パラシュートなしのスカイダイビングをした場合の人類の生存率などというものは考えるまでもないのだから。

落ちた場所に親方様が居なかったらと思うと今でもぞつとする。

というかだ、空から降ってきた数十キロもあるたんぱく質の塊であるところの人間を気合いで受け止めるあの人の非常識っぷりの方が凄い。すごいもっさりした兜にちよび髭の熱くるしいおっさんが『あの』武田信玄だと知った時には心底ぞつとしたものである。

しかし今こうして二度目の空中遊泳を経験しているのだが、未だなぜ自分がこのような目に逢っているのか理解できない。ドジな神様の手違いか、それとも悪魔の気紛れか。どっちにしろ今のところ自分の前にそれを証明してくれるような存在が現れたことはない。出てきたならば寸分違わず二十七つにばらしてやるのに。

いやしかした、まさか二回目があるとは思っていなかった。

なんでもない一日の始まり。朝起きて、家族と朝飯を食べて、家を出て、学校に行く途中——。

訳の分らぬまま人外が跳梁跋扈する世に落下して（自分はあれを戦

国時代とは認めない）。家族も友人も、初恋の吉崎ちゃんもない世界に放り出され、怒り、嘆き、諦め、生きる決意をして。そうして骨をうずめる覚悟までしたというのにこの状況である。

忍者のお姉さんの素敵な胸元を二度と拝むことが出来ないと考えるだけで軽く三度は絶望できそう――

――あ。

――轟音と共に水柱が立ち上り、そしてこの世界『ユーストフェリア』に一人の男子が降り立った。

名を『多田^{ただ}満頼^{みらい}』という。

英雄たちの群雄割拠する世界を経てやってきた、後の世で勇者と称えられた男は、未だこの地にて知られることはない。

こうして彼はやってきた（後書き）

というわけで、一度目のトリップでBASARA世界でもまれた主人公が、次はファンタジーな世界に紛れこんだら、という感じの話です。

二次創作といえるかどうかは微妙なところですが、よろしく願います。

御胸崇拜、多田満頼見参！（前書き）

ちなみに作者はゲームの2と英雄外伝、3のみプレイ済み。テレビ版は2の総集編しか見ていません。

御胸崇拜、多田満頼見参！

空から落ちているという状況にもかかわらずのんびり回想にふけていたミライは見事に頭から海面に衝突した。顔から着水したせいで衝撃はダイレクトに顔面へ伝わり。

—— がぼっ、がぼがぼがぼえっ！？（うぉーっ、もしかしていま気絶してた！？）

数秒の空白の後、がぼっと目を開き、自分の体が海面から随分離れた位置にあることに気づいて驚く。

と同時に顔面を襲うあまりの痛さに海中で顔を抑えてのたうち回る。

—— けれど、それでも被害は顔面への打撲と鼻血のみ。果たしてパラシュートなしのスカイダイビングを敢行して、てへっ、鼻血でちゃった（笑）と言える人類がどれだけいるだろうか？ 否、それはもはや人類にあらず。

別に彼は凄い魔法を使っただけでも神様からチートな力を貰っただけでもない。ただの中学生でしかなかったミライは血を吐き出すような鍛錬と幾多の修羅場を潜り抜けてたどり着いたのだ。英雄たちが覇を競い合う土俵。ただ己の肉体のみで世界の法則を覆す領域へと。

——沈むに任せていた体を持ち上げるように遠くなった水面を目指すミライ。

いやしかし思い返せばその鍛錬も結局は現実逃避の一環だったんだよな。

当時、見知らぬ土地、戦の絶えない地に一人投げ出された自身の、荒れに荒れていたときのことを思い返して溜め息と共に気泡を漏らす。

随分と恥ずかしいことを言っていたような気もするが精神衛生のため、そつと蓋を閉じて心の奥に仕舞っておく。

ミライが空から降ってきた衝撃で潮の乱れる海中を、考え事しながらすいすいと泳いで海面へ顔を出す。

「ぷはあつ、空気がうまい！」

空気を腹いっぱいに取りこんで、少し落ち着いたミライはあたりへと視線を向ける。

取り敢えず、見える範囲に陸の影はないな。……となると、あのでっかい船に乗せてもらうしかないか。

あー、でも海賊みたいなやつらが乗ってたらどうしようかなー？ あんまいい思い出ないんだよなあ船って。まあ最悪陸まで運んでもらえるなら後はどうとでもなる、のか？ ここつて、どういう世界なんだろう。前みたいな難易度の高い世界だったらいやだなー。正直どう頑張つて臍目で見たとこでロボットにしか見えない時代背景すら置き去りにした浪漫武装した武将とか、リアルに地獄か

ら返ってくるような怖いやつとはもう戦いたくないからなあ。

徐々に近づいてくる船（おそらく幌船というやつだろう）の進路に割り込むように泳いでいくミライ。目の前まで迫った船の船首に飛びつくように掴みかかり、握りつぶしてしまわないように、微妙な力加減で指を食いこませながら船体を登っていく。

——落ちてるときには気付かなかったけど、装備が綺麗になってるな。腹部に空いていたはずの大きな穴はふさがっているし、損壊した左手の籠手も新品同然だし。どうなってんだろ？ 神様とやらの粋な計らいかねえ、どうでもいいけど。
お、ようやく、てっぺんか。

「よっこらせ」といいながら両手を縁にかけて一気に体を持ち上げ、くるっと一回転するようにして甲板に着地する。

「あー、疲れた。頭くらくらする」

推定標高三千メートルからの生身のダイブに海流が複雑に入り乱れる荒れた海を着衣（鎧）水泳。

「……さすがに、無茶しすぎたか？」

——ていうか、本当によく死ななかったな自分。熱血師弟のどつきあいに巻き込まれて死にかけてたところが懐かしいわ。

膝に手をついて溜め息をこぼすミライは、脱力したように力を抜いてズルズルと壁にもたれ込む。

——ん？　なんでこんなに静かなんだ？

船に登る時、甲板の上に複数の気配を感じていたミライは疑問に感じつつ顔を上げて「なんぞこれ？」とさらに疑問を浮かべる。

遠巻きに息を飲んでおっかなびっくりな様子でこちらを窺う複数の人。

えーっと、どう反応すればいいんだろこれ？　とミライも腕を組んで頭を捻る。

「——　すまない、通してくれ」

根比べな様相を呈してきていたその空気を打ち払うかのように凜とした声が響いた。

ミライがそちらへと視線を向けると人垣を割るようにして一人の女性が姿を現す。両手に手首までを覆う手甲をはめ、袖の短い、動きやすさを重視した黒色の和服のような服装。帯の変わりに皮のベルトが巻かれており、対になるように二振りの剣が下げられている。燃えるような赤い髪は首下で切り揃え。スラリとした体躯に切れ長の眼をした『絶世の』と冠するに値する美女。何よりおっぱいがでかいのがいい。おっぱいイズジャスティス。

ほほおーと感心したように溜め息が漏れるのも仕方ない。

あれはD、いやEくらいはあるか？ うーむ、なんとも想像力を沸き立てさせるお胸様だろうか。すばらしいっ！

そんなあまりにも堂々と視線を釘付けにしているミライに戸惑うように眉を寄せる女性。

「えっと、そのようにじっくり見られては少々恥ずかしいん、だが？」

両手で胸元を掻き抱いて、恥ずかしそうに頬を染める美女。掻き抱いた両手に押しつぶされるように形を歪めるおっぱい。折り重なった着衣の胸元から覗かせたるは夢の出入り口。

オウフ！ と嬉しい悲鳴を上げたミライは天を仰ぎ、ありがとございますと両手を合わせた。

むー、と眉を寄せていた美女がおもむろに溜め息を吐き出してミライに歩み寄る。

「少し、いいだろうか？」

それを察して美女に向き直り、しかし、ここがどんな場所だか知らんがやっぱり言葉は通じるんだなー、と心の中でこっそり驚くミライはそれを表情に出さずに、よっこらせっと立ち上がり視線を合わせる。

「はいはいっ、俺も聞きたいことあるんで何でも聞いて下さい」

少し目を見開いた美女はそうか、と一つ頷き考えを纏めるように一拍おいて口を開く。

「まずは名前を聞いてもいいだろうか？」

「多田満頼って言います」

「タダミ、ライ？」

「ああ、ミライ・タダって言った方がわかりやすいのかな？ まあいいか。ミライでいいですよ」

「うん、そうか、私はアリゼルだ」

「そうですか、よろしくアリゼルさん」

ミライミライと小さく呟いたアリゼル。

「それではミライ、君はどこから来たんだ？」

ああー、何て答えよう？ 正直に言っているのかな。でもこの世界の常識つてのがイマイチ分かんないしなー。まあいっか！

「——空から」

上を指差しヘラリと笑って見せる。

さて、どうくるかな？ と思っていたミライだったが、アリゼルは少しばかり考えたあと納得したように頷いた。

え？ 納得したの？ とギョツとするミライ。この世界つてもしかして空から落ちてても死なないようなやつばっかなのか？ と自分を棚上げにして戦々恐々とする。

「そうか、君は飛空艇から落ちて——」

「あつ、ちよつとタンマ」

「たんま？」

「悪いけど、もう無理、後はお願いしますねアリゼルさん」

「何を、っ？」

電池切れだわ、もう無理。体力限界。せめて、最後はあのおっぱいに……。

最後の力を振り絞り、アリゼルのおっぱい目掛けて気絶するミライだった。

御胸崇拜、多田満頼見参！（後書き）

主人公はおっぱい魔人。

女性の使用済みベッドが妙に気になりました

「——んあー、よく寝たっ！」

んがーっと起き上がったミライは辺りを見回し首を傾げる。

ん？ どこだここ？ 確か、気絶して、そんで、……おいおい
なんだよこのベッド滅茶苦茶いい匂いじゃねーか！ ひゃっほー！

——ガチャンと音をたてて扉が開き、タオルを手に持った
アリゼルが姿を見せ、

「あ、ミライ、目を覚まし——」

ベッドに倒れ込んだまま顔を押し付けてクンカクンカしているミライ
を見つけて固まるアリゼル。

「な、何をしているかーっ！」

再起動を果たしたアリゼルはミライの首根っこをひっつかみベッド
から引き剥がす。

「おお、アリゼルさん」

「き、君は、い、一体なにを！？」

「いやーベッドの匂い嗅いでました」

てへつと笑うミライを見て頬を染め狼狽えるアリゼル。

「そ、そのベッドは確かにさっきまで私が寝ていたが、う、ううー、たしかに風呂には入って無かったから汗かいてたが」

「いえいえ非常にいい匂いでした」

きりつとした表情をするミライに、ひえーっと言いながら顔を真っ赤に染めて拳動不審になるアリゼル。

な、なんだこの可愛い生き物は……！　こ、このままお持ち帰りしてもいいだろうか？　いや、落ち着け落ち着け。よし落ち着いた。今の自分には帰る家はないんだから、まずは帰る家を確保してからちゃんとお持ち帰りするべきで。

「う、うほんっ！　と、ところでだミライ、もう体は大丈夫なのか？　船医はただの気絶だと言っていたのだから？」

必死に話を変えようとしている顔の赤いアリゼル。

初めてシモネタを振られた中学生みたいな反応をするアリゼルを見て、なんかもう微妙に優しい気持ちになってしまったミライは素直に乗ってやることにする。

「ええ、もう大丈夫ですよ。アルさんをお願いして正解でした」

「ア、アルさんっ？」

「ん？　アリゼルさんだから縮めてアルさん。もしかして愛称で呼ばれたりするの嫌でした？」

「えっ！　べ、べつにいやなわけではなくて。……えっと、その、そっという風に呼ばれたことあまりなくて」

今日一日で一年分くらい赤くなっただんじゃね？　と言いたくなるくらいに頬を染めて視線をキョドらせるアリゼル。

初対面ながら、なんか微笑ましさを通り越して心配になってきたミライ。いや、さつきから微妙に思ってたんだが、この人チヨロすぎるだろ、初対面の男に褒められたり愛称で呼ばれたくらいでこんだけ照れるって。

「……アルさん、俺が言うのもなんだけどさ、もう少し男に耐性つけた方がいいと思いますよ？」

凄く心配そうな瞳でベッドに腰掛けたまま見上げてくるミライの言葉に動揺したアリゼルは、少し深呼吸して気持ちを落ち着ける。

「それよりもだっ！　そ、そろそろ君の事情について話してもらえないか。今の君は一時的に私預かりとなっているが、船長から詳しい事情の説明も求められているのでな」

真面目な表情になったアリゼル。先までとは違う冷たい空気を感じ取ったミライは、ほうほうと感心したような笑みを浮かべる。

英雄たちには遠く及ばないまでも歴戦の気配を臭わせるアリゼルの評価をこっそり上方修正。『ちょろいおっぱい』から『なかなか出来るけどやっぱりちょろいおっぱい』へと。

「ふーむ、アルさんとはさつきであつたばかりながら色々と貸しがあるみたいですから、話すのはやぶさかじゃないんですけど」

腕を組んで唸るミライ。

「まあいいか。突拍子もない話だから信じるかどうかはアルさんが判断してくださいね」

一転、試すようにニヤリと笑みを浮かべるミライに身を引き締めるアリゼル。

「——実は俺この世界の人間じゃないんですよ。ああ、わかりますよ、何言っただお前っていう気持ちは。なんせ俺ですら色々諦めるのに三年くらいかかりましたし。」

続けますよ？ それでですね、俺が俺の最初の故郷、生まれ育った場所で十三年間を過ごしたある日、俺は世界からこぼれ落ちたんですよ。そこにどんな理由があったのか、なんで俺じゃなきゃ駄目だったのか、それは今も分からないし、別にもう今更どうでもいいんですけど。

で、こぼれ落ちた俺がたどり着いたのは全く知らない場所ですて、まあなんだかんだやりながらそこで五年の月日を過ごしたんですが、まあ運が悪くどえらい強い奴とやることになって、結果的に負けちゃって、そんで気が付いたら今度はこの世界に落ちてきてたわけですよ。信じられます？ 今の話、全部ノンフィクションなんですよ」

笑えるったらありやしないよ、ほんとに。こうやって言葉にしたらカップラーメン作るより短い時間で喋れるような人生なんだもんないーとニヘラと笑みを浮かべ、

「そうか。なるほどな。確かに信じがたい話ではあるが、私は信じよう」

はっ？ と驚きの表情を浮かべるミライ。

「え？ そんな簡単に信じるの？ こんな馬鹿げた話を？ 喋ってる俺自身がそんな阿呆なっておもっちゃうのに？」

「ミライ、私はな、冒険者なんだ」

ん？ 何の話だよと訝しむミライ。

「まあ聞け。冒険者になる人間はな、二種類に分けられる、というのが私の持論だ。ひとつは現実を追い求めるもの。そしてもうひとつは夢を追い求めるもの」

そう言っ言葉を区切り、ミライの目を見つめる。

「私はな、新しいものが見たいから、見たことがないものを見たくて冒険者になった。今ではそればかりにかまけていることはできなくなってしまったが、それが私の本当。今の私が私を形作っている根っこの部分だ。だから、私はお前を信じる。たかが違う世界から来たという程度、その程度の荒唐無稽、受け入れることも出来ずに冒険者などではしない」

そういつてにやりと微笑むアリゼルの姿に強く魅せられる。

やばいこの人、めっちゃめっちゃイイ女だわ。改めて見てみれば鋭い目つきも可愛く見えてくるのだから不思議なものだ。思わず惹きつけられるようにアリゼルと視線を交わし。
フツと、アリゼルから視線を外した。

「そ、それで、ミライも何か聞きたいことがあつたんじゃないのか？」

おお、そうだったと掌に拳をぼんとあてる。

「アリゼルさん、結婚を前提にお付き合いください」

四つ指をついて頭を下げるミライをポカンとした表情で見、

「~~~~~！ き、君は、恥ずかしいこと言っの禁止だ！！」

顔を真っ赤に染めてきよどるアリゼル。

——これが後の第一夫人にして、剣姫と呼ばれたアリゼ
ルと、その夫であるミライの初めての出会い。これから始まる愛の
序曲と

「ミライ、いい加減にしろ」
「はいすいません」

女性の使用済みベッドが妙に気になりました（後書き）

あと二話くらいは船の上での話が続きます。
いつになったら戦闘シーンかけるのやら。

閑話（前書き）

ーから三話までのアリゼル視点。

タイトル変更（2011/10/17）

閑話

——客室でうたた寝をしていたアリゼルは、突然船を襲った振動に飛び起きた。

「っ?」

体の芯から揺さぶられるような轟音。まるでドラゴンの咆哮を間近で浴びせられたときのようなその衝撃に、一体何事だと振り向いた先、窓の向こうに映る光景に彼女をしてしばし呆然とさせられる。なぜなら、天を突くかのような、巨大な水柱が上がっているのだから。

目算でおおよそ五百メートルほど離れているにも関わらず、ここまで伝わるほどに異様な光景。

「……何だあれは?」

驚愕の表情をすぐに鎮めたアリゼルは、ベッドの脇に立て掛けていた二振りの剣を腰に差してから部屋を出る。

廊下に出た彼女は慌ただしく人が駆けまわる様子に眉をしかめる。まずは状況を把握したい。甲板にいた人間ならあれが起きたときの事を何か見ているかもしれない。それにあれがモンスターの仕業だったのなら。

ぎゅっと剣の柄を握り瞳を険しくしたアリゼルは、混雑した廊下を縫うようにして歩き出した。

先ほどの衝撃で海が荒れているのだろう、揺れの激しい船内を抜けたアリゼルはようやく外へと出て、目の前に出来た人垣に眉をかめる。

どこか脅えたようにヒソヒソと小声で喋る内容に耳を澄ませてみれば、

『あれは伝説の海神様か？ さっきの柱も海神様の仕業か？』

『そんなバカな話』

『でも海の中から出てきたぞ？ こんな海のと真ん中から出てくるなんて』

『でも人間にしか見えんぞ？』

そんな話し声が聞こえてくる。

—— モンスターではないのか？

ふむ、と一つ頷いたアリゼルは「すまない、通してくれ」と言いながら人垣を抜ける。

どうすればいいのか判断に困っていた彼らは彼女なら、とあっさりと道を譲り、しかしどこか怯えるような、畏負のこもった視線でその後ろ姿を見送った。

人垣を抜けた彼女は視線を感じそちらへ顔を向ける。

——年の頃は十七、八くらい、だろうか？

体にフィットするような黒いジャケットと両手の肘の先までを覆う、赤い紋様の走る黒いガントレット。

首もとまである黒色のインナーの上。腹部から腰回りに赤黒いボデイー・アーマーが。

ズボンは白く、膝下までを覆うように、ガントレットと同じ素材の重厚な黒い金属製の足鎧。

そして、黒い髪に黒い瞳。

全身黒ずくめなうえに、この世界では滅多に見ない黒髪黒目。その純粹な黒い色は、常世の闇からやってきたと言われても頷けそうだな、と考えた所で、件の男が妙に感心したように頷いていることに気づき、その視線がどこに向かっているのか理解したアリゼルは戸惑う。

負の感情。

嫉妬や侮蔑、怨恨、恐怖、畏負、などと言ったものを向けられることには慣れていた。

しかし、純粹な賞賛と慈しみ？ と憧れ？ のこもったような視線を向けられるなど初体験のアリゼルは、その妙に熱を持った視線の背筋を奮わすようなゾクゾクした感覚に戸惑い慌てて男の視線を遮るように自分の胸元を隠す。

「えっと、そのようにじっくり見られては少々恥ずかしいん、だが？」

そういうと、男は悶えるように感嘆の声を上げいきなり空に向かって拝みだす。

こ、この男はいったい何をやっているのか？ と初めからペースを乱されたアリゼルは恥ずかしさも相まって眉を寄せてしまう。しかし、このままでは話が進まないと感じた彼女は溜め息を吐き出して、男のそばへと歩み寄る。

もちろん油断など欠片もしない。いつでも腰の武器を抜けるように。

「少し、いいだろうか？」

アリゼルが静かに問いかけると、男はよっこらせつと呟きつつ立ちあがる。

「はいはい、俺も聞きたいことあるんで何でも聞いてください」

まさかすんなり話を聞けるとは思っていなかったアリゼルは、男の気楽な様子を見て少し驚く。しかし、どちらにしろ話を聞かなければ、判断材料が少なすぎる。まずは――、

「まずは、名前を聞いてもいいだろうか？」

「多田満頼って言います」

「タダミ、ライ？」

「――。ああ、ミライでいいですよ」

「そうか、私はアリゼルだ」

「そうですか、よろしくアリゼルさん」

ミライか。何か独特な響きの名前だな。と口に馴染ませるように二度呟く。それから顔を上げたアリゼルはミライに向けてどこから来たのか問いかけた。

それを聞いて難しい顔をするミライ。

この反応は、何か隠さなければいけないようなことが？ と疑念を抱くアリゼルに、急に頬を緩めたミライが片手を掲げ上を指差し「空から」と答える。

空から？ 空から落ちてきたと行くことか？ だがどうして、いや、この海域はたしか飛空艇も飛んでいたはず。ということは彼はそこから？ 海面にぶつかる前に何らかの方法（格好を見るにおそらく同業者だろうから）を使って速度を緩めたということか？

「そうか、君は飛空艇から落ちて――」
「あつ、ちよつとタンマ」

そう言いかけたアリゼルの言葉を遮り、体をぐらつかせるミライ。タンマ？ という意味だ？ と問いかける間もなく言葉を紡ぐミライ。

「悪いけどもう無理、後はお願いしますアリゼルさん」

そういつてガクンと力の抜けた様子で自分の方へと倒れてくるミライを慌てて受け止めるアリゼル。

「っ！ ミライどうした！ ……ミライ？」

アリゼルの胸元に顔をうずめて安らかな顔で寝息を立てるミライの姿に、力が抜けたように溜め息を零すアリゼル。

アリゼルが襲われたように見えた、後ろで様子を窺うように取り囲

んでいた船員たちが騒ぐのを視線で落ち着かせたアリゼル。そんな彼女のもとへ、船員たちと同じ青を基調とした服を着た、巨体の老人がやってきて、彼女を見下ろす。

「いよう、アリゼルの。さっきの爆発の原因はわかったのか？」

口元に蓄えた立派な髭を撫でつけながら、アリゼルの胸に抱えられているミライを見て低く問いかける。

「いや、まだまだよ船長。話を聞く前にこうなってしまったからな。出来れば医者を呼んでももらえないか？ ただの気絶だと思うが、念のためだ」

「ふん、いいだろう、てめえらギムーを呼んで来い。——
おい、アリゼルの。どこへ行く？」

後ろに立っていた船員に指示を出した船長をしり目にミライを横抱きにしたアリゼルが立ちあがる。

「私の部屋に運ぶ。船医の方は私の部屋に来てもらうようお願いしてもらえないか」

「ふん？ アリゼルの。たった二、三言話ただけのお前がそこまでする必要はないだろ？ ただの気絶なら船倉にでも放り込んでおけばいい」

「確かにな」

そう呟いたアリゼルはしかし、考えるように沈黙し、だがと続けた。

「——彼は、悪いやつではない、たぶん。私の勘だがな」

フツと笑みを浮かべるアリゼルに、キョトンとする船長。

「——がははは！　なんだそりゃあつ、ただの勘か！！
だが、Sランク冒険者の勘だってんなら信じるには値するか。剣鬼殿に見初められるなんて、運が良いガキだ。いいだろう、船医はあとでお前の部屋に行かせる」

「恩に着る」

「だが、後で俺のところに報告に来い。さっきの馬鹿騒ぎで予定が狂っちまってんだからな」

「了解だ、船長」

ミライを抱えたアリゼルは自分の泊まる客室へと戻り、ベッドに寝かせる。全身びしょぬれなので服を脱がしてしまいたいところだが、それは羞恥心が邪魔をして出来ないで、取り敢えず濡れたタオルで頭や胸元をぬぐってやり、塩を取ってから乾いたタオルで水分をふき取る。

「……よくみたら、結構、可愛い、かも」

顔をぬぐってやり、ふと、眠ったままのミライの顔に視線が行ったアリゼルはポツリと眩きを漏らす。

「——し、失礼します。船長に言われてきました、船医のギムーです！　……あの、どうしたんですか？」

おっかなびつくり部屋にやってきた船医は、拳動不審な様子で慌て

ふためくアリゼルの姿を見て首をかしげるのだった。

ただの気絶みただから安静にさせておけばすぐに治ります、と言つて慌てて部屋を後にした船医。使用済みタオルを持つて部屋を出たアリゼルは、船員を捕まえて新しいタオルをもらい部屋に戻る。

扉に手をかけたところで、部屋の中から人の動く気配を感じたアリゼル。ミライが目を覚ましたのか？ とノブを回して部屋へと入り。ベッドの上でうつ伏せのまま思いつきり臭いを吸いこんでいる姿を見て、理解できずに一瞬固まり、徐々に顔に集まる熱を感じて再起動したアリゼルは叫びを上げながらベッドに顔をくつつけているミライの首根っこを掴んでひきはがす。

「おお、アリゼルさん」

とまるで悪びれる様子もなく目を丸くしているミライ。

「お前は、い、一体なにを！」

「いやー、ベッドの匂い嗅いでました」

と言つて微笑むミライを見てさらに羞恥心が刺激される。

さっきまで自分が寝ていたベッド。航海が始まってから丸一日この部屋を使っているからベッドに自分の臭いが染み付いていても仕方

ないかもしれないがそんなに気になるほど臭かったのだろうか？
でも自分では自分の臭いはわからないしもしかしたら――。

「いえいえ非常にいい匂いでした」

真面目な表情をしながらそんなことをのたまうミライの姿に真面目な顔をすればかつこいいかもしれないと混乱極まるアリゼル。いやいや私は何を考えて、いやしかし男性から良い匂いなんて言われたことないし、むしろ怖がられてるし、私に触ったからって問答無用で斬り伏せたりしないし、私は男嫌いなわけではないから女の子が好きなわけではないから、むしろ男の人とお付き合いとかしてみたいって思ってるんだ、でもつまりは好きな人が出来てからじっくりと順序を経てから交際、はっ！ 私はいったい何を！？ いかん、落ち着かなければっ、し、深呼吸して、よし、もう大丈夫！

「う、うほんっ！ と、ところでだミライ、もう体は大丈夫なのか？ 船医はただの気絶だと言っていたが？」

何故か妙に優しい瞳で見られている気がするんだが、というか恥ずかしいからそんな目で見えるな！ と全然落ちつけていないアリゼル。

「ええ、もう大丈夫ですよ。アルさんをお願いして正解でした」

「ア、アルさん？」

誰のことだ？ いやまさかいやいやまさか、

「ん？ アリゼルさんだから縮めてアルさん。もしかして愛称で呼ばれたりするの嫌でした？」

わっ、私のことかーっ！？

「えっ！　べ、べつにいやなわけではなくて。……そ、そういう風に呼ばれたことあまりなくて」

血塗れの剣鬼、殺戮^{ソードタンサー}の剣舞、鉄の乙女、人の皮を被った鬼、愛^{ベル}を捨て力を渴望^{ケル}せし者、とかなら言われ慣れてるけれど、男の人から愛称で呼ばれたことなんか今まで一度もなかったし、それ以前に男の人とこんなに会話したことって今まで一度もなかったし、私怖がられてたから、すごく怖がられてたから、

「アルさん、俺が言うのもなんだけどさ、もう少し男に耐性付けた方がいいと思いますよ？」

そんなこといわれたって喋りかけてくれる男の人がいなかったのだから仕方がない。

「それよりもだっ！　そろそろ君の事情について話してもらえないか。今の君は一時的に私預かりとなっているが、船長から詳しい事情の説明も求められているのでな」

このままでは埒がいかないの、無理やり思考を切り替える。結局終始ペースを握られていたから、ミライのことについて何も分かっていない。このままではいかな、ということとこれ以上の脱線は許さないと少しだけプレッシャーを込める。

——それに返ってきたのは楽しそうな笑み。

アリゼルは気を引き締める。少しとはいえ、世界に三人しかいないSランク冒険者のプレッシャーを浴びて平然と笑っていられる者がどれだけいるか？　そこまで己惚れているつもりではないが、おそ

らくそれほど多くはないはず。一体彼は――。

考えるアリゼルに向け、信じるかどうかは己れで判断しろと、そう
言つて笑みを深めるミライ。

――そして、彼が語つたのはまさに荒唐無稽な話。故郷を
意味も分からぬまま放逐された少年。愛する者がいたかもしれない、
血を分けた肉親や、情を交わした友、その全てを零れ落として零れ
落ち、知らない地で生きなければいけないということはどういうこ
となのだらう。

彼は語る。万感の思いを込めて、五年の月日を過ごした、と。細部
を語ることがないのは何故か？ もう戻れないことを理解している
から？ 彼は敵と戦つて敗れたという。そこにどんな感情がこもつ
ているのか、私には分からない。深すぎて理解することが出来ない。
そして彼は再び零れ落ちた、この世界『ユーストフェリア』に。

彼は言う、信じられるか？ と。

そう言つて笑う彼の顔がまるで迷子になつた子供のように見えたか
ら。

彼女は信じる、ではなく信じようと断言して見せる。彼の語つた荒
唐無稽な話ではなく、それを語る、今ここにいる彼のことを。

それにその程度の話、荒唐無稽だと否定するにはもったいなすぎる
だらう？

私は冒険者なのだから、見たこともないものを追い求めることを是
とした存在なのだから。

誰もが怖がって避けるような、友人に言わせれば抜き身の剣のような笑みで彼を受け入れてやろう。

彼が悪いやつではないと私は確信しているのだから。女の勘というやつは馬鹿にしてはいけないのだから。

そう告げてやると、まいったな、と小さく呟いたミライがはにかむように表情を歪める。

それを黙って見ていたアリゼルだったが、なにか分からないが妙に背中がむずむずするような空気に耐えきれずミライから視線を外すように口を開き、

「そ、それで、ミライも何か聞きたいことがあったんじゃないのか？」

と尋ねると、ポンと手を叩いたミライが、

「アリゼルさん、結婚を前提にお付き合いください」

などというものだから、結局アリゼルは顔を真っ赤に染めてしまい、しかし、さっきまでとは違いそれが嫌だとは思わなくなっていることに、その気持ちの変化に彼女が気付く日はくるのだろうか？

閑話（後書き）

ヒロイン候補その一、アルさんの視点でした。

ちなみにミライの服装は基本は幸村の服装を真っ黒にしたような感じです。そのうえで裸ジャケットを受け付けられなかった彼は黒のハイネックつぽいインナーを着てます。

今後のことについて話し合ってみた

正座させられたまま、しかし全く懲りていないことが窺えるように口元を緩めている彼の姿を、不満げな表情で見下ろすアリゼル。

いやあ和んだ和んだ。こんだけ和んだのはおっぱい忍者を佐助と慶二と一緒に視姦したとき以来かなあ？ あれからずっと殺伐つてたからなあ。なんか、こう、ぐつとくるんだよね、アルさんの羞恥にまみれた顔って。俺ってそっちもいけたんだな。なんか登山家の気持ちが分かってきたわ。山があるから登る。理由も嗜好も関係ない、そこにおっぱいがあれば挑まずにはいられない！ なるほど真理だ。

疲れたように溜め息を吐き出し、組んでいた腕を解いたアリゼルはベッドへと腰掛ける。

「……会って間もないながらに、君という人物が大体分かった気がする」

「おおう、それは上々。俺もアルさんがすごくカッコ可愛いってわかりましたよ」

「うつ、そ、そんなことよりだ。ミライはこれからどうするつもりなんだ？」

ミライの話が本当なら、彼にはこの世界に頼れる者も、その日を暮らす資金を得る手段すらままならないはず。いや、自惚れるわけではないが。たった一人、自分を除いて、な訳ではあるのだが。

「うーん。まだなんにも考えてない、って言うか、ここがどんな場所なのかも知らないわけですから。まあアルさんみたいに話の通じる人がいるならなんとかなるかなって」

そう言っただけで、その笑顔に笑ってみせるミライ。

その笑顔に視線が惹きつけられる。儚い、というのか、今すぐどこかへ消えてしまいそうな気にさせられる不安定な笑み。

——それは、なんだかわからないけど、凄く嫌だな、とアリゼルは思った。

そうか、と小さく呟いたまま考えこむように口を閉ざしていたアリゼルが顔を上げる。

「だ、だったら、だな——」

と言っただけで何もかもじもじするアリゼル。
うん？ とその様子に首をひねりながらも続きを待つミライ。

すー、はー、と深呼吸して気持ちを落ち着かせたアリゼルは一気に吐き出すように口を開いた。

「わわわ私と一緒に来たらいい！ あ、いや、じゃなくて、私と一緒に来ないか？ こうしてミライの事情を知る事になったのも何かの縁だし。そ、それとこれは私的な理由なのだが、君とお喋りするの、なんとというか、……とても、楽しかった、から。だからあの、君さえよければ、なんだが？」

僅かに朱色に染まった頬。両手は祈るように胸元できつく握りしめ。同じ高さにあるミライの顔をのぞき込むように、不安そうな、されどどこか期待するように上目遣いに尋ねるアリゼル。

——ゴクリ、と。生唾を飲み込み、その子犬のような視線から距離を取るために、露骨にならない程度に体を引きつつも内心で恐れおののくミライ。

おそらくというかむしろ絶対に今のアルさんの言葉が色々足りていなかったのだろうということはわかる。わかるのだが。

——こ、これが、政宗がことあるごとに酒の席で熱く語っていた……！ まさか、実在したのか？

その言葉と仕草をもつていとも容易く異性の心に楔を打ち込み、自らの奴隷とする。分かっているにも決して逃れることの出来ない。まるで単純作業をこなすかのように相手の領土に、自陣の旗を突き刺すという不可避の侵略行為から、人は畏怖をもつてこう呼んだのだという。曰わく、『flagmaker』と。

ただのチヨロいおっぱいだとおもって油断していた少し前の自分を叱ってやりたい！

「——あの、やっぱり、嫌だっただろうか。いや、いいんだ、私みたいなガサツで戦うことしか能がない女。戦いばかりに生きて、それ以外のことは何も出来ないし、女らしくもなくて、でも

それでいいとも思ってたんだ。だから外聞なんか気にしたことなかったし、勿論今も全然気にしてなんかいないからな？　だからミライが嫌だっと思う気持ちもしょうがないと思うんだ。だから、うう、ぐす」

世界に三人しかいないSランクという言葉の重み。それゆえに数少ないというか一人しかいない古くからの友達を除いて基本ボツチなアリゼル。黙りこんで考え込んでいるように見えるミライの姿に勘違いしたとしても仕方がなかった。

なかったのだがその落ち込み具合にミライが焦る。

きりつとした凜々しい瞳に涙を溜めて、それが零れてしまわないように必死に耐えつつ、俯いたままつぶやく、というもはや半泣き状態のアリゼルの姿に、罪悪感が刃となって心に突き刺さる。

思春期真っ盛りな時代を個性の強すぎる女ばかり見てきた、というか吹き飛ばされたり、穴だらけにされたりしながら育ったミライとしてはこのような女性はある意味新鮮に感じたりもしたのだが。閑話休題。

「いやいやっ！　全然嫌じゃないから、アルさんみたいな美人で可愛らしい人が手貸してくれるってんならむしろめっちゃ嬉しいから！！」

うわーい！　と立ち上がって大げさに喜んで見せるミライ。もはややけくそだった。

「う？　ぐす、ほ、本当か？　私みたいな女が手を貸したりして迷惑だと思ってるのか？」

「思っていないっすまじでおもっていないっす!」

「——すまないみつともない姿を見せてしまったな。うん、ミライがそう言ってくれるなら私も出来る限り力を貸そう」

恥ずかしそうにしながら笑みを見せるアリゼルに、ほっと息を吐き出したミライ。

「そうですね、ありがとうございます。えーとですね、それじゃあ早速さっきの話にもどるんですけど、アルさんが言ってた一緒にうんぬんってのは具体的にはどーゆうことなんですか?」

とつと話題を変えてしまおうと、急いで話を巻き戻すミライ。

「ああ、うん、なんと説明するべきか。……少し話は逸れるんだが私の目的地というのが『学園都市バースミリア』と呼ばれる場所だな、簡単に言えば冒険者を育成するための学園があるところなんだ」
ふんふんと大人しく聞いている様子のミライに満足そうに頷いたアリゼルは続ける。

「昔は違ったようなんだが、今ではバースミリアをはじめとする学園都市を卒業した者か、もうひとつの条件をクリアしたものしか公

式に冒険者とは認められなくてだな」

迷宮とか冒険者とかファンタジーな世界な割にはせせこましいというか何というか。

「アルさんの言い方からして、その学園ってのはいくつかあるんですか？」

「うん、ユーストフェリア全土、ああ、この世界の名前は『ユーストフェリア』^{ユーストフ}と言うんだがな。この世界を作ったとされている創造^{エリ}神の名に肖^{あや}つたらしい。それで、ユーストフェリア全土で現在は五つの学園都市があるんだ」

言いながら、テーブルの上に置いてあった紙とペンを持ってきて、其処に簡単に地図を描きだす。

「【サウストフェリア大陸】、【イーストフェリア大陸】、【ウエストフェリア大陸】、【ノーストフェリア大陸】。これらの四つの大陸に囲まれるようにしてあるのが【セントイストフェリア大陸】。それぞれの大陸にひとつずつ存在していて、私がこれから向かうのはセントイストフェリアにある学園都市だ」

それぞれ四つの大陸が扇状に点在し、それに囲まれる形でもうひとつ大陸が描かれる。

ふーん、世界、というよりは、この五つの大陸を指してユーストフェリアって呼んでるのかな？

「なんとなく理解しました。じゃあアルさんもそこに勉強しに行くんですか？」

その言葉にキョトンとしたアリゼルはくすくすと笑みをこぼす。

「いやそうじゃない。私はバースミリアで教鞭を取るために行くんだ」

「教鞭？　ってことはアルさん先生になるんですか？」

そういえばこの人すでに冒険者だって言ってたよな。しかし、こんな頼りない人が教師できるのか？

「うん、学園で教師をやっている私の知り合いの紹介でな。それで本題なんだがな、えっと、君がよければなんだが、試験を受けてみる気はないか？」

「ん？　試験、って学園の？　つまり冒険者に？」

「そうだ。入学のための試験は年に一度あるんだが、今ならまだそれに間に合うんだけど、どうだろう？」

お、おお？　学校、学校かあー、いやいや、でもだ、

「勉強せずに受けて受かるんですかそれって？」

「ああ、試験といっても基本的にはその人物の資質を計るから、知識のあるなしはあまり関係ないんだ。あるに越したことはないが。君の場合は、見た限り戦闘に関してはおそらく大丈夫だと思う。だから、後は君の気持ち、次第なんだが、どうだろう？」

心配そうな表情で聞いてくるアリゼル。の胸元でもじもじしている両手をがっしと握りしめてミライが答える。

「もちろんぜひお願いしますアルさん」

「うひゃあっ、わ、わかったから、ミライ、て、手を離して！」

学校かー。最終学歴小卒だから学校って興味あるんだよね。

「それで学校ってどれくらいの期間通わないといけないんですか？」

「人にもよるが、最低でも三年。最大で六年だ」

「最大でってことは、それまでに卒業できなかつたら強制的に？」

「そういうことだ。まあ、そのような者はそれほどいるわけではないのだが。だがほとんどの場合、辞めさせられる前に自ら辞めていくことの方が多いな。大きな怪我が原因で已む無くと言ったものもあれば、挫折したりするものもいたり原因は様々だが」

「なるほど。命が担保の職業ならそういうこともあるよなあ。年齢制限とかは大丈夫なんですか？ 俺十八なんですけど」

「それなら問題ない。基本的に試験さえ通ることが出来るなら誰でも入ることはできるからな。とはいえ、高齢で入る者は多くはない人間種で言うなら平均はおおよそ十七、八くらいが平均だろうか」

「へえ、その辺は現代とそれほど違いはないのか。じゃあアルさんは何歳の時に通ってたんですか？」

「私か？ 私は、七年前だから十二歳のときだ。三年間で卒業してからずっと冒険者をやっている」

てことはアルさん十九歳？ 俺の一つ上だったのか。しかし十二歳って、小学生でも入れるのかその学園って。いや、小学生の年齢で入ることが出来たアルさんがすごいだけなのか？ いまいち想像つかんな。

「卒業試験も無理難題を持ちかけられたりはしない。卒業単位数がクリアされているなら、合格ラインと照らし合わせてその人物が努力すればぎりぎり合格できるような課題を与えられるんだ。だからあとは君の気持ち次第なのだが、あ、いやもちろん冒険者にならないというのだったらそっちでも手を貸す心算だが」

いや、そんな寂しそうな顔して言われて断れる訳ないと思いますよアルさん。

まあファンタジーの醍醐味でもある冒険者って職業には興味もあるし、それに学校にまた通うというのも悪くはないかもな。

「それじゃあアルさん。俺この世界の常識についてなんにも知らないから。学校に行く前にそのあたりご教授お願いしますね？」

そう言っただけで笑って見せたミライ。

アリゼルはその言葉を理解して小さく口元を緩めるのだった。

今後のことについて話し合ってみた（後書き）

へへ、五話も使ってまだ船の上なんだぜ、信じられるかい？

しかも次もまだ陸には上がらないんだよね。

そして発想力の無いこの頭が恨めしい！！

作者の力量的に設定に関しては穴だらけだと思いますので「ふーん」
て感じで流し読みしていただけたら嬉しいです。次回への予防線
です。

というわけでした。そく勉強しました【改訂】（前書き）

設定回。前回のあとがきで言い訳していたので、今回は開き直っている作者です。

というわけでさっそく勉強しました【改訂】

——この世界『ユーストフェリア』には、大きく分けて『人間種』と『幻想種』という二つの種族が共存しているらしい。『人間種』だと人間や魔族、獣人など。『幻想種』だとエルフやドワーフ、鬼族や妖精族などがいるとのこと。

簡単に言えば『人間種』は元は同じ起源から誕生しており、そのどれもが五十から百年くらいを寿命とする短命種。対して『幻想種』は進化して生まれたのではなく単一の種族の総称。そう在るようにして生まれてきた存在で、最低でも百年以上の寿命を持つ長命種。

とはいえ今の時代では、大陸全土が人種の坩堝と言った様相を呈しているらしく、種族間のことに關してそこまで詳しいことを気にしているような人はいないらしいのだとか。

「まさにファンタジーですね」

「ふぁんたじー？ 君の使う言葉は時々よくわからんな」

「俺からしたら言葉が普通に通じているのがわけわかんないんですけどねえ」

ちなみにアルさんは魔族と鬼族のハーフらしい。通常、『人間種』と『幻想種』の間に子供は出来にくいとされているのだけれど、数千人に一人程度の確率で子供が生まれることがあるのだと。

アルさんの場合、外見は魔族である父の血が濃く出たために、鬼族特有の角は『普段は』引っこんでるらしい。極度に興奮したときに現れるのだと恥ずかしそうに言っていた。

何だろうこれ？ もしや遠まわしに興奮さしてほしいと言っていると解釈していいのだろうか？

「そのへんどうなんでしょうアルさん？」

「いったい何の話だ」

不思議そうな顔で小首をかしげるアリゼルに、なんでもありませんよーと返すミライだった。

次に、この世界の成り立ちについて。今のこの世界は過去に滅びた文明の上に文明を築いているのだという。過去に滅びた文明『アポカリス』は、なんでも個人の力を示すために巨大な迷宮を作って競ったのだといわれているのだと。決して誰にも攻略されることのない迷宮を気付くことがステイタスの一種とされていたようだ。そうしてやがて迷宮が世界中を覆い隠したところ。実際になにがあったのかは分かっているわけではないようだが、魔法技術だけは無駄に高かったアポカリス人は互いに争い、殺しあいを始めた。

——そこへ現れたのが『ユーストフェリア』という存在。滅びゆく文明を見て何を想ったのかは知るすべもないが。彼は自らを育てた世界を自らの手で終わらせる決断をする。そして地下深くに覆い隠し、新たな世界を創造したのだ。

これらのことは迷宮探索で得た断片的な情報をもとに建てられた仮説であり。

まあいわゆる神話的な話であるわけで、詳しい世界の成り立ち、迷宮と何なのかといった根本的な疑問ですら、未だ仮説の域を出ていないらしい。なんせ、この世界の起源は数万年も前のことらしいのだからそれも然もありなんと感じた感じらしい。研究者連中がその

情報から誰が一番『それらしい説』を最初に建てるか競っていたのもつい最近の話なのだから。

いやいやいいのか？ それでいいのか現地のみなさん？ というミライの困惑をよそにアリゼルの話は続く。

過程がどうであれ、そのようなことからこの世界では『冒険者』という職業が栄えている。なにせ、世界中のいたるところに財宝の詰まった宝箱が埋まっているのだから。ただし、致死量のトラップつきで、だが。

初心者がそのまま迷宮に挑んで帰ってくるのできる割合は一般的に四割程度。挑む迷宮のレベルにも左右するようだが。十人中六人は死んでしまう、それが迷宮、前時代の亡者の遺物。

かつて、ヒトが繁栄を迎えた『白の時代』。彼らは、それでもと財宝や栄華、世界の真実を求めた。そして迷宮に挑むものは後を絶たず、死人の山が築かれていく。やがてそれらを乗り越えた一流と呼ばれるようになった冒険者たちですらも壁にぶち当たった。

――― 広すぎたのだ。一つ一つの迷宮が。いくら個人の力があるとはいえ、たった数人で地下深くまで。それこそどこまでも広がる、世界を覆い隠すほどに存在する地下迷宮の全てを踏破することなど叶うはずもなく。

だから彼らは探索方法自体を見直す段階が来たのだということを悟らざるを得なかった。

ということ、五百年程前のこと。当時その考えに同調する事の出来た、十三人の冒険者によって創設されたのが迷宮探索互助協会【ギルド】。様々な手段を使いつつ徐々に力を蓄えた彼らは一気呵成に事を進めた。大陸全土にまでその影響力を伸ばし、果てに全ての冒険者にギルドへの登録を義務づけたのだ。

冒険者たちは当然初めは反対し、しかし、市場の大半を支配するまでに成長し、また、登録されたものに与えられる見返りを認識するにつれて考えは変わっていく。

やがて時がたち、ギルドは新しい世代を育てるため、そしてさらなる確固とした地盤を築くために、冒険者のための学校を創った。

それが、名前持ちの地下迷宮『バースミリア』の上に築かれた、『学園都市バースミリア』。この大陸に初めて創られた冒険者育成機関。

やがて、幾百の時が流れた現在、バースミリアの他に四つの学園都市が創られ、そこを卒業したものをギルドは正式な冒険者として認めるという形態へと変化していた。

「バースミリアねー。アルさんアルさん、ところで名前持ちって何なんですか？ 名前のない迷宮とどう違うんですか？」

「うむ、名前持ちと言うのは、『アポカリス』の時代に特に力を持っていた者たちが造った迷宮だといわれている。たいていは迷宮内部に名前を示すようなものが置かれていたりする。それが制作者自身の名前ではないのかという話もあるのだが、要はそれが迷宮の名

前とされるんだ」

「なるほど。力の象徴として造られたってんならそこに名前書いとかないと誰のかわかんないですもんね」

「うん、まあそういうことだ。当然例外もあるが、今は置いておこう。そして名前持ちの迷宮は現在三十三まで確認されている。が、未だその内の一つとして最奥に到達できていないのが現実だ」

「ほうほう」

「簡単にいつてしまえばだ。名前持ちの迷宮は途方もなくでかいんだ。他の迷宮などとは比べ物にならないくらいに。その上難易度も他とは桁が違う。はつきり言って踏破するイメージすら浮かばん規模だ」

「んー、ちなみにアルさんって冒険者としてはどれくらいの位置なんですか？」

「位置？ ランクのことか。そうだな、それについても簡単に説明しておこうか。冒険者のランクはパーティーランクと固有ランクの二つが存在するんだ。パーティーランクはA〜Eまで。固有ランクはS〜Eまでで、わけられている。そうだな、簡単な言えば」

——パーティーランクにしても固有ランクにしても最初はEから始まる。パーティーランクというものは基本的にギルドからの信頼度を現すもの。勿論簡単な依頼を数多くこなしただけでは高ランクに上がれるわけではなく、実力も必要とされる。そして逆に固有ランクに関しては、単純に個人が持つ強さに依るものだけだ。モンスターに対しても十二のレベルで段階づけされているのだけだ。

Dランクはレベル三のオークを一体退治出来る強さ。

Cはレベル五のオーガを一体退治出来る強さ。

Bはレベル八のサイクロプスを一体退治出来る強さ。

Aはレベル十のドラゴン一体を退治出来る強さ。
基本的にはこのような基準に依ってランク付けされるようである。

とはいえ、レベル六以上のモンスターが現ればギルドによって率先的に討伐隊を組まれる。それはつまり、個人で倒すことはかなりの困難であることの証左であり、その通りに、現役の冒険者の固有ランクは大半がC〜Dで構成されている。

ちなみにドラゴンといっても全部で四種類あるらしく、ここでのドラゴンはその中で最弱のグリーンドラゴンのことらしい。

とはいえこれはあくまでも基準であるとのこと。Dランクでもゴブリンの群れに出会ったら殺られることもあるのだとか。

「ふーん、ちなみにそのドラゴン最弱って、どれくらいの強さなんですか？」

「現役の、固有ランクAを持つものは一人もいない。一般的に、レベルが十以上のモンスターに出会ったら抗うべからず、頭を垂れてただ祈れと言われているほどでな。奴らの鱗は鋼すら通さない頑強さに、その爪は山を抉ると言われており、何よりもまず、その巨体は何より脅威でもある。グリーンドラゴンだけがレベル十にされているのは、やつらが翼をもたず、またブレスと呼ばれる特殊な攻撃を行わないからだ。グリーンドラゴンを省いた残りの四種に到ってはレベル十一。Bランク冒険者を千人集めなければ倒すことが出来ないといわれている、真正正銘の化け物だ。^{モンスター}生まれただけの幼竜でさえレベルは八に定められている。それこそドラゴンが最強種と言われる由縁でもあるんだ」

「ふーん……。あれ？それで結局アルさんはどのランクなんですか？」

「ああ、うん。えっと、わ、私はSランクだ」

「Sランク？ あれ、そういえばSランクの説明は聞いてないですね」

Sランクとは、レベル十以上のモンスターを退治したものに与えられる、本来ならありえないことを成し遂げた英雄クラスが存在に与えられる位階。種の限界を超越したものに送られる烙印。

「私が倒したのは水と氷を司るブルードラゴン。ちょうど私が滞在していた街を襲撃されてな。レベル十一に認定されているとはいえ、まだ数百年程度の新竜だったことと、空腹と怒りでドラゴンの脅威の一つである『知性』が欠けていたのは不幸中の幸いだった。はつきり言つてあのレベルのモンスターとは二度と戦いたいとは思わん」

モンスターというのは基本的に年を経るごとに力をつけ、同じレベルのモンスターでも数百年程度と数千年生きたものでは段違いの力の差があるらしい。

当時を思い出したのか、何度死を覚悟したか、と疲れたようにぼやくアリゼル。ちなみに十六の時のことらしい。

「なんとなくしか理解出来ないけど」

この世界のモンスター見たことないし、と。

「アルさんって強かったんだな」

一個軍とガチンコ出来るモンスターを一人で倒すなんてアルさんも十分人外なんじゃ？

うーむと真面目な顔で見つめられたじろぐアリゼル。

「な、なんだ？ …… やっぱり君も、私のことが嫌いになったか？」

え？　なんで？　と首を捻るミライ。

一個軍を相手取って戦うことのできる存在を間近で見続けてきた彼にとつて、『それ』は特段忌避するような事実ではなく。よってアリゼルの抱くそれは杞憂でしかなかった。

「いやむしろ、初対面の男相手にまで優しくしてくれて、普通に美人で可愛くていい匂いがするお姉さんに好意を抱かない男がいたならそれは滅びるべきかと」

うん？　と、言われたことに首を傾げ、理解するにつれて顔を染めて「ななななっ！？」とたじろぐアリゼル。

「ところで、レベル十一までしか話に出てこなかったけど、十二に分類されるモンスターって一体どんな強さなんですか？」

「う、うほんっ、そ、そうだな。便宜上十二段階としてはいるが、レベル十二というのは特別でな。とある三体のモンスターに対して与えられた位階なんだ。【天空の王】ブラックドラゴン。【深海の王】リバイアサン。【大地の王】サンドワーム。『アポカリス』の時代から生き抜いてきたと言われている、現存する最古の生物たち。高度な知恵と知識を持つそれら三体は天災級と呼ばれている。一部では神として崇められる程の最強の単一種だ」

「おおっ、すごい壮大な話になってきたな。なんか強さのインフレ起きすぎてわけわかんね」

うーんと眉を寄せて今までの情報を整理するミライ。

そんなミライを見てつい口元を綻ばせるアリゼル。

「まあ、この三体の古代種に関しては出逢うこともないだろうから、

そういうものもいると分かっていたらいいだろう」

「そうなんですか？」

「ああ、彼の王^かたちは基本的に自らの定めた領土から出ることはないんだ。例えば『天空の王』などは、前時代の、今は滅びた天空都市を棲み家に行っているんだが。こちらから手を出さない限り、限りなく無害に近い存在だ」

「なるほど、引きこもりなのか」

「ああ、だが一度牙を剥けば誰にも止めることが叶わないのもまた事実。その滅びた天空都市がな、五百年程前まではかなりの栄華を誇っていて、その力は世界最強だとまで言われていたらしい。だが、何を勘違いしたのか、愚かにも『天空の王』を討とうとしたらしい。結果は言うまでもないだろう？　ちなみに、一夜もかからなかったらしいぞ」

「なるほどわかりました。俺は絶対にその怖そうなひとたちとは関わりません」

コエーよ。なんだよそれ。本当にあった怖い話ってレベルじゃねえよ。片手間に国滅ぼしちゃうトカゲ様とかいったいどこの世界のラスボスだよ。

「なんか、随分話脱線しちゃったから話戻りますけど。すごい希少種っぽいSランクのアルさんでもクリアできないような迷宮の上に学園造ったってあんまり意味ないんじゃないんですか？」

「いやそうでもないんだ。『バースミリア』は確かに高難易度の迷宮だが、あそこは深く潜るにつれて難易度が上がるタイプの迷宮だから低階層なら指導するのにはもってこいというわけだ。他の四都市も同様だ。それに学園が『バースミリア』を独占したかった、というのもあるんだろうな。あそこは『アポカリス』の時代に存在していた八大王家の一つでもある『バースミリア王』が造ったとされているんだ。それらを証明するものもいくつか発見されているとい

う噂は耳にしたことがある。だからこそ、他には類を見ないような宝がまだまだ眠っている可能性が高い。実際、過去には低階層で宝具が発見されたという話も聞くしな。何か発見があれば、それが学園の栄誉につながるように、ということらしい」

「なーるほどねー。でもアルさんの立場でそんなこと言っているんですか？」

「まあ、公然の秘密みたいな物なのだが、よくはないだろうな。だからこれは私と君だけの秘密にしておいてくれ」

といつつつ得意気にウィンクしようとして両目をバチコンとしてしまい頬を染めてそわそわしてるぶきっちょなアリゼルをしばらく堪能するミライだった。

というわけでさっそく勉強しました【改訂】（後書き）

アルさんTUEEEE!!と思いきやミライにとってはそうでもなかった回。

次で漸く船を降りれる。

戦闘シーン？え？何それ？

ようやく地に足を着けました

「見えてきたな。あれがセンチーストフェアリア大陸の北門と言われている、商港都市『マナシア』だ」

甲板に立ったアリゼルとミライの視線の先、多くの船が停泊する石造りの巨大な街があった。

とは言え船というなら前の世界で嫌というくらいに革新的に過ぎる魔改造船も見たことがあるので落ち着いたものであった。

むしろである。ミライがアリゼルと衝撃的（落下的な意味で）な出会いを果たして早二日。ミライにとってはこの世界で初の陸地。ようやくこの世界の土が踏めるのかとやや疲れた心境だった。

「この船って、バースミリアに直接行くわけじゃないんですねえ」
「ああ、そういえば言っていなかったか。そうだ、バースミリアまではマナシアからさらに馬車を使って二日ほどかかるんだ」

うおお、まだそんなにあるのか。なんかもう自分の足で走った方が速いような気がして来たわ。

うえーっとゲンナリした顔でうなだれるミライを見てフツと笑みをこぼすアリゼル。

「もう少しの辛抱だから頑張ってくれ。今日はここで一泊して、明日出発する予定だから、少しだけ時間も取れるし。……え、えっと、どうだろう、少し、街を見て回るか？」

自分から誰かを誘うなど初めてのアリゼル。この機にもっと友好を深めて、行く行くは、憧れの男友達が出来るのだろうか、などと期待半分。断られたらどうしようと言っ心配半分。まあ杞憂なのだが。

「おお、アルさんからデートに誘ってくれるなんて感動です。俺、初めてなんで優しくして下さいね」

「デ、デデデートじゃない！ 街を案内すると言ってるだけだっ」

真っ赤な顔で抗議するアリゼルを無視して街を眺めるミライ。

この二日間で見慣れたその光景を遠目に見る船員たち。世界で三人しかいないSの位階を持つあの剣鬼を弄ることが出来る勇者に畏怖と尊敬と嫉妬の念を抱く。

というかぶっちゃけ男ばかりの船の上でイチャつくんじゃねー、という気持ちを抱いてたりするのだが、そんなことを言える勇気のあるものはいなかった。だってアリゼル怖いし。

周りからそんな風に思われているとは思えもしないある意味幸せなアリゼルだった。

「——世話になったな船長」

港に降り立ったアリゼルが、見送りに来た巨漢の老人に向け会釈する。

「気にするなあアリゼルの。女子供の一人や二人、物のついでだ。精々また船の上から落っこちないように、そっちの愉快なガキから目を離さないように手綱を握っておけ」

「ああ、了解だよ船長」

「キャプテン、いろいろ迷惑かけてすまんかったな。迷惑料は出世払いで頼むわ」

「ぬかしおるわ小僧。精々死ぬ気で稼いでくるんだな」

そう言つて後ろ手に手を振りつつ巨漢の老人は船へと戻っていく。

あの爺さん、一体何者だったんだろうか？ アルさんも詳しくは知らないみたいだし。けど、あんなにやばそうな『ニオイ』のするヒトが普通である訳もないだろうし。ま、考えるだけ無駄かねえ。今はそれよりも。

「さて、まずは宿を確保しに行くぞ」

船長の後ろ姿が船上に消えたのを確認したアリゼルが、隣でキョロキョロと辺りを見回しているミライへと苦笑混じりに告げるのだった。

「ここにするか」

そう言つてアリゼルが立ち止まったのは二階建ての西洋風の建物。外観からしてかなりお高そうな臭いがぶんぶんするなという感想を抱きつつ「行くぞ」と言つて先に入つたアリゼルの後続くミライ。入り口のそばで振り返つたアリゼルはミライが入つてきたのを確認してからカウンターへと歩き出す。

「——いらつしゃい。泊まりかい？」

「ああ、一泊したい。部屋はあるか？」

「あるっちゃあるけどねえ。あんた金はあるのかい？」

カウンターの前に立つたアリゼルに向けて、気怠そうに瞳を向けて尋ねるのは従業員だろう受付に座る女性。

ピンと尖つた耳と金色の長い髪、透き通るような白い肌。そしてエルフ女性の種族特性であるそれに逆らうかのようにたわなに実つた双子山。

おおー！ 本物のエルフだと！？ しかしこれはまた全体的にアルさんと正反対な美人さんだなあ。すっげーだるそうだし。

ミライがそんなことを考えている間に、アリゼルは腰につけたポーチから一枚の銀色のカードを取り出す。ギルド発行の冒険者の個人識別証である。

アリゼルからそれを受け取り、カウンターの内側に置かれている手のひらサイズの黒い箱——ギルド印の個人識別機——へと差し込み、そこに映し出された文字を見て驚いたように目を睜つた。

「っ！……驚いたね。あんた、あの、『アリゼル』か。剣鬼アリゼル、最年少Sランク冒険者。まさか、こんなところでお目にかかれるなんて」

殆ど囁く程の声で呟き、ギルドカードをアリゼルへと返す。

「問題はないだろう？」

そのような反応をされることはすでに日常のこととして慣れてしまったアリゼル。何の感慨を浮かべることもなく、ギルドカードをポーチに仕舞いながら淡々と問いかける。

「ああ、もちろんさね。Sランク冒険者様を追い返したなんて知られたらアタイがオーナーに殺されちまうよ」

ちなみにSランクの特権のひとつとして、ギルドの傘下にある宿泊施設を使用する際には、その者を含めた一パーティー（八人まで）は一泊まで無料で泊まることのできるものである。

おどけたようにクツクツと笑うエルフの女性は、部屋の鍵を取るために立ち上がり、そのまま視線をアリゼルの横に立つ少年に移すようにチラリと横目で見て、

「しかし、『愛を捨て力を渴望せし者』なんて呼ばれてる御方が男連れなんて、なかなか酔狂な冗談だねえ。部屋は一つでよかったのかい？」

少しだけ挑発するようにアリゼルに視線を戻し。
そして返ってきた刃のごとき鋭さを伴った空気に背中を震わした。

「――― 事実がどうであつたとしても、あなたには何ら関係のないことだ。余計な気など回さなくても良い。部屋は二つだ」

淡々とそれだけを告げるアリゼル。

ヒュツと、エルフの女性は引きつったように喉を鳴らす。

別に何かをされたわけではない。魔法を行使されたわけでも、ギフトのような特殊な力でもない。これは単純な存在の格の違い。

人が空の大きさを推し量ることなどできないように。彼女とアリゼルの間にもまた決定的な住む世界の隔たりが存在し。人は理解出来ないものに恐怖する。Sの称号を持つ人外もまた例外ではなく。

――― そして違う意味で驚愕する。

「アルさんアルさん。俺たち恋人同士に見られたみたいですよ」
「うひゃあつ！　こらあ、き、君は一体どこをつついて」

アリゼルの脇腹をつつきながら二ヘラと笑みを浮かべる少年と。

「懷事情でアルさんに頼るしかない俺としては一部屋にしてお金浮かせてもらったほうが心労が減るというか」

「え？　な、そんなこと、お、男の子と一緒に部屋で寝るなんて恥ずかしくてっ、だいたいお金の心配はしなくても」

「アルさんったら何言ってるんですかあ。俺たち同じベッドで寝た仲じゃないですか？」

「~~~~っ!!」

まるで乙女のごときに顔を真っ赤にして狼狽えるアリゼル。

髪の毛の色と同じくらいに顔を染めた剣鬼がへらへら笑う少年の襟元を掴んでガクンガクンと揺らしているのを、冷や汗交じりに見せられたから。

「……………ぷっ、あはははは！」

突然笑い声を上げるエルフの女性に二人は視線を向ける。

「いや、なんだい、これはどうやら本当に貴重なものが見れたみたいじゃないか」

目尻に浮かんだ涙をふきつつ言われた言葉にアリゼルが呻く。
それに、と口の中で呟いたエルフの女性はチラリと、一度目とは違う明らかな興味を持ってミライを見た。

「まあ今はいいさね。それじゃあこれが部屋の鍵だよ」

そう言っただけを二つカウンターの上に乗せる。

「それと少年。記念にあんたの名前も聞いときたいんだけど構わないかい？　ちなみにアタイはロゼッタ。ただのロゼッタだよ」

艶やかな笑みを浮かべてミライを流し見るロゼッタ。

「俺はミライです。タダのミライですよ」

バチコンとウインクして見せるミライの姿に眼を丸くし、一転、呵呵と笑うロゼッタ。

それを横で眺めて。なんだか仲間外れにされたような寂しい気持ちになったアリゼル。

「むう。自己紹介が終わったなら早く行くぞミライ。街を見て回りたいと言ったのは君なんだからな、先に行くからな、本当に行くかな？ 来ないなら置いていくぞ」

鍵を引っ掴んだアリゼルは、『プンプン』なんてテロップが付きそうな怒り方をしながら一人で階段を上がっていく。

その背を見送り、呆然とするロゼッタ。

「ほんとに、驚いた。噂なんて当てにならないもんだねえ。血も涙も、剣を握ったときに捨てさった戦狂い、なんて聞いてただけど」

「なんぞそれは？ 一体どこの第六天魔王様だよと呆れつつ。ミライはニヤリと笑って見せる。」

「なかなか面白可愛い人でしょ？」

それに釣られるようにして楽しい笑みを浮かべるロゼッタ。

「——ああ。なかなか見る目あるじゃないかアンタ」

その笑みを見て満足したミライは、残った方の鍵を掴んでから片手を上げる。

「それじゃ。あんまり弄ったら本気で拗ねちゃいそうなんで」

ヒラヒラと手を振りながらアリゼルの後を追うことにする。

それにハイハイとおざなりに手を振り返すロゼッタのもとを後にして部屋へと向かった。

それなりに愛用していた弓は最後の戦いで粉々になったため（その割に服とか籠手は直ってるのだから基準がよくわからないのだけれど）、特に手荷物もないミライ。

街の観光をするのには必要のない、籠手と腰回りの鎧を外していき、ジャケットを脱ぐ。長袖のインナーに黒皮の手袋。身軽になったミライは部屋を出てから鍵を閉め、アリゼルの部屋に向かう。

「アルさん、準備出来うおっ」

ノックするミライを吹き飛ばす勢いで扉が開く。

「よし行くぞミライ。すぐ行くぞ」

私が案内してやるっ、と勢い込んで廊下を歩いて行くアリゼル。

「ほどほどでよろしく願いしますねー」

凄く楽しそうな雰囲気を滲ませるアリゼルの背中をニヤニヤと笑いながら着いていくミライだった。

さて、案内すると勢い込んだアリゼルだったのだが。基本ボツチな彼女は何処へ行けばいいのかよく分からなかった。

うーん？ うーん？ と首を捻りつつやってきたのは街の外にある迷宮の入り口。最早マナシア関係なかった。

「アルさんアルさん。なんだかダンジョン的な臭いがプンプンしてるんですけど、ここってマナシアの観光スポットか何かですか？」

無邪気な笑顔を浮かべたミライが固まったアリゼルの肩を叩く。ビクンと体を跳ねさせた彼女は一転、力強く頷いて見せた。

「うん、実はそうなんだミライ！ あまり一般の人は来ないのだからなかなか見応えがあつて」

「そうなんですか、まあマナシア関係ないみたいですけど迷宮には興味あるんで気にしなくていいですよ？」

うなだれるアリゼル。

「それで、ここって入れるんですか？」

「うう？ グス、…… 入れるのは入れるが。君は武器も持たずに潜るつもりか？ この前話しただろう、迷宮がどういう場所なのかは厳しいことを言えば、足手まといを連れて潜れるほどここは甘くはないんだ。あ、いや、連れてきた私が言うのもおかしい話なんだが」

厳しい目から一転、おろおろしつつもミライの短慮な思考にしっかりと釘を差す。

が、怒られたはずのミライは逆に嬉しそうにニヘラと笑う。

「おー、アルさんがそんなに心配してくれるなんて」

「うっ、あ、当たり前だろう？ 君は私の、大切な、と、とと友達っ、なんだから」

うへへ、自分で言っというて恥ずかしがるアルさんも眼福だなあ。

「ええ。そりゃあもう、アルさんと俺はまごうことなき友達。むしろ親友です！」

アリゼルの手を両手で握りしめてそんなことを言ってみる。

「し、しん、ゆう、だと？」

いったいそれはどれだけ強いんだ！？ と訳のわからんことを口ずさみ、頭から湯気を零すアリゼル。

そんなアリゼルの胸元を至近から鑑賞しつつ。

この人絶対にいつか騙されるわ。駄目な男とかに超引っかかりそうだ。こうなったらアルさんの親友として、この人が立派に社会でやっていけるようになるまで守ってやらないとっ。

ニヤニヤと浮かぶ笑みを必死に隠しつつ、ミライはそんなことを心の中で誓うのだった。

ようやく地に足を着けました（後書き）

次回ようやく戦闘シーン突入！

呻る剣戟、迸る血潮。

熱き男、多田ミライの実力はいかに！？

乞うご期待。

初めての迷宮探索【改訂】（前書き）

発想力のモヤシな自分ではこの程度の設定しか思いつかなかった。
r z

なので深く考えずにさらっと流し読みしていただければ。
魔法とマジックワードについて一部改訂。

初めての迷宮探索【改訂】

「——話はもどるんですけど。……アルさん大丈夫ですか？」

「あ、うん、大丈夫だ。問題ないぞ」

頬を染め、どこかぼんやりした様子でコクコク頷くアリゼル。

友達できたのがそんなに嬉しかったんだろうか？

……なんでこんな可愛^{おもしろ}いのに友達いないんだろなあ。ロゼさんも最初は随分警戒してたし。確かに目つきは少し鋭いけど。なんでだろう？
まあ、それは置いて。

「俺の武器に関してなんですけど」

さすが茹だっていたとしても冒険者。迷宮に関わる話だと気づき、表情を真剣なものに変える。

「最近は弓なんかは好んで使ってたんですけど。え、っていうか弓ってあります？」

「うん、もちろんだ。けどミライは弓使いなのか？ 肉付きから近接専門だと思っていたのだが」

「一応、って感じで、本職にはかなわない程度の腕前ですけどね。戦の時にはよく使ってたってだけなんで」

だって前線で暴れる赤いやつらに巻き込まれなかったし。

「イクサ？」

「ああ、戦争のことですよ」

「……戦争。ミライは戦争を経験したことがあるのか」

「まあ、戦が日常茶飯事の時代でしたから」

気にするな、っていったら余計気にするんだろうなこの人。夜襲の時とか、奇襲戦なんかでも使ってたんだけど。これ以上わざわざ言う必要もないか。昔がどうかは知らないけれど、おそらく今のこの世界は平和なんだろうな。戦に慣れてしまわない程度には。

気遣うような視線に気付かぬふりをしてミライは続ける。

「アルさんの言うとおり、俺の武器はこいつです」

そういつて握りしめた両の拳をぶつけてみせる。

「徒手空拳が俺の戦闘スタイルです。籠手は宿に置いてきましたけど、少しなら足技も使えるんで。それにそこまで軟な鍛え方してないから心配しなくて大丈夫ですよ。いざとなったらアルさんもいるし」

「むう、確かに素人ではないようだし。そ、それに、ミライがそこまで言うなら、し、し、親友、の私としても信じない訳にはいかないだろう。そのかわり、私の指示にはしっかり従うんだぞ？ 迷宮内は何があるかわからないからな」

「了解。頼りにしてますよアルさん」

ということ、マナシアの観光をするはずが何故か迷宮に潜ることになったアリゼルとミライ。

「それでどうやって入るんですか？」

土の中から飛び出た錆色をした巨大な立方体の建造物。教室一個分程度の大きさに、幾何学模様を表面に刻んだ石のような材質。

でも叩いた感触だと、普通の石とは違うみたいだし。旧文明から壊れず残ってるくらいだから魔法的な何かが働いてるのか？

迷宮の入り口だと思われるそれを興味深げに観察するミライ。

「こっちだ」

壁をベタベタ触ってるミライに苦笑しつつ歩き出すアリゼル。名残惜しそうに手を離れたミライも大人しくその後を追う。二人はそのままぐるりと反対側まで歩いていき、立ち止まったアリゼルがミライへ振り向く。

「覚えておくといい。これが迷宮への入り口だ」

そう言っただけ視線を向けた先には二メートル四方の黒い壁が。よく見ると、幾何学模様をした、記号のようなものがびっしりと刻まれている。

「これは魔術といってな。この記号のようなもの一つ一つは【マジックワード】とよばれる所謂旧文明の時代の技術。魔法と違って多様性はないが、そのぶんひとつのことに特化した効果を持つ」

——つまり。

魔法というものは体内魔力【オド】と頭の中に描く設計図【魔法陣】を運用して、内側から世界の法則に干渉し様々な事象を顕現する力。故に個人の才能に依るところが大きく。所詮個人であるために出来ることも限られている。

対して魔術は、【マジックワード】と体外魔力【マナ】を用いるのだと。マナというのは要するに酸素みたいなもので、世界を構成する要素のひとつと考えられているらしい。で、マジックワードというものは一文字だけでは意味を為さず、異なる文字と組み合わせ意味を持たせることで魔術としての効果を発揮し。組み合わせた文字数が多ければ多いほどその効果も複雑なものになる。が、魔法とは違いこちらは主に日常の中で、主に生活に密着したところで使われる事が圧倒的に多いのだと。素人であっても、組み合わせさえ分ければ大抵は扱うことができるのだとか。戦闘用に使える組み合わせは今の所ほとんど発見されていないらしい。

話は戻るが、このゲートと呼ばれている扉。

遙か昔、迷宮から湧き出たモンスターたちにより、大きく世界が乱れた時代があった。

その教訓に造られたのがこのゲート。この魔術の元になるマジックワードの配列が迷宮内で発見され、それに改良を加えたもので。これを迷宮の入り口に刻むことで、モンスターが自由に出入りできないような扉を築いたのだ。

「魔法に、魔術、ですかあ」

違いがイマイチぴんと来ないんだけど。折角こんな世界に来たんだし、魔法はぜひ使ってみたいところだよなー。

「うん、それで肝心の開き方だが」

ほうほうと顎に手を当てて頷くミライをチラリと見て説明を続けるアリゼル。ゲートの中央に手を触れて『開門』と呟く。

——このとき言う言葉は別に決まっているわけではなく、開け、という意思が込められた言葉なら何でもいいらしく、例えば『開けゴマ』でもいいのだとか。

触れた手を中心に三十センチほどの緑色に発光する二重円、マジックワードが浮かび上がり、それぞれが逆方向にぐるりと半回転し。そして、そこを中心に渦が巻くようにして黒い壁は消失する。

「言葉に込められた意味と、触れた手から感じ取るオドの流れの二つを鍵にして開ける仕組みになっているんだ」

「うーん、でもそれだとオドがないと開けられないんじゃない？」

「そんなことはない。最大量に大小はあっても、オドが体に存在しない者はいないんだ。オドは体を構成する見えざる内臓器官だと言う研究者もいて、今では定説のひとつとされているくらいでな。だから、この世界で生きる存在は潜在的に全員が魔法使いの卵でもあるわけだ」

「でもアルさん。俺ってこの世界の人じゃないんだけど、その法則^{ルール}適用されるんですか？」

「む、それもそうか。なら試してみるか」

話してる間に閉じてしまった扉を指差すアリゼル。

普通に開いたよ。いやしかし地球生まれの自分になんでそんな不

思議器官あるんだろなあ。いや、いいんだけどね。細かいことなんか。魔法が使えるなら不思議器官のひとつやふたつバッチコイだ。

「それでは行くぞミライ。ついて来てくれ」

開いたゲートを通って入っていくアリゼルに続いて足を踏み入れるミライ。

「おおー。これが迷宮」

「ここはまだ入り口だな」

教室程度の大きさに、幾何学模様の刻まれた錆色の壁。地面や壁自体が光源の役割を果たしているのか淡く光っており、閉ざされた迷宮内においても視界を確保できた。そして部屋の中央。地下へと続く階段。

「アルさん。これも、マジックワードですか？」

階段の周りを囲むように刻まれた文字。

「うん、それはモンスター除けの効果を持つ魔術だ。ヒトのように強い意志を持つものにとっては多少不快感を感じる程度だが、モンスターのような半ば本能のみで生きる存在は無意識で忌避するようになっていくし、そもそも、それほど強力なモンスターが上層部まで上がってくるなど滅多にある事態ではないのだがな。万が一、ゲートを開けた瞬間に襲われる可能性を減らすためだ。発見された迷宮ではゲートと、この【ケージ】と呼ばれる魔術が必ず刻まれるんだ。では行くか」

「はい」

と言ってそれを踏み越えるミライ。

おおう、ぞわりとした。今ぞわりとしたわ。

首の後ろをひと撫でしつつアリゼルの後を追うのだった。

「———— 凄いな、これが迷宮か」

やがで階段が終わり、顔を上げたミライは驚きのつぶやきを漏らす。

十メートル程度の幅のある巨大な通路。壁を突き破り鉱物のような鈍い輝きを放つ樹々が天井へと枝葉を伸ばし。壁が放つ淡い光りが空間を包み込む。そこはまるで地上から切り離された、異世界に訪れたような幻想的な光景を生み出していた。

「———— 凄いだろう？ これが、私が冒険者になろうと決めた理由だ。こんな綺麗なものが、足のすぐ下に埋まってるなんて知ってしまったんだ。ワクワクしないわけがないだろう？」

トントントンと軽快な歩みで通路の先へ踏み出し。クルリと振り返って。

大切な玩具を自慢する子供のように両手を広げ、少しだけ得意げな

表情を浮かべたアリゼルが囁くように柔らかに問いかける。

そしてミライは。

淡い輝きの中で振り返る彼女にどうしようもなく目を惹きつけられる。

ただ単純に美しいと思った。

「ええ、はい。——ははっ、ほんとに綺麗だわ。こんなもんが見れるなら、そりゃあちよつとくらいの危険なんか屁でもないよなあ」

ははっと口を抑えて笑い出したミライに、そうだろう、そうだろうとアリゼルは同意するように頷くのだった。

「さながら。剣鬼っていうより戦女神って言ったほうがしっくりくるよなあ」

腕を組んで一人納得したように頷くミライ。

「ん？ 何か言ったかミライ」

その一歩先を歩いていたアリゼルが振り返り向きミライを見る。

「いえいえ、なんでもないですよー」

「むっ、そうか？　ならいいのだが」

少し不満そうにしながら前に向き直る。

「——ん？　芋虫？」

と足を止めたミライは前方を見据える。その声に引かれてアリゼルも目を凝らし。

「あれは。リークルか。この距離でよく気付いたな」

「ええ。まあ夜目は効くほうなんで」

階段を下りた二人が通路を少し進んださらにその先。壁を這うように移動する二つの影に気づく。五十センチくらいの高さで背から突起物を複数生やした芋虫のようなモンスター。

「リークル？」

「うん、あれはリークルと呼ばれる、レベルーに分類されるモンスターだ。背中の突起から溶解度の高い酸液を分泌する。動きも遅く酸液の射程範囲も狭い。がリークルの体液その物が酸液だから、近接を得意とする冒険者では慣れないうちは厄介な存在でもあるんだ」
「慣れないうちは、ってことは慣れれば大した相手じゃないわけですか」

冷静に観察するミライにニヤリと笑みを浮かべ、左の腰に下げた剣を引き抜く。柄から刀身までが一体となったような黒い片刃の剣。

「随分な業物ですね」

それを見て感心したように呟くミライ。実際、アリゼルが持つそれは、英雄たちが携えていたそれらに匹敵するような、対面するだけで肌を刺すような独特な空気を纏っていた。

アリゼルはその呟きに嬉しそうに答える。

「分かるか？ まあ君のつけていた装備もかなりのレベルのモノのようだしな」

そう言つて右手に握ったそれを、離れた場所にいるリークルに向けて縦に一振りし、流れるようにそのまま鞘へと収める。

壁に亀裂が描かれ。

リークルの体が二つに分かれたれ、地に落ちる。

「二対一体の宝具『アマキリ』。私の冒険を支えてくれる心強い相棒だ」

「『天斬り』、ね。なんとも物騒なネーミングだ事」

「ほかにも魔法具を用いたり、弓のような遠距離武器を使ったり。無視したりだ。私たちは冒険者であつて戦闘者ではない、ここをまず間違えてはいけない。勿論戦いを避けて通ることが出来ないのだから」

「なるほど。まともに戦う必要がないんだから大した相手にもなりはしないと」

「そういうことだ。迷宮という場所はそういう場所だ。ひとつにとられてしまつては絶対に生き残ることはできない」

戦人と冒険者の違いつてやつか、と立ち上がったミライ。

「じゃあ俺もいっちゃつてみますか」

そう言ってトコトコと反対の壁に向かって歩き出すミライ。

「ん？ ミライ、何を――」

漂ってきた気配に、ゾクリ、と背筋を震わせた瞬間。

爆碎音が響き。

粉塵が舞う。

ミライの、真っ直ぐ突き出した右手が肘の半ばまで壁に刺さる。

「っ、なんだ、えらく、硬いな。今のでデカいのが取れると思ったんだけど、なっ」

呟きながら、今度は左手。

ふっ、と息を吐き出すと同時に、貫手を壁へ。

斬、と縦に亀裂を走らせ、左手が刺さる。

ポカンと口を開け、それを驚愕と共に見つめるアリゼル。

両手を壁に突き刺したミライ。まるで壁と抱擁したようにも見え、しかし。

鈍く、何かが碎ける音が『壁の中』から響き。

「ファイッ、トーっ！」

ズシン、と腹の底に響くような轟音が。

イッパァ、ツツ！　と言う気の抜けるような掛け声をかき消し。
ミライは壁をえぐり抜いた。

突然加えられた負荷と、一部が消失したことに耐えきれず。蜘蛛の
巣のようにひび割れ崩れる壁。

それをカポーンと口を開けて驚愕と共に見つめるアリゼル。

一抱えほどあるそれを担いだまま歩き出したミライはそのままリー
クルの正面まで行き。先ほど手に入れた『弾』を右手に食い込ませ
るように握りしめ。体を引き絞り、撃ち出す。

静寂。

キーンと言う音が空間を満たし。

瞬間。

音が爆ぜた。

アリゼルは咄嗟にその場から後方に飛び去り。しゃがみこむ位に態
勢を低くし。

視線の先。

音が消え、煙が晴れた向こう。

——そこには孔があった。

壁一面が大きく穿たれ、伝わる衝撃に耐えきれず、外に行くにつれ

円状に隆起した壁。

崩れ落ちる瓦礫が煙を立てる。

——要するにそこには巨大なクレーターが出来ていた。

もちろんリークルなどというものは文字通り木端微塵に。

冷や汗を一筋。

「……。……、えっと、いやいや、待てミライ。君は魔法が使えたのか？」

「？ いや使えないですけど」

爆心地を作り出した張本人は、ぷはーっと息を吐き出し、平然とした様子でアリゼルの方へ戻ってくる。

「では、いや待て。では今のは何を？」

「何をつて。適当なモノが無かったんで使えるもの使ってみました」

と言つて投球フォームをして見せるミライ。アリゼルは振り返り、明らかに一部が欠けた壁を見て、次に真新しいクレーター見る。

「君は、幻想種だったのか？ それともギフトを？」

「へ？ ギフト？ いや、ただの人間、のはずですよ」

数千年の時を越えてきた、それ自体が上級の防御魔法と同等の性能を持つ迷宮の壁を素手で破壊し。しかもそれをただ投げただけで。

それがどれだけトンデモナイことなのか、彼は理解しているのだろうか？ アリゼル自身、やろうと思えば同じことは出来る。だがそ

れは、宝具たる『アマキリ』の性能。魔族と鬼族の血を最高の形で体現した自らの身体性能とオドに依る肉体強化。魔法を使用したブースト。そこまでしなければ、『これ』と同じ結果を生み出すことは出来ない。

「——君がいた場所では、他にもこんなことができる人はいたりしたのか？」

「うーん、そうですね。結構いましたよ。その中だと、俺なんかいいところ、中の上くらいの実力でしたからねえ」

どこか懐かしむような、されど嫌そうに在りし日の事を思い出しつつ話すミライに、

「——うん。そうだな。今日はもう遅いから引き上げようミライ」

取り敢えず難しく考えることを止めたアリゼル。

「へ？ もう帰るんですか？」

「明日も早いんだ。それに私は疲れたから休みたい」

目頭を押さえて溜め息を吐き出すアリゼル。

こうしてミライの初めての迷宮探索は僅か五十メートルで引き返すことになるのだった。

初めての迷宮探索【改訂】（後書き）

ミライは 経験値を 1 取得した。

レジェンド・オブ・アリゼル（前書き）

お酒は二十歳から！

本作は決して未成年の飲酒を推進しているわけではありませんので
ご注意ください。

レジェンド・オブ・アリゼル

宿に帰るまでに一応立ち直ったアリゼルからしつかり注意されたミライ。

曰く、『迷宮内で無闇に大きな音を立てるな』とのこと。低レベルのモンスターだとしても、数はそれだけで脅威となる。逃げ場の少ない迷宮内ではなおさら。いくら実力があっても不測の事態で倒れてきた冒険者というのも少なくはないのだと。

戦を知るミライにとっても、数の大切さは重々承知のこと。まあ、個人で戦略を引っくり返されるなんてこともよくあったのだが。

自重することをしつかり肝に銘じて反省するミライだった。

「——お帰り、ってなんだい。随分景気の悪い顔してるねえ」

カウンターに座って暇そうにしていたロゼッタは、宿へと帰ってきた二人、主にアリゼルを見ながら声をかける。

「受付嬢^{あなた}が気にすることじゃない。部屋の鍵をもらえるか」

些か精細の欠けた声で返事を返してくるアリゼルに疑問を抱きつつ

も。

恐らくこの少年、アリゼルの横ですました顔をしているミライが原因なのだろうな、と根拠は無いながらに確信するロゼッタ。

その視線に気づいたように二ヘラと笑む少年に、ロゼッタは小さな笑いを返しつつ出かける前に預かっていた部屋の鍵を取り出してアリゼルに手渡す。

部屋に戻り備え付けのシャワールーム（現代日本のそれに近い形だった）で汗を流した二人はしばらくした後合流。先に夜ご飯を済ましてしまおうというアリゼルの提案に従い、食堂に向かった。

船の上で食べたご飯は魚料理が中心だったので、久しぶりに食べる肉中心の料理をペロリと平らげるミライ。日本の料理と比べると見た目も味付けもかなり大雑把ではあったが、細かいことは気にしない質のミライはかなり気に入っているようであった。

食後は喉を潤すように泡立った小麦色の液体が入ったジョッキをグイッと煽る。お酒ではなくお茶（麦茶とウーロン茶を足して二で割ったような味の飲み物でブギ茶というらしい）である。

「それで、明日はどういう予定なんですか？」

ワインをチョビチョビと飲んでいたアリゼルが顔を上げる。

「うん？ 明日か？」

普段より幾分か緩やかな語気。少しだけ赤く染まった頬、潤みを帯びた瞳。対照的に胸元から覗く艶を含んだ白い肌。

実に色つばい！ と心の中でガッツポーズするミライ。

空になったワインボトルをテーブルの隅に寄せて纏めつつ、アリゼルに視線を合わせる。

「はい。ここから馬車で移動するんですよね？」

「うん、そうだ。実は学園から迎えが来る手筈になっていてな。明日の昼前に街の入り口で待ち合わせているんだ」

「ほうほう」

「順調にいけば二日以内に着けるはずだ。学園への入学試験は五日後だから十分間に合うだろう」

「五日後かあ。アルさんアルさん。ちなみにですけど試験ってどんなことするんですか？」

「別に難しいことはしないよ。基本的に魔法と戦闘に関する事項を見るんだ。君は魔法が使えないからオドの容量キャパを計られるだけだろう。戦闘に関しては、基礎的な身体能力の測定と、受験者としての戦闘のふたつ。あとは筆記試験だな」

「げ、筆記試験もあるんですか？ 文字がまだ全部覚え切れてないんだけどなあ」

いやまあ、ひらがなに似てるから頑張ればなんとかなるだろうけど。あの利き手じゃないほうで書きなぐったような文字はなかなか難解なんだよな。

「ふふ、あの調子なら試験までには間に合うだろう。それに、筆記

試験はあくまで参考程度なんだ。よほどの落とさなければならぬような要因がない限り、総合点が合格基準を上回っていれば合格となるんだ。君なら戦闘の項目だけで合格点はとれるだろうから心配しなくても大丈夫だろう」

なるほど。アルさんがそう言うなら信じてみるかね。まあ今から考えても仕方ないってこともあるんだけどな。

テーブルに片肘をついて、ワインをチョビチョビと飲むアリゼルを眺めつつ、そんなことを思うミライだった。

二時間近くアリゼルの酒盛りに付き合ったミライ。空ボトルに囲まれるようにしてテーブルの上でクークーと寝息を零す姿に苦笑する。

アルさん無防備すぎ。いくら『親友』だからって、ここまで無警戒というか、心開いちゃうなんて。環境とかもあるんだろうけど、たぶんアルさん自身が根本的な部分で甘々なんだろうなあ。学園に行つて変な男に騙されなきゃいいけど。

ちょうど隣を通った従業員を呼び止め後片付けをお願いしてから、寝こけたアリゼルを背中に背負い片手で支え、次いでテーブルに立て掛けていた彼女の愛剣を開いた方の手にとって食堂の出口へ向かうミライは、そこに見知った顔を見つけて足を止める。

「おや、奇遇だねえミライ。どうだいこれから一杯付き合、なんだい、Sランク殿のお守りかい？ ……しかし、こうしてると普通に可愛いねえ」

入れ違うようにしてやってきたロゼッタもミライに気付き足を止め、彼に背負われたアリゼルの寝顔を神妙な顔で見つめる。

「でしょ？ アルさんだってまだまだ十九歳。ぴちぴちの女の子ですからね」

「ぴ、ぴちぴちって、あんた。いや、本当に面白いやつだね。『あの』剣鬼をこんなにしちまうなんて」

「『あの』って。気にはなってたんですけど、ぶっちゃけアルさんって一体どんなふうに言われてるんですか？」

肩に顎を乗せて幸せそうに涎を垂らしているアリゼルを横目で見ながら苦笑気味に尋ねるミライ。

「なんだ、あんた知らないのかい？」

「ええ、まあ、結構田舎から出てきたもんで世情には疎くて」

「そうだね。逸話というか、噂話というか、色々あるんだけど。まあ有名なところで言うならこんなのがあるよ。」

ドラゴンと死闘を演じ、ついにはその頭を四つに切り分けた剣の申し子。ドラゴンの屍の上、敵の返り血で真っ赤に染まった全身。全身余すところなく切り刻まれて無残な骸を晒す絶対強者の上で髪を振り乱し狂ったように哄笑を上げていたとか。

他には未発見だった名前持ちの迷宮に単独で潜り、五十以上の階層を斬り開いた。血まみれで現れた少女の報告によってギルドから派遣され調査に赴いた一団が見たのは連綿と続くモンスターの死体死体死体。余りの死の気配と充満する血臭にベテランの冒険者で構

成されていたはずの調査団ですらギブアップしてしまった、とか。

強引に口説こうとした男が男性の象徴を潰されたとか、真面目に口説こうとした男が次の日から突然姿を消してしまったとか。その他にも似たようなものはあるけどね。そしていつしかこう呼ばれるようになったんだよ。血塗れの剣鬼、ってねえ」

「おお。いやいやそれほんとにアルさんの話ですか？ これですよ？ こんなだらしのない顔してる人と同一人物の話とは到底思えないですよ」

「くくつ、いや確かに。こんな可愛い寝顔見た後じゃあ、どこまで本当なのか疑いたくはなるねえ」

「でしょ？ この人いっそこっちが心配になるくらいのお人好しですからね」

「あんた本当に面白いやつだねえ。剣鬼、いやアリゼルが目覚ましたら昼間は悪かったねって言っといてくれるかい？」

「ええ。それくらいお安いご用ですよ」

少しだけ罰の悪そうな顔をするロゼッタに笑顔で了承するミライ。それを聞いて笑みを浮かべる彼女に別れを告げてからその場を後にする。

「しまった。アルさんの部屋入れない」

アリゼルの部屋の前までやって来たミライは足を止めて悩む。

いや、鍵はアルさんが持つてるんだろうけど。勝手に服の中漁るわけにはいかないしなあ。いやそれはそれで魅力的な提案ではあるのだが。

しょうがない、とその場を後にしたミライは自分の部屋に向かう。ポケットから取り出した鍵で扉を開け、月明かりの差し込む部屋へと入る。そのまま真っ直ぐ部屋の奥に鎮座する巨大なベッドに向かう。

手に持った剣をベッドに立て掛け、後ろを向いたミライは起こしてしまわないように背負ったアリゼルをゆっくりとベッドに下ろす。少しでも抵抗するように背にしがみついていた彼女をなんとか下ろしたミライはしっかりと布団をかけてやる。

ンフフフと笑みをこぼしているアリゼル。

—— いったいどんな幸せな夢を見ているのやら。

彼はそんな幸せそうな寝顔に釣られるように大きく欠伸を漏らす。

それじゃあ俺も寝るかー。

呟いてもう一度欠伸を噛み殺したミライは窓際のソファーに向かい、そこへ横になる。

少し顔をずらし、窓の外。夜空に浮かぶ丸い月（この世界でもそう呼ぶのかは分からないが）を見る。

「……どれだけ遠くに来てても、月の光つてのは変わらないもんなんだな」

いつかの時に見た光景が重なるような気がして。

目を閉じたミライは深い深い暗闇に落ちるようにして眠りにつくのだった。

レジェンド・オブ・アリゼル（後書き）

ロゼッタのアリゼルに対する反応はあくまでロゼッタだから。船員たちのように他の人の反応はもつと顕著だったりする。まあ、今回の話はアリゼルに友達の出来ない原因の一端についてということですよ。

野生のエルフが現れた（前書き）

戦闘シーン難しかった……。

ざっくりした書き方してるんで、脳内補完しながらお楽しみいただければと思います。

野生のエルフが現れた

「満頼^{みらい}、今日は夕飯食べにいくから早く帰ってくるんだぞ」

「うーい。わかったよ ■ ■ ■」

「あー！ ちよっとお兄ちゃんつ、それ私の卵！ー」

「はっはっはっ、甘いな ■ ■。この世は常に戦場。つまり余所見したお前が悪い」

「ぐっ、なんて横暴！？ 家族裁判、家族裁判を要求します！」

「弁護人俺、裁判官俺の俺による俺のための俺裁判を開催します」

「あーっ、なにそれ、却下、却下よ！」

「ふはははは、それは無理だよ ■ ■。既に裁判は始まってオウフ！
痛いっ、て何で私まで叩かれるの！？」

「満頼も ■ ■も、食事中に騒がないの。早く食べないと学校に遅れちゃうわよ？」

「あっ、やば、本当だ。お兄ちゃんがバ力なことするから」

「御馳走様。じゃあ行ってくるよ ■ ■ ■、 ■ ■ ■」

「って、早！？ いつのまに」

「 ■ ■も遊んでないで早く食べなよ」

「う、うぐうつ！」

「ほら、満頼もその辺にしといてやれ」

「しょうがないなあ。じゃあ今度こそ行ってくるよ」

「行つてらっしゃい満頼」

「車には気をつけろよ」

「はいよ。ほらいつまで拗ねてんだよ。 ■ ■も気をつけて学校行くんだぞ？」

「わかってるわよっ、……行つてらっしゃいお兄ちゃん」

「ああ、行ってくる——」

——…っ、はっ、は。はあ。はあああ、久し、振りだな。この夢見るの」

寝汗で張り付いた前髪を掻き揚げながら体を起こし、深く息を吐き出す。

外はまだ暗い。日の出までまだ幾分か掛かるだろう時間。ミライは体の向きを変えて脱力したようにソファーにもたれ掛かる。

「——今更、ホームシック、ってか？ あれから何年たった
と思っってた俺は」

あの世界での最後の記憶。

その日常がいつまでも続くのだと、何の根拠もなく信じていられた最後の時間。

それが書き割りのごとく脆く儚いものと、そう思うようになったのはいつの頃からだっただろうか？

二度も大切なものを零して。

それなのになぜまだ俺は生きている？

何のために？

何をさせたい？

いったいどんな莫迦げた理由で俺は再び生かされる？

暗い、暗い笑みが浮かび。

——深く、腹の底に溜まったものを押し出すように息を吐き出した。

止めだ止め。あんな夢見たせい、か、どうにも考えがネガティブになつてゐるわ。……少し体動かすか。

自分に言い聞かせるように呟き頭をガシガシとかき混ぜる。重く溜め息を吐き出したミライはソファから体を起こして立ちあがり、寝ているアリゼルを起こさないように静かに部屋を出るのだった。

昼間に通った道を再び辿るように街の外へと向かい、森の奥、体を動かすのにちょうど良くくらいに開けた場所で足を止める。体を解すようにゆっくりと準備運動をすまし。二度、三度、確かめるように軽く拳を振るう。

さて、と。

「そろそろ出て来て下さいよ。観察するのはよくても、されるのってあまり楽しくないんですよ」

振り返り、木々が生い茂る闇へと視線を向ける。

「——なんだい。気づいてたのかい」

そこから染み出るようにロゼッタが姿を表す。宿屋で着ていた簡素な従業員用の服ではなく。胸元を大きく開けた袖の無い黒皮の服に二の腕まで隠したグローブ。深くスリットの入ったスカートに脛まで覆うガードの付いたブーツ。

月の光で輝く金色の長い髪を左手で掻き揚げ。うつすらと染まった頬と、口元には緩い弧を描き。右手に酒瓶を握りながら。

「ちなみに、いつからばれてたんだい？ 暗闇に紛れた尾行には少しばかり自信があったんだけどねえ」

最初からですという言葉は飲み込んで。

「さつきですよ。気配はなくても臭いまではどうにもならないでし

よう?」

右手の酒瓶を指差してやれば、それもそうかと納得したように笑みを浮かべるロゼッタ。

「それで、なんで尾行を?」

「なに、特に理由はないんだけどね。強いて言うなら、何かおもしろいことでもないかと期待してたりしたんだけどね」

笑いながらミライの肩をバシバシと叩くロゼッタ。

いやいや俺に酒のあてを期待されてもなあ。

「で、あんたはわざわざこんな森の奥で何するつもりだったんだい?」

「何ってわけでもないですけど。目が覚めたんで、少しばかり汗でも流そうかと思ったただですよ」

へえ、と面白そうに瞳を細めるロゼッタ。

「なんだい。それならアタイが手伝ってやろうか?」

「手伝う、って」

—— ツーっと、舌で上唇を湿らせ、艶やかに笑む。

「男と女がいて。やることなんてひとつしかないだろうね? 今は可愛い保護者様もいないんだから」

お、おおっ? なんだこの展開!? ま、まさか、このままエルフな美女とチヨメチヨメなことが

——ヒュッという空気を切り裂く音がなり、ズラした鼻先を掠めるように蹴撃が通り過ぎる。

ある訳ないよなあ。いやわかってたけど。

「一応、確認しておきますけど、ロゼさんの言う『やること』ってこれですか？」

問いかけながら、再び飛んできた蹴撃を身をかがめてかわす。

「やるねえ、今の避けるなんて。勿論それ以外になにがあるって言うんだい？」

あ、こんちくしょう、やっぱり確信犯かよっ、この酔っぱらいめっ、と艶やかに笑うロゼツタに内心で地団駄を踏むミライ。

「アンタ、見る限り素手でもいける口なんだろう？ アタイも足技には少しばかり自信があるからね」

「『少し』、ねえ？ はあー。まあ、いいですけどね。最初の目的からは外れてないし」

「それじゃあ、行くよっ！」

空になった酒瓶を投げ捨て。ニヤリと好戦的な笑みを浮かべたロゼツタがミライに向かって突っ込み。

およそ五メートルの距離を一足飛びで詰めた彼女は、勢いを殺さぬ

ままた、ミライの首を刈り取るように跳び蹴りを放つ。

先よりも速度の増した一撃を、しかし、身をかめるようにして距離を取りつつかわし。

ロゼッタはその勢いのまま反転。脳天を挟る軌道に踵を振り下ろす。が、それは手を添えるようにして威力のベクトルをずらされる。

そのまま背を向ける形で着地したロゼッタは、だが刹那の間も動きを止めることなく回転するように蹴りの二連撃を放つ。

すべての動作を次に繋げる。流れるような蹴りの連撃。月の光に照らされて、黄金色を放つ髪は、弧を描き続ける。

だが。

——ちっ、と舌打ちをこぼすロゼッタ。

途中からオドで身体強化までして、そこから百を超える蹴りを放った。その一つとして同じ軌道のものはなく。だが結果として、ただの一撃すら有効打を当てることができない。

まるで形の無い暗闇そのものを相手にしているような。そんな得も言えぬ考えが頭を過ぎり、冷たい汗が一筋背を伝う。

この少年は強い。純粋な近接戦闘では一枚も二枚も上手。いや、まだまだ全力にすら至ってはいないだろう状態でこれなのだから、も

つと明確な差があるのかもしれない。

だが。

このままいいようにしてやられるだけなのは気に食わない。まあ先に手を出したのは自分だが、それはそれ、これはこれである。

フツ、と呼気を吐き出し、距離を取るように後方へと飛ぶロゼッタ。

それ追うこともなく、ミライは自然体のままロゼッタを見つめる。

「まいったね、ちょっとしたお遊びのつもりだったんだけど。まさか、手も足も出ないなんてねえ」

額の汗をぬぐい、ニヤリと笑うロゼッタにミライもふうーと息を吐き出してから笑み返す。

「いやいや実は結構驚いてたんですけどね。何度か危ないのがありましたし」

「ふん、言つてな」

ザワ、っと森の空気が鳴動するように震える。

おおっ？ これは。なかなか、どうして。思った以上に。

すすすんと鼻を鳴らし、無意識のままに口角が釣り上がり。そして、その姿に身惚れる。

――肌の色が染まり、金の輝きが失せ。

透き通るように白かった肌は褐色に染まり、長い髪は銀色の輝きを纏う。

月光の下、闇の中でなお輝く、黒い妖精ダーク・エルフがその身を晒す。

天に向けていた視線をミライへと向け、銀の瞳で射抜き、口元には獰猛な笑みを浮かべ。

彼女の体から、可視化するほどに濃密なオドが溢れ出る。金色のそれが尾を引きながら空気に溶けていく様は神々しくすらあった。

ロゼッタは力を溜めるように腰をかがめ。

一直線にミライへと焼き回しのように。

跳躍、首を刈り取るように跳び蹴りを放った。

「おっ、とお」

先とは段違いの一撃、油断していた訳ではないが回避が間に合わないと判断したミライは左手で防ぐことを選択。ズシンと、体の芯に響くような衝撃。踏ん張った右足が地面を抉る。

ロゼッタは重力に引かれる前に左足でミライの腕を蹴り、後方へ一回転。膝を沈めるようにして着地し、バネ仕掛けのごとく飛び出す。低く跳躍、独楽のように回転しながら顎に向かって踵を振るい、首を振って避けたミライへそのままさらに逆足を叩きつける。

それを腕で防ぎつつ、勢いを受け流すように自ら衝撃の方向に飛び、地面を削るようにして着地するミライ。

そこへ。

途切れさせることなく追撃を仕掛けるロゼッタ。

——自分の奥の手のひとつである『ギフト』。

エルフの異端たる証。本来エルフが得意とする防御や癒やしの力をひとつとして使うことが出来ない、その対価に与えられた才能。宵闇でしか十全に効果を発揮出来ないという制約はあるものの、それが与える力は等しく彼女を数段上の領域へと押し上げる。

全能感にも似た高ぶりを覚えながらも。思考はクリアに、攻撃は熾烈に。先よりも数段上のレベルで蹴撃を繰り返し続ける。

——だがそれでもまだ足りない。

苛立ちでもなく、焦りでもなく。

疑問が生まれる。

なぜ彼はまだ立っていられる？

今の自分の攻撃は、歴代のダークエルフと比べれば圧倒的に未熟とはいえ、単純な威力だけでいえばレベル五に指定されたモンスターくらいなら容易くほふことができるくらいの力が込められている。

彼が魔法を使っている様子はない。しかも幻想種ならともかく、彼はおそらく人間種。純粋な肉体強度だけで、ギフトを発動した自分の攻撃を防ごうとすればどうなるか。言うまでもない、防いだ腕が

ミンチになるだけ。

単純に推察するならミライの肉体は低級の防御魔法以上。しかし低級の防御魔法なら実際に蹴り破ったことがあるので、おそらく中級以上の防御魔法と同等の頑強さ。はつきり言つてそこまでいくと頑丈さだけなら世界最強（もちろん高位のモンスターを省いて）と言われている竜神族と同等以上、簡単に言うならそれは『有り得ないこと』なのだ。冒険者の基本中の基本でもあるオドを操作しての肉体強化でも、そこまでの恩恵を受ける奴など聞いたことがない。いや、Sランクの三人なら出来るかもしれないが。あるいは何らかのギフトの力という可能性、それが一番近い気もするが、さて……。

ミライはギフトを使った直後と違い、すでに自身の動きに慣れ始めたのか。

繰り出す攻撃は避けられ始めている。

ここまで来ると、いつそ笑いがこみ上げてくる。流石に、Sランク冒険者があれだけ心を許しているだけはある。無名だと侮っていた彼もまたあの高みへと至る可能性を持つ逸材だったのだ。

宙で舞うようにして振り降ろされた蹴りを、ミライは腕をクロスして受け止める。

確かに速さも、それに比例して威力も増したが。

——ミライにとってはただそれだけのこと。

確かに驚きはしたが（カラーチェンジした部分に）、ロボ勝さんみ
たいのドリルみたいに防御が無意味になるほどの理不尽な威力があ
るわけでも、三っちゃんのように目で追いかけようとするのが馬鹿
らしくなるような理不尽な速度があるわけでもない。

さらなる理不尽を知り、そして相対してきた彼にとって、ロゼツタ
程度の力を御し切るのはそれほど困難なことではなかった。

蹴りの反動を使いミライから三メートルほどの距離を取ったロゼツ
タ。

——ならば、と。

足りないのなら持ってくればいい。ロゼツタは笑みを浮かべ『マナ』
を取り込んでいく。体内に入ったマナがオドと混ざり合い駆け巡る。
体の中で暴走しそうになる莫大な力に彼女は苦痛で顔を歪め。しか
し、それを獰猛な笑みで覆い隠す。

そして、爆発するように大地を踏み砕き翔る。

体内を暴走するように駆け巡る魔力は右足に込め。

漏れ出た魔力が纏わりつき紫電のように爆ぜる蹴りをミライの腹部
へと叩きつけ。

衝撃にミライの両足が地面を大きく抉り、

「——どっ、」

右手で蹴りを受け止めるように握りしめ、左手で足首をがっちり握りしめたまま腰をかがめ、

——「は？」というロゼッタの小さな呟きが漏れる。

「セエエツイ——!!」

そして力の限り空へと放り投げた。

「——な、ああああっ!? うきやああ!!?」

急激な風圧を感じつつ静止。そして『落ちる不快感』に悲鳴を上げるロゼッタ。

およそ二十メートル上空から聞こえる悲鳴に「ぷはぁ」と詰めた息を吐き出し、「たーまーやー」と呟いたミライは痺れる右手に眉をしかめ、痛みを払うようにプラプラしつつ落下地点へ。

悲鳴に尾を引いたまま落ちてきたロゼッタを怪我させないように注意しつつしっかり受け止めるミライ。

そして、茫然とした表情を浮かべるロゼッタを覗き込み二ヘラと笑みを浮かべた。

「大丈夫、みたいです。日も出てきたことですし、そろそろ終わりにしません?」

「……く、く、く、あはははっ——!!」

茫然とした表情のままミライの顔を見ていたロゼッタは堪え切れなように笑い声を上げ始める。

「くくつ、いや、まいったよ。完敗だ、ここまでやられたら笑うしかないね。もう一步も動けないよ」

褐色の肌は白く、銀色の髪は金色に。

元の姿に戻ったロゼッタは汗だくの体をぐったりしたようにミライへと預ける。

「はい？ ちょっとロゼさん？」

「悪いけど宿までこのまま運んでもらえるかい？ ギフト使った上に、不完全に魔力の統合までやったから体が言うこと聞かないんだよ」

ミライの首に両手を回し、上目遣いをお願いするロゼッタ。

近つ、顔近つ、睫毛長つ。む、胸が当たってる！ お、おおつ、なんといい柔らかさ！？ ていうかなんだこの良い匂いはっ、フェロモンだ、フェロモン祭だっ、実にたまらんっ！！！！

慄くようにゴクリと生唾を飲み込むミライの分かりやすい様子に、何々と笑い声を上げるロゼッタだった。

朝焼けで赤く染まり始めた空の下。

ロゼッタを横抱きにして森の中を歩くミライ。動けないから運べと主張する美女の言葉に、一も二もなく頷いて見せた少年。

「ところで、ロゼさんがさっき言ってたギフトって何なんですか？」
「ん、なんだい、ギフトのこと知らないなんてアンタ冒険者なんだろう？ アリゼルとパーティー組んでるんじゃないのかい？」

「いやいや違いますよ。アルさんは、まあ保護者みたいなものですかね。アルさんが学園都市に用事で行くのにくっついていつて試験を受けようと思ってるんですよ」

「はあ？ ……なんだい、あんなに強いからてっきり冒険者なんだと思ってたよ」

呆れたようにミライを見上げるロゼッタ。

「でも、そうか。ならアタイとは同期ってことになるね」

「あれ、ロゼさんって普通に宿屋の従業員じゃなかったんですか？」

「そんなわけないだろうね、あそこは試験の日までの小遣い稼ぎに雇って貰ってたんだよ」

「おお、なるほど。だからあんなに不貞不貞しい態度を」

「なんだって？」

ジト目を向けるロゼッタにいえいえなんでもありませんよと笑って誤魔化すミライ。

「まったく、それでギフトについても知らなかったわけかい。とはいえ私も詳しく知ってるわけじゃないから簡単に話すだけだよ」

——魔法やマジックワードとは異なる。

ひとことと言うならそれは才能みたいなもの。持たないものがどれだけ求めても決して手に入れることはできず。逆にどれだけ忌み嫌っても一度手にしてしまえば二度と手放すことはできない力。ギフトは持ち主に対して、階段を三段飛ばしで駆けのぼることが出来るような、そんな飛び抜けた力を与えてくれる。それこそ神の贈り物ギフトと呼ばれるくらいに。

有名なものでいうなら【魂喰らい】。これは悪名の方が残っているのだが。死した者の魂を喰らい、その力を己のモノにすることが出来たという忌まわしきギフト。数百年前に都市をひとつ滅ぼした末、時の実力者たちによって討伐されたと言われている。このようなものは固有ギフトと言われていて、一代限りのその能力は基本的には世に知られることはない。持ち主がわざわざどんなギフトを持っているかなど説明したりはしないから。

で、このような固有のギフトと違い、何度も持ち主を変えて世に現れるギフトもある。

ロゼッタのギフトはこちらに該当するのだという。

――【神闇の森の狩人】。

エルフ族の間で流転し続けるギフト。

エルフたちはそのギフトの持ち主を、使用時の見た目からダークエルフと呼んでおり。

どのような基準に従ってそれが現れるのかは分かっておらず、確かなことは同じ時代に二人現れることはないということだけ。

有名なものと言えば獣人族の【獣王】や魔族の【魔王】などがある。ちなみに魔王といっても世界侵略に乗り出したりするわけではないらしい。

「とはいえギフトを持っているやつなんて大陸中捜しても百人いな

いといわれていてね。その中でも神の贈り物、なんて呼ばれるレベ
ルのものとなればほんの一握りだけなんだよ」

喋り疲れたように息を吐き出すアリゼル。

「だからまあ、ミライの頑丈さもギフトの力だと思ってただけど」

え？ 俺いつの間にそんな力手に入れたんだ？ と疑問符を浮かべ
るミライ。そのほんとうに驚いたような様子に、嘘ではないのだろ
うな、とロゼツタは思う。自分の女の勘はなかなか当たるのだ。

「ほんとうに、違ったのかい。ギフトってのは発現したら、名前と
あと能力の輪郭くらいは自覚できるものだからね。まったく、ギフ
トなしにあんな莫迦げたことやつてのけるなんて。とんだ規格外だ
ねえアンタ。一体何者なんだか」

「はっはっはっ、そんな大層なものじゃないですから。ちょっとば
かり打たれ強いだけですよー」

「まあ、『今は』それでいいさね。それとだね、アタイと話するとき
はそんな堅苦しい話し方しないでいいよ。見た限り大して年も変わ
らないだろう？」

「おう？ えーっと、失礼ですけどロゼさんって」

「アタイはピチピチの十八歳だよ」

面白そうに笑んでみせるロゼツタ。長命種のエルフということで見
た通りの年齢とは違ふのだろうと考えていたミライはまさかの同
い年発言に目を丸くする。

「なんだい？ ミライはいつたいアタイがどれだけ年くつてと思
つてたんだい？」

ニヤニヤと笑みを浮かべてミライの胸を人差し指でグリグリするロゼッタに、いやあ、と言いながら苦笑を返す。

「勘弁してくださいよ。ロゼさんみたいな大人な色気むんむんな美人さんが同じ年なんて思うわけないじゃないですかあ」

「ふん、口の減らないやつだねえ」

「あつはつは、それじゃあ、改めて。今後ともよろしくロゼ。なんだか長い付き合いになりそうだしねー」

「くくつ、ああ、こつちこそ。今から学園での生活が楽しみになってきたよ」

ニヘラと笑みを浮かべたミライに艶やかな笑みを返すロゼッタ。

朝焼けの中、二人の影が重なって、真っ直ぐ続く道の先へと伸びていくのだった。

野生のエルフが現れた（後書き）

というわけで、ヒロイン候補？その2、ダークエルフのロゼッタでした。

なぜこうなった？　ダークエルフとかギフトとか当初書くつもりなかったのに、お酒のせいで変なテンションに……。

まあいい。何とかなるだろ。

ご意見やご感想、主人公もつと動かせこの駄作者などの文句などでもいいので何か一言いただければうれしいです。作者のやる気につながります。

大丈夫酔ってないからと言う人ほど信用できない

本当に動けないくらいに消耗していたらしく、宿についてすぐに気絶したロゼッタ。こりややばいと思いつつも、ミライはロゼッタの使っている部屋を知らないため、仕方なく自分の部屋に向かう。

「——う、うう？　ここ、ど、こ、あ、頭、痛い、うぐう」

部屋に入ったらベッドの上で頭を抱えるようにして丸まっているアリゼルが。

しかも部屋の中が酒臭い。凄く酒臭い。空気がよどんでいる気がする。あのベッドの下に転がっている大量の空きビン。まさか、また飲んでいたのか？

自分の部屋に美女を二人も連れ込んでいるという客観的事実がありながら。

全然その気にならないのは何故だろうと自問するミライ。

取りあえず自答するのは後回しにして、ベッドのアリゼルの下に向かう。

革製の帯はベッドの下に捨て置かれており、故に今のアリゼルは盛大に肌蹴ており、胸の下まで巻きつけた黒い斑模様のサラシ？　に、黒いショーツ一枚という見事な艶姿を晒していた。

ふむ。アルさんは黒、と。しかし上乳とサラシの間から覗く下乳が実にけしからんな。

なんて我儘ボディーなんだと憤るミライ。

「まったく。アルさん、大丈夫ですか？ 水いりますか？」

ロゼッタを抱えたままアリゼルに問いかけ、返事を待ち、

「………………。寝言かよっ！！」

小さな声で世の無情さに悪態をつくミライだった。

一言ツツコンで満足したミライは酒臭いアリゼルの隣にロゼッタを寝かせると、バスルームに向かい濡れタオルを持って戻る。失礼しまーすと呟き、汗を拭き取るためにロゼッタの首もとにタオルを押し当てる。

——その、濡れて冷やりとしたタオルの感触に、ロゼッタの口から淫靡な吐息が漏れ、ミライの手が一瞬止まる。そんなつもりはないのだが、なんだかすごくイヤラシイことをしているような気分を味わいつつ、再び手を動かす。首周り、手袋を外して剥き出しになった両腕を拭い。

そして大きく開いた胸元から覗く、真っ白な割れ目に視線を向ける。むう、素晴らしいな。大きさではアルさんに一歩劣るけど、なんだろう？ 色気が半端ないな、うん。アルさんのような優しく見守りたい感じとは違って、思わずガン見したくなるような色気があるん

だよなあ。これで同い年って言うんだからなあ、さすがファンタジーだ。しかし、こんな素晴らしい御胸を汗だくのまま放置してしまって万一汗疹なんかが出来てしまったとき、自分は耐えることができるのだろうか？ 否！

と言うわけでしっかりきつちり胸の間まで拭くミライだった。

ひと仕事やり終えたミライはバスルームで汗を流してからソファーにゴロリと横になる。既に朝起きたときの不快な気分は残っていない。天井を見上げたままミライはゆっくりと瞼を下ろし、微睡みに身を任せた。

「……、なあ、なにしてるんだ？」

「——うん？ なんだい、起きちまったのかい」

圧迫感を感じて目を覚ましたミライは。下腹に跨ったまま、インナーを左手で捲り、右手で口元を覆うようにして彼の腹を視姦する口ゼツタに問いかける。

が、口ゼツタは何事もなかったかのようにひょいと飛び退く。

「それじゃあアタイは仕事に戻るよ。あ、それとだね、汗拭いてくれてありがとな」

「げ、狸寝入りかよ」

ニヤニヤと笑いながら部屋を出て行くロゼッタを見送り、欠伸を噛み殺すミライだった。

廊下に出たロゼッタは深く息を吐き出し、壁にもたれかかって扉の向こうにいる少年のことを幻視する。

ミライに体を拭ってもらった途中にそのまま寝てしまい。起きてみればSランクが横で寝ているのに気付いてこれゲ落ちそうなくらいにびっくりさせられたりもしたが。なんとか動けるまでに回復していたのでベッドから降りてみればソファで眠るミライ。湧き出る悪戯心に従い彼を脱がしてやろうとして――。

――あれは。一言でいうなら、凄かった。

数十以上に渡るだろう大小様々な傷跡。明らかに致命傷にしか見えないようなものもあった。

そして。

そして、鋼のような肉体。

今朝ミライに抱きかかえられたときも見た目からは分からないくらい頼もしさに随分とモヤモヤした気分させられたが。

あれは凄かった。ただ単純に鍛えただけではない。恐らく戦いの中

で、数多の死闘を潜り抜け鍛えられた。戦うことに特化した、極限まで無駄を省いた筋肉。ある種、ひとつの芸術と言えるだろう。しかも究極の、と呼んで差し支えないレベルで。

今も、目に焼き付いて離れない。瞳を閉じれば細部まで思い出せそうだ。

頬が熱い。もしかしたら赤くなっているかもしれない。ミライにバレなかっただろうか？

「……やばいねえ。あれはやばいよ」

頬の熱を冷ますように両手で挟み、長い耳をぴくぴく揺らしつつ、ポヤきながらその場を後にするロゼッタだった。

「——うん。うん？ どこ、どこ？」

「あ、おはようございますアルさん」

ロゼッタが出て行ってから暫く。ソファに座ってダラダラしていたミライは、背後のベッドから聞こえてきた声に振り返ってヘラリと笑む。

「何か飲みますか？」

「う、ううゝ、あ、頭がポヤポヤする。水がほし、い」

ベッドの上で女の子座りして頭をふらふらさせているアリゼル。どうやら寝ぼけているらしく、その紅色の瞳は焦点が定まっていな

い。
立ち上がったミライは冷蔵庫（のような冷却のマジックワードが刻まれた箱）から水差しを取り出し、部屋に備え付けられていたコップに注ぎ、それを片手にベッドへと向かう。

夢の世界に片足突っ込んだままのアリゼルにどうぞと言って水を渡す。黙ったままそれを両手で受け取った彼女は喉を小さく鳴らしながら水を飲み干す。

ぷはあと小さく息を吐き出し、目元を拭ったアリゼルの瞳に徐々に理性の色が灯り始めたのを見たミライは、その艶姿を惜しみつつもそそくさと部屋から退散。

そつと後ろ手に閉じたドアの向こうから聞こえてきた悲鳴とも奇声ともつかぬ叫び声にやっぱりなあと嘆息し、時間がかかりそうだと先に食堂に向かう事にした。

遅れること暫く。漸く食堂に姿を現したアリゼル。ミライの姿を見つけ、少し視線を泳がせながらも、彼の向かいの席にやって来る。

「おはようございます、アルさん」

「う、うん。おはよう、ミライ。あ、あの……」

おどおどしたように頬を染めるアリゼル。

「ああ。昨晩はアルさんが寝ちゃって、それにアルさんの部屋にも入れなかったんで、仕方なく俺の部屋のベッドで寝てもらってたんですよ。心配しなくても何もしてないんで安心して下さい」

イロイロイイモノ見させて貰いはしましたが。などと間違っても顔には出さずにニコツと微笑んでみるミライ。

「う、やっぱり。あ、や、じゃなくて、別にキミにたいして思うところがあったわけではないんだ。どうも、私は酒癖が悪いらしくてそれで随分迷惑をかけてしまったのではないかと思つて」

頬を真っ赤にしてキョドっているアリゼル。

「いやあむしろ役得ゲフンゲフン。別に迷惑だなんて思つてませんよ。アルさんには俺の方こそ色々お世話になってますし。これからも頼りにしてるんですから」

ミライの言葉に。

安堵したように吐息を零したアリゼルはここでようやく席につき、タイミング良くやってきた従業員に軽めの朝食を頼んだ。

「そ、そうか。でも、手間をかけさせてしまつてすまなかつたミライ」

「アルさんアルさん。そういう時は謝罪の言葉なんかより、ありがとうって言葉のほうが百倍嬉しいですよ」

「そ、そうか？ う、うん。君が言うなら、えっと、……ありがとうミライ」

キリッとした顔をしたミライの言葉に、頬を染めるアリゼル。視線を数回彷徨わせた後、照れたような笑みを浮かべながらもはつきり

と感謝の言葉を告げる。

「どういたしまして」

その言葉に真面目な顔で軽く頭を下げて見せるミライ。

顔を上げたミライは、自分を見つめたままのアリゼルと視線を交わし。何が壺にはまったのか、噴き出すように笑うミライにつられるように彼女も顔を綻ばせて笑みを零すのだった。

「……ところで。ベッドの上から違う女の人のニオイがしていたんだが、ミライ？」

「え？」

大丈夫酔ってないからと言う人ほど信用できない（後書き）

ロゼッタは 筋肉ふえちの称号を 取得した。

公衆の面前で騒ぐのは良くないという話（前書き）

こんな稚拙な作品を読んでくれる読者の皆様大変お騒がせしました。

今後はこちらでゆったりとやっているつもりですので、広い心でお付き合いいただければ幸いです。

公衆の面前で騒ぐのは良くないという話

肩から胸部、腹部を守るための軽鎧を順に身に付けていく。続いて黒いジャケツトを手に取って、何かを思い出すように、背に描かれた『銀の左万字』を無表情に指でなぞる。指に伝わる感触と共に想起されるのは、いつかどこかで駆け抜けてきた未だ色あせぬ時間たち。

「――入ってもかまわないか？」

数回のノックの後、部屋の外から掛けられた声に手元から視線を外し顔を上げたミライは「どうぞー」と声をかけながら、感傷を断ち切るようにジャケツトを着た。

「ミライ、準備は出来たか？」

扉を開けたアリゼルがノブを握ったままミライに尋ねる。

「はい、あとはコレをつけたら」と籠手を手に取り両手に装着していく。ぐっと両の拳を握り締め具合を確かめたミライはアリゼルへと振り返る。

「うっし、ばっちりですアルさん」

振り向いた彼にひとつ頷く。

「それじゃあ行くぞ」と踵を返し出ていくアリゼルの後を追うように、一晚世話になったその部屋を後にする。

受付のネコ耳女性に鍵を返してチェックアウトを済まし宿を出る。残念ながら、別の仕事なのかロゼッタに挨拶することは出来なかったミライ。

だがまあロゼッタは学園都市で試験を受けるようなので。縁があれば顔を合わせる機会もあるだろうと、ここでひとまずの別れとするのだった。

人の賑わうマナシアの景色を眺めながら二人がやってきたのは街の出入り口。開け放たれた巨大な門の間を多くの人や馬車が行き交っている様子に感嘆の声を漏らすミライ。皆が一樣に明るい表情を浮かべて行きかっている姿に釣られるように笑みがこぼれる。

「凄い人の数ですねー」

「うん、商港都市というだけあってマナシアは外からの物が多く集まるからな」

「ああ、なるほどなあ」

だから、こんなに。

と続けようとしたミライの言葉に被さるように「アリゼルーっ！」という大きな声が辺りに響いた。

何事かと、周りの視線が集まる方に顔を向けたミライは、人垣を縫うようにしてこちらへと駆けてくる女性を発見。喜色満面のその女性は今く勢いを殺すことなくそのままミライの横に立つアリゼルに抱きついた。

「う、むっ、フリーエか？」

首に抱きついた女性に目を白黒させつつしっかり抱き返すアリゼル。

「そうや！ 久しぶりやなあアリゼル。元気にしとったか？」

アリゼルから頭を離して満面の笑みを浮かべるフリーエと呼ばれた女性。

眼の上で切り揃えた前髪に腰まで伸ばした黒い髪に青い瞳。アリゼルの着ているものによく似た緑と白の和服。ただアリゼルとは違い、腕と足、胸元に防具を装着しており。そして額からは短い角が二本飛び出している。

「うん、久しぶり。こちらは何も問題はなかった。それよりフリーエ、どうしてここに？」

その笑顔を見て、目元を緩めたアリゼルは疑問を口にする。

「ふふっ、驚いたか？ 学園からのお出迎えやけどな。ウチが引き受けたんや」

「そうだったのか」

少しだけ目を丸くしたアリゼルに満足そうに笑みを浮かべる女性。

そんな二人の後ろで「な、なぜ関西弁？」と固まるミライ。

「先生！！ いきなり大声出さないでください、恥ずかしいじゃないですか！」

その女性の背後、彼女が駆けてきた方から人ごみを掻きわけ姿を現した少女が眦を釣り上げながら食ってかかった。

ツィテールにした金色の髪と茶色の瞳、そして先端が少し尖った耳両手には肘までを覆うガンドレッド、両足には膝の上まである重厚なグリーブ。そして金属の鈍い光沢を放つ胸当てと、明らかに生地足りていないビキニにしか見えない防具。頭隠して尻隠さず、といった風情の肌色の過剰な姿。いわゆるビキニアーマーというものだろう。腰には二本のショートソードを下げている。

「落ち着きなさいタルナダ。あなたの方が煩いですよ」

その彼女の後ろから続いて現れた優男風な青年が、ツィテールの少女の肩を掴んで窘める。青い髪に黄色い瞳、服の上からブレストアーマーをつけ。腰には両手剣が。

「——ファイの言うとおり。先生よりタルナダのほうが恥ずかしい。むしろタルナダが恥ずかしい。一緒にいる私たちのことも考えてほしい」

「……キュ、キュオル、あんた喧嘩売ってんの？ 買うわよ？ 今すぐ買うわよ？」

タルナダと呼ばれた少女が額に青筋を浮かべて振り返った先。青い髪的青年が続いて現れた小柄な少女。

首元まで伸ばした薄い赤色の髪に獣耳。胸元を守るだけの簡素なブ

レストアーマーに短いスカート。スカートの後ろでは髪の毛と同じ色のふさふさした尻尾が揺れている。

「タルナダは相変わらず粗暴。これだからあなたはいつまでたっても男ができない。可哀そう」

キュオルと呼ばれた少女は心底憐れんだ表情を浮かべて怒れる少女を見る。

「よしぶつ殺す、今すぐぶつ殺してやるっ」

売り言葉に買い言葉。唇を引き攣らせた少女がキュオルと呼ばれた少女に飛びかかる、直前に後ろから飛んできた剛拳に地面へと沈む。

「まったく、あんたらしいいつもいつも。大事なお客の前でウチに恥かかさんといてくれるか？」

溜め息を零しながら握りしめた拳を解く。

「それでは、先生、そちらが……？」

「……剣鬼」

地面で蹲って頭を押さえる少女は完全に無視したまま。後から来た二人は静かに息を呑む。

「そや。アリゼル、紹介するわ。この三人はバースミリアの学園生でな。ウチが見てやってるパーティーなんや」

二人の呟きに肯定を示したあと向き直り、少しだけ目を丸くして成り行きを見守っていたアリゼルに紹介する。

「青いのがファイ。猫耳がキュオル。そんでこれが」

最後に蹲る少女を紹介しようとして、がばつと立ち上がったその件の少女に遮られる。

「っ、あ、あの！ わ、私、タルナダって言います！！ えっと、えっと、よ、よろしくお願いしますー！！」

どこか視線を彷徨わせながら、顔を真っ赤にして勢いよく頭を下げるタルナダ。「うわ、恥ずかしい方の馬鹿がいる」と静かに呟くキュオル。そんなタルナダをニコニコと見守るファイ。

「あと馬車に残ってるドワーフのラーデウってやつと、あともう一人いるんやけど今回は学園で留守番しとるから取り敢えず今回連れてきたのは四人だけや。こんなんでも一応は学園でも五指にはいる有力なパーティーでな。卒業までにＣランクまで昇格させるつもりで鍛えてるんや」

「ほう？　Ｃランクに？」

Ｃランクと言えば、レベル五のモンスターを単独で倒せる強さが必要とされる。レベル五の代表的なモンスターとしてはケンタウロスやオーガなど。このレベルになるとモンスターも低くない知性を備えだす。それに加え、その身体能力は人間のものを遥かに凌駕しており、これを単独で撃退するのは容易ならざることであるといえる。実際にＣランクの冒険者は全体でも三割程度しかいないのが現状。またレベル五以上のモンスターを退治する場合は、複数人であたるのが常識とされているのだからその強さは推して知るべし。だからこそアリゼルも僅かに感嘆の声を上げる。

「なるほど。それは教えがいがありそうだ」

「やる？ アリゼルも学園に来たらどつかのパーティー世話することになるかもしれねえから、教えがいのあるやつら選ばなあかんで？」

「うん、そうだな。でもそのことならあまり心配はしていない」

なぜなら一人すでに規格外なほどの有望株を知っているから、と口に出すことなく頬を緩める。

「——ところで。さっきから気になってたんやけどあんた誰や？」

少しだけ視線を鋭くしたフリエと呼ばれた女性が、アリゼルの後ろに立つ黒ずくめの男を見た。はっとした表情を浮かべたタルナダも、言われるまで全く気配の感じることが出来なかった男をきつく睨みつけ、腰の剣に手を添え、ファイとキュオルも静かに身構える。

まあ言うまでもなくミライのことなのだが。

「え、俺ですか？ あれ？ なんてこんなに緊迫した空気に？」

現代日本と異世界言語と関西弁の関連性について深く思考の海に潜っていたミライは、いきなり水を向けられたことと、妙な空気に首を捻り。

「なにがどうなったんですかアルさん？」

取り敢えず保護者に尋ねてみた。

「あ、フリーエ、彼は」

見事に空気を読んだアリゼルはミライのことを紹介しようとして、一歩下がって彼の隣に立つ。それから続きを口にしようとして、愕然とした表情を浮かべる知己である女性の姿に、困惑する。

「あの、フリーエ？ いったい」

「まさかあつ！？ まさか、まさか、やとは、思っけど。まさか、それはあんたの男か？」

その言葉にはつと目を見開くタルナダ。

聞かれたアリゼルは僅かに視線を泳がせ、頬を染めながらも

「え、あ、うん、えっと、そういうことになる、のか？」

しっかりと肯定する。

全然話は噛み合っていないのだが当人たちは気付かない。ミライは苦笑いを浮かべていたが。

ブチン、と何かが切れる音が響き。

「—— あ、あつ、あんたああつ！ ウチのアリゼルかどわかすとはええ度胸やんけえーっ！！ そこになおれやああつ！！」

鬼のような形相をしてミライの首を絞める彼女を、涙目になったアリゼルが必死に止めるはめになるのだった。

公衆の面前で騒ぐのは良くないという話（後書き）

ロゼッター時退場。

アリゼルの数少ない貴重な友達とモブパーティー入場。

フリーアリーエやアリゼルの服装に関してイメージがつかめない方は『サモンナイト3』『ミスミ』で検索すれば「あゝ、こういう感じね」と言ってもらえるかと。

そして今作でも関西弁粹登場。私としては一番かきやすかったり。

え？ 馬って空飛ばないんですか？

「正直すまんかった」

往来の真ん中で土下座する女性と土下座される男。土下座するのは美目麗しき鬼人の和装乙女。一方土下座されているのはぱっと見冴えない笑みを顔に張り付けた少年・ミライ。

そんな彼は衆人觀衆から向けられる刺々しい視線に若干笑みを引きつけていた。具体的に言うなら、『こんな真昼間から美女を地面に這い蹲らせて悦に浸るゲス野郎』的な視線である。

――話は少し前に遡る。

首を絞める和服の女性をアリゼルが引き離し、剣を引きぬき飛びかかってきたタルナダをファイとキュオルが取り押さえ。なんとかアリゼルの説明により誤解の解けたミライ。

「とも、だち？ ただの？」

「ああ、うん、そ、そうだが。何か変だっただろうか？」

「え、いやいやちゃうねん。てつきり……。ああ、なんでもないんよ」

「？ なら、いいのだが」

「いや、しかし、まさかあのアリゼルに男友達を紹介される日が来るなんて。あかんわウチ、目から汗出てくるわ」

という流れがあつて、気付いたら土下座されていたミライ。

この世界にも土下座文化あるんだ、と思考が横道にそれていくのを軌道修正。

ちなみにタルナダはその後ろでフリアリーエによって強制的に地面

にキスさせられている。突き出したヒップが実に哀愁を誘う。

「もういいですから。とりあえず顔上げてください」

苦笑いを浮かべたミライが右手を差し出す。

「あんたいいやつやなあ。すまんなあ疑ったりして。よう考えたらアリゼルが下心持って近づいてきたやつを五体満足でのさばらせておくわけないもんない」

なにそれ怖い。アルさんといったい今までなにやってきたんだよ。あ、いやそう言えば口ゼから似たような噂話は聞いたけど、まさかなあ？

ちらりと横目でうかがえば。

その言葉に視線を彷徨わせているアリゼル。ただの噂が真実味を帯びた瞬間だった。

「それじゃあ改めて自己紹介しとこか。ウチはフリーアリーエ、フリーエって呼んでくれてええよ。バスミリアで教師やってるもんや。アリゼルとは古い付き合いでな、いわゆる幼馴染ってやつや。アリゼルの友達同士、ウチとも仲良くしたってや」

差し出したミライの手を握り返し、立ち上がったフリーアリーエは二カっ歯を見せて笑う。

「ミライです。こちらこそよろしくフリーエさん」

大和撫子風美女が見せる快活な笑顔に、つられる様にミライも笑顔を返すのだった。

「それじゃあ、紹介も済んだことやしさつさと移動しよか」

「そうですね。ラードウも退屈してるでしょうし」

そう宣言したフリーアリーエに追隨するようにファイが頷き同意を示す。

「馬車は門の外に待機してもらってるから、取り敢えずそこまで付いて来てや」

アリゼルとミライはそれに了承の意を返しフリーアリーエの後に続く。

そんな中、先ほどからぶつけられていた視線が鋭さを増して背中に突き刺さる。嫌々ながらもミライがちらりと振り向けば、呪詛のこめられたような濁った瞳で睨みつけてくるタルナダが。前へと視線を戻し、「ふーむ」と小さく鼻を鳴らし。

——まあ、特に問題はないだろう、と。見なかったことにしたミライは、楽しそうに話をするフリーアリーエとアリゼルの背中を黙々と追いかけた。

「うおおい。おせえぞい、先生よお。おう？ 剣鬼殿は無事に見つかったみてえだな」

小柄な身長、ぼさぼさの頭髮と逞しい顎鬚。レザーアーマーに、背中には双斧を交差させるようにして背負ったドワーフが、独特な訛り口調で先頭を歩いていたフリーアリーエに話しかける。

「またせたなラードウ、こつちがアリゼル。そんでこの少年はアリゼルの連れでミライや」

「……なあるほどなあ。これがSランクかよお。とんでもねえなあ。まあよお、短い間だがよろしく頼むぜえいアリゼル殿。そいとそっちの良い目えした少年もなあよ」

アリゼルを見て僅か背を震わすラードウだったが、すぐにそれを誤魔化すように豪快な笑みを浮かべる。

それに小さく頷き返すアリゼルと「よろしくおねがいますねー」と言つてにこやかに握手を交わすミライ。

「よし、そんじゃあ行こか。御者はラードウと」

「あ、はいはい！ 俺にやらせてもらつてもいいですか？」

ラードウの背後、御者台に繋がれた『八本足』の巨馬を見たミライが好奇心を引かれたのか志願する。

「ん、そんじゃお願いしよかな。構わんよなアリゼル？」

「あ、む、勿論だ」

焦つたようにうんうんと頷き返すアリゼル。

別に寂しく思つたりしたわけではないし、まさか天下のSランク様が友達に挟まれてお喋りするのが夢だったなんてことがあるわけがないのだ。

そんなアリゼルの様子に首を傾げつつも、特に問い掛けることもなく馬車へと乗り込んでいくフリーエとアリゼル。それに続くようにファイ、タルナダ、キュオルが馬車の中に姿を消す。

「それじゃあ、ワシらも行くぞおい」

言ってミライを引き連れたラーデウが御者台へと腰を下ろす。

「おおー、すげー、でつかいなあ」

「がはははっ！　なんだあ珍しい、馬を見るのは初めてかよお？」

馬車を発進させながら、隣のミライの様子に豪快に笑うラーデウ。

え？　これ馬？　足が八本もある馬は馬とは言わんだろ。つーかデカいし。俺の知ってる馬より二割増くらいでかいし。

「あ、はい、実はずっとノースフェリアのとある辺境の田舎暮らしだったんですよー」

八本の足を巧みに使い、どんどん加速し出す馬車に目を輝かせつつ。アリゼルと一緒に三分で考えた一分の隙もないシナリオを披露する。

「森に囲まれた場所だったんで世間にも馬にも触れるような機会もなくて。だからアルさんの好意で外に連れ出してもらってからは驚きの連続なんですよねー」

つまり、知らない世界にやってきたのではなく、元からこの世界のことを知らなかったということにしたのだ。

この世界には未だ未開の土地も多く、他者との交流を好まない種族

の築くコミュニティがあることも知られていることから、その説明を違和感なくリードウに聞かせるのも特に問題はなく。

「ほおう、それはあ仕方がねえよなあ。こいつはなあ元はトライホースつつうモンスターだったんだがよお、気性も大人しくて頭もいいからこうやって生活の一部として扱われるようになったんだぞおい」

特に追求することなく頷いて見せた彼は、説明して聞かせる。

「まあよ、こいつみたいな大人しいモンスターなんてもんは例外なだけだな。基本的には害にしかならん奴らだからなあよ」

「なるほどー、それでもあえてモンスターを仲間に加えるとか、浪漫ですねー」

昔そんなゲームやったよなー、と過去に思いを馳せるミライの呟きに、リードウは楽しそうに笑う。

「がっはっはっ！ 面白いこと言うなあミライよお。そうだ！ 男つてえのはよおい、浪漫でえ生きる生き物なんだ。そうは思はねえかよお？」

「ふむ、確かに。浪漫のない人生など歩むに足り得ず。俺はそういう考え、嫌いじゃないですね」

「おおい、うれしいこと言ってえくれるじゃあねえかあ。よおいミライ、心が通じた仲だあ。堅苦しい喋り方は抜きにしようぜい？」

「お？ そうですか？ それじゃあ遠慮なく、そうさせてもらうわ」
「おうよ、他に何か聞きたいことがあれば遠慮なく聞いてこおい」
「それじゃあさ、ラーデウの冒険の話聞かせてくれよ。俺迷宮って一回しか潜ったことないんだ」

「いよおおし、ならとおっておきの話を話してやるおい。あれはよう、

ワシらがパーティー組んで――」

街道を進む御者台の上、ミライは気さくなドワーフとの話に花を咲かせるのだった。

走ること数時間。日が暮れる前に一行が立ち寄ったのはペソットという小さな村。位置的にはマナシアとバースミリアのちょうど三分の一くらいの地点。夜というのはモンスターが活発になりやすいらしく、特にマナシアとバースミリアを繋ぐ街道のすぐそばに広がるラングレの森には多くのモンスターが生息しており、街道まで出没することも少なくないとのこと。しかも最高でレベル六のモンスターが出ることもあり、そうなってしまうては並の冒険者では対処することも難しくなるのだとか。

そんな説明をアリゼルに聞いていたミライ。

「まあこのメンツやったら問題ないやろうけど。どうも聞いた話やとオーガの群れがどっかから流れてきたらしくてな。近々複数のパーティーで討伐隊組むって話らしいわ」

そのため、今回は無茶せずに安全なルートを取るとのこと。

夜はペソットで一泊、朝早くにここを出て日が暮れる前にバースミリアに到着する予定らしい。

というわけでこの村唯一の宿に向かった一行。まあ当然というべき

か、マナシアでミライたちが泊まったものと比べると随分とランクは下がるのだが。

それに関して文句を言うような狭量なものはいない。そもそも冒険者をやっていれば何日も野宿が続くこともあれば、迷宮内は淡泊な携帯食にモンスター襲撃で熟睡することもできないというのが普通なのである。

だから彼らにとっては熟睡できてうまい飯が食べることが出来るなら選り好みすることはなく、熟練の、一流の冒険者ほどこの傾向は強くなっていくのだ。

アリゼルとフリアリーエ、キュオルとタルナダ、ミライとファイとラーデウの計三部屋を取ったあと、荷物を下ろした彼らはそのまま一階の酒場で夕食を取るために集合した。

——なんなんだろうこの微妙な空気？

こんがり焼けた骨付き肉にかじりつきながら目だけを動かすミライ。フリアリーエはエール片手に隣に座ったアリゼルと楽しそうに喋っている。それに対してアリゼルも（良く見ないと分からないけれど）表情を緩めて聞き役に回っている。まあそこは問題ないのだが。

問題はフリアリーエの隣に座るタルナダである。

タルナダはフリアリーエを挟んで反対側に座るアリゼルに向けて時折落ち着かない視線を飛ばし、またそれと同じくらいの頻度でミライに向けて射殺するような視線を向けてくる。

アリゼルの対面、ミライの隣に座ったファイとキュオルは我関せずと黙々とご飯に手を伸ばしており、そのさらに隣に座ったラードゥは我関せずというより食えることと飲むことに集中し過ぎて手が

に着かない状態だ。

タルナダは別として。ファイとキュオル、それによくよく観察しなければ分らないけれどラードウも。

視線を向けてはいないものの、意識だけは明らかにアリゼルに向かっている。それも好意的ではないたぐいのものなのは明白である。アリゼル自身は気付いているのかいないのか、気にする素振りは見せていないものの。

——アルさんってほんとに友達少ないんだなあ。

この様子を見る限り、としみじみと思ってしまうミライ。思わず優しい視線を向けてしまい、唐突に向けられたそれにびくつとしておろろするアリゼルだった。

英雄は地に墜ちるか？（前書き）

今週、来週は忙しくて更新出来ないかもしれないので早めに更新。

うーん、しかし、今回急展開すぎて読者様の反応が怖い

英雄は地に墜ちるか？

「——なあ、一つ聞きたいんだけどさ。なんでご飯のときにあんな緊張してたんだ？」

部屋に戻ったミライは、同じように部屋に戻ってきたファイとラードウに向けて問いかけ。

その声に振り返って彼を見た二人は一度顔を合わせ、ファイが難しい顔をしながら口を開く。

「……逆に、あなたはあの方と一緒にいてなんともないのですか？」
「え？ いや、別に何ともないけど？」

いや確かにあまりの可愛さにたまにクラッと来ちゃいそうになることはあるけど。

「そうですか」と言って静かにミライを見つめるファイ。

「があはははっ、ミライよおう、おめえは大物になるだろうなあ」
「あ」

「そうですね。そうかもしれませんね」

「まあよおう、おまえさんは分からののかも知れんがあなあ、剣鬼殿の、いやあそうじゃあないかあ。Sランクってのはよおう、はっきりいってしまえば一つ壁を突き抜けちまったあ存在なんだあ」

「それはつまり、我々よりも存在の格が上にある、ということ。どうしてそうなるのか、どのような条件があるのか、正確なところは何も分かってはいないのですけれど」

青い髪を掻き上げ、息を吐き出すファイ

「簡単に言えば私は怯えているんですよ。私自身の魂が、というべきでしょうか。感覚的な話にはなってしまうのですが。強者の気配に、私のような弱者では耐えることはできないですよ」

「ワシらみたいによお、半端に力を持つちまった奴らはなあ、普通の奴より余計それを感じてしまうんだあ。剣鬼殿個人がどうのつていう話じゃあねえんだよおい。人がドラゴンを見上げるしかないよ
うなあもんでなあ、どうしよおうもねえことなんだあ」

あなたの問の答えにはなりましたか？　と言って締めくくるファイ。

……………え？

なんかすごい重い話飛び出てきたんだけど、え？

アルさんに原因はないんだけどアルさんだから無理なんです、とか。
アルさん、なんて不憫な。

——ああ、でも、そういうことなのか？　あの人と出会ってまだ数日しかたってないのに、妙にあの人の隣が居心地よく感じるのは…………。

…………うわあ、ちゃんと割り切ったつもりだったんだけど。

未だに未練タラタラじゃねえか俺。

危ないなあ、アルさんに依存する前に気付けて良かった。初めて『

落ちた』ときの二の舞は嫌だからねー。

若干顔を引き吊らせながらミライは口を開く。

「ま、取り敢えず理解はしたよ」

「どうにかしたいとは思うのですが。先生くらいに強くなればそこまでは気にならないみたいなんですけど」

「がははは、正式にはないにしろお、サイクロプスを二体同時に相手して倒すようなあ先生殿と比較されちゃあたまらんよおい」

「おう？ フリエさんてかなり強いのか？」

「ええ、バースミリアでは二番目に強いと言われていますね。アラシクに最も近いと一部では有名ですね」

「あの人はよお、そんなもんには興味ないみたいだけどなあよ」

ラーデウは心からの尊敬をこめて。

ファイは嫉妬と憧憬のこもった、複雑そうな感情をこめて笑みを浮かべる。

「なにせ、彼女が強さを求めたのはたったひとりの友達のためらしいですから。前ばかりを見てどんどん突き進んでいくその人がいつか振り返ったときに、俯くことなく立ち寄れる場所になるために。たったそれだけのためにあれほどの強さを手に入れて、そして、その願いは今こうして果たされているんですから」

そう言ってフリエとアリゼルの部屋があるほうへ視線を向ける。

「酔った勢いで聞いた話で、本人からは口止めされていますので、これはここだけの話にしとおいてくださいね？」

そう言ってファイは笑顔を浮かべるのだった。

「——ああ、それともう一つ聞こうと思ってただけだよ」

それからしばらく。

ベッドに座って籠手の手入れをしていたミライが、椅子に座って飲み交わす二人に顔を向ける（ミライも誘われたが丁寧にお断りした）。

「タルナダっていつもあんな感じなのかな？」

「……まあ、タルナダは基本的にあのような感じなのですが、いつもというわけではありませんよ。今回はアリゼルさんが絡んでいるのが原因でしょうね」

そこまで言ったファイは隣のラーデウを見るが、彼は完全に聞き役に回るつもりなのかジョッキに並々と注がれた酒を味わっている。

「アルさんねえ」

「最年少Sランク到達者、しかも伶俐な美貌の持ち主。経歴は他のSランクの方たちに一歩及ばないとはいえ。あの方に憧れを抱くものも少なくはないのです。それも現役の冒険者よりも、学園に通う女性方に多く見られますね」

「ようは偶像崇拜アイドルみたいなもんか」

「『偶像』崇拜とは言い得て妙ですね」

くつくつと笑みを零すファイに嫌そうな顔をするミライ。

「……じゃあタルナダは、それだけであんな『目』を？」

まるで、大切なものを壊そうとする敵を見るかのような、濁った瞳。

「そうですね。言うなれば彼女のあれは、崇拜。いえ、無意識の脅迫観念、でしょうか」

「強迫観念？」

ファンはチラリと横目でラーデウを見るが、口を挟むことなくグラスを傾けている。

「——私達五人は古い付き合いでして」

そう前置きしてから、静かな瞳でミライを見る。

「彼女の両親は三年前、私達の住んでいた街を襲ったホワイトドラゴンに立ち向かい、亡くなりました。冒険者だったことと、愛する我が子を守るため。そういつて多くのものが大切なものを守るため勇敢に立ち向かい、ですがそんな『想い』だけで事をなすには敵はあまりにも強大に過ぎ。

そして、彼女は両親が無残に殺される場面を見てしまった。

——同時にその敵が地に墜ちる姿も。

タルナダは未だにそのときの英雄の姿にとり憑かれているのですよ。
アリゼル

力足りず散った両親ではなく、絶対的な力の象徴として。あの方に近づくのではなく、あの方に為らなければ何も守ることは出来ないのだと。

なにせ、その記憶に従うままに適性の低い双剣を使う始末ですからね。ただ、幸か不幸か、彼女には普通より上手く扱うことが出来る程度には力があつた。けれど」

「それより上を目指すだけの才能が無かつたわけか」

「そうですね。それがいつ訪れるかはわかりませんが、最近の彼女の動きを見るにそう遠い日のことではないでしょう。私達の言葉には聞く耳を持ちませんし、先生に関しては『そんなことにも自力で気付くことのできない馬鹿なら所詮其処まで』と言ってますし」

「……まったく。なんともまあ」

甘い考えだねえ、と呆れたように溜め息を零す。

静かに唇を歪めるファイも、静観するラーデウも。過去の幻影に憑かれたタルナダさえも。

はあ、と溜め息をこぼす。

「何で俺に話す？ 確かにあんたたちは嫌いじゃないが、言ってしまえばそれだけだ」

赤の他人だろ？ と言外に込める、

「確かに、私もあなたとは仲良くなれるかもしれないですけど、所詮は可能性程度の関係です」

「——ああ。ああ、つまりそういうことか」

なんともまあ呆れるな。

「自分たちには止めることが出来ない、違うか。止めてしまうことが出来ないのか。だから俺を使う、ってか？」

同情か、同調か。理由はわからないし知るつもりもないけれど。

「ええ、あなたはあの孤高を謳われた剣鬼が、隣にすることを許した存在。なら、それに値する何かがある、とまあ別に何も無くても構わないのですけど。あなたがあの方の隣にいた、その事実さえあれば。プラスかマイナスか、どちらにしる今の停滞した彼女にとっては刺激にはなるでしょうから」

「ふーん。で、そこまで聞いて俺が動かなければどうするつもりなんだ」

「そうですね。ではアリゼルさんに話してみましようか」

——あなたの弱さのせいで、彼女の両親が、多くの者が殺されたのだと。

そう言って、一層笑みを深める。

ミライは。

視線を外して息を吐き出す。

大した決意だわ。俺をけしかけて、アルさんを敵に回す可能性を含めてまで、そこまでして悪役演じようなんて。よっぽど焦っているのかねえ。

けれど――。

「まあ、これもきっかけではあるよな」

ぽつりと呟いたミライに、ホツとしたように僅かに瞳を揺らしたフアイの、

「そうですか、では」

言いかけた言葉を遮る。

「ああ、ああ。勿論だ。あんたの望み通り」

両腕に漆黒の籠手を装備して立ち上がったミライは、訝しむフアイとラーデウの視線を無視して廊下に向かう。

出会ってから半日で覚えた気配が部屋の前を通りかかるのに合わせて扉を開いた。

目の前で突然開けられた扉に驚き、目をみはるタルナダは、しかしすぐにそこから現れたミライを見留めて不愉快だと言わんばかりに眉をしかめる。舌打ちつきで。

「……どいてくれる？ あんたがそこにいと、通れないんだけど」

敵愾心のこもる言葉を無視したミライは、入り口に背をもたれかけ、ニヤニヤと笑みを浮かべ。

タルナダの全身を上から下まで順繰りに舐め回すように眺め、最後に腰に差した双剣を見て鼻で笑う。

そこに込められた侮蔑と嘲笑を履き違えることなく理解したタルナダの瞳が鋭く窄められ、額に青筋が浮かぶ。

それすらも無視したミライは、

「——なあ、あんた、アルさんの猿真似が得意なんだってな？　じゃあさ、腰についたそれも、飾りなんだろう？」

そう言つてのける。

ファイとラーデウ、キュオルは驚きに見開き。

瞬間、片刃のショートソードを引き抜いたタルナダが猛然とミライに向け振り下ろす。

それを、浮かべる表情とは裏腹に、冷静に観察しながら。
小さくつぶやく。

「——ああ。ああ、お望み通り、あんたの英雄を地に落としてやるよ。力づくでな」

英雄は地に墜ちるか？（後書き）

書いているうちにどんどん横道にそれていく……。

ほんとはさらっと学園都市いくはずだったんですけど、タルナダ苛めるのが書いてて楽し（ゲフンゲフン

さて次回ですが。一言で言えばタルナダフルぼっこの回です。更新は一週間ほど空くかもしれませんが。更新
それではまた。

守るものと守られるもの（前書き）

暴力表現が苦手な方はご注意ください。

守るものと守られるもの

ズシンっと。

まるで臓腑をかき乱すような腹部を突き抜ける衝撃。

一瞬の浮遊感と頬を打つ地面の感触。

タルナダは、遅ればせながらようやく、自分が倒れているのだと理解した。

明滅する意識を必死に繋ぎ止めるタルナダを見下ろして、つまらないものでも見たようにミライは溜め息を零す。

「なんだ、この程度か？」

タルナダには、何が起きたのか分からなかった。

否、理解していながら理解することを心が拒否した。

何故、自分が膝をついているのか、理解できない。

何故、私の剣は届かなかったのか、理解できない。

何故、自分がこの男を見上げているのか、理解できない。したくない。

何故何故何故、と彼女の中に混沌とした感情の渦が生まれる。

かろうじて手放さなかった左手の剣を握りしめたまま顔を苦痛で歪ませながらも睨みつけるタルナダに、ミライは近づき。

歯を食いしばり力任せに下から振り抜かれた一撃をあっさり蹴り飛ばし、徐にタルナダの顔を片手で掴む。

徐々に強まる力に抗うように振るった剣は、しかし、まるで風を斬るかのように空を斬り。

振りほどこうと右手で握りしめた男の腕は、まるで巨石のように微動だにせず。

「あああッ！！」

万力のような力で頭を握りしめられたタルナダの口から、苦痛の聲が漏れた。

——一瞬の出来事だった。

挑発に乗ったタルナダが剣を抜き。

キュオルが止めるより早く、振り下ろした剣が届くより早く。

ミライの拳がタルナダの腹に突き刺さっていた。

腐っても、自分たちのパーティーで最も強いタルナダが、瞬きする間に沈められた。

タルナダが漏らす苦悶の声に、共に廊下にいたキュオルは、素早く動揺から立ち直ると同時。

タルナダを救うために腰の短剣を引き抜き、

——ミライから向けられた視線に、屈するように膝をついた。

短剣を取り落とし、息を呑み小さく震えるキュオルをそのままに、ミライはタルナダが振り回す剣を片手でいなしつつ、引きずるように部屋へと引き返す。

「っ、あなたは、いったい何をっ!？」

腰を浮かし、剣の柄に手をかけたファイが叫ぶ。
そこから視線を外し、ぎりつと眉をしかめて静かに佇むラーデウを一瞥してからファイに視線を戻す。

「何をつて。あんたこそ何を言ってる？ あんたが望んだ通りだろ。他人を利用してでも仲間を救いたいと。いやいや、そういう考えは立派だと思っけだな？ ただ。まさか、考えなかったとは言わないだろ？ こうなるかもしれない可能性を。まさか、なんの対価もないに俺がこいつを救う、なんて」

それは、甘いだろ？ と。

「それはっ、くっ!」

ぎりつと歯を噛み締めるファイ。

ミライはすでに興味を失ったかのようにその二人の横を通り抜け、窓枠に足をかける。

「待ちやっ！ あんた何を！？」

「ミライっ。何をしている？」

背後から響いたフリーアリーエとアリゼルの声に。

「その二人に聞いてください」

タルナダを外へと投げ飛ばしてから、振り向くことなく飛び出した。

緩やかな放物線を描き、石作りの民家の屋上に叩きつけられるタルナダ。

「っ、ぐっ」

衝撃に声を漏らす彼女の横に音もなく着地したミライは、

「——さて、どんどん行くぞ？」

タルナダを見下ろし、それだけを告げ静かに歩き出す。

「っ、ぐうっ、っああああ！！！」

咆哮し、幾百と使うことで体に馴染ませたタルナダの十八番の魔法
図【雷装】を瞬時に脳裏に展開。手の甲に拳大くらいの大きさをし

た幾何学模様の円陣が現れ、光を放ち。

瞬間、彼女の両腕で紫電が弾ける。

剣全体を覆うように二の腕まで展開された雷を纏う魔法。オドで編まれたその魔法の雷は、触れるものすべてを悉く焼き尽くす、――
――はずだった。

タルナダは膝立ちのまま、何の魔法も使用することなく歩み寄るミライの姿を視界にとらえ、ギチリと音が鳴るほど固く握りしめた対の雷剣を交差させるように引き絞り。

――まるでサッカーボールを蹴るような気楽さで。

ミライは、十字に迫る剣撃ごとタルナダの体を蹴り飛ばした。

痛みが支配する中からうじで受け身をとって、そのままダイレクトに地面に叩きつけられることは回避したタルナダは、しかし、体中に駆け廻る鈍痛に体を抱えるように地面に膝をつく。

追いかけるようにして町はずれの広場へと着地したミライは、タルナダの怒りと怯えの相反する想いを浮かべた瞳を見て、不快気に舌打ちを零し、視線を切って夜空を仰ぎみて思考をめぐらす。

「……なあ、知ってるかタルナダ？」

ゆっくりと戻された黒い双眸がタルナダを射抜く。

「あの女が、——アリゼルが、ベッドの上で、どんな顔して鳴くか？」

静かに笑みを零す。

『アリゼル』という単語にびくんと肩をゆらしたタルナダの、感情のこもらない視線がミライを捉え。

それを確認して、ゆっくりと告げる。

「——あれも、結局はただの女なんだよ。人の手で簡単に地に落ちる、ただの人なんだよ。分かるか？」

その挑発の言葉は、いとも容易くタルナダの継ぎはぎだらけの鎧で覆った心の隙間へと染み渡る。

「……違う。違う、違う違う違うちがうちがうつー!!」

その瞳に憤怒の炎を宿し、立ち上がったタルナダが叫ぶ。

「あの人は英雄なのよ！ 私の、英雄！ 私は、あの人にならないとっ、私はもうっ、私はまた、何も守れないのよ！！」

その憤怒の炎が燃やすのは、己の英雄を汚そうとするミライか。それとも。

地面に剣を突きさし、それを支えに立ち上がる。

途切れた魔法を再び発動する。両腕が雷を纏い。

それに加えて、新たな魔法図を脳裏に展開する。

使うのは【加速】。アリゼルあの人と同じ世界を駆けるために得た力。

タルナダの両足と臀部に拳大の大きさの幾何学模様の魔法円が三つ現れ、光を放つ。

——【雷装】と【加速】の同時使用。アリゼルあの人が得意とする魔法の併用発動。

魔法円が光を放ち、紫電が爆ぜる。両手の剣を握り締めたタルナダはそれを下段に構え、ミライへと駆ける。

【加速】によって、肉体を縛る世界の法則から僅かに解放されたタルナダは、一人加速された世界の中で、目の前に佇むミライに向けて双剣を振るう。

一の太刀は首への斬撃。二の太刀は胴への斬撃。金色の残像を描いたその斬撃を。

——ミライは、そのような温い攻撃が当たるのを待つわけもなく。

ステップして半歩踏み込むと同時に、一挙動で放たれたミドルキックがタルナダの脇腹に突き刺さり吹き飛ばす。

地面を削るように三度跳ねたタルナダは、「がはアッ!？」と口から血を吐き出し、苦痛に視界を歪める。

それでも、震える足で立ち上がる。

「どうした？ 使える魔法は？ 手札はそれだけか？ お前の剣はその程度か？ なら、終いにしようか」

無造作に歩み寄ったミライが拳を握りしめる。

「あ、うあああつ、ああア!!」

紫電が爆ぜる左の斬り払いと、金色の尾を引く右の刺突を掻い潜り、無防備にさらした頭に、頭突きを叩きこむ。

その衝撃に、タルナダの首は大きく後ろに逸れる。

さらに追い打ちとばかりに、がらあきの胴へ両の掌を添え。震脚。

ミライの踏みしめた地面が小さく陥没する。

そしてタルナダは、ズンっと、体内を駆け廻る衝撃と共に数メートル

ル吹き飛ばされ、転がる。

魔法の効果は途絶え。

髪留めは千切れ飛び、長い金の髪は汚れ、地面に大きく広がる。堪えようもないほどに体中を侵食する痛みに、反射的にこぼれた涙が頬をぬらす。

それでも、齒を食いしばり立ち上がる。

「まだ立つか。でもな――」

ゆっくりと歩み寄るミライ。

タルナダは乱れた髪を振り乱し、声にならない声を上げ、ミライに向けなんの技巧もない力任せの剣を振るう。

「そんな空っぽの攻撃が、俺に届くと思うな」

伸ばされた腕がタルナダの振りまわす双剣を逃すことなく捉え、握り碎いた。

鼻と鼻がくつつくような距離で視線を絡ませる。

「あんたが守りたいものは一体何なんだ？ 過去の幻想か？ 失ったものを忘れない自分か？ なあ、一体何が守りたい？――」

――お前は、何のために力を振るう？」

「――っ、黙れ黙れ黙れ黙れっ！ 何も知らない癖に、あの人の横に立つあんたに何かはアッ！？」

言葉を遮るように掌打を腹にねじ込み、よろめき離れたところに、

「まあ正直。お前の事情なんかどうでもいいんだけどさ」

後ろ回し蹴りを叩きこむ。

「耳を塞いで、目を閉ざして、何かを成すための力すら他人に縋り求める」

その呟きは誰に向けられたのか、

「あの人の強さはあの人だけのもので、あの人の魂の熱はあの人だけのものだ！ 熱に当てられ夢に溺れるだけのガキに、大切なものを守るなんて出来るか！！」

苛立ちのままに声を荒げる。

心の片隅では、熱くなりすぎたら、と呆れたように冷めた自分がいることにも気付いていた。

だがそれ以上に、負の感情が熱く燃えたぎる。嫉妬、羨望、悔恨、言葉にならないそれらの感情。

何度も何度も何度も。

彼はその手から大切なものを取りこぼしてきた。

だが、この女はなんだ？ 自分がどれだけ仲間に大切にされているか、その何でもない日常の一欠片がどれだけ貴重なものなのか、省みようとすらせず幻影にとらわれているだけ。

「……ちっ、反吐が出るな」

——まるで、鏡を見ているようで。

これが、ただのやつあたりだというのは分かっている。
それでも、と彼は思ってしまう。

あの世界で戦い、死んで。それで終わったならば、終わっていたならば、どれだけ良かったか。

再び生きながらえて落とされたこの世界には、何もないのだから。
自分が命を賭してまで守りたかった大切なものは。

——— 今のあんたとは違って。なんにもないのに、と。

まるで、ないものねだりをする子供のようなだな、と自嘲する。
見返りを求めて命を投げ打ったかのようなあさましい己の心に、心底吐き気がする。

空を仰ぎ、瞳を閉じて深く息を吐き出し、再び両目を開いたミライが口を開く。

「タルナダ、こうしよう。俺はあんたを倒した後、まずは宿に戻ってお前の仲間を一人ずつ叩き潰してやる」

一歩。一歩。

へらへらと笑みを浮かべながら。ゆっくりと歩を進める。

腕をつき、懸命に立ち上がろうとするタルナダに向けて言い聞かせるように。

「あ、あ、あ、いや、いや、げほっ、うぐ、いやあ」

涙で頬をぬらし、口からは嗚咽が漏れる。

その手に握った偶像の象徴は砕かれ。心を縛りつける鎧は砕け落ちた。

「そうだなー、まずはファイのやつだな。両腕を砕いて一生武器を握れないようにしてやろう」

一步。

やめて、と声にならない声で。

「次はラードウだな。ファイの共犯だから同じように腕でも？いでやるか？一生誰も守ることのできないように」

一步。いやだ、と声にならない声で。

「その二人のあとは、あのキュオルとかいう獣人にするか。両足を引きちぎって、二度と仲間と歩けないようにしてやろう」

一步。「やめて」と掠れた声で。

「最後は、あんだだ。その両目を抉り取って、二度と大切なものを見れないようにしてやろうか、それともその両腕をもぎ取って、無力なガキに戻してやろうか」

一步ごとに言葉が染み入るように。

タルナダは、震える腕を支えに、自らの足で立ち上がる。

その瞳には、僅かに、しかし、確かに先までは無かった光を灯すように。

「いや、いやいやいやあ、そんなこと、そんなことさせないっ！！

「！」

「——— だったら、守ってみるよ！ タルナダあつ——！」

指向性をもたせた殺意の波動がタルナダを貫く。
取りつくろった心を暴きたてるように。

ミライは振り下ろすように、握りしめた拳を———。

「———、ああ、ああああああつ——！！？」

——— 瞬間、世界が塗り替えられる。

地を蹴って大きく後ろへと後退したミライは、それを見上げた。

顕現したのは、炎の魔人。

タルナダを中心に、空を覆い尽くすように広がる真紅の炎が世界を
赤く染め上げる。

轟々と吹き荒れる炎は、しかし、彼女自身を傷つけることなく。

そして。

天へと翔る炎が、収束し。

三本の巨大な炎の槍が生まれる。

それを。

「——、ははっ。なんだよ。随分熱いもん持ってるじゃんか」

ミライはポカンと口を開き。楽しそうに、泣きそうに、懐かしいものでも見たように。ぐちゃぐちゃの心のままに笑う。

全身から真紅の炎を撒き散らしながら、

「——っ、ああああーっ!!」

タルナダが咆哮し。

同時に、天に聳える三本の赤い槍が、ミライへと降り注ぐ。

刹那。

世界は赤色に染め上げられた。

思考が熱を発し。

視界が染まり。

世界が、赤く赤く染まる。

——ただひたすらに、我武者羅に、あのとき見た、あの人の持つ強さに焦がれたまま、走ろうと思った。

そうすればあの時に止まってしまったものが、また動き出すような気がしたから。

両親の死と共に、止まってしまった自分も動き出せるのだと頑なに信じていたかったから。

でも。

本当は、分かっていたのだと思う。頭の片隅では。

どれだけ目指しても、あの人の、あのとき見た背中に追いつけるわけなんかなくて。だってそれはもうすべてあの時間で終わってしまった物語。それでも、それでも。私の弱い心は立ち止ることが出来なかった。

大切なものをなくして空っぽになったと思っていたのに。

いつのまにか、少しずつ、少しずつ。

違う。昔から変わらず側にある。

失くしたくないものに気付いていたから。

だから、今度こそ立ち止れなくなった。瞼の裏にこびり付いたあの日の光景が私を責め立てるから。

また、失くすつもりかと。

また、お前は守られるだけなのかと。

嫌だと、叫ぶ。

守られるだけなのは嫌だ。見ているだけなのも嫌だ。今度こそ私が守って見せるのだと。

あの日見た、あの人のように。

だから私はひたすらあの日見たあの人を目指した。

失くしたくないと思ったものからすら、いつしか目を背けて。

ただただあの人の強さを欲した。

——でも結局そこに、私の求めた物はなかったという、ただそれだけの話だった。

視界が赤く染まる。

体はふわふわと揺れて定まらず。

けれど、心は熱く、熱く、私はここにいるのだと。
存在を主張するように確かに鼓動を刻む。

あれだけ今まで、大事に大事に両手に握っていた重石は簡単に零れ落ちて。

いつも、必死に何かを掴もうとしていた両手。

あんなに重い重い重石を握り締めたまま、私はいったい何を掴もうとしていたのだろうか？

—— 景色が揺らめく。まるで闇がたゆたうように。黒を湛えた彼が赤を切り裂き現れる。ゆらり、ゆらりと燃える黒で、赤を染め上げて。彼はそこにいた。

あの日のあの人のような、遠い遠い場所ではなくて。その人は確かにそこにいたのだ。

私の両手は、そこに届いたのだと。届かせることが出来たのだと倒れるように手を伸ばし。

彼はその大きな腕で私を受け止める。

彼に言いたいことがあった。彼に見せてやりたい意地があった。自分は無力な子供などではないのだと。

「——。」

でも、もうどうでもよかった。

だって、耳元で囁いた彼の言葉が——。

熱いものが一筋頬を伝い、流れ落ちた。

守るものと守られるもの（後書き）

というわけで、単なるミライの八つ当たりというか、色々と溜まっていたモノが爆発したというか。

まあ、ファイモロードもタルナダも間が悪かったとしか言いようがない。

いやしかし、当初、使い捨てのモブキャラとしてしか考えていなかったタルナダ。こんなにスポット当ててどうすんだよ私。

次の次くらいには学園都市に着けるといいなあ。

二十五歳独身、花の戦乙女とは彼女のことです（前書き）

今週分早く出来たので投稿します。
前話から時間は少し遡ります。

二十五歳独身、花の戦乙女とは彼女のことです

「それじゃあそろそろ話してもらおかアリゼル？」

「？」

うん？ と、その何の脈絡もなく放たれた言葉に首をかしげるアリゼルの姿に、グハツとのけぞるフリーアリーエ。

「あかん、あかんで、そんな可愛い顔しても無駄や！ 今日のフリエお姉ちゃんは一味違うからなっ」

言葉とは裏腹にがばりとアリゼルを抱きしめて頭を撫でまわす。

「あ、ちよつと、フリーエ、急に何をする！？」

「あー、あかん、あかんでフリーアリーエ、アリゼル愛でるのは今はあかんねん、ちゃんと話聞いた後に」

「な、うひゃあ、こ、こらあ、フリーエっ！ どこに手を入れて」

「むむ！ アリゼルまた大きくなったか？ しばらく触ってないうちに揉みごたえが、はっ、まさか、ももも揉まれたんか？ 男に揉まれたんか！？」

「な、やめ、うう、んっ、あ、違う、から、離れろと言っているだろフリーエー！！」

ばったんばったんとベッドの上で暴れる二人の狂騒はもうしばらく続いた。

食後の運動代わりといってしまうのはいささか彼女にとっては不本意なところではあるが。

絡んでくるフリーアリーエを物理的（主に拳的な意味）に沈めたアリゼルは頬を染めつつも、着衣の乱れを整える。

ベッドの上からはくぐもったうめき声が漏れてくるが無視する。今回はいつもより間を開けていたためか、挨拶代わりのスキンシップも普段より度が過ぎる感が否めなかったため実力行使に出たのだが。

今年で二十五歳だというのに昔から変わる様子を見せないこの年上の幼なじみ。それは嬉しくもあるのだが、さすがにそろそろ落ち着いて欲しいものだと思え息を零すアリゼル。

「うう、もうちょい手加減してやアリゼル。ウチ本気で頭割れたかと思っただで？」

「フリーエが悪い。いつもいつも、恥ずかしいから止めると言っているだろ」

「あははははっ！　まあそれは横に置いとくとして」

よっこらせとベッドの上に座り直して胡座をかくフリーアリーエ。

「あ、またはぐらかすつもりかフリーエ？」

むん、と眉を寄せるアリゼルに、「ちやうからそんな怒らんというやあ」と笑ってみせるフリーアリーエ。

そしてふっと、真面目な表情を浮かべて、ベッドサイドに腰掛けるアリゼルに身を乗り出すようにして顔を近づける。

「ウチが聞きたいんは、ミライのことや」

フリアリーエの雰囲気に遊びではない気配を感じ、アリゼルも顔を引き締める。

「ミライの何を聞きたいんだ？」

「何を、か。そやね、例えばその素性。行きの馬車でちらつと耳にしたんやけどな。ノースフェリアの辺境出身やつて？ ノースフェリアで馬ですら入ることの出来んような、世間と切り離された辺境って言ったら。そやな、ウチにはゴズペル森林地帯くらいしか思いつかんけど」

ついと目を逸らすアリゼルをジト目でみつめる。

「はあー、ほんまあんたは。たまには迷宮以外にも目向け言ってるやろ、この迷宮馬鹿」

うぐ、と呻くように視線を彷徨わせるアリゼル。

「ゴスペルの森は迷宮も未だ発見されてないし、モンスターもサウスフェリアの黒の森にいるやつなんかと比べたら大人しい。けど、あそこの土地のおよそ九割は水に覆われとる湿地帯。おまけに水中にはわんさかモンスターもいて、少ない陸地にはグリムベアーの群れが生息してる。とてもやないけど人が住めるような場所やない。それくらいあんたなら知ってると思うけど？」

ちらりと窺えば、おろおろ視線を彷徨わせ言い訳を考えているアリゼルの姿が。

そういえば昨日の夕飯の席でお酒を飲みながらミライとそんな話をしたような気が、と今さらながら思い出すアリゼルだったがすでに後の祭り。

「……はあ。まあ、別にウチはミライの秘密やらを暴きたい訳じゃないから安心し」

その反応だけで十分やしね、とは心の中だけで呟く。

冒険者を目指すような者には、聞いても面白くないような過去を持った者も少なくない。実際素性を隠したままの冒険者も山のようにいるのだから、わざわざミライの、アリゼルが協力してまで隠そうとする秘密を暴こうなどとは思わない。

怪しさで言えばバースミリア学園の学園長もどっこいどっこいなものだから。

そんなことよりも。

「そんなことよりもな、聞きたいんはあんとあいつの関係や」

「私とミライの？」

「そや、あんだミライが友達やってのは聞いた。けどな、アリゼル」

キリッとした表情を浮かべて見据えてくるフリーアリーエにたじろぐアリゼル。

「友達つて一口に言ってしまうのは素人のやることや。玄人なら、友達強度が百越えてからが勝負なんや!!」

ドーン！ というテロップがアリゼルには見えた気がした。

「な、なんだ、と？ 友達強度、そんな、恐ろしいものが。そう、か。私にはまだミライの友達を名乗る資格はなかったというのか？」

ましてや、上位互換の親友、などと……」

ズーンと目に見えて落ち込むアリゼル。

うはあ、こんな阿呆みたいな話信じるとか相変わらずアリゼルは素直でカワええなあー、と密かに萌ゆるフリアリーエ。

「そういうことや。でもな、特別に、そう、特別にウチがあんたとミライの友達強度を測ってやるやないか」

へえあ？ と目尻に涙を溜めたアリゼルが顔を上げる。

――
ぐは。

あかん。そっちの気が無くてもこの可愛さは反則やで。あかん、あかんわフリアリーエ、気をしっかり持たんと。

などとアホなことを考えているとはつゆ知らず。優しい笑みを浮かべるフリアリーエに信頼の眼差しを向けるアリゼル。

「フ、フリエには、その、友達強度というものが測れるのか！」

「ふふふ、このフリエお姉ちゃんがノウノウと教師生活を送っているだけやと思つとるんかアリゼル？」

ちつつちつ、と眼前で人差し指を揺らし。

「友達強度認定鑑フリエとはウチのことやで！」
フレンドメーカー

ドドーン！と。

ベッドの上に立ち上がり、親指で自分を指差したフリーアエが、
どや？ と得意げにアリゼルを見下ろす。

そんな彼女に向けて、子供のように顔を輝かせて、尊敬の籠もった
視線を向けつつパチパチと拍手するアリゼル。

「……………ご、ごほん」

とわざとらしく咳払いしたフリーアエが再びベッドに座り直す。

「……………ま、まあ、それは置いとくとしてや。そやな。まずはあんた
がミライに対してどーゆう風に思ってるんか詳しく教えてもらおか」
ぽつと出の男がアリゼルの友達に相応しいか審査しちやると、黒い
笑みを手で隠しつつ。

「ミライのことを？」

そやそやと頷き、先を促すフリーアエ。もはやただの私情でしか
ないのだが幸か不幸か誰もそれをツッコむ者はいなかった。

「そ、そうか、ミライのことか。えつと、そうだな。ミライとは出
会ってまだ四日しかたってないんだが」

「ふーん四日かあ短い付き合いやのに仲ええねんなあって短っ、短
っ！？ めっちゃ最近やんっ」

「うん、確かに出会ってまだちょっとしかたってないんだ。フリーア
と違って、私はまだミライのことをほとんど何も知らないし、ミラ
イも私のことをほとんど知らない」

その否定的な言葉とは裏腹に、嬉しそうに笑うアリゼルに、フリーエは少しだけ驚く。普段から友達が少ないことを気にしている癖に、迷宮以外のことにはほとんど興味を示さないアリゼル。そんな彼女が、他人に対してこのような表情を浮かべるなど、最近ではあまり見ることはなかったから。

「でも、なんだろうな、ミライといると、楽しくて、なんだか、胸のあたりが暖かくなって。……ミライの黒くて、深い瞳の色を見ていると、こう、落ち着かなくなるのだが、それでも、それは、いやな気持ちではなくて」

握りしめた両手を胸元に抱き寄せ、まるで自分の心を紐解いていくように、独白するように言葉を紡ぐアリゼル。

「ミライが、私を友達だと、親友、だと、言ってくれたときは、なんだか夢を見ているみたいな、フワフワした気持ちになったんだ。……なあ、フリーエ、私にはフリーエしか友達はいなかったのだが。こんな気持ちになれるなんて、友達というものは、いいものだな」

……ふーん。

うん？

えーと。うん？ 友達？

なんや、えーと、それは。

頬を染め、瞳を潤ますその姿は――。

……うーん、なんや、これ。あれ？　ウチ一体何聞こうと思ってたんやつけ？　ああ、いや、落ちっこ。なんせ、アリゼルやしな。まだそうと決まったわけじゃないし。ああ、ふふふ、ウチが最後に男作っただんていつやったけ？　最近はずしかったからそういうのに縁なかったからなあ。……あれ、おかしいな？　思い出されへんで？　最後っていうか最初に男できたのっていつやったつけ？

「あの、どうだ、フリーエ？　私とミライの友達強度はわかったのか？」

「ああ、なんやこんな話振ったウチがあかんかったんやろか。まさかあのアリゼルに先越されるなんて。そやなあ、ウチもそろそろ良い相手見つけよかなあー」

忙しさにかまけて忘れていた忌まわしい記憶でも思い出してしまったのか。

ふふふと濁いた笑いを零すフリーエを、オロオロと見守るアリゼルだった。

「まあ、あんたとミライが友達なんはええとして」

ややおざなりな様子のフリーエは、ベッドにうつ伏せに寝ころんだまま顔をアリゼルに向ける。

「あ、こら、はしたないぞフリーエ。パンツが見えてる」と言いながらそんな彼女の服を直してやるアリセルに「あんがとー」と返しつつ。胸元おっぴろげてるあんたには言われたくないけど、とは心で呟き。

「ミライに試験受けるように薦めたつてのは、まさか友達鼻屑と違うやろな？」

「うん？ ああ、もちろんだ。知識に不安はあるが。……うん、それを補うくらいには強い、と思うからな」

マナシアで見せられたミライの非常識さを思い出してやや言葉尻が濁る。

「ほー、^{アリゼル}Sランクにそこまで言わせるなんてやるなあ」

「ああ、私も直接彼の戦闘を見たわけではないから、推測になるが。おそらく――」

その言葉を最後まで続ける前に立ち上がったアリゼルと、少し遅れて体を起こしたフリーエが同時に同じ方角――ミライたちの部屋がある場所――に鋭い視線を向ける。

「フリーエ」と静かに呟いたアリゼルが^{アマキリ}双剣に手を伸ばし腰に差す。それに頷き返したフリーエは、腰につけたマジックポーチから先端が丸みを帯びた巨大な剣――斬馬剣――を取り出し肩に担ぐ。

それと同時に動き出したアリゼルがドアを開け廊下に出れば、呆然とした様子で、自分で自分の体を抱きしめるようにして膝をつくキユオルが。

「キユオル！」

アリゼルの後ろで獣人の少女の名を呼ぶフリアリーエを置いて、向かうのは今も剣呑な雰囲気漂うミライたちの部屋。

そこには。

背中を向けたミライ。

その手に掴んだ苦悶の声を漏らすタルナダ。

「待ちやつ！ あんた何を！？」

「ミライっ。何をしている？」

振り返りすらせず、

「その二人に聞いてください」

そこに込められた拒絶の色に息をのみ、タルナダを投げ捨てそれを追うように背を向けたまま闇の中へと消えていくミライを、彼女はただ見送ることしかできなかった。

「どういうことだ、ミライに何を言った？」

窓の外に向けていた顔を戻し、鋭い視線を二人に向けるアリゼル。そこに込められた平時とは比べ物にならない気配の圧に、二人は息を飲む。

「アリゼル落ち着き。キュオル、大丈夫か？」

アリゼルの肩を掴んで意識を自分に向けさせたフリーエ。長い付き合いだからこそわかる内心で取り乱すアリゼルの姿に、逆に心を落ち着かせた彼女は今も腕の中で力なく肩を預けるキュオルに問いかける。

「……あまり大丈夫、ではないけど、今はタルナダが先」

キュオルは今も体に纏わりつく濃密な気配にブルリと背を震わせる。視線を合わせただけで、そこから感じ取ったものに、自分の意思ではなく心が抗うことを拒否していた。なぜ、今の今まで、あの瞬間まであれに気付けなかったのだろうか？

あれは、おそらく今ここにいるSランクの女性から感じるそれよりも――。

そんな存在を相手に、今の不安定なタルナダが剣を交えてどうになるなどとはキュオルには思えない。

それは先ほどの一瞬の攻防でも明らかだったから。

「ファイ、ラードウ」

短く問いただすフリーエ。

「彼に、話したのです、タルナダのことを」

「……それで？」

「ワシらがよおう、ミライを利用しようとしたからだよい」

「彼の存在が、彼女にとって何かの切っ掛けになればと思ったのですが。ぐうつ!!」

「ぐはあっ!？」

その言葉を聞くと同時、フリーエがファイとラードウの頭にオドで強化した拳を落とす。

「この、アホ餓鬼どもめつ。なんのための仲間あんたらやねん!」

「フリーエ」

「ちいつ、あんたらのお説教は後や。今はミライ止めるんが先や」

「先生。私も行く」

「わかった、ほらいつまで寝取るんや、アホ餓鬼ども! 男なら自分のケツくらい自分で拭いてみせる程度の気概見せてみんかいっ!」

頭を押さえて蹲る二人に一喝。慌てて立ち上がる二人をしり目に、フリーエたちは宿を飛び出した。

遠くで発動した魔法の気配をアリゼルが感じ取り、それを頼りに一直線に町を駆け。

そして、アリゼルのオドによって強化された聴覚がその言葉を拾い上げ、強化された視覚が彼の姿を鮮明にとらえた。

——守ってみせろと。そう叫び、震える体で立ち上がったタルナダに向けて握りしめた拳を振りおろそうとするミライ。

まるで、泣きそうな、怒っているような、誰かに救いを求めているような。その背はここ数日間で見せていた彼の姿とは比べようもないくらいに、彼女にはとても小さく見えて——。

「っ！ 先生、あれ！！」

アリゼルに遅れてキュオルがその光景を捉えて声を上げる。

「ちっ、遠い！ アリゼル！！」

「間に合うかつ？」

先頭に立って走るアリゼルが全身をオドで強化して剣の柄に手をかける。

その瞬間、驚愕に目を見開く。

「——あれは、まさか」

「っ、うそやろ？」

魔法円が描かれることなく、つまり、ヒトの生み出した魔法の理に依ることなく引き起こされる超常。

タルナダの全身を包んでなお、有り余る劫火が空へと立ち登り覆い尽くす。

それはまさしく炎の化身。

「……おい、ありゃあ、まさか」

「っ、ギフ、ト？」

「これは、タルナダが？」

ラーデウとキュオル、ファイが呆然と言葉を紡ぎ。

「っ！？ はよ止めんと——」

炎が収束し、形を成す。その圧倒的な魔力の気配にフリーアリーエは息を呑み。

空に聳える三本の赤い槍が。

「っ、ミライ！」

それが一斉に重力に引かれる様に降り注いだ。

——瞬間。

莫大な魔力が解放され、真紅の炎が吹き荒れた。
ミライがいた場所を中心に炎の渦が巻き起こり、世界を赤く染め上げる。

町の一画を覆い尽くすほどに轟々と燃え盛る火の海の中。

「……熱く、ない？」

自らをも炎に包まれながら、キュオルが呆然と呟く。

「これは、一体？」

驚きに目を睜りながら、炎の中に手を差し出したファイは、そこに感じる温かさに言葉を漏らす。

「これは、幻惑魔法？ いや、ちゃう。これは、対象指定型の、っ、アリゼル！」

ギフトの効果について推測するフリアリーエの思考を遮るように、アリゼルが猛然と駆けだした。

このギフトがどのようなものかは分からないが、あの炎を構成する魔力に込められていた気配から、あれが攻撃型のギフトであることは間違いがなく、そしてあれが落ちた先にいたのはミライ。あの巨大な炎の槍一本に込められた魔力。かつて戦ったホワイトドラゴンのプレスには劣るが、それに匹敵するくらいの魔力。それが計三本もミライに向けて降り注いだ。

常識で考えるならそれがどういう結果をもたらすのか。

アリゼルは焦燥と不安と恐怖に、ギチリと強く歯を噛み締め。

「――あ、アルさん」

だから平然と姿を現した彼の姿を見てずっとこけてしまっても仕方ないだろう。

「お？　おお、リアル漫画滑り」

と驚いたミライは、ボロボロになったタルナダを背負ったままアリゼルへと近づいてくる。

「えっと、あの、大丈夫ですかアルさん？」

うつ伏せたままのアリゼルの頭に恐る恐る声をかけるミライ。

「大丈夫、何も問題ない」とくぐもった声で返事を返し、何事もなかったかのように立ち上がる。

「あ、あはは、えっと、なんかすごい顔してますけど、もしかなくとも怒ってます？」

「……人の気も知らないで、君は随分元気そうだな」

アリゼルの顔を見て冷や汗を流し、頬をひきつらせるミライ。

――いつもと変わらない、彼女の知る少年の姿。

「え、えっと、いやあー、まあ最後のあれだけはヤバかったんで、奥の手ひとつ使ったんですけどね」

「……奥の手。君には色々聞きたいことが出来たが、今は、いい。彼女は、無事なのか？」

ミライに背負われたまま瞳を閉じるタルナダに視線を移す。

「ああ、タルナダなら――」

「タルナダ！」

ミライの言葉が続く前に被せられた声。

顔を上げれば四人の姿が。フリーアリーエは、見たところ傷一つないミライの姿を見てギョツと目を見開き、ファイとリードウも驚愕に表情を染める。

そして、先ほど彼女の名前を叫んだキュオル。

獸耳は力なく倒れ、ふさふさのしっぽを股の間に挟んで。本人的には心中を隠しきったつもりではあるが、生憎誰から見てもミライに恐怖している様子で、しかし、それでもなおミライを強く睨みつけていた。

「あんた、どうやってあの攻撃から。いや、そんなことより、タルナダは無事なんか？」

「今は気を失っていますが、後に影響するような怪我はさせてません」

言いながらフリーアリーエにタルナダを預けて後ろに下がる。フリーアリーエは真剣な表情でタルナダの顔を覗き込み、そして、ひくりと口元を震わせた。

それに続いて覗きこんだファイは微妙な表情を浮かべ、リードウは「おいおい」と呆れたように呟き。最後にフリーアリーエの前に回り込むようにして覗きこんだキュオルは、一瞬黙りこんだあと、ベシツとタルナダの、その『ふやけた表情』のまま眠る彼女のデコを叩く。

「……あんだ、タルナダに何したんや？」

四人の視線がミライに向かい、その圧力に一步後ずさる。

「い、いやあ、心当たりはない、っていうか、ぼこぼこにはしてしまっただけですけど。――………すいません、フリーさん。それにファイとロードウも。少しばかり、やりすぎてしまいました」

そういつて自嘲の笑みを浮かべるミライ。

「はあー、この件に関してはもうええ。当事者のこいつがこんなアホ顔さらしてんのに、周りのウチらがどうこう言っても詮ないことやし、それにこいつらにも非はあるみたいやからな」

「その通り、ですね。すいませんミライ。関係の無いあなたを巻き込むような真似、本来ならするべきではなかった。あなたに言われた通り、今回の事は私の甘さが原因です」

「そうだなあよう。ワシらも短慮に過ぎからのう、ミライだけに責任押し付けるわけにはいかんよおい」

「そこまでにしとき。あんただけで反省会せんと続きは本人が目覚ましてからや。……その前にあんたら二人はウチがみっちり話聞かせたるけどな」

うぐつと顔を引き攣らせる二人。

キュオルだけは最後まで怯えっぱなしだったのは余談である。

二十五歳独身、花の戦乙女とは彼女のことです（後書き）

視点変更してお送りしました。

次でタルナダ編（仮）は終了予定です。

いや、ほんと、引つ張りすぎてすんません。

こうして彼はまたひとつ黒い歴史を刻むのだった

突然空を染め上げるほどに吹き荒れた火の柱が轟音と共に町の一角を覆い尽くせば、ペソットの住人たちが騒ぎだすのは至極当然のこと。

ファイとキュオル、ラードウにはタルナダを任せて先に宿へと戻らしたあと、住民に対してアリゼルとフリアリーエが『突然現れたモンスターに対するための処置であり、町への被害はない（要訳）』と説明し、ギルドカードを見せた。

彼ら自身誰一人怪我をしていたわけでもなく、それゆえに変わらないう町の姿とアリゼルとフリアリーエ両名の冒険者ランクを見せられ納得したように家へと戻っていった。

というより、Sランク冒険者の言うことに意見できるような一般人などこの場所に、ひいてはこの世界にそうそういるはずもないのだが。

「はあー、疲れた」と体を解すフリアリーエ。落ち着かない様子のアリゼルに代わり、住人へと長々と説明、というより即興で打ち上げたカバーストーリーを語った彼女。慣れないことはするモノじゃないなあ、と溜め息を零す。

冒険者のウチがやることちゃうつちゅねん、ギルドの職員連れてこいっちゅうねん。という悪態を口を引き攣らせて聞くミライだった。

「それじゃあウチも戻るとするかな、っと、その前に」

くるりと体の向きを変えてミライの下へ。

そのままぐいつと腕を彼の首に回し、アリゼルに背を向けるようにして額と額がぶつかりそうな位に顔を近づける。

苛烈な視線がミライを射抜いた。

「……ミライ、あんたがどんなもん背負ってきてんのか、どんな気持ち抱えとるんかなんてウチは何も知らんし、無理に聞き出そうとも思わん。けどな、それでもこれだけは言わしてもらうで。――

――アリゼルの信頼を、気持ちを裏切ってみ。地の果てまで追いかけてブン殴つたるからな」

それは宣誓。どのような相手だとしても、どれだけ力量に差があろうとも、必ず果たすという彼女自身が己に課した誓い。彼女の冒険者としての立脚点。

「……随分、甘いですね。俺なら、『そんなやつ』がいたら、絶対に生かしてはおかないですけどね」

そのミライの答えに、何が楽しいのか口元が弧を描く。

「アホか。そんなんしたらアリゼルが悲しむやろ」

「……はあー、フリーエさん、過保護すぎですよ」

呆れたように、しかし少しだけ頬を緩めて視線を逸らせるミライ。

「よう言われるわ」

そう言って、ミライから体を離れたフリーエ。

「話も済んだし今度こそ帰るわ。あとは任せるでアリゼル」

「あ、うん、わかったフリーエ」

アリゼルの肩をポンと叩き、フリーエはそれだけを告げ、背を向けたまま手を一振りして宿へと去っていくのだった。

フリーエの姿が見えなくなるまで見送ったミライは、自分の背中に注がれている視線に答えるように振り向く。

「……なんか、もうあれですね。ここにきてからアルさんには迷惑ばかりかけてますね」

がしがしと頭を掻きながら苦笑するミライ。

「もう少し、うまいことやれると思ってたんですけどね。結局のところ、自分騙してやっていけるほど強くはなかったんですよ」

はああー、と大きく溜め息を吐き出す。

「ただの八つ当たり、だったんですよ、結局。どうにもならないことに対する鬱憤と、子供みたいな僻み。それを、関係の無いタルナダにぶつけてしまった。強くなれたと思ってたんだが、結局、何も変われちゃいなかったわけだ。ここまでやって、ようやく気付くなんて、間抜けにもほどがあるでしょう？」

力なく笑みを浮かべるその姿に、いつも浮かべる余裕はなく。その独白に答えることなく、ゆっくりと、アリゼルが言葉を紡ぐ。

「ミライ。私は君のことを何も知らない。どんな世界で生きてきたのか、どんな人たちと共に生きてきたのか、守りたかったものがどんなものなのか。ここに来るまでに一体どれだけのものをなくしてきたのか。それを失った君が、今どんな気持ちを抱いてるのか、何一つわからない。わからないんだ。」

——なあ、ミライ、こんなに悔しいと思ったことは、初めてだ」

ミライの最も近くにいるのは自分だという優越感のようなものが心にあつたのは確かだ。彼に友達だと言われて舞いあがっていた部分もあつたのだと思う。

そのようなもの、所詮ただの言葉でしかないのだというのに。

彼の事を何も知らないことなど、自分自身が一番分かっているつもりだったのに。

だというのに、知らなかった彼の顔を見ただけで動揺している自分がいることが悔しかった。

ミライのことを何も知らないのだと、改めて突き付けられたその事実が、とても悔しかった。

そして、ミライがこの世界を、自分を見てくれないことがとても悔しかった。

「ミライ。君は今、どこにいるんだ？」

その眼差しが、言葉が。

弱り切ったミライの心の楔を引きぬき、彼の心はいとも容易く慟哭の声を上げる。

「俺はっ、……。俺は、今度こそ、あの日々を守るためなら命など

惜しくないと思っていたんだ。だけど、なんだよ、なんだよ、これだよ、これは！！　なんで俺はまだ生きてる、なんで、なんでまた、こんな、こんな、居場所を失くさなきゃならないっ、大切なものを失くさなきゃならない！？　こんなものを知らなければいけないなら、俺は生きたくなくなかった。また、こんな、何もない世界になんて来たくなかったんだ……っ！」

支離滅裂な叫び。アリゼルには、その言葉の羅列にどのような意味があるのか理解することはできなかった。

けれど、それがミライの心の弱さ、紛うことなき多田満頼^{ミライ}の心からの嘆きだということ。

それだけは、理解してしまい。

ああ、だというのに。だというのに、なぜ私は。

これほど、喜びを感じているのだろうか？

なぜこれほど、心に温かいものが溢れてくるのだろうか？

「——ミライ、覚えているか。私は言っただろう、初めに信じると。君のことを、ここに、今この場所にいる君のことを信じるのだと」

その溢れた思いのままにアリゼルは口を開く。

この世界で彼が彼を見失ってしまうことがないように、と強く願いを込めて。

「なあ、ミライ。私は君が失くしてきたものになることはできない。でも」

——でも、キミの大切なものの一つになることは、できな

いだろうか？

そう、静かに、まるで夜闇に溶けていきそうなくらいに静かに紡がれた言葉は、不思議とミライが聞き逃すことはなく。

――涙が零れることはなかった。

そんなものは、何が何でも強くなると誓ったときに捨て去ったから。だから涙は流れていないはずだった。

アリゼルが、そっと、両腕でミライの頭をその胸に掻き抱く。

静かに、静かに、少年から伝わる震えごと、優しく包み込むように。

「あゝあゝ。やべえ、超恥ずかしい……っ！！」

しわがれた声で頭を抱え悶絶するミライ。なにか凄い勢いで色々ぶつちやけてしまった。そして、それ以上に今の自分の心が、まるで救われたかのように軽くなっていることが、余計に彼の羞恥心に拍車をかける。

なぜアルさんはあんなに艶々してるんだ？ そんなに嬉しそうに微笑まれるほど今の俺は滑稽なんですか！？

うおー！ と頭を抱えて地面を転げ回るミライだった。

「——いや、ほんとに、随分お恥ずかしいところをお見せしました」

漸く落ち着いたのか、頬をポリポリ掻きつつアリゼルに視線を合わせ、

「ふふ、君でもそうやって恥ずかしがるんだな？」

いつもの三割増しで優しく笑うアリゼルにうくつと喉を詰まらせる。なにか母性愛とか、慈愛心とかいったものが溢れ出ているような気がするんだが絶対気のせいじゃないよな、と眩しいものでも見てしまったかのように視線を逸らすミライ。

「当たり前じゃないですか。アルさんは一体俺のこと何だと思ってたんですか？」

「……うん、そうだな。少し前までは、不思議な魅力を持った私の初めての男の子の友達で。今は、私の大切な人だ」

いや、うん、わかってるんだ。わかってるんだけど、あれだろ、大切な友達って意味なんだろうせ。大丈夫、大丈夫だ、俺は冷静だ、クールに行こう。

はあーと溜め息を吐いて、ちょうどいいところにあった切り株に腰かけ、空を見上げる。

「まあ、でも。アルさんには、俺のせいで色々迷惑かけちゃいましたね」

「ミライ、私は迷惑をかけられたなどとは思っていない。確かに君

のやったことは誉められることではないし、結果よければ万事良好などと言つつもりはない」

そう言いながら、背中あわせになるようにアリゼルもそこへ腰掛け、ふつと小さく息を吐き出し、両足を抱え、でも、と否定の言葉を口にする。

「でもな、ミライ。それ以上に私はとても嬉しかったんだ。少しだとしても、君の本当の心に触れることが出来たことが。君の弱さを私に見せてくれたことが、本当に嬉しかったんだ。嫌な女だと思っ
うか？」

背中に感じる温もりを感じつつ。

色んな意味での羞恥心のおかげで、ミライは得も言えぬむず痒さに身悶えしたくなるのを必死に堪えていた。

「……、……。そんなこと、思うわけですよ」

漸くそのひとことを搾り出したミライ。

その言葉に反応するようにビクンと背中を揺らすアリゼルになんかなあど苦笑が浮かぶ。

「まあ、弱さ云々のところは忘れて貰えると個人的には凄くすつごく嬉しいんですけど。……おかげで、なんか、色々と区切りをつけれそうですよ。まだ、あそこでのことを思わずにはいれないけど。ひとまずは、ここで地に足つけてやっていこうかと。こんなに大切に思われてるのに、いつまでも心配掛けさせてられませんから」

とんと、僅かに背中に体重を掛けてみれば、

「っ、そ、そうか。うん、君がそういつてくれるなら、凄く嬉しい」
僅か触れるように、その小さな背中を預けてくる。

ヒトの暖かさってのは、どこ行っても変わらないんだなあ、と。
そんな当たり前のことをぼんやり思いつつ。

ふと空を見上げれば、昨夜と同じく丸い月が天上を輝き照らす。

「アルさんアルさん。あれって、この世界では何て言うんですか？」
うん？ と首だけ動かして振り向き、ミライが夜空を見上げている
のを確認したアリゼルも同じ様に上を向く。

「あれ、というのは『月』のことか？ ミライがいた場所では違う
のか？」

「……いえ、まあ似たようなもんですよ」

———
「なんだ、本当に、同じなのか。」

ふはーと息を吐き出し、だらんと体から余計な力を抜く。

「ひゃあ、っ、こらミライっ。く、くつつきすぎ、顔、近——

———

アリゼルの抗議の声をBGMに、ミライはただただ星の海へと思いを馳せた。

その心に実った誓の名前を、彼女はまだ知らない

「なあ、ミライ。聞きたいことがあるのだが構わないか？」

背中合わせのままアリゼルの肩に後ろ頭を乗せて、少しばかりウトウトしていたミライの耳朵を涼やかな声が擦る。

「……ん、構わないですよ、っと、んん」

言いながら、のそりと体をアリゼルから離して筋肉を解すように腕を組んでぐつと背を伸ばす。

「ひとつだけ気になっていたんだが、君があのようなことをしたのは、なぜなんだ？」

背中にかかる重みがなくなったことを若干寂しく思いつつ。

アリゼルはくると体の向きを変えるように、狭い切り株の上を横並びになるよう移動する。

「なぜ、って。何でそう思うんですか？」

——あの瞬間、ギフトが発動する直前にアリゼルが捉えた光景。執拗なまでに殺意を込めた言葉をタルナダに投げつけていたミライの姿に覚えた、僅かなズレのような感覚。

「そうだな。君は、彼女が何か。反抗してくるのを期待しているように私には見えたんだ」

「期待、ですか。うーん、あれは期待、というほどいいものではなかったんですけど。……まあ、あいつが何かしら持っていることは

分かってたんですよー。だからぎりぎりまで追い詰めたら何かで
てくる、んじゃないかなあ？　とか思ったわけで」

「何かしら？　分かっていた、というのは、それは彼女が立ち向か
ってくるということか？」

「いえいえ。そのまんまの意味で。ギフトか、それに近い力を持っ
ていた、秘めていたって言ったほうが近いかな？　ともかく、それは
会ったときからなんとなく分かってたんで」

アリゼルは、隣から返ってきた想像もしなかった答えにいささか頬
をひきつらせる。

「……わかっていた？　君はタルナダがギフトをもっていることが、
わかっていたというのか？」

潜在的なギフトを感知するなど。そんな話は、アリゼルですら古今
東西聞いたことがない。

「ええまあ、マナシアでロゼに一度見して貰って、そのときの匂い
を覚えてたんで」

――人外が跳梁跋扈する世界。見た目からでは想像するこ
とすらおこがましいような超越した力を振るう彼らの中であってな
お、ただの少年でしかなかったころのミライが。未だ舞台に立つ資
格すらなかったころの少年が、その中で生き残るために血にまみれ
ながらも磨いた才能のひとつ。強者の持つ、形のない力を嗅ぎ分け
るという異常なまでの危機察知能力を有する嗅覚。

あんな特徴的な匂いは間違えるわけないしなあ。アルさんとかフ
リエさんとは違って、どちらかというと、あっちの人外魔境の住人

に近い感じだし。

呑気な顔で顎に手を置き、一人思考に没するミライの横顔を唸りながら見つめるアリゼル。

「……ギフトに臭い？ ああ、いや、それは、ありえないだろ？ そんなことがもし可能なのだとしたら、ああ、でもミライだし。……ふう」

考えることを放棄したかのように。

どこか達観とした表情を浮かべて溜め息を吐き出すアリゼル。混乱する思考を落ち着かせるように空を見上げて、星の数を数える。星の数を五十まで数えたところで、自分が随分混乱していることに気づいてもう一度溜め息を吐き出した。

ドラゴンと相まみえたときですら冷静に戦っていたはずなのに。自分はいつからこんなにも動揺しやすくなったのだろうか？ と過去を振り返り、ああ、彼と出会ってからこの数日からだったかと思いついた彼女はふうと溜め息を零し、顔の熱を誤魔化すようにほっぺを揉み解す。

「……それでロゼ、というのは、マナシアで会ったあのエルフの女性のことか？」

熱を冷ますように両手で頬を挟みつつ、視線だけをミライに向けて問いかける。

「ええ、今日の明け方頃に少し手合わせして、そのときにギフトのあれこれも一緒に教えてもらったんですよ」

「むう、いつのまに。まあ、いいけど、その時に彼女のギフトを？」

「そうなんですよー」とうんうんと頷くミライ。あの時の衝撃を思い出すように右手を開いたり閉じたりする。

「あれはなかなかでしたね。タルナダみたいな爆発力はないですけど、安定した強さというか。しかもまだまだ発展途上みたいでしたからね。あれは、極めればかなりの高みまでいけるんじゃないですかねえ」

「……随分、褒めるんだな。そんなに凄かったのか？」

その言葉に、瞳を閉じたミライは瞼の裏であの時の光景を鮮明に思い描く。

一挙手一投足。

彼女が描き出した軌道を。そして彼がその両の眼に逃すことなく納めた、衝撃的な。

「——ええ、あれは凄かったですね。蹴りを放つたびに、有り余る質量が重力に逆らい飛び跳ねるんですから。ええ、実に。

……実に（あのおっぱいは）凄かった」

「そ、そうなのか？」

空気を震わせるような気迫のこもったミライの真剣な横顔に、ごくりと喉を鳴らしつつ。その鋭利でありながら頼もしくも見える表情にドッキンと知らず胸を高鳴らせるアリゼル。言ってることはイマイチ理解出来ていなかったが。

「そうなんですよ。まあ、どっちかというと俺はアルさんくらいの

ほうが好、げふんげふん。アルさんのほうが俺は凄いですよ
！！」

「そ、そうなのか？」

ミライに勢いよく褒められて、満更でもなさそうに視線を彷徨わせるアリゼル。

どこ褒められてるのか分かってねーのに喜んでるアルさんカワエー
なあ、と。

フフフと笑みを浮かべ、先ほどの色々と黒歴史になりそうな告白を聞かれてしまったことの意趣返しとばかりに、こっそりアリゼルで遊ぶ実心小さいミライだった。

「しかし、ギフトって外見まで変化するんですねー。……いったい
どんな仕組みなんだろうなあ」

ついではかりに思い出したのはロゼッタのカラーチェンジ。輝く
ような銀の髪に浅黒い肌の色。一体、いかような力が働けば、あんな
ことになるのかと。

ぽつりと呟いたその言葉を聞き止めたアリゼルが怪訝そうな瞳を彼
に向ける。

「……外見が？」

「ん？ ええ、髪の毛と目の色が銀で、肌の色が褐色に」

「……まさか、彼女はダークエルフなのか？」

驚いたように目を見開くアリゼルを不思議そうに見やるミライ。

「あれ、知ってるんですか？」

「ん、ああ、そうだったな。うん、まあ、君は知らないのだろうけど」

と、少しだけ疲れたように眉間を揉みほぐすアリゼル。

「ダークエルフ、そう呼ばれる由縁たるギフト『神閻の森の狩人』。このギフトを持ったものは記録に残るだけで過去に三度表舞台に現れているんだがな。そのうちの一人はAランクパーティーで名を馳せ。さらに残りの二人はその名をSランクに連ねている。しかし、そうか。新たな担い手が現れたということは、『砲環のフレデリア』殿はお亡くなりになられたということか」

「砲環の？ それは」

「ああ、先代のダークエルフだ。八十年ほど前に名を馳せていたAランクパーティーの一人でな。パーティーで戦えばSランク冒険者すら圧倒するくらいの練度を誇り、単独でも『砲環』と二つ名を得るほどの武勇を振るっていたそうだ。三十年ほど前に現役を退いて以降、隠居したと聞いていたのだが」

一度は会ってみたかったのだが、と眉を下げるアリゼル。

「よく分からないけどすごいんですねー」と目をシパシパさせるミライ。

顔を上げてそんなミライのことを横目で見つづ。

正直君のほうがすごいと思うけど、という言葉が胸中でつぶやくアリゼル。

この僅か数日の間に、自分を含め^{リンク}。今代のダークエルフ、そしてタルナダという強力なギフトをもった存在との出会い。バースミリアで実質トップの強さを誇るフリーエ。

短い間にこれほど特異な存在と立て続けに縁を繋げてしまう彼に、納得いかないような、『でもミライだし』と妙に納得させられてしまうような。

そんな複雑な気持ちを抱くアリゼル。

「しかし、あの従業員がダークエルフだったとは……」

「ん、まあ、ロゼもバースミリアの入学試験受けるみたいなんで、会えるんじゃないですかねー。本人は既に合格確定してるみたいない口ぶりでしたし」

「学園に？　そうか。うん。そうだな、君とも親しいみたいだし、いずれ相まみえることもあるかもしれないな」

ふふふ、と口だけで笑うアリゼルの横顔を眺めながら。

相まみえるって、なんか穏やかじゃないよなあ、そんなにダークエルフと戦いたいのかこの人？　と呆れたように笑うミライ。

「まあ、いい。それよりその、おい？　の話はあまり大っぴらにはしないほうがいい。この世界ではギフトを潜在的に持っているかどうか、確かめる術というものは今だ確立されていないんだ。そんな中で君が『それが可能』だと周りに知られてしまってみろ」

「……うへえー、すごい面倒なことになりそう」

連日連夜、自分の前で長蛇の列が並ぶ光景を想像してしまって嫌そ

うに眉をしかめるミライ。

「うん、色々、厄介なことに巻き込まれてしまう可能性が出てくるだろうしな」

そんな話を周りが信じるかどうかは別だが。

とはいえ、彼自身の特異性は隠そうと思ってもいつまでも隠し通せるものでもないだろうから、厄介事を全て避けて通ることはできないのかもしれないのだけれど。

「うーん、肝に命じときます」と情けない顔で溜息を零すミライを見つめつつ。

もしもの話ではあるのだけれど。その時は自分が彼の助けになることができればいいな、と小さく微笑むのだった。

「——さて、そんなじゃ、そろそろ戻るとしましょうか？」

フリアリーエたちが去って既に一時間は経過した頃。隣でウトウトとしたアリゼル（の胸元）を見て、優しい笑みを浮かべつつ。立ち上がり、目をしょぼしょぼさせるアリゼルに手を貸す。

「む？ うん、そう、だな。明日も早いし」

ふわ、と小さく欠伸を噛みこらしつつ。それに、と呟きミライの顔

を伺う。

「ああ。まあ、こっちは心配しなくてもいいですよ。ふふふ、完璧な作戦がありますから」

とニヤリと笑ってみせるミライ。

「そ、そうなのか？ そのあたりの機微は、どうにも苦手だから手助けしてやることはできないのだが」

「気持ちだけ、って言いたいところなんですけど、ちょっとだけ手を貸してもらってもいいですか？」

「む。わ、私に出来ることなら構わんが」

落ち込んでたところから一転、むんと胸の前でこぶしを握り締め力強く頷くアリゼルを見て。

「いやあ、お金貸してって言いづれー、とヘラリと笑みを浮かべるのだった。」

「お。もう戻ってたのか」

と、部屋に入るなり目に入ったファイとラードウの姿に声を上げるミライ。

「よっと。それで、俺が言うのもなんだけど、タルナダは大丈夫だ

った？」

「え？ ええ、運がよかったのか、それともあなたが手心を加えてくれたからなのか。傷自体は打撲程度でしたので、先ほどキュオルが治癒魔法で治療は済ませて、あとのことは女性方にお任せしようという事で戻ってきたのです。ミライとも話しておかないと思いまして、あの？」

「……おおうい、ミライよおう。それはあなあんだ？」

「よっこらせつと。これで最後、と、ん？ なにって、見ればわかるだろ？ 酒だよ酒」

フヒーと掻いてもない汗を拭い、ポンポンと四つある酒樽のひとつを叩いて見せる。

「こつちはこつちで、いろいろと心の整理がついたというか、しっかり直視させられてしまったというか。まあ、とにかく、落ち着いたところでお互い色々思うところがあるだろうと思ってね」

そんなときはあれだよあれ、飲みニケーション、まあ俺の金じゃないんだけどね。といいながら樽を担いで二人が座るテーブルまで向かい、足元にそれを置く。

「しかし、そうはあ言ってもよおい。おめえ、酒飲めないんじゃないのかよお？」

「ん？ いやあ、べつに飲めない訳じゃないみたいだから心配しなくていいよ」

と言いながら。バコンと樽を開けると、酒特有の豊潤な香りが部屋全体に充満しだす。

怪訝な顔をしていたラードウがおおう！ と喜色を含んだ声を上げ

るのを聞きながら。

テーブルに置いてあつた木製のコップを取って酒を三人分入れていく。

「さあさあ、そんな難しい顔してないで、まずは乾杯しようやファイ」

「う、私はあまりお酒は得意ではないのですが」

いいからいいから、と微妙に頬をひきつらせるファイに無理やり杯を持たせる。

「まあ、酒はあいいが。ミライよお、一体何に乾杯すんだあ？」

「んー、そうだな。それじゃあ、お互いの『若さ』、なんてどうよ？」

ニヤリと唇の端を釣り上げ。

その苦笑のような自虐するような表情に、リードウとファイも思わず苦い苦い笑みを浮かべる。

「その一言で片付けて仕舞うのも、どうかとは思いますが……」

「まあよお、今晚のことに関しちやあ間違つてはなあいよおなあ」

「だろ？ と。」

一転、ヘラリと緩い笑みを浮かべミライは自分の杯を手取る。

「さ、夜は待ってくれないんだ。準備はいいかい？」

そんな気楽なミライの姿に。

リードウはさつさと気持ちを切り替えたのか意気揚々と。ファイは溜め息混じりに。

「「「乾杯」「」」

三人の杯がぶつかり、僅かに中身を飛び散らし。こうして、彼らの長い長い夜は更けていくのだった。

もう、どうにでもなればいい、と彼は呟いた（前書き）

色々変更した点について。簡単に。

冒険者ランク↓固有ランクとパーティーランクの二つに分ける。

魔法全般↓体内魔力を利用するのを【魔法】。対外魔力とマジックワードを利用するのを【魔術】と呼称変更。

いまのところはこれだけです。

もう、どうにでもなればいい、と彼は呟いた

「――お待たせしました」

そう言つて、玄関の木扉を開けて姿を現したミライ。

まだ薄闇が支配する時間、すでに準備をし終え、宿のすぐ外で待っていたアリゼルたちに向け片手を掲げつつ、おはようございますと声をかける。

「おはようミライ」とアリゼルはいつも通りの凜々しい表情で、いやさ、何かいいことでもあったのだろうか、いつもより柔らかな雰囲気漂っている。

「おはよーさん。残念ながらウチらも今降りてきたところやから待つてないわ。タイミングばっちりやで」

アリゼルの横に並んで立つたフリアリーエが二カツと笑みを浮かべる。

「何が残念なのは知りませんがそれならよかった。……それで、えーと」

――あー、うん、まあ、自業自得なんだけども。どうしたもんかね？

獣耳をペタンと伏せ、その瞳に警戒の色を浮かべたまま、フリアリーエの背後に隠れるようにして顔を半分だけ覗かせるキュオル。視線を向ければ、うーと低く唸りつつ、薄らと目に涙を浮かべだし。

そこからさらに隣に視線を移せば、バツ！　と顔を体ごと背けるタルナダが。

各所に包帯を巻き付けつつも、少しだけ窺える顔色はそれほど悪くないことから体調は悪くないのだろうが、今は俯かせたそこから感情の機微を伺うのは難しかった。

と、二人の少女の姿を見て頬を掻くミライ。

同年代の女の子に嫌われるのって、地味に傷付くんだね、初めて知ったよ、と乾いた笑みを浮かべる。

そんな三人の様子にアリゼルはむーんと眉を窄め、フリアリーエは苦笑を浮かべる。とはいえ、いつまでもそうしているわけにもいかないのひとまず空気を変えるために口を開く。

「——ところでミライ。なんや、えらい遅くまでドンパチやってたみたいやけど、大丈夫なんか？」

昨晚のうちにアリゼルから事情は聞いていたフリアリーエ。
仲直りするのに酒樽持ち出すなんて若いなあ、とかしみじみ思いつつ。

色んな意味を込めて大丈夫だったのかと。

「んー、はい。なんとかなっただけですね」

「なんや、えらい曖昧な言い方やな。どついう、んん？　なんや、あんたら」

ミライの後ろから遅れて現れた男二人に言葉を止めて怪訝そうに眉を顰めたフリアリーエは、「えらい派手にやられとんなあ」と呆れ

たように呟く。

亀のような鈍重な動きで宿から現れた二人。

片手で口元を押さえるのは、真っ白を通り越して蒼白な顔色をしたファイ。

それに比べればマシとはいえ、やはり疲れたような表情を隠しきれないラードウが、ファイの肩を支えたままミライの隣に並ぶ。

「いやあ恥ずかしい話だが、先生よおう。すまねえがあ、ワシもそうだが、ファイのやつもこんな調子だからよおう、馬車に乗れそうにないだろうからあ、ワシらは別で戻るとするよあい」

「はあー、まあええ。馬車ん中で吐かれたらたまらんしな。宿代は、今日の昼の分までは払ってるからそれまで寝とき」

「……うつぶ、す、すいませ、ん」

虚ろな瞳をしたファイが、掠れたように言葉をこぼす。

いい、いいと片手を振ったフリアリーエは出発のためにキュオルに馬車をとってくるように指示を出す。

そこから視線を外したラードウは、隣のミライに顔を向ける。

「……しかしよおう。ミライは平気そうだなあ。あんな飲み方してよあ」

「ん？ ああ、なんか酒には滅法強い体質らしくてな。俺としては、飲んだときの記憶がほとんど残らないから酒自体はそこまで好きじゃあないんだけどねえー」

と、ヘラリと笑って見せるミライに、ラードウはぽかんと口を開き、ファイは愕然と目を見開く。

いやいや、最後は樽ごと飲んだり飲ましたり、ケラケラ笑いながらやりたい放題していたくせして何も覚えていないなんて、と。

「……何も、うぶ、覚えて、いないの、ですか？」

打ち上げられた魚の目をしたファイは、昨晚力付くで話す羽目になった青臭い決意やら信念やらの、自分の語りを再び思い出して顔を青くしたり白くしたりする。

「まあ、その時にどんな風に感じていたのかってのはなんとなくだけど覚えてはいるんだけど」

何があつたか覚えてないから、余計に色々もやもやするんだよなあ。まあ、昨日は随分楽しかったって感情だけは覚えてるんだけど。

「……そうかよあい」とだけ呟いたロードウは色々諦めたように溜め息をつき、同じ目に合わされたファイの背を優しくさすのだった。

「そんじゃ、御者はウチがやるからアリゼルたちは後ろ乗ってくれるか」

やってきた馬車の御者台に乗り込んだフリアリーエが首だけ振り向いてアリゼルたちに後ろの馬車を指し示す。それに頷き返し、ミ

ライを伴って乗り込むアリゼル。

それに慌てるように反応を示したのはやはりというかこの二人。

「先生、私も一緒にやる。今日はなんだか御者をやりたい気分」

「なっ、じゃ、じゃあ私も」

「三人は無理。怪我人は大人しくヒトば……、馬車の中で安静にしておくべき」

「あ、あんた今ヒト柱って言ったでしょ！」

言っていない。言ったわよ！　タルナダの耳が節穴。な、言ったでしょ、絶対言ったでしょ！！

と息もつかせぬままに額をぶつけあわせる二人に向けて溜め息を零すフリアリーエ。

「あんたらそのへんにしとき。まったく。しゃあないからキュオルはこっち。タルナダは大人しく後ろ座つとき。それと、バースミリア着く前に、一回きっちりミライと話しときや」

やったと小さくガッツポーズをするキュオルと、フリアリーエの無情な言葉にそんなあゝと頂垂れるタルナダだった。

嬉々として御者に乗りに込むキュオルの背中を恨みがましく見送りつつ、フリアリーエに言われた言葉を反芻する。

——それは、勿論、自分だつてこのまま何もしていないでいるつもりなどではなかった。
無かったけれど。

ゴクリと生唾を飲み込み、取り敢えずの覚悟を決めたタルナダは緊張でガチガチの足で馬車に乗り込む。

そんな彼女を出迎えたのは、怜悧な美貌をたたえる見る者すべてを凍てつかせる氷のごとき灼眼（タルナダ視点）と、まるで全てを見透かすかのように泰然とした闇よりなお黒い漆黒の双眸（あくまでタルナダ視点）。その二つの視線に晒され、内心であわあわと慌てふためきながらもなんとか、二人の向かい側に腰かける。

死ぬ。緊張しすぎて死ぬ、と心臓を早鐘のように打ち鳴らし視線を彷徨わせるタルナダ。

そんな心境の彼女が腰かけたのと同じ、ガラガラと馬車が動き出し、一行はバースミリアに向け出発するのだった。

うーん。これは、あれだよな、俺から話しかけるべきなんだろう
か。と、ぼりぼり頭を掻きつつ思考するミライ。

——馬車が走り出して既に二十分ほど。

隣に座ったアリゼルは何をするでもなく、というより、彼女にこの

問題に対して口出しする気はあまりないのだろう。先ほどから口を閉ざしたまま、時折視線を感じるだけ。

そして、対面に座ったタルナダは、キュオルのようにあからさまに自分に対して怯えてくるようなことはないけれども。顔をうつむけ視線はそのまま足元を彷徨っており、両手の人差し指をしきりに突っつき合わせていた。

いやまあ、アルさんの視線が痛いくらいにどうにかしろって催促してきてるし。俺から話し掛けるべきなんだろうなあ。出来れば二人っきりの時に話したかったんだが。アルさんいたら、色々話しづらいだろうしなあ。フリーエさんも、なかなかどうして、優しくないよなあ。

と、頭の揺れと連動して揺れるツィテールを目で追っかけつつ、そこまで考えたミライ。

ええーいままよっと、口を開く。

「なあ、タルナダ、っと、そうだった。昨日からなんとなく呼び捨てにしてたけど、さん付けで呼んだ方がいいか？」

一方、突然話しかけられたタルナダは、びくんっと大きく肩を跳ねあげたあと、勢いよく顔を上げる。

「い、いえっ、あの、呼び捨てにしてくれて構わないです！ はい！」

「そ、そう？ それじゃあ、タルナダって呼ばしてもらっけど」

あれ？ っと何か違和感を感じて首を捻りつつ。

「あーっ、と。そうだ、怪我は大丈夫だった？」

「だ、大丈夫です！ 私は頑丈なのが取り柄ですから、むしろ、もつとされても大丈夫ですっ」

「そ、そうか、えっと、それはよかった。えっと、それでだ。タルナダ、昨日はほんとすまなかった。そもそも俺自身が、あんたに偉そうなこと言えるような人間じゃねーってのに。あんな、自分勝手^{わが}な理屈押し付けるようなことしてしまつて。……おまけに暴力で解決しようとか、俺ってなんて餓鬼なんだろうな」

そこまで言つて、ミライはタルナダに向けて頭を下げる。

一晩経つて冷静に一連の出来事を思い出してみると、なんだか、頭から地面に突っ込みたくなつてきたミライである。

その言葉に、驚いたのは頭を下げられたタルナダであつた。

ひょっ！ と変な声をもらし、慌てて立ち上がりミライの前に膝をついて屈みこみ。

「そ、そんなことはありません！ 私は、私は確かに救われたんです。ミライ様のおかげで、私は愚かだった自分に気づくことができたのですからっ。だから、謝らないでください！ ミライ様がどのような意図で私にあのようなお仕置きをしてくださったのかは、無知な私^ごときには推し量ることなど出来るはずありませんが、そのおかげで、私は確かに、自分の手で誰かを守ることできる力を手にすることが出来たのですから！！ 今の私がいるのは、すべてミライ様のおかげなのですから！！」

……うん？　なんか、いま。色々おかしくなかっただろうか？

顔を上げれば、まるで傳くかのように膝をつき、潤んだ瞳に紅潮した顔をして見上げる少女が。

首を捻り、口元に曖昧な笑みを浮かべる。ゆっくりと隣に視線をやれば、すこしだけ体をひいたアリゼルがタルナダとミライを交互に見つめ。

「ああ、うん。そのだな。私は君がどのような趣味を持っていたとしても、受け入れていく自信はあるから！」

と強く断言された。

いや、そんな自信はいらないですから。

「あのな、タルナダ。その、俺のことも普通に呼んでくれていいからな？　それと昨日のは別にお仕置きとかでは——」

「そんなことできるはずがありません！！」

「えー？」

そんな力強く拒否するようなことなのか？

なんでこの人一晩でこんなにはっちゃけてんだよ。

こんなキャラじゃなかっただろ昨日まで？

「あの、一応気をつけてたんだけど。もしかして、頭強くぶつけてたり？」

「はい？　大丈夫ですよ？　ミライ様のお気づかいにはもちろん気付いていますから！　脳髓を震わすような体罰の中で垣間見えた、この身を案じるミライ様の優しさ。不肖タルナダ、感服しました！」

！
」

あつれー？ 話通じねえー。この人の憧れのヒトって、アルさんなんじゃなかったの？ と、最早完全に微妙な表情を隠し切れていないアリゼルに向けてひきつつた笑みを返す。

それに目ざとく気づいたタルナダが、ばつとアリゼルに顔を向け、

「勿論、ミライ様だけではなくアリゼル様もいまだ私の中の憧れの^{ヒロ}人ですからっ！」

拳を振るって言い放つ。

ですからっ、て言われても、と困ったように眉を寄せたアリゼルがミライと視線を合わせる。

そんな困った表情を浮かべるアリゼルから視線を外し、タルナダに視線を戻し。

—— うん。なんでこんな話になったんだっけ？ と天井を仰ぐように一瞥。

未だ興奮冷めやらぬ様子で瞳に変な輝きを灯し、ハアハアと息をついているタルナダ。

すでに傍観者でいることは出来ずに、上着の裾を小さく引いて助けを求めるアリゼル。

うん、もうどうにでもなあれ、と笑みを浮かべるミライ。

つまり、色々と投げ出したのだった。

もう、どうにでもなればいい、と彼は呟いた（後書き）

以下、御者台での二人の会話。

「……なんや、後ろ、えらい騒がしいな」

「……先生、私、あの変態の友達続ける自身がない」

「そういうなや。変態なんは前から分かってたやろ？」

「速度を得るために、ビキニアーマーを着用しているといっていたけど。絶対に嘘。あれは、タルナダの趣味に間違いない」

「あれな。確かにあれは見てるこつちが恥ずかしくなるよな。わざわざ大金はたいて魔術刻んでまであの防御力低いエロ鎧着たいとか筋金入りやで」

「……昨日、治療しているときにタルナダが言っていた。少し、濡れてしまったって」

「……殴られて？」

「殴られて」

「……」

「……」

「……どこで、教え方間違えたんやろなあ。もつと優しくするべきやったんやろか？」

「先生の責任ではない。素質は前からあった。だから目覚めさせた彼の責任」

「うーん、まあタルナダのことは置いて。話変わるけど。キュオル、あんたそんなにミライがあかんのか？」

「（ぶるっ）ダメ。あの目が、忘れられない」

「そうか？　ウチはなんも感じへんねんけどなあ」

「だから余計に。なぜ、あれだけの力がありながら、あそこまで巧妙に隠すことができるのか理解できない。あれは、剣鬼よりも手に負えない。『暴王』といい勝負かもしれない」

「うげ、『暴王』って。そこまで、か。まあ、確かに。タルナダの暴走したギフトの力受け止めて平気な顔したりとか、色々規格外な感じやもんな」

「あれは心的外傷^{トラウマ}もの」

「まあ、学園に入ってくれば、その辺ももう少し分かるやろ。とはいえや、そんなことよりまずは後ろの変態をどうにかせんとな」

「……」

「……」

「……はあ。色々、諦めていい？」

「がんばりとしか言いようがないわ」

ようやく彼も調子を取り戻してきたようで（前書き）

あんまり話は進まないです。

ようやく彼も調子を取り戻してきたようで

——ミライとタルナダが和解（？）してから数時間。薄闇に包まれていた空は既に日が昇り、燦々と空を輝き照らしていた。

あれから、ミライの体感時間で数時間ほど。

なにが原因きうかけだったのか、まるで蛇口の壊れた水道のように垂れ流し続けるタルナダの口撃くちげが始まってから。

最初は、彼も笑顔で答えていた。

どのようにあのような強さを手に入れたのか？ どうすれば自分のように強くなれるのか？

そんな質問に対して喋れる範囲で答えた。

それも一時間が過ぎたところには、彼も笑みを引き攣らせだす。

好きな食べ物は？ 好きな色は？ 寝るときは横向き？ それとも仰向けのまま？

それ聞いてどうするつもりやっちゅうねん！！ と思わず力強くツッコんでしまうのも仕方がないだろう。

ただし、ツッコまれたタルナダが、驚きにビクンと体を揺らした後、恍惚とした表情を浮かべなければの話だが。

ミライもアリゼルも最早隠すことなくドン引きした。

そんな二人の表情にさらに嬉しそうに頬を染め顔を俯かせるタルナダ。

こいつぁーダメだ、本物だ。とミライが呟けば。

ど、どうすればいいんだ？ わ、私はこういう特殊な知り合いはい

ないんだ。と眩き困惑したようにミライに視線を向けるアリゼル。
そんな二人に何か期待したような視線を向けるタルナダ。
意味が分からない空気が出来あがっていた。

そんなこんながあつたものの。

さすがにあの一切の常識が通用しない世界に染まる事が出来た彼の胆力、もとい順応力も並ではない。

つまり、相手が真性のマゾヒストで露出狂の変態であつたとして、それがそういうものだとして理解するに至つたなら。そのことがわざわざ彼の心を乱す理由にはならないということ。たぶん。

故に。

「よし、タルナダ、少し静かにしなさい。というか黙れ。俺が許可するまで発言禁止な?」

「はい! ありがとうございます!」

そこにはすでに遠慮はなく。そして、タルナダも嬉々としてその言葉に従うのだつた。

——これ少し楽しいかも、と彼が思ったかどうかは定かではない。

というわけで、ミライに言われた通りタルナダが口を閉ざし、静かになった車内。

取り敢えず色々と理解の追いつかないことは、心の平穩のためにも頭の隅の方に追いやったアリゼル。

緊張した面持ちで、されど興奮したように頬を染める少女は努めて意識の外に追いやってミライの方に視線を向ける。

「——ん、んっ。というわけで、ミライ。これからの予定について話しておこうと思うのだが」

「？ これからってというと、バースミリアに着いてからのことですか？」

「そうだ。向こうに着いたらだが、私は色々と手続きがあるから学園に行かなければならないんだ」

「ああ、そういえば色々ありすぎて忘れかけてたけど、アルさんの目的はそれでしたもんね」

「うん。フリーエの話では二、三日はかかるみたいだから、えっと、試験まで君とは別行動することになるんだけど……」

「試験までですか。うん、まあ、なんとかなるでしょ、というかなんとかしますよ。アルさんに世話掛けてばかりつてのも面目たないですから。だから、そんなに心配しなくていいですよ。これでも順応力はなかなかのものだと自負してるんで、だからアルさんはアルさんの用事を優先して下さい」

おろおろしているアリゼルをみて、ミライは自分のことを『心配してくれている』んだろうなと。

そんな、自分を思いやる彼女の性根を嬉しく思いつつ、そんなに心配させるほど頼りなく見えるのかねえ自分は、と苦笑いを浮かべる。

「そ、そうか、うん。……ミライがそう言うなら」

なんだか妙に大人びた笑みを浮かべるミライにドキドキしつつ、内心でがつつり落ち込むアリゼル。

まあ、彼女としては勿論心配する気持ちも多少はあったのだが、それ以上にミライがもっと頼ってくれることを期待していたわけで。

具体的には「え！そんな、アルさんがいないと俺ひとりで生きてけないよー！！」ぐらい言ってくれていたなら二つ返事で頷いた上でSランク権限で諸所の手続きをすつ飛ばすつもりだった（実際、Sランクの人間にはその程度の無理を通して、道理を力づくで引くこませる程度に、『自由』を与えられている）。

アリゼルも大概アレである。学園関係者に代わって、よくやったミライといわざるを得ないだろう。

閑話休題。

と、そこで言われたとおり黙ったまま成り行きを見守っていたタルナダが手を上げる。

「えーっと、タルナダさんや。さっきの半分くらい冗談だから。いちいち許可取らなくても喋っていいからね」

ミライはそんな、いちいち従順な彼女の姿に苦笑いを返した後、「んで、どした？」と問いかける。

「はいっ、あの、差し支えなければですけど」

緊張に頬を紅潮させながら僅かに身を乗り出すタルナダ。金色のツ

インテールが彼女の感情に呼応したかのように小刻みに震える。

「アリゼル様の代わりなどと身の程知らずなことを言うつもりはな
いですけど。今は学園も長期休暇中なので、ミライ様が許可して
下さるなら私に街の案内をさせていただきたいのですけど！ どう
でしょうか!？」

はあはあ、と（緊張のせいで）荒く息をつき、カッと見開いた瞳で
見つめるというかタルナダ。

「お、おう、それじゃあお願いしようかな？」とそんな彼女の剣幕
に驚いたように身を引くミライと、その隣でガビーンと口をぱくぱ
く開閉させるアリゼル。

疑問形ではあるのだがそこは勿論無視して、ミライからオッケーが
出たことに素直に喜び、やった！ と小さくガッツポーズをするタ
ルナダ。こうして普通に笑ってるところは美少女なんだけど、なん
でこんな残念なやつなんだろうなあ、とこっさり溜め息を零す。

「うーん、でも悪いなタルナダ。なんもお礼とか返せるものないん
だけど」

「あ、だったら、ひ、ひとつだけお願いがあるんですけど……」

「お願い？」

「はい、あの、私にお仕置き、ではなくて稽古をつけて欲しいので
す！」

若干本音が漏れかけてしまいが建前を被せて無事に言い切るタルナ
ダ。

ぎゅっと握り拳をふたつ、胸の前に掲げて懇願する。詳しく言えば
二つの膨らみを二の腕で挟むような態勢で。名前をつけるなら変則

型ダツチューノで決まりである。

そんなわけで大きすぎず小さすぎない形の良い胸が上げて寄せられ出来たその威容に小さく感嘆の声を漏らすミライ。

特異性^{ヘンタイ}が目立ち過ぎていて自分としたことが今の今までしつかり気付いていなかったが、近くで見ればこれはこれで。と僅かコンマ数秒で思考する。

「おおうつ、と。それで、稽古？ あー、でも俺そついうのすんごい下手なんだけどなあ」

俺自身まともに戦い方教えてもらった訳じゃないなあ。親方様とか幸村は肉体言語の指導しかしてくんなかったし、佐助は畑違いだから論外なわけで。もみあげとか家康からは勝手に技を見てパクつたりはしたけど、基本的に戦いの中で戦い方磨いてきたからなあ俺足輕の訓練も基本実践的な奴しかしたことなかったし。主にちぎつてわ投げちぎつてわ投げ。

……あれ、俺、あんま親方様たちのこと馬鹿に出来ない？

まさか、俺は脳筋、なのか？　といまさら気付いた驚愕の事実如若干凹むミライ。

「……うん、ほんと凄い下手だからさ。だからフリーエさんとかに頼んだほうがいいと思うけど？」

大きく溜息ひとつ。ポリポリと頭を掻きつつ、隣から感じる（理由は分からないが）ジトリとした視線は努めて気にしないようにしが

らそう答えを返すと、タルナダは大きく横に首を振って否定を示した。

「そんなことはありません！ 確かに言葉はありませんでしたが、昨夜の指導で、私はミライ様から多くのことを学ぶことが出来ました。技術的なことはありません。精神的な部分で、です。だから、あの、昨夜のような形で構わないので、ダメでしょうか？」

タルナダが、昨日の一方的な戦闘（決してお仕置きではない）で何を得て、そしてこれから何を得ようとしているのかはわからないけど。まあ、何から何を得るのか。阿呆みたいに猪突猛進していたころの自分を思えば、彼女の言葉も否定はできんだけど。指導者なんて柄ではないんで、いいやり方なんてわからないけれど。

「はあ、わかったよ。そのかわり、案内とかよろしくな」

本人がいいならいいか、と頷き返すミライ。

「あつ、よ、よろしくお願いしますミライ様！」

というわけで、案内人兼弟子が仲間に加わるのだった。

「——うう、ぐす、いいんだ、別に気にしていないし。ミライと別行動になるのは分かってたことだし、別に気にしていない

し……」

くすんと小さく鼻を鳴らし、小声で自分に言い聞かせるアリゼル。まあ自分が収まりたかったポジションをポツと脇から出てきた少女にかすめ取られたのだ。友達の少ない彼女にしたらなかなか、具体的に半泣きになるくらいにはシヨックだったようだ。

まあ、アリゼルが世の不条理やらなんやらに嘆いたところで馬車の歩みは変わるわけもなく。

三角座りで落ち込むアリゼルをミライが慰めたり、その横で、アリゼルの涙（笑）にタルナダ緊張し混乱したり、そこにフリーアリーエが飛び込んで来て余計混乱を助長したり、一度休憩を挟んだり、着いてからの予定を真面目に考えたりしながら。

——そうして、太陽が天頂に上る頃。

彼らは、冒険者を目指す者たちが集う地に足を踏み入れるのだった。

ようやく彼も調子を取り戻してきたようで（後書き）

ミライは脳筋、というよりあんまり後先を考えて行動しないタイプの男の子。

行きあたりばつかりというか、馬鹿というか。BASARA時代はそこに無謀とか無茶とかが付いていた感じ。

坊やだからね。と言われたことがあるかどうかは定かではない。

なぜ空を見上げているかって？ 涙がこぼれないようにさ

「—— おおい、お待たせやでー。もうじき到着や」

御者台と馬車をつなぐ小窓から顔を覗かせたフリーアリーエがにこやかにそう告げる。

「お、もうですか、結構早かったですね」

「あははは、そんな褒めんなやミライ！ そや、あんたは初めてやつたんやつけ？ だったら外見てみ、外、ええもん見れるで！」

なぜそんなにハイテンションなんだ？ という疑問は顔に出さず。言われた通りに自分の後ろ、馬車の横についた窓を開け、そこから体を半分突き出すようにして外へ出す。

強く吹き付ける風と太陽の光に一瞬瞼を閉ざし、改めて吹きつける風と爛々と照りつける光を感じながら、前方へと見下ろすように目をやれば。

雄大な高原を切り抜いたようにそこに在った。この距離では正確な全体像を測ることは出来ないが、これだけ離れていてあの広さはかなりのものだろう。

簡単に言えば、大きな六角形のような形。

外敵対策なのか、街の外壁は分厚く、街全体を囲うように走り。なにより目を引くのは、街の一角。

悠然と聳える一本の巨塔。

「ぬっふっふ、いい反応やミライ。まあ初めてあれ見たやつは大概そんな顔しよんねんけどな」

巨塔に目を釘付けにしていたミライを、御者の方から顔を覗かせたフリアリーエが楽しそうに見やる。

「いやあ、あれ、なんか明らかにオーバーテクノロジーにしか見えないんですけど。なんすかあれ？ カリン塔ですか？」

太陽光を反射して銀色の輝きを放つ塔を『見上げながら』、ほあー、と息をもらす。

「かりんとう？ が何かは知らんけど。あれはな、バースミリア名物、その名も【イカロスの天楼】^{オーバーテクノロジー}や！ ミライの言うとおり、今より遙か昔、白の時代の失われた技術で造られたんとちゃうかっていわれとる。大陸全土で最も高い建造物なんや。なんでかわかんけど学園都市が作られるずっと前から、あれ自体がバースミリア迷宮に蓋をするような形で建ってたらしくてな、塔の最下層が迷宮への入り口になっとなん。むふふ、どおや、凄いやろ？」

半身を乗り出した態勢がしんどくなってきたので、どや顔のフリアリーエは無視して馬車の中に戻るミライ。

それにしても、と。

イカロスって、どっかで聞いたことあるんだけどなんだったっけ？ とひとつ首を捻るミライ。

なんか不吉な響きがするような気がすんだけどなあー、っと。

そんなことを考えつつ何か反応してーやーと喚く関西弁を遮るよう

に、窓を閉めてからアリゼルの横に腰掛ける。

「あれ、でも迷宮の上に立ってるってことは学園の施設なのか？」

腕を組んで何んともなしに呟いた彼の言葉を拾ったアリゼルはここぞとばかりに。

「む、うん、あ——」

「もちろんですよ、ミライ様！ バースミリア学園とはイカロスの天楼の別称なんですから！！」

「ほう、そうなんか」

「はい。現在解放されている百二十階層のうち、五十階までを一般学生用に使っているんです。もちろんそれだけではなく、学園の施設は天楼を中心に広がっているのですが」

「ふんふん。解放、つてのは、どういうことなんだ？」

「はい。実はです、イカロスの天楼は未だ、その全階層を踏破しているわけではないと言われているのです。とはいえ、学園側の公式の発表というわけではないのですが。現在解放されている百二十階層。学園創設当初、数多くの冒険者によって天楼内部が調べ上げられました。そこで、そこが最上階であろうという結論に達することにはなったのですが。しかし、そこが最上階だとすると、明らかにその上には空白の部分が存在するのです。しかし、調査では、そこより上に行く方法は見つけることも出来ず、調査は打ち切られたのです。今ではバースミリア学園の七不思議のひとつとして語られているのです」

「ふーん、しかしそんな訳のわからんものの下でよく勉強する気になったなあ」

「そうですね。たしかに、今の技術では理解できない物も数多く天楼には存在していますが、そもそも、私たちが生活のなかで大きく頼っている魔術という技術もまた、よくわからない物なのですから」

今さらですよ。と照れたように笑って見せるタルナダ。

まあ、これがここに暮らす人たちの一般的な考えなんだろうか？
現代日本ならマスコミが狂喜乱舞しそうだけ。いや、まあねえ、安全なら、その理屈やら理由やらなんてものはどうでもいいんだだけだ。

『理解できないこと』には慣れているから、と頷いて見せるミライ。

「——むう、タルナダの相手はきっちりするんかい。お姉さんの相手もちゃんとしてほしいでほんま。寂しくて涙ちよちよぎれるでほんま！」

「あはは、面白いと言いますねフリエさん」

「いや、今なんも笑うとこなかったやろ？」

御者台から顔をのぞかせたフリーエはユルユルと笑うミライにゲンナリした表情を返した後、アリゼルに憐憫混じりの視線を一つ向けてから何も言うことなく前へと戻っていった。

「それでは、バスミリアに着いてからですが。まずは試験の登録に向かいたいと思うんですが、いいですかミライ様？」

伺うようにミライを見つめるタルナダに頷きひとつ返し。

「ああ、そうすつか。そのためにここにきたんだしね。要るものとか何かある？」

「いえ、受験料と受験資格証さえあれば」

「ん？」

「あ」

しまった、と言つかのように僅かに目を開けたアリゼルに二つの視線が集まる。

「あの、アリゼル様。まさか」

「うん、いや、えっと」

「アルさんアルさん。受験資格証って？」

「う、うむ。それはだな、平たくいえば学園の入学試験を受けるための試験を通過したものに与えられる、その名の通り受験を受けるための資格を証明するためのものなんだ。これは四大陸にある四つの学園都市のいずれかのギルドで受けなければいけないんだが」

「ほうほう。アルさんや。そんな話かなり初耳なんです」

じーと見つめてくるミライから、ついつと視線を外すアリゼル。

「い、いや、わ、忘れていた訳ではないんだぞ。本当だぞ！ただ、色々あって後回しにしていただけっていうか、面倒だから私の権限でねじ込もうかと思ったというか。ほ、本当だからな？」

なぜ俺に聞く。

「あの。え、えっと、でしたら！」

と、涙目で狼狽えるアリゼルを見かねて助け舟を出すのはタルナダ。

「まだ、試験本番まで三日間ありますから急いで取りに行きましょうー！」

「そんな簡単に取りれるもんなのか？」

「え、えっと、たぶん……」

冷や汗交じりに視線を逸らすタルナダをじっと見つめるミライ。

「ちなみに、タルナダの時はどんなだったのか教える。今すぐ。包み隠さずだ」

「はぁん、いい視線！ はぁはぁ。わ、わたしの時は、二週間ギルド直営の宿屋で働かせられました。他にもキユオルの場合だとグリーンポジションとレッドポジションの原料の薬草を一定以上収集だとかで、これも三日程かったと言っておりましてはぁうん！」

ミライの眼光に耐えきれず崩れ落ちるタルナダ。一般人なら失神しかねない殺気を浴びせられてなお恍惚とした笑みを浮かべる猛者っぷりは、まあ実に気持ち悪いことこの上ない。

そんなタルナダは当然無視して。

「アルさん、そのギルドから出される試験ってどれも長期のものばかりなんですか？」

「う、むう。そういうわけではないのだが、すぐに終わらせることができるような簡単なものが出されることがないだけで、ギルドの職員が適切だと感じたなら実力次第では短期間で済ませることが可能な課題も、たまに出されることはあるんだ」

「たまにってことはほとんどないんですか」

「うん。こうなったらやっぱり私の権限で」

「それはちょい待ちアリゼル」

よっこらせつと言って御者台の小さな窓から乗り込んできたフリーアリーエが口を開く。

「む、なぜだフリーエ？ これが一番確実だと思うのだが」

「阿呆。世界に三人しかおらんSランクの逆指名受けて一次試験パスしたなんて話が広まったら無駄に騒ぎ大きくしてまうやろ？ あんたの場合はなおさら、己の立場つてもんはしっかり把握しときや」

まあすでに手遅れやとは思うけど、とは口には出さず。

なんせ学園で五指に入るパーティーのリーダーを奴隷にしたうえに、誰が見ても分かるくらいにSランクと親友やっているのだから。

「——だから、今回は特別にフリーエお姉さんが手貸してやろうやろうってことで。感謝しいやミライ？」

にやりと笑みを浮かべたフリーエがミライの肩に腕を回して、そう甘く囁くのだった。

——最後まで役に立たなかったアリゼルが、泣いたか泣かなかったかは、それこそ本当にどうでもいい話である。

「——ようこそ、学園都市バースミリアへ。我々は未知なるものを求める心を歓迎しよう」

ニヤニヤと。

口元に笑みを湛えたフリーエが、台詞だけは恭しく飾り、学園都市に足を踏み入れたミライに向けて口にする。

「フリーエ何を馬鹿やっている、日が暮れるまでそれほど時間もないんだから早く行くぞ。それではミライ、君には申し訳ないがひとまずここでお別れた。次は学園で会おう。……ぜ、絶対だぞ？ 待っているからな！」

ちよ、みんなスルーかいつ、そんな殺生なあゝと喚くフリーアリーエを引きずり、ミライに手を振りながら走り去っていくアリゼル。

「慌ただししい人たちだねえ」と、そんな彼女たちの背が見えなくなるまで見送ってから、ゆっくり辺りを見回すミライ。

——背後には、先刻通ったばかりの巨大な鉄門。近くで見えるからこそ理解できる外壁の堅牢さ。

そして。

なるほど。フリーエさんがあんなだけ自慢したがるわけだ、と唸るミライ。

直線距離でおよそ二、三キロほど離れているのだろうに。

圧倒的なまでの、一種の荘厳さを放つその光景を見上げ、さしものミライといえど、そのあまりにもファンタジーな建造物には感嘆のうねりを上げざる負えないといった様子だった。

そんな彼から少し離れたところに立っていたタルナダとキュオル。

「それじゃあ、私は馬車を返しに行く。タルナダはあまり羽目を外しすぎないように」

「なんで、あんたそのまま帰っちゃうわけ？」

不思議そうにツインテールを揺らすタルナダにハイライトの消えた

濁った視線を向けるキュオル。

「うぐ、なによ、何かあるんなら言いなさいよ」

たじろぐタルナダに向け「……頭が痛い」と小さく呟きそのまま踵を返して去っていくキュオル。

「え、ちょっとキュオル、体調悪いんならちゃんと休みなさいよね
！！」

と、元凶である少女は、珍しく煤けた背中を見せる仲間の姿に心配げに声をかけるも、その日からしばらく彼女がタルナダの前に姿を現すことはなかった。

「もう、なんなのよ一体。まあ、いいけど。それより。ミライ様！
それではまずは宿屋の確保に行きましょうか、それとも先にギルドにいたしますか！ 如何様にでも御命令下さいい！！！」

なぜ空を見上げているかって？ 涙がこぼれないようにさ（後書き）

アリゼルはログアウトしました。最後まで扱いがアレな上に当分出番はないかと。

いやあ、しかし、関西弁と変態が実に動かしやすいと感じた回でした。

あと、語彙力が足りない作者なので、読みにくくても勘弁して下さい！

さっそくギルドに行ってみました（前書き）

前半の設定は深く考えずにすらっと。

後半のお話は難しく考えずにすらっと読んでいただければ助かります。

さっそくギルドに行ってみました

大通りで阿呆な事を叫ぶタルナダを静かにさせたミライは、取り敢えず先にギルドへと案内してもらったことに。

そんなわけで行ってききました冒険者互助協会本部。ギルドホームなんでも大陸全土に点在するのはあくまでギルド支部であり、その中心にあり全てのギルドを取りまとめているのが、ここなのだという。

「ていうか、これは最早街だろ。もつと酒場っぽいのを想像してただけだな。やっぱ本場はスケールが違うのなあ」

彼の指す本場が一体どんなものを想像していたのかは分からないけれども、そう言って立ち尽くすミライ。

縦にぶったぎったように真っ直ぐ伸びる大通り。その道の両端にはずらりと建物が並んでおり、今も多くの人々が行きかっていた。

「より正確にはギルドホームではなく、ここら一帯はギルドタウンと呼ばれています。ミライ様をこれから案内するのはあの一番奥の建物。あれがギルドホームです」

そう言っただけで指差したのは真っ直ぐ続く道の一番奥、ミライたちの真正面に建つ灰褐色の建物。

「ここらがギルドタウンと呼ばれるのはここら一帯がギルド関連の建物が多いことから、この町の住人によって呼ばれる様になった名前なんですよ」

「へー、ギルド関連って」と

思いつくのは、喧嘩っ早いエルフが勤めていた。

「宿屋とかも？」

「はい、この通りではありませんが」

あのあたりです、とタルナダが指差した方を見れば周囲より頭一つほど高い建物がチラホラ見ることが出来た。

「あとは、武器や消耗品、防具などを取り扱う店が多いですね」
「なるほどな。冒険者のための街、か」

歩を進めながらタルナダは物珍しそうに辺りを見回すミライに視線を向ける。昨晩はアレほど圧倒的に素敵な暴力を行使していたミライ。相対したその姿は、両親の敵であるドラゴンの記憶すら霞ませるような、隔絶した絶対的な強者。己の全てを捧げなくなるような力の在り方。それが今は。

まるでただの、普通の少年にしか見えないその姿は、昨夜の姿を知る彼女にとっては違和感たっぷりで、昨夜の力の片鱗さえ窺うことのできない今の彼には一種の寒気すら覚える。

しかし、その寒気ですら心地よい。

昨夜の絶対強者としての彼と今の彼。たとえ自分が魅せられたのが絶対強者である彼だったのだとしても、今の樂しげに笑みを浮かべる姿も間違いなく自らの所有者と認めた主のそれであり。そして、これはこれで、と体を震わせるタルナダだった。

「おお、賑わってるなあ」

あと、意外にごみごみしてないのなあ。どっちかというところじゃれてるっていうのかな？

ギルドホームに入ったミライはそんなことを考えつつ視線を動かす。

「他の街と違って、学園都市にあるギルドでは冒険者だけではなくて学園に通う学生も訪れるからでしょう。ミライ様こちらです」

先導するタルナダの後を歩きながら、周囲を賑わすヒトたちをよく観察してみれば、確かにそれなりに出来そうなヒトたちが何組いるのが分かる。

とはいえ、あまりぱっとしているわけではなく、あくまでそれなりに。

それ以外のヒトが恐らく学生だろうか。

強さを擬態してるのではないならば、正直足軽より弱そうだと脳内で評価をつける。

ざっと見た限り、アリゼルやフリーエのような洗練された空気を纏ったヒトはこの場所には一人もないことに、安堵とも落胆ともつかない気持ちになるミライ。

いくつかあるカウンターのうちの一つで足を止めたタルナダが振り返り「ミライ様」と言って促す。

『学生課』と大陸の共通語で記されたカウンターの奥に座る女性がその声に反応して顔を上げた。

「こんにちは。本日はどのようなご用件でしょうか？」

ギルド職員共通の制服に身を包んだ女性が、眼鏡を光らせつつそう切り出す。

黒いシャツの下からボタンを弾き飛ばそうと盛大に自己主張するおっぱいが実に素敵だと、さり気なくかつ大胆に見入るミライの横に立ったタルナダは懷から一枚の便箋を取り出して渡す。

フリーアリーエから別れる前に渡されたそれ。

これで間違いなく試験を受けることは出来るだろうと安堵しつつ、受け取った便箋の中身を確認する忌々しいくらいに巨乳な職員を見つめる。

「っ、これは……。申し訳ございませんが、私個人では判断できませんので少々こちらでお待ちいただけますか？」

そこにどのようなことが書かれていたのか、僅かに目を見開いた後、しかしすぐに平静を取り戻した女性職員はミライを一瞥してからタルナダに問いかける。

「あの人一体何書いたのよ？」と小さく悪態をついたタルナダは気を取りなおして顔を上げる。

「よろしいですかミライ様？」
「ん。ああ、構わないですよ」
「それでは失礼します」

タルナダがわざわざ冒険者でもないミライに確認したことに、学園でも有数の実力を持つ少女がまるで上位者に対応するような態度で接していることに疑問を浮かべつつもそれには触れず。

一言断りを入れてから近くにいた職員の男性に声をかけてから席を立ち、奥の階段へと消えていく。

男性職員に案内され、カウンターの奥にある個室へと通されたミライ達は、そこにあるソファーに腰掛ける。

その男性職員がしばらくこちらでお待ちくださいといって個室から出て行ってしばらく。

ミライが厳かに口を開く。

「……なあ、タルナダ」

「はい、何でしょうかミライ様？」

「あの女の人のおっぱいは素晴らしかったと思わないか？」

「はい。大きさ、形共に基準値を遥かに上回る逸品だったかと」

「だよなあ。アルさんとかロゼもかなりものだけど、あれは別格だな、うん」

「……あの、ミライ様は、やはり大きい方が好みなのですか？」

わ、私みたいな平均胸は、駄目ですか？」

「ははっ、何馬鹿言っただタルナダ。いいか？ おっぱいにはな、貴はあつても賤はないんだよ」

「っ、それでは！」

「ああ、お前のおっぱいも素晴らしい」

「そ、そうですか！ じゃあ、じゃあ叩いてくれますか！？」

「……どこをだよ。そしてそれは照れながら言う台詞じゃないだろ

「？」
「え？」
「え？」

一方、まさか二人が自分の胸の大きさを盛り上がっているとは露ほども考えていない眼鏡も素敵な女性職員、改めエクレア・エクレール。人間族の二十七歳独身。悩みはあまり感情が表に出ない自分の顔。三年前に別れた彼氏に最後に言われた「お前が何を考えてるか分からない」という言葉はかなりの衝撃をもって彼女の心を抉ったという。

しかし、ギルドの男性職員の半数以上は「彼女の冷たい感じがたまらない。叶うならばあのおっぱいに圧殺されたい」と概ね高い評価をしていたりする。

閑話休題。

さて、そんなエクレアが問題の二人を置いてやってきたのはギルドホームの三階。階段を上がりきった先は開けたホールとなっており、この階は実質たった一人の存在のために設けられており、だからこのホールに繋がっているのはただひとつ、その存在が使用する部屋だけ。

エクレアはそのままホールを横切り、真っ直ぐ目的地である奥の扉へと向かう。

その扉の前、扉を挟むように左右に立つ鬼族と獣人の二人の男が近付いてきたエクレアへと顔を向ける。

「エクレア・エクレール。用件は？」

低い声で短く問いかけたのは鬼族の男。

鬼族の民族衣装である和装と、その下からでも分かるくらいに筋肉のついた巨体。背中には幅広の大剣を背負っている。

彼は扉の先にいるであろう人物を守護するための剣の一振り。名をロイドという。

そんなロイドの威圧的な態度に苦笑いを浮かべるのは獣人の男。

「ごめんよエクレア嬢。ロイドは頭が固いだけで別に怒ってるわけじゃないからさ」

そう言つて鋭く尖った犬歯を剥き出しにして笑う。

獣人族の中でも人狼と呼ばれる速さに特化した種で、その姿は人よりもより獣に近い姿。

狼のような頭、全身を覆う鋭く硬い体毛。動きを阻害しないための肩と胸部だけを守る軽鎧。

腰に短剣を二本備えている。

この男の名はゲイル。ロイドと同様、扉の先に居る人物を守護するための存在。

見た目の野獣っぷりに反して丁寧な物腰とバリトンの効いた渋い声、理知的な瞳でギルドの女性職員を虜にしているとかしていないとか。

「気にしていません。用件はこれです」

眼鏡のふちをクイと引き上げたエクレアは端的に自分の用件を伝えるために、その便箋をゲイルへと手渡す。ゲイルはその手紙の内容へと素早く目を通し、そして驚いたように目を瞠る。

「それを持ってきたのは学園に在籍する生徒とその手紙に書かれているように受験を希望する男性の二人組です」

「学生というのは？」

手紙をロイドに手渡しながら詳細を尋ねるゲイル。

「フリーアリーエ教諭が受け持つパーティーの学生の一人で、タルナダという名の少女です」

「フリーアリーエさんの教え子が連れてきたのか。ということは、その手紙も何かの間違いということもないのだろう、ね」

それを読み終えたロイドは手紙をエクレアへと返す。

「……あの『フリーアリーエが、ここまで。それに」

「だね。まさか剣鬼殿まで」

彼ら二人には珍しいことに、驚きの混じった声が思わず漏れる。

「エクレア・エクレール。失礼の無いように」

「まあ、私たちの管轄ではないよねこれは。ボスに判断してもらわないと」

二人は扉から一步分左右にずれてエクレア入室を促す。

それに無言で目礼を返した後、扉の前まで進みノックする。

「入れ」という声を扉越しに聞き取ってからノブを回して入室し、後ろ手に扉を閉める。

「失礼します。ギルド長、少しよろしいでしょうか？」

絢爛豪華とは無縁な、機能美を追求したような部屋の中央。

「エクレアか。何があった」

傲岸不遜。

そんな言葉が浮かびあがるような態度でエクレアを出迎えたのは、この大陸で最も巨大な力を持つ組織の頂点、その一角を担う存在。

獅子を彷彿とさせるような鈍い金色の長髪。

ミライが見たなら軍服を連想させるような灰褐色の服と、右半身を覆い隠すように纏うのはグリーンドラゴンの竜鱗を素材に幾重にも魔術を刻み込んで編まれた石灰色のマント。

切れ長の瞳と類なれまる美貌は、相手に魅力ではなく威圧を与え。そして顔の左半分を覆う黒い眼帯がさらに迫力を与える。

名をライカ・ラーゼフォン。

元Sランク冒険者にして、現役のSランク冒険者である『白老』以来の史上二人目の人間族によるSランクへ到達した女傑。その加減容赦のない戦いぶりから付けられた二つ名は『ブラッド・マーカー血戦の殉教者』。

公式な記録には残らないとある戦いで大怪我を負い冒険者を引退。その後、バースミリア学園の学園長及び当時のギルド長の推薦により、現在の肩書きを得るに至った。

「まずはこれを」

エクレアはしかし、その大人物を目の前にしても表情を変えることなく歩み寄り便箋を差し出す。

ライカもまた、自分のような化け物相手に臆することなく存在できる彼女の在り方を酷く気に入っており、それゆえにライカの口元にはまるで肉食獣のような鋭い笑みが刻まれる。

彼女は便箋ではなくエクレアの細い手首をつかみ、そのまま片手で持ち上げるようにして引き寄せる。

ライカは仰向けの状態で机の上に転がしたエクレアの胸を片手で鷲掴み、そして息と息がかかるほどに顔を近づけ、囁く。

「——エクレア、そろそろ私の物になる気になったか？」

形が崩れるほどに胸を掴んだまま、凶悪な笑顔をエクレアに向ける。

が、彼女は表情を動かすことなく。

「ギルド長。仕事中です。冗談なら就業時間外にお願いします」

と今の自分の状況を省みることなくあっさりと言ったのけた。

そんないつもと変わらないエクレアにつれないねえ、と面白そうに呟いたライカは身を離して椅子に座り直す。エクレアは机の上から降りて、服の乱れを直してから改めてライカに便箋を手渡す。

今度は素直にそれを受け取り視線を落とす。

「あの二人が通したということは、厄介事か？」

面倒くさそうに舌打ちひとつ、内容へと視線を走らせた彼女は、ほう？ と小さく声を漏らし、内容を読み進めるに従って、口元を歪め笑みを刻む。

「なるほど。随分とふざけた内容だな」

その内容とは。

ミライなる人物に受けさせる一次試験の内容の提案。本来ならいくら学園の教員であろうとも、ギルドの受け持つ一次試験の内容を指定するようなことは認められないし、ライカが許可することなどありえない。

だが、そこに書かれた試験の内容が受験者を有利に進めるためのものなどではなく、むしろ単独でのオーガの群れの討伐などという無理難題である場合はどうであろうか。

レベル五に分類されるオーガ一体を討伐する適正ランクは固有ランクでこといわれており、さらにそれが複数になった場合では単独でしかも確実に討伐するには二つ上のランクが適正であると一般的にはいわれている。

今回の場合、手紙で指定されたオーガの群れというのはバースミリアとマナシアの間にあるラングレの森で先日確認された、数十体で群れを成しているオーガのことだろう。

彼女が調べさせた情報の中では、オーガの変異種も確認されており、それが群れを統率しているためか、本来単独でしか行動しないはずが統率された動きをするためにさらに危険度は増加しているという。これだけの危険な討伐。本来ならCランク以上のパーティーが複数で事に当たらなければどうにもならないのだが。

実際、ライカもそのような形で討伐隊の編成を進めるつもりだった

のだ。今この街にそこまで高ランクで信頼のできるパーティーがいなかったため未だ形になっていなかっただけで。

そして、この便箋にはそのオーガの群れを単独で討伐することを『たかが』一次試験の内容に指定しているのだ。

本来ならありえないことだ。

冒険者でもなく、学園の生徒でもない、未だ一般人である個人にやらせるような内容ではない。

「ふん。お前はどう思うエクレア。ただの酔興か、それとも私たちをからかっているのか」

「本来ならばありえないと斬って捨てる内容です。しかし――」

――

「フリーアリーの小娘とSランクの連名か？」
アリゼル

「はい。ただの悪ふざけと考えるには、そのお二人は無視できない名前です」

片や、バースミリア学園で二番目に力を持つ教師。

片や、歴代で最も若くして頂きへと上り詰めた若き天才にして至高のSランク。

「ああ、このフリーアリーの魔術印は間違いなく学園指定のものだ。虚偽である可能性はないだろうな」

「しかし、ギルド長。悪ふざけではないのだとしても、一次試験でギルドがそのような課題を出したとあつては信用問題にかかわるのでは？」

「……ああ、ふん。なるほど、そういうことか？ あの小娘、私を使うつもりか？」

エクレアの疑問に答えずに一人思考していたライカは納得したよう

に言葉を漏らす。

「ギルド長？」

「エクレア。この一次試験の内容を許可する。また敵に関する情報も全て開示してやれ。それと、この話には第一級の秘匿義務を設ける。受験者及びそれに同行してきた人物、バースミア学園所属フリーアリーエ教諭及び、アリゼル教諭両名にも速やかに通達するように」

「わかりました。そのように」

「用件は済んだな。さがれエクレア」

「失礼します」

突然のライカの指示にも慌てることなくエクレアは頷き、そのまま部屋を後にする。

「ゲイル、入れ」

この階からエクレアの気配が退いたのを確認したライカがゲイルの名を呼ぶ。

「失礼します。今度はどんな雑用ですかボス？」

部屋に入ってきたゲイルは恭しくライカに頭を下げつつ問いかける。

「このミライというやつを尾行し、お前の目で見極めろ」

フリーアリーエは、ギルドが諸所の理由からオーガ討伐をすぐになすことができないと分かっていた。

だから、持ちかけたのだろう。

それをなんとかしてやるから、使わないか、と。

ギルドに貸しを作らせ、そしてあわよくばギルドとの縁を。

否。おそらく今回のこの話がライカにまで登ることを考えていたというなら、ギルドではなくギルド長との縁。

フリーエがこのミライという人物に期待しているからか、それとも他に理由があるのか。

それはいずれ本人を呼び出して聞きだせばいい。

「了解ボス。それでは失礼します」

退室するゲイルを見送り一人きりになったライカは椅子に背を預け顔を伏せる。

「——さて、ミライといったか。期待を裏切って死にたくなければ、この私を楽しませることができくらい頑張ってみるんだな」

くつくつと笑う声が、静かに部屋の中で木霊した。

さっそくギルドに行ってみました（後書き）

はたして、フリーさんは腹黒キャラだったのだろうか？

当分フリーさんもアリゼルも出てくる予定はないので真相は当分闇の中の予定です。

後半はサブキャラ祭でお送りしたので、次回は主人公に活躍してもらえるかなと。

次はもうちょっと早く更新出来ればいいなあ。
いやほんとすいません。頑張ります。

そうして、彼は走り出した

ミライとタルナダが別室で待たされることしばらく。ギルド長の指示を受けたエクレアは今回の課題に関する資料を手に持ち、二人の待つ個室へと向かう。

「お待たせし――」

完全防音処理を施されたその部屋に足を踏み入れたエクレアは目の前に広がる光景に言葉を止めた。

「おらっ、どうだタルナダ、親方様直伝虎固め。通常の四の字固めの十倍の激痛、これでもまだ耐えられるかっ？」

「痛い痛いいたたたいたいたいたきもちいいきもちいいいいですう」

「ちっ、気持ち悪いやつめ。なら次は対幸村専用腕ひしぎ虎の字固めっ、だっ」

「いあああ、ひぎいい、あ、あ、あ、もう濡れちゃい、あ、うそ、痛い痛い痛いあああでもきもちいいい」

「ど変態がっ。ならこれで終わりだ。あのモミアゲすら泣いて許しを請うた――」

「――よろしいですか？」と。

それは特段大きな声ではなかった。静かな声だった。

しかし、それを向けられた二人は動きを止め、地面でもつれ合ったまま表情に恐れを貼り付ける。汚物を見るような極寒の視線でもって二人を見下ろすエクレアに。

「よろしいですか？」

繰り返し告げられた二人は素早く立ち上がりソファーに腰掛ける。

それに続いて向かい側に腰掛けたエクレアが手に持っていた資料をテーブルの上に置く。

「さっそくですが、フリーアリー工教諭の提案をギルドは受託しました」

先ほどまでのことはまるでなかったかのように静かに語り出すエクレア。

「と、ということは、ミライ様は課題を受けることが出来るのね？」

「はい。しかし、それと同時にフリーアリー工教諭の提案された課題には第一級の秘匿義務が発生します」

「……。んなつ、第一級の秘匿義務ですって？」

タルナダが驚愕に腰を浮かして、反問する。

「はい。ですからお二人には一次試験を受けるに当たって、課題の内容の漏洩を防ぐ義務が発生します」

第一級の秘匿義務というのは、本来は冒険者の個人情報や上位ランク冒険者が任される特殊な依頼など、情報が漏洩した場合無用な混乱を巻き起こす可能性のある場合に発生するもので、間違っても一次試験の課題で発生するようなものではないのだ。

「……。先生、一体何書いたのよ」

「それでは課題について説明させてもらいます」

呟くタルナダを置いてエクレアが手元の資料を開き二人に説明を始める。

要約すると。

ラングレの森に発生したオーガの群れの討伐、またはオーガ変異種の討伐のいずれかが合格条件。群れの数はおよそ二十程度。

期限は二日間。

これを聞いた時点で第一級秘匿義務が発生し、課題の合否に関わらず情報の漏洩を禁ずる。

説明を終えたエクレアは全く驚いた様子のないミライの姿に内心で疑問を覚える。

その反応が無知から来るものなのか、それとも実力に裏付けられたもののなのか。

話を聞き、難しそうに眉を寄せ腕を組んでいたタルナダが姿勢を正しミライに顔を向ける。

「ミライ様、どうされますか？」

「そうだな」

そんなタルナダに対して説明を静かに聞いていたミライだったが。

話を聞いて驚くとか以前に、正直さっぱり理解できていなかった。まずもって彼はオーガというモンスターを知らないのだ。それより強力な個体である変異種がどのと言われるても推測することすら出来ない。

しかし。

ならばいつそ分かるやつに聞くとしようとすぐさま開き直ったミライは、タルナダの視線を絡み取るように目を合わせる。

「タルナダ、正直に答える。俺にそれが出来ると思うか？」

「はい勿論です。たかがオーガ如きにミライ様が後れをとるなど有り得ません」

「変異種とやらが相手でもか？」

「レベル五の変異種というのは確かに脅威ではありますが、それでもレベルは六相当でしょうから、ミライ様の相手には不足です」

「そうなのか？ まあ、なら問題はないか。そういうわけですから、えっと」

「……エクレア・エクレールです」

「エクレアさん。この試験受けさせてもらつよ」

ギルドを後にする二人の姿を、彼女は静かに見送る。

一体、あの少年は何者なのだろうか。

疑問はそれに尽きる。

先ほどの会話で、タルナダはオーガの群れ『程度』ミライなら問題などないと断言していた。

ギルド長ですら放置することを危険視するオーガの群れと、しかも変異種が問題ない？

そして、そもそも提案者であるフリーエ教諭にSランクの剣姫もタルナダと同様、ミライならば成し得ると考えたのだろうか？
ありえるのか？

彼らほどの冒険者がオーガの変異種が群れを率いて行動することの脅威が分からない訳はないだろう。

つまり、それでもなおミライならばと言えるだけの固い信頼があるというのか？

Sランクを除いて大陸最上位との呼び声高い『アンチ・サイクロプス一つ目殺し』のフリーエ。

絶対的な力の象徴たるSランク、『ソード・ダンサー殺戮の剣舞』アリゼル。

この二人にそこまで認められるなど、一体どれだけのことを成したと言っのだろうか。

疑問は数ある。

けれど確信できることもひとつだけあった。

それは間違いなくミライと再び会うことになるだろうということ。
何故そのように思うのか？

自分でも解らないその答え。

もしも彼がこの無謀を成し遂げることが出来たのなら、その時は理解できるのだろうか。

エクレアは、その氷のような表情をいつも通り動かすことなく。
しかし、何かが変わる予感に心を大きく揺れ動かした。

ギルドホームを出た二人は大通りを突っ切りギルドタウンを後にする。

「それじゃあ課題とやらを終わらせに行きたいのだけでも」

「どうかしましたか？」

「ああ、俺はオーガというモンスターを見たことがないんだ」

どうすつべ？ と問いかけてくるミライに慌てて振り返るタルナダ。

「え、本当ですかっ？」

「うん、マジです」

「そ、それは困りました。ミライ様が討伐に赴く間に宿の確保に向かおうと考えていたのですが」

「ん？ 何だ、タルナダは付いてこないのか？」

「はい。ミライ様の戦う御姿を拝見出来ないのは汚水を舐めさせられるより無念なのですが、私では足手纏いになってしまいますから」

「大袈裟だな。でも、あれだけ派手なギフトがあっても勝てないような相手なのか、オーガってのは？」

「いえ、あ、あのですね。昨晚の一撃はまぐれというか、力を制御仕切れず暴走してしまった結果出せたようなもので。今の私にはあれの半分も力を出すことは出来ないんです」

昨晚の自分の醜態を思い出したのか頬を赤らめ俯くタルナダ。

「暴走による潜在能力の発露、てことか」

「はい。非常に口惜しいのですが、今の私ではオーガ数体を相手取って戦える力はありません。それに今は武器ありませんから」

「あ、すまん」

そう言えば昨日勢いでこいつの武器両方とも壊したんだった、とミライは両手を合わせてタルナダに謝罪する。

「ひい、そんな、奴隷ごときに頭を下げるなんて、恐れ多い！でも素敵！」

恐縮したり、恍惚としたり忙しいタルナダは無視して話を戻す。

「しかしそれなら仕方ないな。それに俺の試験だからタルナダに手伝わせたら駄目だろうし。でもどうすっかな実際」

「はあはあ、ごほん。それなら最後の手段と行きましょうミライ様、このタルナダめにお任せください！」

最後の手段に行くのはやくない？ というミライの疑問はスルーしたタルナダ。

「さあさあさあこちらに！」とウザイ笑みを浮かべて嫌そうにするミライを引つ張るように道の端に連れて行く。

「なんかお前今日一日でどんどんウザく、じゃなくて気持ち悪くなっってきてるよな」

侮蔑の言葉に下腹部を熱くしつつ、道の一番端で足を止めしゃがみこむタルナダ。

「っあ、ふう。さあさあ、ミライ様、今しばらくお待ちください。この従順なる僕は見事あなた様の役にたってみせますから！」

そう言つて手頃なところにあつた比較的先端のつがった石ころを手に取り作業を開始する。

それを見下ろすミライ。

うわあ、まさか最後の手段つて、と苦笑いを浮かべる。

がりがり^がと地面を削ることしばらく。

ふうっ！ と笑顔を浮かべて額の汗を拭つたタルナダが立ち上がる。

「さあ、ミライ様、ごらんください！ こちらの醜悪なケダモノがオーガです」

「うわ、無駄にハイクオリティー」

地面に描かれたものを見て感嘆と呆れを含んだ声をもらすミライ。

それはオーガと思われる一体のモンスターの絵である。

「はい、私の特技の一つです。一度見たものなら、大抵のものは再現できると自負しております！」

いやいや、これって普通に凄いよな。たしか、そういうのって完全記憶能力つていうんだっけ？

と直に褒めるのは癪なので頭の中で感心する。

「うん。まあオーガつてのは分かった。あとは変異種つてやつの説明頼むわ」

そこから再び街の外を目指して歩き出す二人。

「そうですね。基本的に変異種と呼ばれるモンスターはその元とな

るモンスターから逸脱したような形態を持つことはありませんが。

ただ、元のモンスターとは外見的特徴に大きく差異が見られるのが一般的です。例えば表皮の色が異なったり、一部が異常発達していたり。例外として外見には現れないタイプもあるようですが、今回の場合、ギルドの説明を聞く限り、前者のタイプのようですね」

「ああ、確か通常のオーガの五割増しくらいの大きさなんだっけ？」

「はい。ですからすぐに見分けることはできるでしょう。ミライ様なら問題はないと思いますが、特にこの変異種というのは何れも厄介な存在であるのは確かです。私は未だ相対したことはありませんが、通常のオーガとは比較にならない強さを備えている可能性がありますので、ご注意ください」

「ああ、了解。まあ危なかったら逃げるから問題ねえよ。逃げ足には少しばかり自信あるしな」

ぬふふ、と笑うミライの姿に、心配などこのお方には不用かとタルナダは尊敬の籠もった瞳を向ける。

そうして辿り着いた門の前。

「それではミライ様。私も役目を済ませたら、ここでお帰りになれるのをお待ちしております」

「ん、それじゃあまた後で」

ミライはタルナダに手を一振りしたあと門をくぐり街を出る。

ギルドで借りた地図で方角を確認して歩き出す。ここから件の森までおよそ三キロほど。

タルナダに馬はどうするか聞かれたが断った。なぜなら走ったほうが早いから。

それにあまりお金は使いたくない。アリゼルへの借金も、今回の課題を達成した際に出る報酬で十分返済できる上にかんりのプラスにはなるが、当分お金を稼ぐ当てがあるわけでもないので無駄遣いはしたくないのである。

しばらく歩いて街から離れたミライ。

その場で屈伸運動を軽くこなす。

秘匿義務云々とやらで、あまり人目につくのはよろしくないようなので、完全に気配を遮断する隠密モードでいくことにする。

目的地は分かっているだろうし後ろから付いて来てるヒトのことは気にしなくてもいいかな、と。

そうしてミライは目的地へと向けて残像を残す勢いで猛然と走り出すのだった。

そうして、彼は走り出した（後書き）

ミライの移動方法は基本足です。たまに馬も使います。

熱血師弟の桃白白式移動法ですが、ミライもDB既読してるんで憧れから挑戦したことがあります。結局一度も成功してません。

「自分で飛ばした丸太にどうやって追いつくんだよ、ちくしょう…
…っ!!」

そう言えば彼はよく生え際を気にしていた

「———ここか」

そう呟いたミライの前方。

そこには鬱蒼と生い茂る木々が視界一杯に広がっていた。

行きに馬車で通った道から逸れてしばらく走った場所に広がるそれこそ【ラングレの森】。

日は傾き始めたとはいえ辺りはいまだ明るく、夜が訪れるまであと数時間はある。

にも関わらず、その森の入り口から先は不気味なほどに薄暗闇が広がっていた。

常人ならば、そこに得も言えぬ不気味な気配を感じ取って躊躇するだろう。

だがしかし、ミライにとって、闇は慣れ親しんだものではあっても忌避するものではない。

かつて彼の戦場の多くは夜と共にあった。

夜の闇を己の友とした彼にとってそこへ踏み入れるのにためらう理由など一つもなく、森へと足を踏み入れる。

「ふん？ 思ったよりも生き物の気配は少ないんだな」

薄暗闇と不安定な足場が広がる森の中を歩きながらもミライは辺りの気配を探る。

ペソット村でフリーアリーエに聞いた話では、このラングレの森には多くのモンスターが生息しているという話だったが、今は僅かにしかそれらの気配は感じられない。

あるいは、突然現れたオーガの群れという異物の存在が関係しているのかもしれない、とそんなことを考えつつ横道にそれた思考を戻し、探索に意識を向ける。

佐助と開発した隠密モード（要は凄まじく自分の影を薄くするだけの技）を用いているため、特にモンスターと接敵することもなく森の奥までやってきたミライはそこで足を止め、眼下を一望できる位置にある木の陰へと身を屈める。

——彼の視線の先。

なだらかな傾斜の向こうに広がるのは、不自然に木々が薙ぎ倒され出来た空間。

そして、およそ二十メートル程度の円形に開かれた日の光が差し込むその場所にいたのは、彼がかつていた二つの世界には存在しなかった生き物。ヒトとは異なる理より生まれた存在。この世界でレベル五に認定される強力なモンスター。

それを前にして、ミライが初めに抱いたのは呆れ。

「……タルナダの描いた絵そのまんまだし」

そんな呟きを零しつつ、緩んだ気を引き締めるように前方二十メートルほど、彼の視界を横切るように歩いていく一体のオーガを改めて観察する。

体長はおよそ二・五メートルくらい。

モンスターの中でもヒト型に近い形態をしており、やや前傾姿勢、加えてここからでも分かるくらいに歪に隆起した全身の筋肉。

そして両腕部。肘から先に当たる部分が先端に行くにつれ異常なま

でに膨れ上がっている。

例えるならば、鈍器、という言葉が一番適しているだろうか。指という余分な機能を排し、ただただ、敵へと叩きつけ、押しつぶし、すり潰すただけに進化した肉体という武器。

それは生半可な鎧は容易く押しつぶし、また凡庸な武器では傷ひとつつけることも叶わないと言われており、実際、オーガの両腕部というのは武器や防具の素材として割と高価な値段で取引されているのだという。

今回の課題の成功報酬が高く設定されているのは、それも含めてのことだろうとタルナダが言っていたのを思い出す。

特に変異種の場合は個体によっては貴重な素材を有していることもあるので、成功如何によつては報酬に上乘せさせることもできるかもしれません、とも言っていた。

「まあ、何はともあれ」

眩き立ち上がる。

取るのは無形の構え。

「日が沈み切る前に、やるとするか」

ミライの体から意図的に漏れ出た闘気が、薄闇を黒く焦がすかのようになり立ち上る。

闇が鳴動するかのような異様な気配を感じ取ったオーガたちが振り仰ぎ、ミライの姿を見つけると同時に一斉に咆哮する。

「弱肉強食。恨みっこなしだ」

感情を排し、ただただ視線は前へと向ける。

ぐらり、とミライの体が前方へと傾く。

刹那。

二十メートルの距離をゼロへと。

瞬きをするよりなお速くオーガの懷にもぐりこんだミライは、握りしめた拳をその腹へと添え。

零から壱へ。加えるのは『回転』と『衝撃』による内部破壊。

ミライの拳が半円を描くように回転し。

その瞬間、オーガの体内で何かがつぶれる鈍い音が響くと同時、その巨体が後方へと弾け飛ぶ。

ミライはそれを見届けることなく、咆哮を上げながら近づいてくる別のオーガへと視線を向け。

ゆらり、と体が傾き。

刹那。

ミライはその場から姿を消し、オーガの頭上背後へと背を向けるように姿を現す。そのまま空中でぐるりと半回転し側頭部へ漆黒の足鎧を振り下ろす。

ゴキン、と。

骨が砕ける音と共に頭部が半回転したオーガはなすすべもなく地に落ちる。

力を失い、地に倒れたオーガの背後へと着地したミライは、酷い酩酊感に「……ふっ」と息を吐き出す。

瞬足移動【刹那】。

の劣化模倣、勝手に見て盗んで作り上げた多田式高速歩法【縮地】。

本家の超速を再現することは叶わなかったものの、見た目の再現率だけは七割を上回る程まで模倣した技。

しかし、所詮は模倣。

【縮地】は【刹那】のようなくわからない方法とは違い、『氣』を用いて自分を点から点へと飛ばす技。

力技であるが故、使用には三半規管への多大なる負荷と引き換えとするため、連続使用が出来ないという制限があった。

「はあ、よくこんな無茶苦茶な技連発出来るな三つちゃん」

と、ぼやきつつ、まるで羽虫でも払うかのように、——新たに近付いて来ていた——オーガの剛腕を弾くように籠手でいなす。

目標を失ったオーガの一撃はミライの背後にあった大木を轟音と共に爆砕し。

——ミライのバックブローがオーガの胴を轟音と共に爆砕する。

しかし、やっぱりあの髪型に秘密があるんだろうか？ 空気抵抗薄そうだし。ズラにしか見えないのが難点だが。

「さて、真実是如何か？」

腹に響くような衝撃。

両腕で一撃ずつオーガの攻撃を受け止める。芯に響くような衝撃。両足を中心に波状に地が割れ砕けるのもお構いなしにミライは動く。

「まあ、おまえ等にとってはどうでもいいか」

受け止めたオーガの腕を片手ずつ握りつぶすように掴み取り、

「ふっ！」

二体同時に持ち上げ振り回すように一回転させ、力任せに地に叩きつけた。

グシャリ、と。

地面が碎け散る音に混じって肉の潰れる不快音が混じる。

抵抗の無くなったオーガの腕から手を離し立ち上がるミライ。

一方的な同朋の死を見ても、未だ衰えることなく殺意を振りまき迫るオーガたちを視界にとらえる。

遠い昔に戦場での覚悟を済ました彼に、命を奪う事への躊躇いはなく。

ならばこそ、残るオーガが全滅させられるまで、さほど時はかからなかった。

「ふうー」と息を吐き出して、ぐっと体を伸ばし、それからゆっくり後ろを振り返る。

周囲に動いてる敵がいなことを改めて確認した彼は、しかし首をかしげてから再び辺りを見回す。

「変異種とやらは、どこへ行っただんだ？」

疑問はそれだった。戦闘を始めた時点ではそれらしい奴はいなかったのだが、このオーガの集団をまとめているのなら、途中で姿を現すだろうと考えていたミライ。

しかし、予想と違い変異種らしきオーガが姿を現すことはなかった。戦ったオーガも、群れてはいたが、それだけ。

エクレアの言っていたような統率された集団としてではなく個としての戦い方をしていた。

あるいは、自分が戦ったこのオーガたちと、その変異種がまとめるオーガは別の群れだったのだろうか？

「うーん、わからん」

見上げれば、すでに空の半分が黒く染まり、夜の訪れを示している。街を出てから既に半刻以上経過しているので、タルナダのほうはすでに宿の確保も終えているだろうか。

まあ、やつは放置したところで喜びはすれども、怒ることはないだろうからいいとして。

もう四半刻（三十分）程探索してから帰るとするか。

ミライは踵を返し、そこからさらに森の奥へと足を向けることにする。

来た時は薄暗闇程度だった森の中も、探索を再開してしばらくたった今では完全に暗闇に覆われている。

しかし夜目の効くミライには関係もなく、その森の中を悠々と進む。

こうして完全な暗闇のなかを歩くのも懐かしいものだ、と僅かな郷愁が胸に宿る。

最後に夜襲を仕掛けたのはいつだったっけ、と思い出に浸っていた彼の視界が、薙ぎ倒された木々をとらえた。

「これは、オーガの攻撃跡か？」

強力な力を叩きつけられたかのように、ほとんどが根元近くから持っていわれている。

足元に積もった枯れ葉を足で払えば、案の定巨大なモンスターの足跡が刻まれている。

「先客でもいたのか。ふん？ これは。……行ってみればわかるか」

そう呟き、風に乗って流れてきた血の匂いのもとへ。

そこからさらに五十メートルほど走って、ミライは足を止めた。

先よりも濃厚な血の匂い。

戦闘の余波か、木々は薙ぎ倒され、月の光が差し込んでいる。

視線を横に向ければ、すぐそばで周囲の木々を巻き込み横たわっている巨体。

先ほど戦ったオーガのそれよりはるかに巨大。おそらく元の大きさは三メートルを優に越す大きさだったのだろう。

おそらくと言ったのは、破損部分が多すぎてほとんど原形をとどめていないため。

鋭利な刃物で切られたようになめらかな断面を見せる右腕部。

左足は固いもので殴られたかのように無惨に折れ曲がり。そして、左半身から頭部にかけて、なにかで抉り取られたかのような穴が穿たれている。

「これはまあ、随分アグレッシブな壊し方だな」

と、自分のことは棚に上げつつ、呆れたように呟く。

既に倒されてる場合はどうなんだろう、課題に影響するのだろうか？ と首を傾げる。

まあ、あれだけオーガ倒してるわけだし、大丈夫だろう。

顔をあげて視線を巡らしたミライは、薙ぎ倒された木々の奥、僅かに月明かりに照らされて浮かび上がるその姿に息を飲む。

「なん、だと？」

震える声。竦んだように固まる体。

ミライの心は、『それ』に捕らわれた。

そう言えば彼はよく生え際を気にしていた（後書き）

一度やってみたかった無駄に引つ張る終わり方。種明かしは次回。

あと、作者は別に三成アンチとかじゃありません、むしろ大好きです。多少私的な見解が混じってますけれど。不快に感じた人がいたなら申し訳ないです。

大きな拾いものをしました

誘蛾灯に誘われる羽虫のように、おぼつかない足取りで月明かりに照らされ姿を晒すそれに近づいて行く。

「……どうして？」

口から洩れるのは驚嘆に濡れた、言葉にもならない囁き。

それを目前に足を止め、まるで己が神に対するかのように、恭しく跪く。

そして、ゴクリと喉を鳴らし、手を伸ばす。

それは、まるで全ての罪を抱擁するかのような柔――。

「おおう、やばいやばい」

おっぱいが落ちてるとかとはいえ、こんなにも動揺してしまうとは俺もまだまだ鍛錬が足りない物だと反省しつつ、驚掴んだそれを惜しむように手を離し、一步後ろに下がった。

「さて」

そう呟き、地面に横たわる女性を見やる。

身長はアリゼルより低いので、おそらく百六十前後。種族はおそらく人間族で年齢は二十歳前後だろうか。体のラインがハッキリと出る上下一体の真っ黒な服。

上は手首の先から首元までを覆い、下はへそ下辺りから大きく切れ込みが入っており、ロングスカートのようにふわりと広がり。

その下は足元まで隠すスパッツのようなピタリとした黒い衣とハイヒールのような踵の高い靴。

露出の非常に少ない服装であるはずが、その彼女自身の持つ扇情的なラインが逆に魅力を引き立てている。

ばさりと地面に広がった膝まで届くくらいに長い髪は鴉の濡れ羽色。その容貌はまるで触れれば壊れてしまいそうなガラス細工のような儚さを。

瞳を閉じて眠るその姿は、まるで一枚の絵画のようだと、柄にもなくミライにそんな詩的なことを考えさせてしまうほど。あとたわわなおっぱいも素晴らしい。

「——さて、この人がオーガをやったんだろうけど」

顎に手をやり眉を寄せるミライ。

とてもではないが、見た目からではそのようなことを成し得るなどとは想像もできないような風貌。

兎にも角にも、このままでは話もできまい。

「おい、お姉さん。こんなところで寝てると襲っちゃうぜ俺が」

ペシペシと頬を叩き声をかけるミライ。

ちなみに超もち肌だったとのこと。

それに反応したのか「うう」とくぐもった声が女性の口から洩れる。

「お、気がついたか？」そんな彼女の顔を横からのぞき込むように窺う。

ゆっくりと開かれる瞼。

その奥から現れるのは鮮血のごとき光彩と、闇のような深さを覗かせる瞳孔。

ほう、と息をもらす。

まるで血のようだな、と。

そうして彼女の様子を観察するように見つめる。

見つめる。

見つめて

見つめ――。

「……」
「……」

うん？ と口元を引き攣らせる。

「じー」という擬音が聞こえるかのように。

まさに穴が開くほどミライを見つめる二つの瞳。

妙な圧迫感というか迫力のようなものを感じて体を引けば、追随するように女性は顔を近づける。

少し動けば唇と唇がマウストゥーマウスしそうな距離。

「あのー？」と困惑気味なミライの呟きに、「あら？」と小首を傾

げた女性は、漸くその瞳の焦点を『ミライ自身』へと合わせる。

「あの、何か付いてますか？ 俺の顔」

ようやく会話ができそうだと、取り敢えずの疑問をぶつけてみれば、

「あらゝ、ごめんね。そういうわけじゃないのよ？」

と、おっとりとした声が帰ってくる。

「あなたがとてもいい香りしてたから。ついねゝ」

ほわりと眼前ではほ笑む女性。

なにが「ついねゝ」なのだろう？

そんなに俺臭うのだろうか。

「まあ、いいですけど。まずは少し離れませんか？」

ひとまず抱いたその疑問は置いておくとして、優先順位の高い順に話を進めることにする。

さしあたってはこの距離間からだろうかと、苦笑いを浮かべるミライだった。

「あらあら」といって、ミライから顔を離し改めて横座りする女性。

「それですね。あー、まずは名前を聞いておくか。俺はミライっていいます、よろしく願います」

「まあ、これはご丁寧にどうも。私はフェイトっていいます」

お互いに頭をさげて自己紹介を済ませる。

ぽわぽわした笑みをうかべるフェイトの様子に、なんか和むなーとヘラリと口元を緩めるミライ。

「あー、つと。それですね。あのオーガ倒したのってフェイトさんですか？」

指差すのは、木々を押し倒し力尽きた残骸。

「あら、あのオーガね？ そうなの、かなりしつこくて。私も長旅で疲れてたから力加減出来なくて全力で戦っちゃったんだけど、そのあと私も力尽きちゃったのよ」

うふふ、と恥ずかしそうに笑うフェイト。

「それで、こんなところで寝てたんですか？」

「そうよ？ 私ってどうも燃費が悪いのよね。だから仕方なく寝て回復してたわけなの」

回復のためとはいえ、よくこんな敵だらけの場所で寝れるなーと思いつつ、こういう場合はどうするべきなのだろうかと首を捻るミライ。

彼自身の嗅覚が、フェイトの言葉が真実だと告げているので、オーガ変異種を倒したというのは間違いないだろう。

オーガの群れはミライが潰し、変異種もフェイトが倒したということ、これで課題は達成したと考えていいものなのだろうか。

「それで、私もミライ君に聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

「ん？ はい、なんですか？」

「えーと、ミライ君はどこから来たのかしら？」

「俺ですか？ 俺はバースミリアってところから来たんですけど」

「あら、それって確か学園都市、だったかしら？」

「そうですよ」

「まあ、じゃあミライ君は学園都市の学生さんなのかしら？」

「いやいや、むしろその学生になるための試験で、あー、これは言っちゃだめなんだっけ？ まあ色々あってこの森までやってきたんですよ。その途中で偶然ここに寝てるおっぱ、もといフェイトさんを見つけてまして」

「あらあら、そうだったの？」

そう言つて、小首を傾げて何か考え出した様子のフェイトに、今度はなんだろうねえとそれを黙って見守るミライ。

やがてフェイトは掌をポンと胸の前で合わせ、ずいっとミライに顔を近づけ満面の笑みを咲かせる。

「じゃあ、私もミライ君に着いていくことにするわ」

ついでに冒険者にでもなろうかしら、といいこと思いついたとばかりに呟きながらほわんほわんと口元を緩めるフェイトに呆れの籠もった視線を向けるミライ。

「何が『じゃあ』で『ついでに』なのかは知らないですけど。そんな簡単に決めていいんですか？ そも俺とフェイトさんって初対面

でしょうが」

「あら。でもあなたは悪い子には見えないから」

「えー？ そんな簡単に」

「うふふ、私の勘ってよく当たるのよ？ フレデリアもよく褒めてくれたのよ」

「勘ですかそうですか」

「それに、目的のあった旅というわけでもなかったの。だからちよ
うどいいと思わない？」

そういつて、うふふと微笑むフェイト。

ちようどいいって何がだよ、意味分らないからと溜め息をこぼす
ミライ。

「えーとですね本気ですか？」

「あら、駄目だったかしら？」

「いや駄目ってわけじゃないですけど、本当にいいんですかそれで
？」

「あらあら、それじゃあ問題ないわね。もし断られても勝手に着
いていくつもりだったし」

にこにこ微笑むフェイトにミライも微妙な笑みを返す。

すでに最初に抱いた儚そうな印象は消え去っていたものの、それで
も、彼女の言ではないが見たところ悪い人ではなさそうではあるし、
それにここまで言われては男としても引くことはできない。決して
オッパイにつられた訳ではない。

「はあ、わかりました、俺の負けですよ。……まあ、成るようにな
るだろ」

「そうよ、人生なんか成るようにしかないものなのよ」

「それじゃあ、腹も減ったし帰るとするか。ああ、フェイトさんは

当然泊まる場所なんか」

「あらゝ、どうしましょうか？」

「ですよー。捨て置くのはな。……しょうがない、タルナダにもうひと頑張りしてもらうか。最悪俺と同室かもですけどいいですか？」

「あらあら、それは困ったわね。うふふ、私もご無沙汰だし、少しだけよ？」

「はいはい。女の人がそんな卑猥な冗言言つもんじゃないですよまったく俺じゃなかったら本気にしてるところですよ本当にもうまったく」

「うふふ、ミライ君ったら正直者ねえ」

「ほんとひとつ咳払い。」

「さて、すいませーん、俺たち帰っちゃいますけどいいですかー？」

と、後ろを振り返って声を張るミライ。

「まあ、どうしたのミライ君？」

「んー、やっぱり知らん振りしといたほうがよかったか？ ああ、ちよっと待ってくださいねフェイトさん。へいへーい！ そのギルドのヒト、観念して出てきてくださーい」

ミライの声が森の暗闇に響いて溶けていく。

静けさを取り戻した闇の中を静かに見守るミライの確信を含んだ視線に観念したのか、ガサガサと葉を揺らし、姿を現したのはギルド長の命により尾行していた人狼・ゲイル。

「うおっ、リアル狼男」と小さく吃驚するミライと「あらあら」と目を丸くして驚くフェイト。

「——まいったね。まさかバレてるとは」と苦笑を零しながらゲイルはミライの前で足を止める。

「ちなみにいつから気付いていたのか聞いてもかまわないかい？」

「えーと、ギルドを出たときですね」

「……なんと、初めからばれてたのか。まいったね、気配を隠すのはうまい方だと思ってたんだけど」

「あら、ミライ君凄いのね。狼君がいるなんて全然気付かなかつたわ私。私もそれなりに敏感な方なのよ？ ガル君も良く誉めてくれたわあ、『フェイトお主よく今まで生きてこれたなあ』って」

頬に手を当て何かを思い出すように、明後日の方を向いて微笑むフェイト。

「いやまあフェイトさんがそれでいいならいいんじゃないですか？」

「あらそう？」と首を傾げるフェイトを優しく見やるミライ。

「まあ、それはともかく。ギルドへの報告はそっちに任せてもいいんですよね？」

そのために着いてきたんでしょ？ と言外に籠められた意味を読み取り苦笑を浮かべるゲイル。

「しょうがないね。見つかってしまったのはこちらの落ち度だからそれくらいはさせてもらうよ。では今日はもう遅いから明日もう一度ギルドホームに来てもらえるかい？」

「了解。それじゃフェイトさん、行きましようか」

「あら、久し振りに料理されたご飯が食べれるのかしらあ？ う

ふふ、楽しみだわ」

「ああ、でも俺街から走ってきたんで、帰りも徒歩になるんですよ。だから」

俺が背負って行きましようか、と。言うつもりでフェイトに手を差し出したミライの言葉は、彼女自身の笑みに遮られる。

「あらあらそれなら心配しなくてもいいわ。その代わり――
――」

ミライの差し出した右手を掴み取り、ヒョイと引き寄せるように、反対の手を彼の後頭部に。

「ん？」

と、ミライの零した疑問を置き去りに。

フェイトは迷うことなく彼の唇にマウストゥーマウス。

「んうっ！」

とまるで生娘のような声を漏らし目を丸くするミライを、しかし目を瞑り、彼を堅く抱き寄せたフェイトは見向きすらせず。

驚きに開かれた唇を割って入るように、フェイトの舌が口内へと侵入し、貪るように愛撫する。

「うあっ」と、押し寄せる刺激に唇と唇の隙間から声にならない声が溢れ出す。

隣で突然の痴態に驚き固まるゲイルを置き去りに、さらにフェイトは自らのそれを強く押し付け。

『ガリ』と舌に噛みつかれた痛みにミライは驚嘆から抜け出し、怪訝な瞳をフェイトに向ける。

瞬間。

ゾクンと、体の一部が抜け落ちるような感覚。

「んふうっ」とフェイトの鼻から熱を伴う息が吐き出される。ともすれば依存しそうになるその背徳的な感覚に、ミライはフェイトの肩をつかんで無理やり引きはがした。

「あふん」とそのまま尻もちを突いたフェイトは恍惚とした表情を浮かべ体を震わす。

「はあ、はあ。いきなり何を？」

涎で濡れた口周りを手で拭い、問いかけるミライ。フェイトは口元を濡らしたまま、定まらなかった視線をゆっくりミライに合わせる。

「あふん、ミライ君ったら、凄いものもってるのね？ 私腰が抜けるかと思っちゃったわあ」

いやんいやんと座ったまま腰をくねらせるフェイト。

「いや、そうじゃなくて、なんでいきなりこんなことを？」

「あら？ 言わなかったかしら？」

と小首をかしげる姿に呆れた視線をぶつける。

「聞いてないですから」

「あらあら。そうだったかしら」

「それで、今のは何だったんですか？」

「体内魔力の吸引よ？ 私ほとんど魔力残ってなかったからね」

「キスで魔力を？」

「正確には唾液に含まれる微魔力ね」

「じゃあ舌に噛みついたのは？」

「血液を媒介にした方がもっと濃い魔力を吸えるのよ」

「……だったら、キスしなくてもよかったんじゃない？」

と、疲れたように問いかけるミライ。

役得と言えば役得なのだが、受けというのはあまり得意ではないうえに、魔力を奪われたことに依る倦怠感が半端ないのだ。

「あらあら。でもミライ君の魔力病みつきになっちゃいそうだから。うふふ」と笑顔を浮かべるフェイトに、ミライは諦めるように溜め息を吐き出した。

「他人の魔力の吸収なんて初めて聞いたね。それは君のギフトの力かい？」

黙って成り行きを見守っていたゲイルが、ミライの手を借りて立ち上がるフェイトに問いかける。

通常、体内魔力の回復の仕方は二通り。自然回復か、ポーションによる回復のみ。

血液を媒介に魔力を吸収出来るというなら、それはつまり『通常』ではない方法ということになる。

「あら、そうよ、狼君賢いのね？」

「イイ子イイ子」と言いながらゲイルの頭を撫でるフェイトに、頬を引くつかせるゲイル。

「随分あつさり話すんだね」

「そうかしら？」と言って無邪気に微笑む姿に、ゲイルは毒気を抜かれたように溜め息とともに撫で続ける手から逃れるように距離を取る。

「あら、どうかしたのミライ君？」

もつとモフモフしたかったわと残念がるフェイトは、首を傾げて自分に視線を向けるミライに気づき声をかける。

「ああ、いや」

ゲイルの言ったギフトという言葉に違和感を抱くミライ。

ロゼッタやタルナダのギフトの時は共通した『匂い』を放っていた。だが、フェイトのそれは少し違う。

まるで、無理やりその『匂い』に近づけたような、全く別物であるかのような。

しかし、ミライとてまだこの世界に来て数日。

その抱いた違和感もすぐに勘違いだろうと意識の端に追いやる。

「なんでもありませんよ。気のせいみたいなんで」

「あらそう？ それじゃあ」

よいしょと。

そんな気の抜けるような掛け声と共に、フェイトの背中に翼が生まれる。

片翼だけでおよそ一・五メートル。

血を凝縮したような、赤黒い色をしたそれはまるで刃を重ね合わせたように刺々しく。

しかし、見た目に反してまるで重さを感じさせないようにふわりと広がる。

突然、なんの前触れもなく現れたその翼に「おおっ！」と驚くミライ。

「うふふ。どう、可愛いでしょう？」

「え？ いや可愛いというかむしろカッコよすぎるでしょ」

翼をたたみ、くるりと回ってみせるフェイトに、似合わねえーと内心でツツコむミライ。

「驚いたね。これもギフトなのか。ということは魔力の吸引はあくまで力の一部？ 力の根本はもつと別のもの？」

ゲイルはそれを見ながら呟くように考え込んでいる。

「それじゃあ、今度こそ帰りますか」

ふう、と息を吐き出しつつフェイトに背を向け歩き出そうとしたミライの足を止めたのは、その向けられた背に抱きついたフェイト。

「うふふ、それじゃあミライ君行くわよ」

「え？ いや俺は走って、ちょ、おわ、フェイトさん、だめ、そんな風に掴んじゃ、らめえ！！」

ミライの悲鳴が、夜の空に響いて消えた。

大きな拾いものをしました（後書き）

というわけでアリゼル、ロゼッタに次ぐメインキャラ三人目です。アリゼルとかロゼッタとか忘れてる人が大半でしょうけど。出番ないし。

しかし、長かった。もっと早期に登場するはずがタルナダの思わぬ出世のせいで二十五話まで引っ張ってしまった。メインキャラは残り二人を予定。いつ出てくるかは未定ですけど。

ご意見感想など随時お待ちしております。

閑話

——時は少し遡る。

門前にて、ミライの背中が見えなくなるまで見送ったタルナダ。

今からオーガの群れの討伐という難題へと挑まれるというのに、『ちよつくら散歩に言ってくるぜ』と言わんばかりに気負いの一つすら見せない背中なんと凛々しいことか！　と思わず溢れ出る生唾を飲み干し、だらしなく緩んだ顔を恍惚に染める。

周囲がそんな彼女の様子にドン引きしていることには気づきもせず、さあ主を待たせてなるものと気合を入れ直すように頬を掌で叩き、その場を後にするのだった。

そこから彼女がまず向かったのはギルドタウン。

小走りでギルドタウンの入り口まで戻ってきたタルナダはそこで足を緩め、行き交う人々の邪魔にならない程度の歩みで中央を通る大通りを挟んだ、一般的な宿屋が集まる方向と反対側の脇道へと向かう。

歩を進めていくと、やがて辺りの様相も変化を見せ、『表』で見えるような華やかな外観の店は軒並み姿を消していく。

『裏』、または『職人通り』と呼ばれるギルドタウンの北西部に位置するこの場所は、文字通り職人たちが居を構え物を作る場所である。

基本的に、ここで職人たちによって創られた武器・防具・装飾品などの商品が『表』の店舗へと卸され、また『表』で仕入れた素材は

職人通りへと流されるという仕組みがこのギルドタウンでは成り立っていた。

例外として、特注品などを求めて直接職人へと交渉を行う冒険者もいたりはある（タルナダの装備もここで直接交渉して作ってもらったオーダーメイドである）。

そのためだろうか、ここ『職人通り』と呼ばれる場所は『表』とは違い、異様な熱気のようなものに満ち満ちており、時折飛び交う職人の怒声や鉄を打つような甲高い音や鈍く響き渡る音のハーモニーは、そこを行くタルナダに一種異様な世界へ踏みこんだかのような、そんな錯覚を与えた。

いつ来ても、ここの空気には慣れないわねと苦笑を浮かべつつ、顔見知りの職人たちと挨拶を交わしつつさらに奥へと足早に向かう。

そこから一分ほど歩いて職人通りを抜けたタルナダはようやく目的地に到着した。

ギルドタウンの最南端、外縁沿いに構えた宿屋『ナツクルパンチ』である。

名前の由来は、元冒険者であった女将がその当時に愛用していた武器の名前から引用したらしい。もう少し考えた方がよかったのではと思わなくもないけれど、経営者たる一家たちが大いに満足している様子だったので今のところ彼女がそれを口にしたことはない。

宿屋『ナツクルパンチ』は木造建築の二階建てで特にこれと言って特徴の無い外観、宿屋としての看板を掲げているわけでもないの、言われなければ宿屋とは分からないだろう。『表』から外れたこのような場所で宿を開いているのも、隠れたように宿を営んでいるのもこの宿屋の主人たちに言わせれば趣味だからとのこと、副業としてやっている朝と昼の弁当の販売での収入のほうが多いというのだから、呆れるしかない。

まあ、弁当の販売に関して言うならば、職人通りでは『表』を差し置いて今や市場独占状態とのことらしいので本業よりも多くの収入を得ているとか。閑話休題。

扉を押しあげるとともに鳴り響く『グエエーグエエー』というゲロツグ（レベル四に該当するモンスター）の鳴き声のような不快な音は無視して、一直線にカウンターへと向かうタルナダのもとに声がかかる。

「お、珍しく客だと思ったらタルナダじゃねーか。久しぶりだなー」

そう言つてカウンターの奥に座った少女が、歩み寄るタルナダに向け快活な笑みを見せる。

「そうね。怪我はもう大丈夫なのヘレーネ？」

「おう、ばつちりだ！ 今ならオーガでも倒せそうだぜっ」

笑顔で氣勢を上げる少女に、苦笑を浮かべるタルナダ。

名前はヘレーネ・スタイン、十九歳人族。

アリゼルを迎える一向には訓練時に負った怪我のために加わつてはいなかったが、タルナダたちのパーティー最後の一人である。

青色の髪は短く切りそろえており、丸くて大きな目と太い眉が特徴的な可愛い容貌。

営業中にもかかわらず短パンとスポーツブラのような生地が少ない服しか着ていないせいで、男性がいれば目のやり場に困るくらい肌色の過剰な服装をしているのだが、幸か不幸かこの場にはそれを指

摘するような恥じらいを持った人材はいなかった。

「はいはい。ところでバスタさんとマルアさんは？」

「ああ、父さんと母さんなら夕飯の買い出しに出かけてるぜ。もうすこししたら返ってくると思うけど？」

バスタ・スタインとマルア・スタイン。

ヘレーネの父と母であり、両者ともに元冒険者である。現役時代に稼いだ金で現在は気ままに宿屋を営んでいる。

「そう。まあいいわ。時間も惜しいしさっそくだけど部屋は空いてるかしら？ 出来れば今夜から、試験結果が出るまでだから、最低でも七日間は借りることになると思うんだけどね」

「うん？ タルナダが借りるのか？」

「そんなわけではないでしょう。もちろんご主人さまがお借りになるのよ」

あなたはなにを馬鹿なことをいつているの？ とでも言いたげに澄ました顔をするタルナダに、理解が及ばずに口から疑問の言葉を漏らすヘレーネ。

「ごしゅじんさま？」

「そうよ。私ごときが口にするのも甚だしいけど、教えてあげる。私のご主人さまであるミライ様よ」

「……」

こいついつたいなにいつてんだ？ と一寸タルナダの頭の心配をするヘレーネ。

彼の剣鬼を迎えに言った道中で頭でもぶつけたのか、と。

「あのさタルナダ。お前頭大丈夫か？」

素直に聞いてみることにしたヘレーネ。

「はあ？ 何言ってるのあんた？」

腕を組んで呆れたようにヘレーネを見下ろす姿はいつものようにしか見えないのだが。

うーん、と椅子に座ったまま胡坐をかいて盛大に首をかしげる。

「で、空いてるの？」

「ん、ああ、部屋だっけ。まあ、空いてるには空いてるぜ？」

とりあえず問題は棚に上げておくことにする。後でキュオル辺りに放り投げようと他人任せな決意を固めるヘレーネ。

「そう。だったらお願いするわね。あと夕食も」

「わかったぜ。タルナダも食べていくのか？」

「もちろんよ。ミライ様のお顔を拝見しながらなんて素敵な機会逃すわけないでしょ。むしろそれだけでご飯三杯いけるわね」

「そ、そうか？ それじゃ母さんに言っとくけど。ところでその肝心のミライサマってのはどこにいるんだ？」

「今は所用で外されているのよ。今から迎えに行かせてもらうわ。

そうよ、ここでもたもたしている暇なんてないのよね。それじゃあ後はよろしく頼んだわよ」

「そ、そうか。頑張れよ色々」

ひとまず宿の確保を終えたタルナダはほほを引きつらせたヘレーネに背を向け『ナックルパンチ』を後にして再び門前へと急いで駆けつけた。

どうやら杞憂だったようで、まだミライの姿がないことに一安心する。

道の真ん中で突っ立ってるのも邪魔なだけなので、門前の広場の中央にある噴水前へと足を向ける。

噴水を背にしたタルナダは赤く染まり出した空を見上げ「ほう」と息を吐き出す。

ミライがオーガ討伐に向かってから大体三十分くらいか、と広場に設置された魔術時計を見る。

後は主の無事の帰還を祈るだけ。

否、私程度の未熟な身であのお方の無事を祈るなど、傲慢に過ぎる。無事なのは当然なのだ。ならば私が行すべきは無事を祈ることではない、ただ黙して待つことのみ。

まさに僕の鑑かんだな、と自画自賛しつつ、それから彼女はおよそ二時間もの間、恍惚とした表情のままひたすらミライの帰りを待っているのだった。

閑話（後書き）

書いてる途中でタルナダパートが微妙に膨れたので閑話にしました。

次回は本編に戻ります。

そんな友の成れの果ての姿を見て、彼女は酷く悲しそうな瞳で呟いたそうなの

空路を辿り、人目に付かないようにバースミリア近郊に降り立った二人は空腹に急かされるように足早に都市内へと足を踏み入れた。

人々が腹を満たすために動き出す時間帯だろう、あたりから漂ってくる様々な香しい匂いがミライの空腹中枢をいい具合に刺激してくる。

「むう、辛抱たまらんなこの匂い」と溢れ出る生唾を飲み込んだミライは、隣で屋台に目を釘付けに笑顔で涎を垂らしているフェイトの手を引いて歩き出すのだった。

覚えた気配をたどったミライは労せずタルナダを発見。

そんな彼女はというと門前広場の中央にある噴水の前でソワソワと辺りに視線を走らせていた。

よく見ると、頬が紅潮し、息が荒い。自分の身体を抱きしめ、舌で唇を濡らす様など大変艶っぽくていいのだが、生憎彼女の場合『目がダメだった。

一言で言うところ、ぎらつき具合が過ぎているのだ。声をかけようと近づいていく男たちが目を合わせたたん軒並み引き返していく様はある種壮観ですらあった。まあ、それも身うちでなければの話なのだが。

「うわあ、理由が知りたく無くなるくらいご機嫌だなアイツ」

「まあまあ、ミライ君のお知り合い？ とても面白そうな子ね」

「出来るなら放置したいところなんだけど、背に腹は代えられないか

……」

人混みを掻き分け姿を見せたミライをいち早く見つけたタルナダは、カッと目を見開き足早に彼へと近づく。

「お帰りなさいませミライ様っ！」

「ああうん、ただいまタルナダ。待たせたなあ」

「そのようなことはありません。ミライ様のために使う時間に無駄な時など一寸たりとも存在しないのですから！」

「……何がお前にそこまでの確信を抱かせるんだろっ？」

「それよりミライ様、私はあなたに謝らねばならないことが」

「今度は何だ？」

「不肖タルナダ、未熟な身でありながら愚かにも御身の無事を祈ってしまったことお許してください！」

「うん、お前が何を言ってるのかはさっぱりすっぱり理解できんが取り敢えず落ち着け馬鹿野郎」

嬉々として頭を地面にこすりつけようとするタルナダの肩を掴んで阻止するミライと、それを楽しそうに見守るフェイト。

そんな三人組を遠巻きに見つめる人々。

「おい、あれって、まさか『地雷花』じゃね？」

「ああ、間違いないですね。あんな非効率的な装備をしてる人物がこの街に二人といるわけがありません」

「ちよつとちよつと。『地雷花』ってあの『地雷花』？」

「そうです。『地雷花』のタルナダ。バースミリア学園入学一年目にして既に二つもの魔法スロットを持ち、その年の体育大会では数々の上回生を退け見事ベストテン入り。その巧みな二刀捌きと雷装

による疾風怒濤の近接攻撃スタイルと余りにも破廉恥な装備から、僅か一年で二つ名まで得ています。学園期待の新星ですね。また彼女の所属するパーティーの構成メンバーもそれぞれがかなりの高レベルで纏まっていると言われています」

「じゃあさー、そんな有名な人に傳かれてるあの男のヒト知ってる？」

「うわ、あのタルナダって子凄いいこと口走ってるけど？」

「ふむ、この歩く図書館とまで呼ばれた私も、彼についての情報は皆無ですね」

「げー！お前でも知らないのか？」

「ひゃー、ご主人様って言われてるよご主人様って」

「恐らくは新たにこの街へやって来た冒険者の卵たち……。ふつ、バースミリアに新たな風が吹くか。この風は嵐となるか、それとも……」

それは必然。物が上から下に落ちるように、世界が回り続けるように。噂は噂を呼び、まるで風が吹くかのように街へと広がる。

アリゼルが懸念していた以上に早く、彼の存在がこの街へと刻まれる。

「ああっ、ああっ、なんて蔑んだ瞳、そんな目で見られたら感じちやうー！」

「ああ、うん。わかったから気持ち悪い動きしないで早く宿に案内しろその物体X」

「あらあらミライ君あその焼き鳥おいしそうね」

「ちよっ、フェイトさんも勝手に動かないでじっとしてて」

「それではミライ様、このタルナダめがご案内させていただきます」
「いきなり真面目！？」

——噂は広まる。

彼がそれを望もうと、望まなかつと。^{ミライ}

「で、聞いてなかったけどあんたは何なのよ？」

ひとしきり騒いだあと、ミライがタルナダのケツをける形であわただしく広場を出た一行。

先頭を歩くタルナダは、そこでようやくミライに手を引かれている豊満な胸の女性・フェイトがいることに気付く。

え？ いまさら？ というミライの呆れた視線には気付かないタルナダは、警戒心丸出しにフェイトへと問い掛ける。

「あら、あれ美味しそうね」

「聞きなさいよ！」

ぐぎぎと怒りを露わに詰め寄るタルナダと、それを歯牙にもかけず周りの様子に目を奪われているフェイト。

「ほれ、落ち着けタルナダ」

そんなタルナダの頭を空いた手でがっちりホールドするミライ。

「痛い痛い痛いなのに気持ちいい」と、手の下から漏れ聞こえる戯

れ言はもちろん聞き流す。

「この人はフェイトさんって言ってな。色々あった末に成り行きで試験の日まで暫定的に仲間になったんだオーケー？」

「えっと、あの、ミライ様が何を言ってるのか分かりません」

「気にするな」

「わかりました！」

頭を鷲掴まれたまま威勢良く頷くタルナダ。

こいつが馬鹿でよかったと思うミライ。

「あらあら。ミライ君ったら暫定的だなんて寂しいこというのね？」

「……聞いてたんですか？」

「うふふ」

「いい性格してるなあこの人」

「ミライ君？ 一度拾ったものは責任持って最後まで面倒みないと駄目なのよ？」

「うわ、露骨にスルーした。と言うか、それを自分で言いますか」

「男の子の甲斐性よ？ 私ミライ君に捨てられたら飢え死にする自身あるわよ」

「いや、あなたならどこでも強かに生きていけそうな気がしてきましたよ、ほんとに」

「ちよつと！ あんたミライ様になんて羨、もとい図々しいこと言ってるのよ！」

「タルナダちゃんったら、あからさまにミライ君以外には態度かえるなんて面白い子ね。バカっぽくて」

「なんですってえ？ 脳みそ詰まってなさそうな緩い顔したあんたには言われたくないわよ！ その無駄な贅肉に頭に回る栄養取られてんじゃないのー！」

「あらあら……。……うふふ」

「うきーっ！ 何よっ、何よそんな憐れみの目で見えるんじゃないわよ！ 私のはあれよあれ、ミライ様もすばらしいって」

「ぷふ」

「っ！」

「大きくも小さくもない。中途半端って、いつそ余計に哀れみを誘うと思わない？」

「ぐ。……う、うええ、ミライさまあ、私のおっぱいは見るに耐えないくらいに醜いですかあ！？」

「うわあマジ泣きかよ。いやいやお前も極端だなあ。ほらほら落ち着け、お前のおっぱいは醜くないから、な？」

「あらあら、本当に可愛いわねえ〜タルナダちゃんったら」

「うわ、めっちゃ笑顔だしこのヒト。とりあえずフェイトさん自重してください」

そんなこんなで騒がしいままに宿屋『ナツクルパンチ』へとやってきた三人。

フェイトに対してよりいっそう警戒心を強めたタルナダと、それを無邪気な笑顔で見守るフェイト。

この人、あそこで放置してても大丈夫だったんじゃない？ とフェイトの後姿を眺めながら考えるミライ。

考え過ぎるとどつばにはまりそうだったので苦笑いを浮かべつつ、頭を振って二人の背を追うように宿へと足を踏み入れる。

「いらっしやーい。お、用事は済んだのかタルナダ。む、どっちがミライサマだ？」

カウンターの内側に座ったヘレーネ（ツナギのような上下一体の服へと着替えている）がタルナダと、その後ろに続く二人の間で視線を行き来させる。

「ちよつと、そんなの決まってるでしょ。馬鹿女とミライ様と一緒にしないでくれる？」

「ってことはそっちの兄ちゃんが……」

むむむ、と口をへ字に曲げたヘレーネが深るような眼差しをミライへと向ける。
なんせ、年頃の少女に『ごしゅじんさま』と呼ばせるような男である。

今の今まで妄想に妄想を重ねて相当に悪趣味な人物像を描いていたのだが、

「……なんか、思ってたより普通だなー」

緩い笑みを浮かべた、同い年くらいの少年にしか見えない。むしろタルナダと並んで立っているとタルナダの肌色の多さが強調されるせいで、どれだけ身内贗冒したところで変態なのは彼女のほうにしか見えない。

「何か言ったヘレーネ？」

「いやーっ、なんでもないなんでもない」

不審気に眉をしかめているタルナダにわたわたと否定の言葉を返すヘレーネ。

「タルナダ、そっちの子は知り合いか？」

そんな親しげ？　な二人の会話が途切れたところでミライがタルナダの肩をつついて促す。

「あ、はいミライ様。この子は私達のパーティーメンバーの一人で」「ヘレーネ・スタインだ、よろしく頼むぜ！」

「ああ、なるほど君が。タルナダから話は聞いてたよ。俺はミライ。しばらくの間よろしくスタインさん」

「ヘレーネでいいぜ！　そのかわり私はごしゅじんさまじゃなくてミライって呼ぶけどいいか？」

「あつはつは、もちのろんだヘレーネ。ゴシユジンサマなんてどっかの物体Xと同じような呼び方こちらから願い下げだって」

「あはあん！　そんなミライ様心の準備が出来ていないのに急にそのような蔑んだ目で見られては濡れ「ふん！」ぐええっ」

「うふふ、私はフェイトっていうの。よろしくね」ヘレーネちゃん「そ、そうか、よ、よろしくだぜ。……えっと」

「ああ、あと急で悪いんだけどさ、もう一部屋フェイトさんの分を借りたいんだけど。借りる日数は俺と同じで。いいよなフェイトさん？」

「ええ、それでお願いするわ」

「あ、ああ。それも大丈夫だけど、えっと、タルナダが」

「ん？　ああ、大丈夫。一時間くらいで起きるだろ」

「あらあら、うふふ。タルナダちゃんったら、気絶させられた癖にどうしてこんなに嬉しそうなのかしら？」

「……タルナダ、お前、やっぱり」

ヘレーネの悲しそうな声が妙に耳に残ったものだと、後にそのときのことを思い出したミライは語る。

こうして少女はまた一つ現実（身内にモノホンの変態が居たこと）を知り、大人への階段を上っていくのであった。

そんな友の成れの果ての姿を見て、彼女は酷く悲しそうな瞳で呟いたそうな（後

【補足】

タルナダの二つ名である地雷花。

本編では語られなかったがこれには二つの意味が込められており。

一つは双剣と得意魔法である雷装から『地を裂く雷の花』という意味が。

そしてもう一つは『あの恰好は地雷すぎるだろ、花売りも真っ青だ』という裏の意味が込められています。

ちなみに本作内での地雷という言葉は、『地に雷が落ちてきたならば小便も我慢できないくらい怖いだろう』という由来から、身を切り裂くような恥ずかしい事という意味でも使われています。

本人は二つ名に込められた意味を知っていますが、特に気にしていません。

食べながら喋るんじゃないありません！

コンコンコンと扉を叩く音に、ライカは誰何の声を上げることなく「入れ」と一言許可の声を出す。

「失礼します。ただいまもどりましたボス」

獣面に笑顔を浮かべて入室するゲイルを、ライカは手元に視線を落としたまま出迎える。

「貴様か。何の用だ？」

そんないつも通りの素っ気ない言葉に、僅かに苦笑のようなものを浮かべるゲイル。

「ボス、ミライという少年の件で報告に来たんですよ」

その言葉にライカは手元の書類から顔を上げ、愉快なものでも見つけたかのようにゲイルを見据える。

「ほう？ 随分早いな。それで。何か面白いことでもあったか？」

「何も、面白いことなんかありませんでしたよ。つつがなく、何の問題もなく、オーガの討伐及びオーガ変異種の討伐を確認してきました」

そう言いつつも、言葉と裏腹にゲイルは笑みを浮かべたまま彼女の反応を見つめる。

「……ほう？」

そして、ギルド長はゲイルの予想通り、先までの鋭利な雰囲気収め、まるで童女のように楽しげな感情を口元に刻む。

——— 普段の、他者を圧倒するような空気を纏う彼女を、特段苦手に思ってたたり嫌っていたりするわけではないのだが。

ゲイルとしてはこのように時折見せる初心な少女のような表情を浮かべるギルド長のほうが好きだった。

何せ容姿の素晴らしさだけはギルドの男性職員も総意を持って縦に頷く程であり、噂ではギルド職員の猛者たちにより未確認ながら『ギルド長ライカたんファンクラブ』なるものまであるらしい。

もちろん本人の耳に入ったり見つかれば命はないだろうことを考えれば、彼らがどれだけの命知らずかは推して知るべしである。

話が逸れたが、つまり何が言いたいのかと言うと美的感覚が人のものとは異なるゲイルにしても、そんな彼女の姿はひとつの芸術品を眺めているような気分になるのだ。

とは言えそんな事を口にするなどもつてのほか。言うまでもないが態度に現したりした日には誰のとは言わずもがな、この執務室に血の雨が降りしきることは間違いない。

なので彼女に決して悟られないようにしつつ、彼女のそんな美しい姿を鑑賞することが彼のライフワークの一つであった。

閑話休題。

「詳細はこちらに纏めておいたのでどうぞ」

そんな煩惱に塗れた思考を笑顔の下で展開しつつ、ゲイルは（普段の彼女を知るものが見れば仰天するような）不気味なほどに機嫌のいいライカに持っていた報告書を手渡す。

それを受け取ったライカはパラパラと素早く中身に目を通す。ペー
ジを捲るほどに笑みを深くする彼女の姿をゲイルは静かに見守る。
そうして、報告を全て確認したライカはバサリと報告書を机の上に
放り出し、「くはっ！」と堪えきれないように笑い声を漏らす。

「くくっ、ははは！　なんだこれは？　オーガの群れを単身で、素
手で、掠り傷ひとつ負うことなく殲滅するだと？　こんな馬鹿な話
ははっ、まるでSランクの化け物共の所行だな。成る程。フリアリ
ーエの小娘がわざわざ世話を焼く訳だ。それに、ふふ。まさか小娘
と剣鬼だけでなく、ブラッド・エクスキューショナー『赤の敵滅者』との縁まで結ぶとはな」

それまで黙って聞いていたゲイルは、ライカの呟いたその言葉に笑
顔を崩し突然ブホッと咳き込む。

「げげげほ！　なっ、ちょ、ちょっとちよっとボス？　『赤の敵滅
者』って、まさか、あの？」

「何だ貴様、ここまで詳細な報告をしておいて気付いてなかったの
か」

「いえいえ、それ以前に『赤の敵滅者』って実在したんですか！？
まさかギルド長ともなれば『御伽噺の登場人物』とも親交あつた
りするんですか？」

「しかし、まさかあの女が学園入りを望むとはな。ここまで面白い
ことになるとは」

「ああ、無視するんですね分かりますよボス。はあ、今年の学園は
何だか荒れそうだねえ」

「ゲイル、この二人に受験資格証を渡しておけ。これだけギルドに
有益なやつらだ、貸しの一つくらいで懐に入れることが出来るなら
安いものだ」

先まで浮かべていた童女のような笑みを消し去り、ニィつと三日月の笑みを浮かべるライカ。

「顔合わせはどうしますか？」

「今はいい。このミライという男が本物だというなら、いずれ名実ともに上まで登り詰めたときに機会が巡ってくる」

「了解ボス」

はあとため息混じりに諦観の笑みを浮かべるゲイルと、愉しそうに笑みを浮かべるライカの姿は実に対称的だった。

「さあさあ、遠慮せずにいただいてくれたまえ」

「おかわりもたくさんあるからどんどん言ってちょうだいね？」

天を突くかの如く前方に突き出した特徴的な髪型にサングラスをした人族の男性と、青い髪を頭の後ろで団子にした、十九歳の娘がいるようには見えないくらいに若々しい容姿をした女性。

バスタ・スタインにマルア・スタイン。

ヘレーネの両親であり、宿屋『ナツクルパンチ』の経営者でもある二人は満面の笑みをテーブルに着く二人の客に向ける。

「おお！ これはまた豪勢だなー」

「ほふね。ほへもほひしひはんぐもぐ」

「って早っ！ 人が感想述べてる間に食い始めるとかフェイトさん

「どんだけお腹減ってんですか」

「はっへほっへもぐもぐ」

「ああ、ほらもう、行儀悪いから食べながら喋らない」

喋る間すら惜しむように料理を消費していくフェイトの姿に苦笑をこぼしつつ、ミライも目の前の料理を食べ始めるために手を合わせた。

カウンター前での一連のやり取りの後、騒がしい声に気付いて奥から出てきたバスタとマルア夫妻。軽く自己紹介を交わした後、夫妻の「まずは食事にしよう」という言葉に従い、さっさと食堂へと移動したミライとフェイト。

そうして、促されるまま満腹になるまでひたすら無言で夫妻の料理を味わい尽くした二人なのだった。

満足そうに目を細めてテーブルにダラリともたれているフェイト。そんな彼女を視界の端で捉えたまま椅子に背を預け果実水でのどを潤すミライ。

「それで、まだ聞いてなかったけどミライとフェイトは何しにこの町に来たんだ？」

食事の後片付けを終えたのか、手ぬぐいで手を拭きながらやってきたヘレーネが彼らの正面に腰かけながら口を開く。ちなみにバスタとマルア夫妻は大量の弁当を詰めた荷車を持って職人通りに向かったためここにはいない。

「あれ、タルナダに聞いてなかったのか」

「そうなんだぜ。タルナダのやつ随分慌ててたからな。聞く暇なかったんだ。あつ、でもあれだぜ？ 言いにくいんだつたら無理に教えてくれなくてもかまわないからな」

「いや、まあ隠すようなことでもないから。学園の入学試験受けにきたんだよ」

「わたしも」

「あ、やっぱそうだったのか。この時期にこの街を訪れるのって受験者が多いから、そうなのかなとは思ってたんだけど。タルナダが剣鬼様の話しているとき以外であんな風になつてくるくらいだから、実は凄い冒険者だったりするのかと思つちまつたぜ」

「ははは、まあ、いろいろあつたんだよいろいろ」

そんなヘレーネの濁りの無いまなざしを避けるようにそつと視線を外し、乾いた笑いを零すミライ。

「あらあら、ミライ君ったら。タルナダちゃんをあんな変態さんにしたうえに御主人様になるなんて一体何をやつちやつたのかしら」

「ははは、そんなフェイトさんつてば、まるで俺が何かやらかしたみたいな言い方ですねー」

「うふふ、違つたのかしら」

「ははは、フェイトさんつてばおもしろいなあそんなわけないのに」
「あらあら、ミライ君も冷や汗いっぱいでとつても愉快よ」

ははは、うふふと笑いあう二人に首を傾げるヘレーネだったが、急にいいこと思い付いたとばかりに手のひらをポンと打ち合わせ笑みを浮かべる。

「だったら私と手合わせしようぜ！」

「おお、どうした急に」

「学園の先輩として、後輩になるかもしれないやつの実力は把握しとかなきゃいけないんだぜ！」

「え、なにそのローカルルール？」

「うふふ、私もミライ君の戦つてるとこ見てみたいわ〜」

「フェイトさんまで。あー、まあ、断る理由は特にないんだけど、明日にしてもらってもいいか？　一緒にタルナダとの約束も済ましてしまいたいし」

それにお腹いっぱいでは今は動き回りたくないしな、と。

「それもそうだな。ところで約束ってなんだ？」

「ああ、実はタルナダと稽古の約束をしてるんだ」

「へえー、（タルナダがミライの）稽古見てやるなんて珍しいなー」

「へ？　ああ、うん。まあ、確かに珍しいと言えは珍しいな（俺が教える立場になるのは）。フェイトさんもそれでいいですか？」

「それで構わないふわあ〜」

「あんたほんとにマイペースだなあ」

「うふふ」

「それじゃあ部屋まで案内するぜ！」

勢いよく立ち上がったヘレーネに続けて立ち上がったミライは、既に舟をこぎはじめたフェイトを引き連れ元気いっぱいの案内人の背を追って歩き出すのだった。

享樂的な経営方針の割にしっかりとした部屋に案内されたミライは向かいの部屋にフエイトを押し込んだ後、ヘレーネに礼を言ってから自室へと入る。

ボタンとドアを閉め、視界に移った窓際に置かれた一人掛けの椅子へと足を向ける。

籠手を外し、上着を脱ぎ捨てたミライは、ドカッと体を投げ出すように椅子へと座り込み深く息を吐き出す。

丁度、二日前に見た時と同じように、開け放たれた窓の向こうに輝く月の光がミライの瞳に映された。

——— どうかで、食べたことある味だと思ってただけど、そうか。

スタインさんたちの料理、少しまつさんの手料理の味に似てるんだな。

道理で懐かしい感じがしたわけだ。

アレ食って育ってきたって言っても過言じゃないしなあ。

思い出すのは在りし日の光景。

そして、そんな望郷の念と共に視線を遠くへと向けたミライは、昨日までとは僅かに、しかし確かに変わりつつある内心に気づき、ゆっくりと溜め息を吐き出す。

我が事ながら、全く現金なものだな、と。

めめめと嘆いているばかりの情けない自分と、真剣に向き合ってくれるようなモノ好きな女性が居ることを知ってしまった。

こんな自分のことを、真剣に慕ってくれる少しばかり変わった少女が居ることを知ってしまった。
あちらと何も変わらない。

この世界でたくさんさんのヒトが精いっぱいに生きているということを知ってしまった。

それだけのこと。

しかし、それだけのことで――。

知ってしまったから、もう目を背けることができなくなってしまったのか。

それとも知ったからこそ、向き合う覚悟ができたのか。
それともそれともそれとも――。

「あー、やめだやめ」

深く沈みかける思考を切り捨て、勢いよく立ちあがったミライはぐつと背伸びしたあと、大きく深呼吸する。

難しく考えたって、俺の頭じゃたいした答えなんか見つからないに決まっている。それこそ昨夜の二の舞のようなことになってしまっ
ては目も当てられない。

時間はあるんだ。

アリゼルとの約束通り、なんとか地に足付けてやっていくことにする。

幸か不幸か、こういう経験は二度目なのだから。

なにより。

「あんまり情けない顔ばかりしてたら、お前らに顔向けできないしな」

それだけは、いかに自分のちっぽけなプライドとはいえども、納得してくれそうにないから。

口元に強く刻んだ笑みは、月明かりに照らされることなく、しかし確かにそこに在った。

食べながら喋るんじゃない！（後書き）

ただのかつこつけだとしても頑張ります。だって、男の子なんだから。byミライ

私寝起きは悪い方なんですと彼女が微笑んだ（前書き）

戦闘シーン入ると思ったろ？

私寝起きは悪い方なんですと彼女が微笑んだ

暖かな海の底から浮上するようなフワフワする感覚。

たゆたう意識を拾い集め、微睡みと言う名の水面から抜け出し、未だ夢現な脳みそを奮い起こすように頭を二度三度振るい、凝り固まった体を解すように大きく伸びをする。

ゆっくりと体を起こして、別たれることを拒否しようとする上下の瞼をなんとかこじあげれば。

窓から差し込む朝焼けの光に、ミライは眩しそうに両目を細めた。

「くあゝ」と欠伸をひとつ。

目の端からこぼれ出た涙をこしこしと拭い、再度凝りを解すようにゴキゴキと体の各所を鳴らして満足したミライはベッドから降りて洗面所に向かい、冷たい水で顔を洗った後ジャケットを羽織り、部屋を後にする。

「あ、ミライ様おはようございます」

扉を開け廊下に出たミライは、階下から上がってきたタルナダと顔を合わせた。

「おー、おはようタルナダ。どうしたこんな早くに、」

確かタルナダはここに泊まらずに帰ると言っていたような、……あ。俺が気絶させたんだった。

「俺に何か用だったか？」

はははと乾いた笑みを浮かべるミライの心情に気づく様子もなく、タルナダは満面の笑みをうかべたままミライのもとへ。

「はい。朝食の準備が出来たのでお眠りになつてゐるなら声をお掛けしようと思つたのですが、流石ミライ様です。私ごときの浅慮の常に先を行く姿勢、不肖タルナダ、感服です！」

お前はいつたい俺をどうしたいんだ？ と朝から頭の痛いミライだった。

「ついでですので、馬鹿女も起こしてきますからミライ様はお先に」嫌々といった面持ちでそう告げるタルナダの言葉に甘え、きつちりノックして返事が来ないのを確認してからずかずかとフェイトの部屋へと入っていく微妙に几帳面な彼女に苦笑を浮かべつつ、ミライは一人、階段を下りていく。

「やあ、おはようミライさん。昨日はよく眠れたかい？」

と、食堂に顔を出したミライを出迎えたのは色とりどりのサラダの

乗った皿を運んでいるバスタ。

「ええ、ぐっすりと」とそんなバスタにミライもゆるりと笑顔を返しつつ皿を受け取りテーブルにつく。

「悪いね」といって笑顔を一つ残して厨房に戻っていくバスタ。

「おはようミライくん。飲み物はどうする？」

続いて入れ替わりにやって来たエプロン姿のマルアが、冷たいおしぼりをミライに手渡ししながら笑みを見せる。

「おはようございますマルアさん。じゃあ昨日と同じ果実水で」

「わかったわ。ちょっとだけ待っててね」と言って厨房に戻っていくマルアの背を眺めつつ（若妻の魅力とおっぱいの相乗効果について頭の片隅で議論しながら）、色とりどりの朝食を眺めてミライは感嘆のため息を漏らした。

「おっすミライ！ 今日もいい冒険日和だぜ」

マルアの持つてきた果実水を口にしつつ、すぐに降りてくるだろうフェイトたちを待つことにしたミライは、背にかけられた声に振り返る。

「おはようヘレーネ。その格好は？」

短パンにノースリーブのシャツを着たヘレーネがタオル片手にミライの方へと近付いてくる。

「おう、朝鍛錬に行ってきたんだぜ！ 街の外周を三周してきたんだ！」

「はあー、元気だねえー」

びしりと指を三本立ててニカツと笑みを浮かべるヘレーネの姿は爽やかな一言に尽きた。

——と。ここで突然だが。

冒険者や迷宮やらモンスターやら、ファンタジーたちが闊歩しているこの世界だが、意外なことに文明レベルではそれなりに発達しているように感じる。

戦国時代と言いながら色々混沌としていた前の世界と比べても生活レベルでいえばこちらの方が上だろう。

しかしそんな世界において、なぜだか『下着』というアイテムは妙に偏っているように見受ける。

例えばアリゼルはサラシのようなものを巻いているだけ。

フリアリーエは未確認だが、ロゼッタやフェイトに至っては感触的に恐らくつけてすらいない。

そしてヘレーネの場合はスポーツブラのようなものを胸元に着けているようだ。普通の布とは違うのだろう。歩く振動で揺れるということもなく一定の形を保ったままなところから、おそらく何か頑丈な素材を使っているのだろう。冒険者という激しく動き回る職業柄、邪魔になっってしまうための用途と、あとは防御力の向上効果などだろうか（この点に関してはアリゼルのサラシも同じような効果があると、連日の観察から読み取っていた）。しかし、そうとはいえないである。

汗でシャツが張り付いているせいでモロに体のラインが出ており、そのせいで、初見のミライですらそれらの情報を簡単に見て取れたりするくらいにいろいろ露わになっていたりするのだが、恥ずかしくないのだろうかこのお嬢さんは？

とまれ、こうして例を上げれば分かる通り、まともな下着を着けているだろう女性と未だ出会ってすらいらない。ただ、羞恥心がないわけではなく、アリゼルのように見られれば恥ずかしがるのだ。だからこそ余計に、彼女たちのそれらの部分に関する考えは随分と偏っているように感じる。

唯一タルナダのエロ装備がブラジャーに見えなくもないというのはいったいどんな皮肉なのだろうか。
まあ冒険者の女性たちだけに見られる傾向なのかもしれないが。

つまりこんな戯言を並べ立てて何がしたいのかというところ――

「ふむ」

急に黙り込み腕を組んだミライが真剣な眼差しをヘレーネへと向ける。

「な、なんだよミライ？」

妙なプレッシャーを放つ視線を浴びて若干どもるヘレーネに、ミライは何かに礼をするかのようにパンパンと拍手を二つ。

「――」
「じつつあんです」

と感嘆の吐息と共に呟き手を合わせる。

そんなミライの様子にヘレーネはただただ頭に疑問符を浮かべた。

「なに、気にするなヘレーネ。少しばかりお前の元気を分けてもらっただけだ」

ぐつと親指を立てて見せたミライはへらりと笑顔を浮かべ、しれっとそんなことをのたまう。

「？ えつと、そうなのか？ うーん？ うん。それじゃあ仕方ないぜ！」

まだまだ疑うことを知らない少女は、そんな言葉を真に受けて元気にピースして見せる。

とそれと同時。

「————あらあら、いい匂いねえ」

食堂の入り口から聞こえた声に、ミライとヘレーネは同時に振り返る。

聞き覚えのある声。

予想と違わずそこにはフェイトがいた。

それも脇にぐつたりしたタルナダを抱えたフェイトが。

人ひとりを抱えた彼女は、昨日と変わらぬおっとり笑顔を浮かべてミライの隣へとやってくる。

「どうしたんですタルナダ^{それ}？」

「私寝起き悪いのよ」

と、笑顔でそれだけ言ったフェイトは、慌てて駆け寄るヘレーネにタルナダを預けてミライの隣に腰掛ける。

耳をすませば微かに聞こえてくる「私の初めて」とか「女だからノーカン」という切ない響きの呟き。「何があっただんだタルナダー！」と虚ろな瞳をしたタルナダの肩をゆするヘレーネ。

答えを求めて隣を見れば妙に肌を艶々させたフェイトが。

「そんなに見つめられると照れるわあ」

うふふ、と頬を染めるフェイトを見つつ、この人を朝起こしにいくのだけは絶対に止めておこうと心に誓うミライだった。

タルナダに少々不幸があつたもののしっかり朝食をいただいたミライは、ゲイルの言葉通りフェイトを伴いギルドへと向かうことに。

そう大した距離でもない上に何度も同じ道を案内させるのもめんどもとい可哀想なのでタルナダとは別行動である。

ギルドに入つたミライは、ぐるとあたりを見回しカウンターに知った顔を見つけてそちらへと足を向ける。

「どうもエクレアさん」

昨日と変わらず伶俐な美貌を携えたヒマラヤ山脈の持ち主、エクレア・エクレール女史がミライに視線を合わせる。

「——お待ちしております、ミライさま。それに、そちらの方がフェイトさまでよろしかったでしょうか？」

様々な思いを込めつつ、ミライに向けてきつちりと頭を下げたエクレアは、横に視線をずらしてフェイトへと向ける。

報告では変異種を単独で撃破したという女性。

「よろしくね」

柔らかに微笑むその姿からは想像すら出来ないが、負傷すらせずに変異種を倒しているというのだから、ミライと同様、見た目通りの実力ではないのだろう。

「よろしくお願ひしますフェイトさま。私はエクレア・エクレールと申します」

「エクレアちゃんって言うのね、うふふ、いい名前ね」

「ちゃん付け……」

ほわほわと笑みを浮かべるフェイトの言葉にピクリと眉を揺らすエクレア。

二十七にもなっちゃん付けで呼ばれるとは、と。

表情には出ないものの、内心ではかなり喜んでいたのだった。

「エクレアさん？」

フェイトとお見合いしたまま固まるエクレアの姿に控え目に声をかけるミライ。

「っ。……ごほん、申し訳ございません。それでは別室に案内させていただきます」

びくりと肩を揺らして、何でもなかったかのように振る舞いつつ僅かに頬をピンク色に染めるクール美人の横顔に萌えるミライ。
アリゼルと別れてからは久しく感じてなかった心の癒やし分をこそとばかりにしっかり補充するのだった。

その後は驚くほどすんなりと、二人分の受験資格証に加えて討伐達成による成功報酬をいただいたミライ。

ちなみに、この世界での通貨の単位はジェニーである。

金板は百万ジェニー、銀板は十万ジェニー、銅板は千ジェニー。金貨が百、銀貨が十、銅貨が一ジェニーという単位で取り引きされている。

また、金銀銅と頭につけられているが、あくまで呼び名であるため、実際は全て同じ金属をそれぞれの形に加工した上で、ギルドの秘匿魔術を用いて複製を防止しているのである。

一ジェニーはおよそ十円程度の価値であり、この世界での一般的な労働者の平均年収はおよそ十万ジェニー。基本的に十万ジェニーあれば生活していだけなら困ることはないのだという。

また、冒険者のDランクでの平均的な年収はおよそ五十万ジェニーと言われている。個人の成果に依るところが多いのでばらつきはあるものの、比例するように危険も多い分、一般的な職業より高額な収入である。

そして今回ミライが貰った報酬は銀板十枚の百万ジェニー、およそ一千万円相当。

しかし、これでも本来出されるはずだった依頼報酬の三分の一しかなかったりする。

然もありなん。

元々Cランク相当のパーティーに対して出すはずの依頼だったのだ。達成金が高額であるのも当然のことであった。

むしろ単独で達成したミライの方が例外なのである。

ただ、変異種を倒したのはフェイトなので、報酬は折半にしようというミライの提案から、最終的に三：二で落ち着いたのだった。

そんなこんなで、「今後もよろしくお願いします」と頭を下げてくるエクレアに礼を言ってから二人はギルドを出て宿屋へと帰ることに。

カウンターに座って喋っていたタルナダとヘレーネは帰ってきた二人に気づき顔を向ける。

「あつ、ミライ様お帰りなさい！」
「お帰りだぜ」

カウンターの向こうから慌ててやってくる忠犬タルナダと、座ったままミライ達へと手を振るヘレーネ。

「おー、ただいま」

「あらあら、私には言ってくれないのタルナダちゃん？」
「うるさいわねっ、あんたは敵なのよ、敵っ！」

「ミライ君、私タルナダちゃんに嫌われちゃったのかしらあ？」

悲しそうに頬に手を当てつつ、ミライへとしなだれかかるフェイト。
二の腕に感じる柔い感触が素晴らしい。

「まあ少なくとも好かれるようなことはしてないですもんねーフェイトさん」

「あらあら」

「こらー！ ミライ様にくつつくなこの変態め！！」

怒れるタルナダがフェイトに吠える。

その瞬間。

「「お前が言うな」」

ミライとヘレーネの心がひとつになった。

私寝起きは悪い方なんですと彼女が微笑んだ（後書き）

そんなことなかったぜ！

燃え上がれ、少女（前書き）

ついにというか。ようやくというか。30話までやってきました。寄り道し過ぎて大変なことになってますが、まあ多めに見てやってください。

燃え上がれ、少女

「おお、すげえな」

「だろー、なんだってうちの自慢の場所なんだぜ！」

「あんたの家宿屋でしょうが。もっと目に見える場所売りにしなさいよね」

「あらあら、すごいねえ今時の宿屋さんって」

「こんな色物宿屋と一緒にされたら他の宿屋さんもたまったもんじやないに決まってるでしょ馬鹿女」

タルナダは呆れたように溜め息を零し、フェイトとヘレーネに向けてじとりとした視線を向けている。

「いやはや、しかし、趣味でここまでするとは、なんというか天晴れだねー」

そんなタルナダの隣に並んだミライがゆるりと笑みを浮かべた。

直径およそ四十メートル、高さおよそ五メートルほどの円形の空間。地面には砂が敷き詰められており、天井には発光の効果を持つ魔術が刻まれているため、朝も夜も関係なくこの場所は明るいのだと。

——この場所。宿屋『ナックルパンチ』の食堂の奥、スタイン一家のプライベートルームの一角に何故かあった両開きの荘厳な扉を抜け、階段を降りた先に彼ら四人はいた。

あれを思い出すな。グラップラーマッキー？ とかいう漫画に出てきた地下闘技場。

と、そんなうる覚えな記憶を辿りつつ、ミライは楽しげに笑みを浮かべた。

時間を少し遡る。

ミライとフェイトがギルドから帰ってきてしばらく。

「さて、タルナダの自分を省みない恥辱にまみれた発言は置いておくとして」

突然投げかけられた暴言に、ぱつと満面の笑みを浮かべ勢いよく見上げてくるタルナダの頭を鬱陶しそうに押さえつけたミライは、グーと盛大に腹の虫を鳴らしているフェイトに視線を向ける。

空腹に耐えるように、自らの姿態をきつく抱きしめ妖艶に身悶えるフェイト。長く艶やかな髪が淫らにその豊満な肉体に絡み付き、いつも浮かべている穏やかな笑みはなりを潜めた女の貌をうかべ、頬を染め熱い吐息を零す。

男女問わず魅了してしまうような危うい空気を、今の（空腹な）フェイトは放っていた。

いやさ、眼福は眼福なんだけど、なぜ空腹でここまで変われるんだこの人？ と首を傾げるミライを余所に、視線を彷徨わせつつヘレ―ネがぼそりと呟いた。

「……フェイト。少しは女子として恥ずかしがった方がいいと思
ぜ」

「あらあら。うふふ照れてるの？　ヘレーネちゃんかわいい。……
食べちゃいたいくらい」

それにあてられて顔を赤くするヘレーネを見てくすくすと笑みを零
すフェイト。

——そして、ぼそりと呟かれた言葉は幸いミライ以外に届
くことはなかったが、そのときのフェイトが冗談でも何でもなし、
確かに狩る者の目をしていたことを、彼は後に神妙な気持ちと共に
思い出すことになるのだが、今はまだ知る由もなく。

「取り敢えずご飯にするかー」

ただただ呑気に言葉を口にするのだった。

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさまでした」「」

二人ずつ向かい合って座った彼らが、ミライの真似をしつつ食後
の言葉を口にする。

元々この世界にはそのような習慣はなく、種族によつては食前にそ
れぞれの神々に祈ることもあるくらいとかで、それを聞いたミラ
イが前日の夕食時に、（彼女たちは特に信奉する神はいないとい
うので）教え込んだのだった。

目に見えない神などではなく、自らの生きる糧となる食材への感謝の気持ちを込めた言葉だというミライの説明を彼女たちも気に入ったのか、こうして彼ら全員が同じように手を合わせているのだった。閑話休題。

「はふう、もううごけないわあ」

机にだらりと体を乗せて幸せそうに微笑むフェイトを見て苦笑する三人。

「あんたはいちいち大げさな奴ね」

とタルナダがわざとらしく鼻を鳴らせば、

「フェイトは感情に素直すぎるぜ」

とヘレーネが相槌を返す。

「うふふ。それがいい女の秘訣なのよ」ヘレーネちゃん

「へ？ そうなのか？」

「こらこら信じるなよヘレーネ。フェイトさんはただ欲望に忠実なだけだから」

「ふん、ミライ様のおっしゃる通りよ。女は自分を厳しく律してこそ光るのよ」

「とタルナダがおっしゃるように、良い子はこの二人の真似だけではないように」

わかったかヘレーネ？ と真面目な顔で告げるミライに、ヘレーネも妙に重々しく頷き返したのだった。

と、そんな風にだらだらと過ごすことしばらく。

「さて、いい具合に腹もこなれてきたし、そろそろやるかタルナダ？」

ぐいっと体を伸ばしつつ、ミライがタルナダに顔を向けて問いかける。

「はい？ えっと、やるって一体はあつ！ まさかそんな、こんな日の高い時間からそんなことをし『ゴスン』へぶ！」

「違う。稽古だ稽古」

「あつ！ 覚えていて下さったのですねミライ様！」

叩かれた頭を撫でながらも、嬉しいですと全身で表現するタルナダに苦笑するミライ。

「ま、約束だしな」

「あ、えっと、えっとっ、どうしましょう！ まずはどうしましょう！ どうすればいいんでしょう！…！」

「落ち着け」

鬱陶しいくらいにテンパっているタルナダの頭に割と本気でチョップを喰らわせる。

「取り敢えず、どこでやるかだけど」

足下で頭を押さえてうずくまるタルナダには我関せず、腕を組んで考えるミライ。

「お。じゃあうち使えばいいぜミライ！」

と、そんなミライの考えを遮るようにヘレーネが手を上げて立ち上がる。

「うち？」

「そうだぜ！」

——そして話は冒頭にもどる。

「痛いとか気持ちいいを通り越した新感覚だったわ。ふう」と意味の分からないことを呟くタルナダを引き連れ、ミライたちがヘレーネに案内されたのは地下に築かれた訓練場だった。

バスタとマルアが宿屋を始めるにあたってこれだけは譲れないということで宿を建てるより金をかけて造ったのだとか。

元冒険者である二人は言わずもがな、ヘレーネも定期的に戦い方を教えてもらう場所にここを利用していた。

「学園に行けば闘技場もあるんだけど生徒以外は基本的に入れないんだぜ」

「私達のパーティーが訓練するときは大体ここを使っているんですよ。学園の闘技場と違って面倒な手続きもなく他に人もいないので

広々と使えますから」

と言う話を耳にしつつ、ミライは籠手を身につける。
グーパーと感触を確かめ、ひとつ呼気を吐き出す。

「さーて、準備オツケー。まずは誰から行く？」

パシンと掌を拳で打ちつけ、準備万端と振り向いたミライの視線が、
真っ直ぐ自分を見つめてくるタルナダの視線とぶつかる。

ミライは、愉快だとばかりに口元をにやりと歪めた。

「なるほど。聞くまでもなかったな。お前からか、タルナダ？」

「はい。一番手を譲る気はありません」

ぐつと背筋を伸ばしたタルナダの、強い意思のこもった眼差しがミ
ライだけを捕らえる。

「今の私の全てを見てください、ミライ様」

訓練場の真ん中で、十メートルほどの距離を置いて向かい合って
立つミライとタルナダ。

ミライはもちろん無手。一方のタルナダは腰に収めた二振りのシヨ
ートソードをゆっくりと抜き放つ。

腕を組んでそれをじっと見守るミライ。

「へえ。武器はそれでいいのか？」

昨晚自分が壊した剣と同系統の武器。刀身が五十センチほどの細身の剣を下段に構えるタルナダ。

自分を過去に縛り付けたその象徴を再び手にして。

変わることが出来たといったこの少女が何を見出したのか？

「はい。自分の進んできた道は、否定しないことにしました。この力も私の一部だと肯定できるようになったのも。それもミライ様が教えてくれたことです」

「そんな大層なことしたつもりはないよ。あの戦いでそれに気づけたって言うんなら、それはお前自身の成果だ。俺みたいながきに他人を導くような事は出来んからな」

「そんなことっ！」

「いい、いい。問答は終わりにしよう。語りたいことがあるなら拳で、ってな」

そう言つて、ミライが組んでいた腕を離し、ダラリと横に垂らす。それと同時に。訓練場の空気そのものがひっくり返るかのような、そんな錯覚を覚えるほどの濃密な戦いの気配が満ちる。

「っ」

一度体験したはずのその気配に、息を飲み体を震わすタルナダ。異常なのは、この濃密な気配の中、目の前に立っているミライの気配だけが意識していなければ見つけれないほど希薄だということ。

ぐつと歯を噛みしめ、震える体に渴を入れる。

この人に、無様な姿を見せるわけにはいかない。

そんなものは、昨夜の一度きりで十分。

二度も見せるなど、女が廃る。

脳裏に描くのは『加速』の魔法図。

太腿の側面に二つ、臀部に一つ、彼女の魔力光である黄色の魔法円が浮かびあがる。

——アリゼルと同じ世界を駆けるために得た力は、間違いなく私の一部となり。

さらに『雷装』の魔法図を展開。
手の甲に魔法円が浮かびあがり、魔の法理によって体内魔力を雷の鎧へと変える。

——アリゼルになりたくて、彼女の力を欲して得たそれもまた、私の糧となっていた。

私が戦うための力は、彼と出会う前から既にここにあったのだ。
そんなことを、彼女はいまさらのように理解して、そして歓喜した。

加速された知覚が、静かに笑うミライの表情を捉える。

「——行くぞ」

小さく呟かれたその言葉が、タルナダの耳に届くと同時に、ミライの姿が掻き消えた。

驚嘆の声が溢れそうになるのをこらえ。

刹那。

背後から感じる突き刺すような殺気に、タルナダは見栄も外聞もなく、転がるように前へと身を投げ出す。

そのままの勢いで素早く立ち上がり、足を振りぬいた形のまま片足で立つミライへと向き直った。

私は今、蹴られたのか。

と、理解し。

背を掠めるように通り過ぎた暴力の余韻が、その威力の一端を彼女へと知らしめる。

まともに当たっていればそれだけで終わっていたであろうことを予感し、彼女は知らず冷たい汗で背中を濡らす。

「ほお。確かに、違うな。前と一緒になら今ので終わってたんだけど」

ミライの感心したような呟きが漏れ聞こえた。

ゆっくりと足を下ろし、無形の構え。

恐ろしいほどに隙だらけで、しかし全く隙の見出せない矛盾だらけの姿。

タルナダは、それに呑み込まれてしまわないように意識をさらに研ぎ澄まさせる。

そうだ。まだ、まだ終わるわけにはいかない。何も見せていないのに。

大きく息を吐き出し、唇を強く引き結ぶ。

『雷装』の効果限定し、広域から一極集中へ。
腕全体を覆っていた雷が収束するように手首から先、剣を覆うように絡みつく。

一回り巨大に膨らんだ金色のうねりを抱え、今度はタルナダから仕掛けた。

姿勢を低くしたまま、最速でミライまでの距離を零にする。

棒立ちのままのミライへと剣を走らせる。

斜め下へ振り下ろす斬撃は、しかし軽く首を傾げるだけで避けられ、反対の剣で胴を薙ぐように切り上げた一撃も、箆手で弾かれ、纏った雷が弾ける音が二人の間で鳴り響く。

三度、刺突を繰り返そうと剣を引き絞り。

悪寒が背筋を駆け廻る。

ミライが動いた。

左足を軸にして、回転。右の踵が臍腑を抉らんと弧を描く。

加速した視界でも捉えきることのできない一撃を、勘を頼りに紙一重で避ける。

腹部を掠める蹴撃の余波だけで、内蔵がかき乱シェイクされるのを、歯が碎けるほどに噛みしめて堪え。

そして、おもむろに剣を握ったままの拳をミライへ。

ほ？ と背中越しに疑問を浮かべるミライに向けて「雷槍」と、一言つぶやく。

その瞬間、ミライを包み込むかのように金色の奔流が溢れ出た。

『雷槍』。身を包みこむことで攻防一体の鎧として働く魔法の雷に指向性を持たせ、放出することで攻撃魔法へと変化させた文字通り雷の槍である。

【攻性】魔法と違い【属性】魔法の放出にあたるこの魔法。

【攻性】のような、膨大な魔力を必要としない数少ない攻撃魔法のひとつであるが、それでも以前の、過去の記憶に固執するだけのタルナダであつたなら思いつきもしない手札であつた。

とはいえ、【属性】の放出型にあたる魔法は、『雷装』などの継続型と比べても総合的な威力自体に大差はない。そのため、本来なら『雷槍』単体で発動することも可能だが、威力の底上げのために『雷装』から派生させた発動のさせ方をしたタルナダ。

しかし、タルナダの魔力量ではそれでも一・五にする程度の効果しかなく。

——だから。

雷光の中から飛び出してきたミライの姿は想定通りで。

地を這うように駆けるミライから放たれた左の拳を剣の柄で受け止め、抵抗せずに攻撃の威力を利用して後ろへ飛ぶ。^{ジャブ}

追いつがるように続けて放たれた右の拳^{フック}を態勢を崩しながら左にかわし、それと同時に反撃。不安定な態勢から放たれた切り上げ。

ミライはその一撃を体をずらして避ける。しまった、と思う暇もなく、カウンターで放たれた掌底がタルナダの身体を捉えた。

ゴバン！！

と鉄を引き裂いたような轟音が鳴り響き、吹き飛ぶタルナダ。かろうじて間に合った『雷壁』のおかげで、致命打を避けることだ

けは出来たが、『雷壁』と同時に咄嗟に防御に回した左腕に奔る痺れるような鈍痛に剣を取りこぼす。

『雷槍』と同じく放出型の魔法である『雷壁』は、防御力により特化した魔法ではあるものの。

ミライの一撃を完璧に防ぐには些か以上に修練不足だった。今まで『雷装』と『加速』に頑なに拘ってきた弊害。多少は軽減したものの、紙を破くように容易く抜かれた上に軽くないダメージまで与えられてしまった。

一方のミライは、僅かに煙を吐き出す箆手だけが、確かに『雷槍』が当たっていたことをうかがわせるのみ。

オーガくらいなら打ち抜けるだけの威力を込めたのだが――
――

「悪いな。ちょっとばかり電撃系の攻撃は喰らい慣れてるんだ。だから生憎とこの程度なら効かないんだよ」

そんな出鱈目な言葉を漏らすミライ。

おそらく大したダメージは与えられないだろうとは思ってはいても、まさか傷一つ与えられないとはと、感動を覚えるタルナダ。

ならば。

最初に宣言した通り、今出せる全力を見せる。

意識を内面に。喚起するは炎魔の力。

ユラリと、タルナダの周囲の景色が歪み。

体の内側から溢れだした炎魔の炎が、世界に溢れるマナを燃焼し燃え上がる。

全身を包み込み吹き出す炎がタルナダの髪を揺らし、右手に握りしめた剣に炎が集束し、炎剣となす。

轟々と赤く輝くそれを腰ために構え、

「これが、今の私の全てです、ミライ様」

解き放つ。

横薙ぎに振るわれた炎剣は、炎の奔流となってミライを呑み込む。訓練場の半分以上を埋め尽くしてなお膨れ上がるように広がる炎。

——ギフト【炎魔の系譜】。

それは、あらゆるものを燃やしつくす可能性を秘めし獄炎。顕現せしめたのは、今はまだ大きすぎる力の断片程度。

故に、タルナダは止まらない。

その程度が、自分の底ではないといわんばかりに。

ギフトの使用による疲労と魔力の使用過多で朦朧とする意識を奮い立たせ、脳裏に魔法図を描き出す。同時に、右手に持った剣を地面に突き刺した。

描き出した魔法図の効果をさらに限定、最速で最適化されたそれは魔法円となりタルナダの右手の甲に一つ、掌にひとつ、浮かび上がり紫電を走らせる。

刹那、炎の中に湧き上がる絶対的な存在感。

空気が爆ぜるような轟音と共に、灼熱の魔炎を剛拳が食い破る。

そして、瞬きよりもさらに速く、目前へとゆらりと現れたミライと、

視線が交差する。

瞬間。

タルナダは右手の魔法を解き放つ。

一条の光の渦がジグザグに暴れ回るような軌道を描き、ミライを射抜いた。

赤と金で描かれたその光は、いくなれば炎雷。

炎魔の焰を纏った雷が、ミライの腹部で弾ける。

耳をつんざくような轟音が鳴り響く。

「はっ、——はっ」

荒く呼吸を繰り返し、暴れる心臓の鼓動に身をゆだねる。

視線は前へ。粉塵の中から姿を現したミライに釘付けにされる。

「これが、ふっ、は。はっ、私の、全力です」

汗にまみれた汚れた顔で、自然、笑みを浮かべる。

一瞬驚いたようにタルナダの顔を見つめたミライは、破顔する。

「ああ、大したもんだ。お前は本当に、大した奴だよタルナダ」

その笑みを見て、体から力が一気に抜ける。

私が彼から得た物を。彼への心からの感謝を。私が彼にささげるこの思いを。

伝えることができたのかは、分からないけれど。

今は少しだけ、休むとしよう。

「……………は？ え？」

一瞬の攻防。轟く雷鳴。
そして視界を埋め尽くす魔炎。

「なあっ！？」

「あらまあ。タルナダちゃんったら凄いのね」
「いやいや。え？ え？ 何が」

吹き飛ぶ灼熱。刹那の攻防。再びの轟音。

「うわっ！？ え？」

舞い散る粉塵の中から腹を押さえて姿を現すミライ。

「は？ 無傷？」

二人の間でかわされる言葉。笑顔を浮かべたタルナダは意識を失い、ミライがそれを受け止めた。

「あらあら。ミライ君はやっぱり凄かったのね」。私もちよつと勝

てそうにないわ」

「……何がどうなったのか全然理解できないんだぜ」

この間、僅か二分半。

燃え上がれ、少女（後書き）

魔法に関してちょいちょい説明が出てきましたが、ここでは適当に流しといてください。今後説明が入る予定なんです。

さて、今回はミライ対タルナダでした。

次の予定としてはもう一戦書きたいところですけど、やる気次第では省くかも。

最後に。やっぱり戦闘シーンは難しいとです。

キャラクター紹介（前書き）

30話時点でのキャラ紹介。

勢いで書いたため、いろいろメタな内容となっておりますので目を通す際はご注意ください。

キャラクター紹介

●多田満頼^{ミナモト}（18）

【種族】人類（笑）

【身長】175センチ

【体重】75キロ

【容姿】黒髪黒目。赤い紋様の入った黒い籠手に足鎧を装備。脱いだらマッチョ。

【プロフィール】

本作の主人公。元は日本の普通の中学生だったが、戦国時代と見せかけて人外が跳梁跋扈する世界で五年間揉みにもまれる内に人外の仲間入りを果たした。むしろたった五年地獄を見た程度で奴らの仲間入りを果たすことが出来た逸般人。

おっぱいに並々ならぬ関心をもつに至ったのは、青春時代を暑苦しいやつらに囲まれて過ごしてきたことに端を発しているのかもしれない。

またミライ基準で『大切なもの』認定した人物には非常に過保護になる。これは過去に一度全て失っていることに起因しており、本人もまたそれを自覚している。

基本的には楽天家だが、割と根暗な面もある複雑なお年頃。

●アリゼル（19）

【種族】鬼族と魔人族のハーフ

【身長】163センチ

【体重】58キロ

【容姿】赤髪紅眼。ショートヘア。やや釣り目の美人。和服装備に二刀流。

【プロフィール】

運悪くミライを保護してしまった心も体も乙女なジュウキュウサイ。世界に三人しかいないSランクの一人。強くなりすぎたせいで友達がフリーアリーエしかいなかったドジっこちゃん。むしろフリーアリーエは姉的な立ち位置なので友達は皆無といっても過言ではないかもしれない。対人関係が希薄なため、一度線の内側に入った人物には酷く甘い。

ミライの癒やし成分そのいち。

●ロゼッタ（18）

【種族】 エルフ

【身長】 174センチ

【体重】 64キロ

【容姿】 金髪碧眼。背中あたりまで伸ばしたストレート。

【プロフィール】

作者の思いつきにより定番の金髪エルフにダークエルフ成分に姉御肌設定まで加えられたのに、後から出てきたモブキャラの陰に埋もれて読者にも作者にも忘れられかけている不幸な人物。

ミライに一方的にやられたのに心を開いてるあたりマゾの資質があったかもしれないが、それもすでにぼつと出てきたモブキャラがかっさらってしまったので、キャラ付けには弱いと思われる。

しかし意外に純情な面もあるので、今後の活躍に期待したいと思う。

●タルナダ（18）

【種族】 魔族

【身長】 168センチ

【体重】 59キロ

【容姿】 恥女。金髪ツインテール。残念な美少女。

【プロフィール】

みんな大好き変態少女。タルナダの活躍にはある意味作者が一番驚いているのはここだけの話。

過去のトラウマに縛られつつも力を求めすぎたせいで同時に自らの可能性すら縛り付けていた少女。過去の象徴たるアリゼルと共に現れたミライという圧倒的強者により全てを否定されると共に叩きのめされるも、土壇場で真の力に目覚め、過去の楔を自らの力で断ち切った。

ついでに目覚めさせてはいけない扉までがつつり開いてしまった。

実は意外に優秀な人物で、ミライやアリゼルが関わらなければ落ち着いた言動を見せることも。

救いのないくらいの変態ではあるが、二度の戦いを通じてミライからはこっそり身内認定されていたり。

現在はアリゼル教の信者からミライの奴隷にジョブチェンジを遂げた。

●フェイト(?)

【種族】 不明

【身長】 161センチ

【体重】 50キロ

【容姿】 黒髪赤目。腰まで伸ばしたストレート。前髪はぱつん。

【プロフィール】

ミライが拾ってきた見た目大和撫子。常に浮かべるふわりとした頬笑みとおっとりとした言葉遣いに騙されたが最後、骨までしゃぶりつくされること間違いなしな残念な女。

かなり欲望に忠実な性格をしているため、ミライの周りにいる人物が被害を被ることも。

なぜこんなキャラになったのかは作者にも分からない。設定段階では見た目も中身も大和撫子な天然系萌え萌えキャラにするつもりだったはずが……。

ここから下はサブキャラにつき説明が適当になりけり。注意されたし。

●フリーエ（25）

鬼族。関西弁。アリゼル至上主義でアリゼルの敵は殲滅対象。基本的名におちゃらけた性格。二つ名は『一つ目殺し（アンチ・サイクロプス）』。

作者の書く作品には必ずあると噂の関西弁。ぶっちゃけ一番台詞かきやすい。

色々裏で画策しているように見せかけて実は、……おっと、ここから先は本編で確認してくれよな。

●ファイ・キシリット（19）

青髪。人間族。本編では一度もフルネームを語る機会がなかったタルナダのパーティーメンバー。似非敬語。酒に弱い。ミライとは二度と酒を飲まないと誓っている。

●キュオル（23）

薄い赤の髪。獣耳娘。タルナダのパーティーメンバーその2。ミライにトラウマを抱く。割と常識人。タルナダのことは友達と思っているが、あまりの変態っぷりに最近付き合い方を考え直そうかと真剣に考えているとかいないとか。あとミライのせいで気苦労も増えたとか。

● ラーデウ（29）

ドワーフの若者。逞しい顎髭が魅力。タルナダのパーティーメンバーその3。双斧使い。ドワーフとしては若いが無せん老け顔。

● ヘレーネ・スタイン（19）

人間族。青色の短髪、丸くて大きな目と太い眉が特徴的な可愛らしい容貌（タルナダ談）。

タルナダのパーティーメンバーその4。まだまだ純情な女の子。

● バスタ・マルア夫妻

ヘレーネの両親。元冒険者。趣味に生きる人たち。宿屋『ナツクルパンチ』を趣味で経営している。

● ライカ・ラーゼフォン（4 ■）

ギルド長。女王様。元Sランク。笑うと童女のように可愛いらしいとか。名前と容姿の元ネタはホテル・モスクワのあの入。

『ライカたんファンクラブ』なる非公式の組織が作られるほどの隠れた人気者。ファンクラブの創設者はギルドの女性職員という噂も。

● ロイド

ライカの手下？

鬼人族。無口なほう。

● ゲイル

ライカの手下？

獣人族。ライカ見守り隊。よくしゃべるほう。

● エクレア・エクレール（27）

本作きつての巨乳との噂も。

眼鏡でクール系。表情筋が死んでいるのが悩み。

ギルドの男性職員及び冒険者に大人気だが本人は知らない。

男に尽くすタイプの隠れ性格美人。主人公のツボを抑えた萌え要素。恋愛経験はそれなり。どっかのなんちゃって大和撫子とは違い、本物の大和撫子タイプ。

もしエクレア嬢がヒロイン枠におさまっていた場合、どのような波乱が巻き起こっていたかは作者ですら恐怖を禁じえない。

● 船長(?)

口元に蓄えた立派な白ひげをもった巨漢の老人。

ミライに『やばいにおいがする』と言わせしめた人物。

かつて世界を股にかけた大海賊団を率いていたという噂もあるが、彼の老人がその真実を語る日が来るかは定かではない。

● 船医のギムー(22)

精悍な顔つきをした若者。

15歳のときに、一つ下の妹を病気で失くす。当時は不治の病とされていた病気でサウスフェリア大陸きつての名医といわれた人物ですら余命数年引きのばすことしかできなかった。

自らの無力さに絶望し、それをきっかけに医療の道を志し、5年後、『机の上で学べることは全て学んだ。だから次は外へ行く』と告げ、ただ黙して静かに見送る最大の理解者たる恋人に背を向け世界へと旅出った。

その後、ノースフェリア大陸でとある事件をきっかけに船長と初めての邂逅を果たす。

『あの人と出会うことがなければ、今の俺はいなかっただろう』と後年彼は著書の中でそう語っている。

その後も、船で様々な事件を経験し、時に涙し、時に絶望し、それでも折れることなく突き進んだ彼は大きく成長を果たす。

人生に転機があったとすれば、一度目は妹との死別。二度目はあの

時あの騒動に巻き込まれたことだったよと彼は語る。

船に乗って10年後、船長と別れを告げて故郷に帰った彼は、そこで昔別れた恋人が妹と同じ病にかかっていると知ったのだ。

しかし、彼は喜んだ。

そう、自分がここにいる意味は、きっとこのためだったのだと。全
ては彼女を救うためだったのだと。

そして、それを証明するかのように。

世界で学んだ全ての知識と技術を用い、彼は見事に恋人を救って
みせた。

その後、15年間自分を待ち続けていたという恋人と見事ゴール
イン。

二人が子供に恵まれることはなかったものの、夫の仕事を妻が支
えることで二人はより多くの命を救い続けた。

そして彼らの死後。二人を葬るために、世界中から彼らを父と母と
して慕うものたちが集まり、花をたむけたのだった。

一輪の花を携えたとある冒険者は墓碑に向かってこう語ったという。

『彼らにこそ、この名がふさわしい。安らかに眠ってくれ、最上位
ジャック
の医者たち』と。

その翼は希望を踏み越え、その顎が希望を噛み砕いた

「あらあら、おつかれさまミライ君。最後の大丈夫だった？」

「いやあ、実は結構効きましたよ。油断したつもりはなかったんですけど、タルナダには一本取られちゃいましたよ」

「あらあら」

体力と精神力の限界から気絶したタルナダを横抱きにし、二人の元に戻ってきたミライはフェイトに苦笑してみせる。

「それはともかく、待たせたなヘレーネ。早速戦^やるか？」

「うへっ！ わ、私か？ いやー、ミライもタルナダとの連戦はきついだろっし、しょうがないから遠慮しとくぜ！」

自分だったら軽く蒸発出来そうなタルナダの攻撃（魔法円が確認できなかったので、おそらくはギフトだと思われる炎）を、それを殴って吹き飛ばすような出鱈目な男と戦うにはいささか覚悟やら情熱やらMっ気が足りないヘレーネは、ひきつった笑みを浮かべて言い訳を並び立てる。

とはいえ、ヘレーネを軟弱者と攻めたててやるのは酷な話だろう。なんせタルナダは学園でも上位の実力者。過去、そのようなものたちは卒業したのち、大半の者が何らかの成功を収めており、中にはアリゼルやフリーアリーエのような歴史に名を残すような高位のランクに到達するようなものも出ている。つまり学園で上から数えて十位以内という言葉の重みは、冒険者を志す者たちにとってはそれだけの価値があるのだ。

そして、アリゼルもミライに語ったことがあるように、冒険者はイ

コール戦闘者ではない、ということ。もちろん強敵と戦うことを至上の喜びとするような戦闘狂も中には存在するが、それも一握りしかない。大体の話、モンスターとヒトでは、種としての強靱さは圧倒的にモンスターの方が上にあるこの世界。Sランクと呼ばれる上位存在ですら倒すことが困難な強敵が跋扈する迷宮に潜るにあたって、冒険者に必要なものは強さだけではなく、生き残るための臆病さも必要とされるのだから。

そして、良くも悪くもヘレーネは普通の冒険者（見習い）であった。総合的に自分を上回るタルナダをも軽く一蹴するような未知数の実力を保持する男。

勝てる見込みがなくても得るものがあるなら、ヘレーネとて逃げはしないだろうが。

例えば地を這う蟻が大空を舞うドラゴンと勝負して、得れるものなどなにもないように。

本能でミライと勝負にすらならないと理解したヘレーネが戦闘を回避しようとするのもまた道理であるのだ。

とはいえ、だからといってヘレーネの戦闘力は別段低いというわけではない。タルナダ率いるパーティー内では下位に入る彼女だが、学園全体で見れば平均以上の実力は持っている。

それに加え、たった一度の攻防でミライの力を感じ取ることが出来たヘレーネは、冒険者として優秀な部類なのは間違いない。

「え？ 全然大丈夫だけど？」

まあ、当然そんなことを理解していないミライは首を傾げてヘレーネを見やる。

「だめだぜ！ ミライは女の子をばこすか殴ってそのままにしておくつもりなのか！？」 最後まで面倒見なくちゃいけないんだぜっ」

しかしヘレーネも必死である。

色々理屈をこねたところで根底にあるのはひとつ。

——怖いものは怖いのだ。

「おお、そう言われると何とも言えないんだけど」

ヘレーネの必死な形相に弱冠引きつつ、腕の中で気を失っているタルナダを見下ろして唸るミライ。

「うふふ、ミライ君ったらふえみにすとさんなのね」

「いや、使い方違うと思いますよフェイトさん」

「！　そうだぜ。フェイトも試験受けるんだから次は私とフェイトが戦えばいいんだぜ！　先輩として」

「あらあら」

「んー、まあ俺も気持ち的にさっきので満足しちゃったから、それで構わないけどな」

「いよっし、やるぜフェイト。すぐやるんだぜ！」

なんとか助かったと安堵するヘレーネは気づかない。

さっきまでの異様な戦闘の余波にあてられて自分の危機察知能力が麻痺していることに。

——あらあらと微笑むフェイトの纏う空気が、僅かに色を変えたことに。

十メートルほどの距離を置いて向かい合う二人。

ヘレーネは黒いタンクトップと皮のパンツの上に鍛錬用の使い込まれたレザーガード。

武器は二の腕から拳を包み込むようなグローブ。些か彼女の体格に比べ不釣り合いな大きさのそれは、拳と腕周りに頑強な造りの鉄製のガードが備わっている。

それを見るに、戦闘スタイルはミライと同様の近接戦闘タイプだと思われる。

一方のフェイトは変わらない。

後ろ手に手を組んだまま、ポワポワと微笑んでいるだけ。

そんな姿に、漸く平常運転し出したヘレーネは疑問と共に警戒を浮かべる。

相手の戦闘スタイルが全く読めないのだ。無手のままでいるのは近接戦闘を得手とするからか、それとも魔法を使って戦うタイプなのか、あるいはその両方か。防御力の低そうな衣服も、恐らくはタルナダの装備と同じように何らかの魔術による強化が施されていると考えるべきだろう。

何れにせよ、少し様子見するぜ、と。

そこまで考えたところで。

「うふふ。そろそろいいかしらヘレーネちゃん？」

そんな戦闘前とは思えないほどゆるゆるとした声を聞きながら、体内魔力で肉体を強化する。

それに加え【付与】系魔法『剛体』を発動。
ヘレーネの胸元に薄緑色の魔法円が浮かび上がった。

魔法スロットがひとつしかないヘレーネが選んだのは物理防御力を上げるための魔法。

魔法防御力を上げる『鏡体』と呼ばれる魔法も存在するが、基本的な常識としてこの世界の冒険者で、デメリットの大きい【攻性】系に該当する超攻撃的な魔法を使用するものは滅多に存在しない。特定の条件に合致した場合か、あるいは魔力保有量に自信があるものか。

故にヘレーネはその常識に従い、前者を選んだ。

今回の場合で言うならそれは間違いであったと言っしかないのだが。

「ふふん！ 準備万端だぜ」

「あらあら。それじゃあいくわよ」

「どっからでもかかって」

呑気な掛け声と同時に、フェイトの背から空間を切り裂くかのように、禍々しい剣翼が生まれ出た。

「へ？」

音もなく広がった剣翼が赤錆色の光をその身に纏う。

それと共に、フェイトが横に突き出した右腕。

ズプリと、赤い線が走る。

指先から始まり、肘先までを幾何学模様を刻みこむかのように、赤い線が這いずり回る。

魔法円とは似ても似つかない、歪な刻印。

それが刻まれた瞬間、そこから赤いナニ力が溢れ出る。

赤、赤、赤。

ヒトが根源的に忌み嫌うような赤黒い赤。

零れ出た赤は、渦を巻くように形を為す。

「は？」

現れ出でたのは巨大な顎。^{アギト}

余計な機能は全て排除した、ただ獲物を噛み砕く牙だけを詠えたシンブルさ。

いや、牙と呼ぶより、それは剣。

口内に幾百と並ぶそれはもはや剣の山。

――覗き見た者に死の洗礼を、『メメント・モリ』。

そんなささやき声が零れ。

「――あは」

刹那。

「え？」

剣翼が撓み、百の剣が獲物を串刺す。

十メートルの距離を一瞬で飛び越え、振るわれた右手の顎がヘレーネの体を横から挟み込むように喰らいついていた。

百の剣がヘレーネの体を穿ち、決る。

ナニが起きたのか理解出来ないヘレーネが驚愕の瞳で、笑うフェイトと視線を交わし、

「かふっ」

小さく吐血し、ゆっくりと、瞳を閉ざした。

「いや、ほんと見てるこっちの心臓に悪いから、先に説明しといて下さいよフェイトさん」

「あらあら、心配してくれたのミライ君？」

あんたにじゃねーよとツッコミつつ溜め息を吐き出したミライは、真っ青な顔で傷一つなく気を失うヘレーネに視線を向ける。

「まったく、あんな仰々しいもんで噛み付いて傷ひとつないとかどうなってるんですか？」

「うふふ、それを聞いちゃうのね」

嬉しそうに人差し指を立てて体をくねらせるフェイトに嫌々ながらも視線で先を促す。

「あれは殺しちゃだめな相手と戦うとき用に考えた魔法だから物理

的な干渉力はないのよ。攻撃したのはヘレーネちゃんの魔力そのものの」

「魔力？」

「そうよ。オドそのものをあれで食べたの。ヘレーネちゃんが気絶したのはオドの欠乏によるものだからしばらくしたら目を覚ますと思うわよ」

この人見た目と違ってえげつない技つかうなあ、と思いつつ納得したように頷くミライ。

こと戦いに関しては、割と寛容なミライ。見た目や効果がえげつなくても、自分の定めた禁忌（大切なものに害を与えるようなこと）に抵触しないかぎりは割となんでもありと考えているので、効率的に敵を無力化することが出来るフェイトのそれは、むしろ感心すべきもので。

それに、今のがヘレーネではなくタルナダだったとしてもまず防ぐことは出来なかっただろう。

そも、レベル六相当にあたるというオーガの変異種を無傷で倒せているのだ。今のタルナダよりも確実に実力は上だろう。今までミライが出会ってきた中でまともにフェイトと戦えそうなのは、アリゼルを除いたらフリアリーエと、ぎりぎりで狼のヒトくらいだろうか。

「なるほど。便利ですねそれ」

「あら、そうでもないのよ。私の力ってとっても燃費が悪いから」

「力、っていうとギフトのことですか？　そういえば昨日もそんなこと言っていましたね」

「そうなの。血を媒介にして色んなことが出来るんだけど、その分魔力の消費も多いのよ。魔力が少なくなると動けなくなるし」

仕方ないけど困ったものよね、と頬に手を当て眉をハの字にする
フェイト。

「よく分かんないですけど、フェイトさんも色々苦労してるんですねー」

フェイトのギフトに感じた違和感も、そのあたりに関係するのもかもしれないな、と思いつつ。あえて深く詮索することはせずに、話を締めくくるようにヘラリと笑みを浮かべ労りの言葉を告げる。

「そうなのよ？ だからミライ君はもっと私に優しくしてもいいんだから。具体的には朝昼晩の魔力供給に協力してくれたらお姉さんとっても嬉しいわあ」

目を細めて柔らかに微笑み返すフェイト。

「ははは。ほんとに図々しいヒトだなー」

「うふふ。女の子は欲張りなものなのよ？」

ははは。うふふ。

と、タルナダが目覚ますまでのしばらくの間、二人の愉しげな笑い声が訓練場に響くのだった。

その翼は希望を踏み越え、その顎が希望を噛み砕いた（後書き）

ひとまずバトルパート終了。

こいつ意外と面白いなど、彼は心の中で黒い笑みを浮かべた

「うむ、さて困った。やることがない……」

ベッドの上で胡座をかき、欠伸を噛み殺したミライの口から溜息にも似た呟きが漏れ出た。

一昨日。全力ではないものの、オーガとの命のやり取りに加え、タルナダを相手に真剣に臨んだ模擬戦は、知らず知らずのうちに疲労を体の内に蓄積させていたのだろう。

さしものミライとはいえ人の業たる三大欲求に抗う術は習得しておらず、故に夕食後の満腹時に襲ってきた睡魔にあっさりと白旗を掲げ、夜も浅いうちにベッドにノックダウンすることになったのだった。

そんな訳で、予定外に早く目を覚ましてしまったミライ。未だ日が昇るまで優に二時間近くはあるというのに、こんなときばかり睡魔は気を利かせて体の奥に引っ込んでしまっていた。

「二度寝するのなあー」

ぼやきつつ、喉の渴きを覚えたミライはベッドを下りてテーブルの上に置いてある水挿しを手にとって。

「おっと、空^{から}だったか」

中身のないそれを目の高さでからからと振るい、溜め息を吐く。

しょうがない。食堂に行けば何かあるだろう。
ついでに軽く汗でも流しに行くか。

ふむ、と一つ頷き、空の水挿しを手に部屋を出て階下に向かう。

「――お、誰か起きて？」

食堂の入口から漏れる明かりを見たミライが首をかしげ。
入口顔だけ覗かせたミライは、こちらに背を向けて座るヘレーネを認める。

ヘレーネが、こんな朝早くから何を、っていうか、何か食ってるのか。

食器を鳴らす音に、胃袋を刺激する香ばしい匂い。

そういえば、ヘレーネは結局夕飯の時も目覚まさなくて食いつぱぐれたんだっとな。

今頃腹すかして起きてきたのかと苦笑を浮かべ、その背に向けて挨拶しようとして手を上げかけ。

――しかし声を出すことなくその手をゆつくりと下ろし、
次いでふふふと笑みを浮かべたミライは、その背後へと忍び足で歩み寄り。

「――ヘレーネボハアア……」ふつ、と耳元で響くウィ
スパイボイス。

肩を震わせ、「もひゃっ！」と盛大に悲鳴を上げたヘレーネがパン

を口にくわえたまま慌てて振り返り――。

そのまま、慄いたように息をのみこむ。

誰も、居ないのだ。

「――もひゃ、れ？」

自分がパンを啜えたままなのも自失し、強張った表情のまま『だ、れ？』と呟く少女。

確かに、自分を呼ぶ声が聞こえたのに、振り向いたそこには誰もいないミステリー。

自分の、気のせいだったのだろう。

耳元に残る妙に生温かい声の名残については、深く考えては駄目だと自分に言い聞かせる。おそらく昨日の疲れからくる幻聴のようなものでそれに合わさって静寂な空間がより一層自意識を刺激したために起きた錯覚つまり勘違い結論ここには自分以外だれもない。

しばらく、じつと動きを止めたまま食堂の奥の暗がりを見据えていたヘレーネは、そうして自分以外に確かに誰もいないことを認め、ふっと、安堵したように肩を揺らして動きを再開する。

そして口に啜えたままのパンのことを今さらのように思い出し、唾液でふやけたそれをゲンナリした気持ちで咀嚼しながら振り返り、

「――」

それを至近で見たヘレーネは見事に椅子ごとひっくり返ったのだった。

ぐったりと疲れたようにテーブルにもたれたヘレーネが、恨みがましい目をミライへと向ける。

「そんなに怒るなよヘレーネ。お茶目な悪戯じゃないか」

ヘレーネの対面に座り、果実酒を喉に流しながらバチンとウインクして見せるも、機嫌は良くなるどころか下降の一途をたどっている。

「正直、お前の悪戯は悪意に満ちてると思うぜ」

「いやー、まさかここまでびびるとは思わなかったからなあ」

「怖いものは怖いんだぜ。幽霊とか死ねばいいんだ」

「いやいや、幽霊嫌いすぎだろ。というか冒険者目指してるやつが幽霊なんぞにびびってていいのか？」

「だってモンスターは目に見えるし。幽霊は目に見えない、触れない殺せない」

「いやあ、案外どうにかなるもんだぞ？」

俺も昔に一度随分苦勞させられたけどなんとかあったしな。幽霊って殴って殺せるんだぜ？ 信じれるか？

「ははははは、ミライは本当に笑えない冗談ばかりだぜ」

「え？ いや本当、……うん。冗談冗談」

涙目で虚空を見つめ、乾いた唾いを零すヘレーネを見て、流石のミライも哀れみを覚えざるを得なかったという。

「——で、結局ミライはこんな朝早くにどうしたんだぜ？」

今さら朝食の続きを再開する気にもなれないヘレーネは、何をするでもなく対面に座ってぶらりぶらりと組んだ足を揺らすミライにじとりと視線を向ける。

まさかこの男私を驚かすために起きてきたんじゃないだろうな？と疑惑を込めてじつとりと。

「んあ？ ああ、別にどうってことはないんだけどな。昨日早く寝すぎたせいではっちりが覚めちゃってさ。心配しなくてもわざわざヘレーネ驚かせるためだけにこんな早起きしないから。いや、ほんと。別に面白くなかったからな？ 嘘、超面白かった」

わはは、と笑うミライに「うつつるさい！」と顔を真っ赤に染めてテーブルを叩くヘレーネ。

「とまあ冗談は置いてくとして」

じゃあ始めから余計なことを言うんじゃないんだぜというヘレーネの呟きは華麗にスルー。

「時間が出来たから軽く汗でも流しに行こうかと思ってな」

「む、なんだそうなのか。だったら一緒に走りに行くか？ 私も食後の運動に行くつもりだったんだぜ」

くくく、さっきの借りはきっちり返してやるんだぜと小さな声で呟くヘレーネにっこりと笑顔を向ける。

「じゃあ折角だし一緒にするかな。よろしくたのむよ先輩。お手柔らかに？」

勢い込んで立ち上がったヘレーネの後ろ姿に苦笑を浮かべつつ、その背をゆっくりと追いかけるミライだった。

ヘレーネを背負ったミライがゆっくりと歩を進める。

「うっ、……なんで、汗一つかいてないんだぜミライ」

「何言ってるんだよ。そんな先輩が手加減して走ってくれたからだよ？」

「うぐ、なんだよ？ 大人げなく本気出して走ったくせに簡単にへばってんじゃないよこのへば先輩って言いたいのかな？」

「あつはつは、まさか。先輩の威厳見せようと必死に走るのに、全然うまくいなくて涙目になってるところなんてむしろ尊敬？」

「なんで疑問形なんだぜ」

「おまけに動けなくなるまで意地張っちゃうところなんて面白くてしかたな、おほんおほん」

「今本音が口つと出たぜ！」

「ああ、もう尊敬尊敬」

「うう、尊敬という言葉が軽いぜ。面倒くさがるなよう、ちゃんと相手しろよう」

「ああ、そうだなー。じゃあこれだけは言わせてほしいんだけどさ「な、なんだぜ？」

「ちゃんと下着付けたほうがいいぞ、女の子なんだから」

「ひよお、な、何言ってるんだお前は！」

「いや、俺としては背中当たる感触はご褒美と言えなくもないんだがな。男が皆俺みたいな羊のような優しさを持つやつとは限らな

いんだ、下手したらこのままお持ち帰りとかされるかも。そうなたもうシッポリヌツポリと」

「やつ、やだあ！ 離せ、離せえ！ セクハラだあ！！」

「わはは、動けないんだから大人しく諦めなさい」

「嫌だああ！！」

—— 明るくなりだした街の中、落ち込んだヘレーネを言葉で弄びつつ、ミライは宿へと向かってゆっくり足を進めるのだった。

こいつ意外と面白いなど、彼は心の中で黒い笑みを浮かべた（後書き）

話が進まなさ過ぎ、全私が泣いた。まあ繋ぎの繋ぎということだ。

ミライのヘレーネに対する発言は本来なら紛れもなくセクハラです。非常に危険ですので真似しないでください。

閑話（前書き）

話は学園に到着した長後に遡ります。

閑話

イカロスの天楼——バースミリア学園——を目指して真っ直ぐ歩く美女二人。

一人は学園の教師にしてBランク冒険者のフリーエ。腰まで伸ばした黒い髪が日の光を反射して天使の輪を描く。こめかみから突き出る鬼族の証である二本の鋭利な角は、しかし、その美しさを損なうことなく。白い生地と緑の紋様を刻んだ和服は彼女の美しさにより際立たせている。

もう一人は、大陸でも三人しかいないSランク冒険者のアリゼル。首の下で切りそろえた赤い髪は、日の光を浴びてまるで燃え上がる炎のような輝きを放ち。

漆黒の和服が彼女の持つ美しさを際立たせ、鋭利な瞳は進むべき道を切り開くかのように前へと向けられている——いつもは、だが。

フリーエはついに我慢できずに、後ろを歩くアリゼルへと顔を向ける。

「ほらもう、いつまで凹んでんねんアリゼル。しゃきつとしいや、しゃきつと」

「うう、だがな、ミライはああ見えてかなりの世間知らずなんだぞ？ それにミライの巡り合わせの妙は普通じゃないんだ。もし私のいない間に何かトラブルに巻き込まれていたら私はどうすればいいんだ？」

「どうもせんでええよ」

というか、自分自身も普通じゃない枠の中に入ってることに気づいてるんか？

呆れたようなフリアリーエの視線にも気付かぬ様子で、迷子の子供のように両手をさまよわせているアリゼル。

まったく、これじゃあどっちが保護者かわからんな。

「ほらアリゼル、学園長も待ちわびてるやろーから早よ行くで。あんた卒業して以来一回も顔出してないから寂しがってたで」

先程別れたミライの落ち着いた様子を思い出し心中で溜め息を吐き出しつつ、しかしこのままでは切りが無さそうにだと未だ心の迷路に迷い込んだままのアリゼルの手を引いてそのまま歩き出す。

まあしかし、大事な妹分アリゼルのこんな可愛い姿を拝める日が来たということには素直に感慨深いものがある。

次に少年に会った時には飯でもおごってやるかな、と。

フリアリーエはアリゼルに背を向けたまま、苦笑に近い形に口元を歪めるのだった。

冒険者になるための登竜門として絶対的な役割を担っている冒険者育成機関、通称・学園。

大陸に四つしか存在しないそれらは、時代の流れと共に現在ではギ

ルドからは独立した機関として存在するようになり、【ギルド】・【貴族】と続き、【学園】を含めたこれらは大陸の権威を三分するほどの力を持つている言われている。

そしてここ、バースミリア学園の本体たる聳え立つ銀色の巨塔【イカロスの天楼】、その入り口前。

「じゃあまずは学園長のところ行くで」

「ああ、わかった」

振り返ったフリーアリーエが告げる言葉に小さく頷き返すアリゼル。

すでにフリーアリーエに引かれていた手は離されており、先程までの動揺した姿がまるで幻だったかのように、冷然とした雰囲気その身に纏っていた。

しかし、それをちらりと盗み見たフリーアリーエは、再び大きな溜め息を吐き出す。

「む、フリーエ、なんだその溜め息は？」

それを聞き咎めたアリゼルが（デフォルトな）鋭い眼光を向ける。

視線と視線が交錯し。

アリゼルの瞳の奥にくすぶる、ヒトの枠を逸脱した力の残滓を目撃する。

——が、そこにはいつも感じている生殺与奪を握られているかのような狂おしいまでの圧力は無く、精々がトロールの群れに囲まれている程度のものしか感じない。

以前のアリゼルならば、このような公の場で、このような隙を見せることなど決してなかった。

故に友達も出来なかったのだが。

「いや、……あんたほんまに変わったなあと改めて思ったんよ。ミライには感謝したらいいのか嫉妬したらいいのか、お姉ちゃん複雑な心境やわあ」

やっぱ少年に飯奢るのは保留で、一度説教しておこう。ついでにタルナダを誑かした分も含めて。あとキユオルの気苦労の分もついでに。

「変わった？ 私が？ む、む、そんなつもりはないんだが。……それに、ミ、ミライは関係ないだろう？」

途端に視線を揺らして口をモゴモゴさせるアリゼル。

「もうあんたがそれでいいなら好きにしーな」

【一愛を捨て力を渴望せし者^{ベルセルク}】とまで呼ばれた妹分が、変われば変わるものだ。

呆れたような表情から一転、フリーアリーエは可笑しそうに笑みを零す。

ただまあ、しかし。

アリゼルにセクハラしたせいで強制的に性転換させられたマクゼルや、アリゼルの実力を嫉んで迷宮でエロい罠にはめようとして強制的に性転換させられたゾードが、今のアリゼルを見たらどんな反応

を見せるのやら。

「さて、そんなじゃ行こか」

未だ、モゴモゴと言い訳を続けるアリゼルの肩をバシバシと叩いたフリアリーエはカラカラと笑いながら銀の塔へと足を踏み入れた。

箱型の魔術装置で一階から一気に百二十階まで上がってきた二人、最上階のここを使用するのはただひとり。バースミリア学園の長にして、【学園】のトップに君臨する四人のうちの一人。

「失礼すんで学園長ー」

入室の挨拶もそこそこに、気楽な態度のまま荘厳な扉を押し開けてフリアリーエが部屋の中に足を踏み入れた。

「失礼する」

言葉少なに断りを入れてそれに続くアリゼルの表情には、僅かに郷愁の念が滲む。

「ああ、フリアリーエに――――アリゼルかの？」

その懐かしい声音に自然、アリゼルの口元が緩む。

「うん。学園長、息災だったか？」

「ほほほ、言いよるわ小娘が。たかだか数年見なかっただけで随分立派になりおって」

バースミリア学園学園長。

在学時には随分と世話になった彼の人物はあの頃から変わることなく。

生きた歳月の重みを感じさせる深く刻まれた皺。頭頂部から編み込まれた長い白髪が背中に向けて垂れ下がり、真つ白な髭は腰まで延ばされ髪と同様長い紐を用いて編み込まれている。

体はゆつたりとした青い衣を巻き付けるように帯で締めて着ており。そして、背中に浮かぶ三対六枚の羽根。

真ん中の二枚は虹色の輝きを薄く放ち、残りの羽根は白銀色の光を纏っている。

三十センチほどの大きさをした三対の羽根は、初めて見た頃から全く変わることなく力強い輝きを纏っていた。

「なんや爺ちゃん、あんなに会いたがってたくせにえらい普通やないか」

「ほほほ。何を言うかフリーア―エよ。わしゃいつだって溢れんばかりの威厳を纏っておるんじゃ。それを損なうような真似をするわけがなかるうぞ」

「あはは、何言っとなねんこのエロ爺ちゃんめ」

澄ました顔でアリゼルの胸元を値踏みしている学園長を、フリーア―エがひょいと持ち上げて振り回した。

妖精族。

古には森の守り神とまで呼ばれた彼の存在。

寿命が存在せず、生望む限り時を渡ることが出来たこの幻想たちは、しかし、長すぎる時と戦いに明け暮れる時代の中で生きる意味を失い多くが滅びた。

その中で、現代に残ったのは数えるも僅かな妖精だけ。

その中のひとり、生き残った中でも最古の時を身に刻んだ幻想それがバースミリア学園学園長であった。

「ふおおお、何すんじゃフリーエ！ 年寄りはおっと丁寧に扱わんかい！」

「だったら年寄りらしくええ加減に引退せんかい」

「ほほほ。ナニを言うか。わしゃ生涯現役じゃわい」

「ちょんぎったるかほんまに」

「うひよっ、何ちゅう恐ろしいことを言いよるかこの娘は。だからお主は行き遅」

れ、と続ける間もなく。ぐほっ、とくぐもった悲鳴をあげて、その体長五十センチほどの小さな体は錐揉みしたまま、開いた窓から外へと飛んでいく。

「あんの爺、誰が行き遅れやねん……」

僅かな沈黙。

そして。

「……ぐはっ」

自分の言葉が心に突き刺さり、崩おれるフリーアリーエだった。

「ほほほ。さて、改めてじゃ、よく帰ってきたのうアリゼル」

先程までの奇行がまるで嘘だったかのように穏やかな笑みを向けてくる学園長に、流石のアリゼルも小さく苦笑を浮かべる。

「うん、学園長も相変わらずのようで安心した」

「ほっ。そうじゃろそうじゃろ？ わしやお主等の子供の顔を拝むまでは隠居するつもりはないんじやよ」

曾孫の顔拝むまでは死んでやらんわい、と朗々と笑う学園長。

「む、子供か、しかし私には相手がいないからな」

「ほほほ。お主も相変わらぬよう」

じゃのう、と続けようとした学園長は、

「ミライなら、……あ、いやいやっ、私は何を！」

アリゼルのそんな眩きと髪と同じくらい顔を真っ赤に染める姿を見て、あまりにも驚天動地な光景にぎょぎょと目を丸くする。

「……ほっ、吃驚し過ぎて一瞬綺麗なお花畑が見えたわい」

「そ、そうだ、彼は私の友達で親友で、で、でも、……こ、恋人、か。む、むっ」

空の彼方から帰還してみれば未だ顔を染めて、ぶつぶつと呟いているアリゼルが。

まさかこの娘に限って、男が出来たなどということはないだろうが、それでもいい歳した女子なのだから恋ぐらいはしているのかもしれない。

いち大事じゃのう、と唸る爺。

孫娘のように可愛がっている娘に男の影。これは学園長としての権力をフル活用してでも相手のことを調べなければ、と無駄に張り切っていたりするのだが、いっばいいっぱいなアリゼルにそれを知る由もなかった。

「——はっ！ す、すまない学園長、少し取り乱してしまった。き、気にせず話を続けてくれ」

ようやく返ってきたアリゼル。実に十数分は飛んでいた。男性経験が皆無な分、ここにきて初めてできた男の知り合いに、妄想の幅はとどまることを知らないのだろう。赤くなったり青くなったり、頭から湯気を吹きだしたりと大忙しだった姿は、ばつちりと学園長に目撃されているのだが、『少し』と言い張るところは流石のSラン

クである。

「ほっほ、まあ積もる話は後にして、先に仕事の話をしとくかのう」
「そ、そうだな。うん、そのために来たんだ、よろしく頼む学園長」
逆にここまでくれば爺も気を使って知らないふりをしてしまうというものだ。

気を取り直して。

普通より縦に長い椅子に座った学園長が指を振るうと、机の上に置かれた書類が浮かびあがりアリゼルのもとに届く。

「お主に担当してもらうのは実戦特殊講義、二期生以降の生徒を対象とした講義じゃ。選別はこちらでやっておくが、大体二十人程度を指導してもらう。詳しくはその資料に乗っ取るからあとで確認しとくんじゃぞ」

「ん、わかった」

ぱらぱらと資料をめくりながら小さく頷きを返す。

「次はこれじゃな」

再び書類がひと束手元に収まる。

「これは？」

「ほほほ。契約書じゃよ。要は学園で働くにあたっての同意書みたいなもんじゃわい。さすがに現役Sランクを囲ったとなれば、ギルドやらほかの学園のガキどもがうるさいからのう」

「いつまでに？」

「明日までに出しとくれればよいわ。他に必要なことは大方最初の

ほうの書類に資料を挟んどるからそつちも目を通しておくようにのう」

ほほほ、と髭を人撫でして学園長は「そうそう」と言つて続ける。

「三日後の入学試験にはお主にも手伝つてんもらいたくての」「試験に？」

む、と眉根を寄せるアリゼル。

「まあ難しい事じゃないわい。今年は少し手間を省きたくての、去年の合格者が予定より大幅に多くなつた分、今年は数を減らすんじやが、それにお主の手を借りたくてのう」

今年の合格者は少ない、と聞いて一瞬不安が持ち上がる。

が、心配するだけ無駄だろうな、と苦笑する。

彼ならばきつと何の気負いもなく笑つて乗り越えてくるだろう。そんな確信があつた。

「あとは、明日のお主の紹介も兼ねた立食パーティーの話もしておかんとな――」

こうしてミライのいない一日は瞬く間に過ぎ去っていくのだった。

また、部屋の隅で膝を抱えて丸くなつていたフリーアリエは、結局二人の話が終わるまで復帰することはなかったことを追記しておく。

閑話（後書き）

久しぶりにアリゼルのターン。あと新しく妖精な爺も登場。妖精娘ではなく妖精爺。ここ重要。

爺は祖父、フリアリーエは姉、という立ち位置。そしてアリゼルの交友関係で、これ以上深い関係の人はいなかったりします。

昼食はパン、スープ、サラダに肉でした

カチャカチャと食器がこすれる音が響く。

「——— そうですね。ミライ様、今日はどのようなご予定なんでしょうか？」

目の前の肉を切り分けながら、対面に座るミライに向け口を開くタルナダ。

昨日の疲れから昼前に起きた彼女はパジャマのまま下に降りて来たのだが。当然ビキニアーマーではない。ないのだが、さすがというか、ぶれないというべきか。

一言で言うならどうやって着てるんだその布、というべきそれ。その服で一体お前はお前自身の何を守っているんだと言いたくなる。服本来の役割に対する冒瀆。むしろ叛逆？

今のタルナダの格好を、的確に表現するための言葉を見つけることができない自分が不甲斐ない。

くだらないことを頭の隅で考えつつ、かじりついたパンから口を離す。

「ああ、特にやることは決まっていんだけど」

口に含んだパンを嚥下してから考えるようにして続ける。

「そうだなあ。出来れば明日の試験に備えたいんだが、何かやることあるか？」

アリゼルは特に何もしなくて大丈夫だと言ってはいたが、それで落ちてしまったら格好がつかない。

まあ、その時はその時でこの世界を見て回るのもいいかもしれないが。

「そうですね。私も詳しい採点基準を知ってる訳ではないのですが」

切り分ける作業を止め、肉を一切れ口の中に放り込み、幾度か噛み締めたあと飲み込む。「ミライ様は箱組ではなくて野良組でしたよね？」

「？」

初めて聞いた単語にミライは首を捻る。

「その『はこ』とか『のら』ってのは何なんだ？」

「ぷふー、なんだよミライ、そんなことも知らないのかー？」

ここぞとばかりに食い付いたヘレーネは、

「あ、ん、た、は、黙ってなさい」

タルナダの冷え切った声の後、「ひぎゃっ」とかん高い悲鳴とともにおでこから机に突っ伏した。
見事な四連鎖である。

タルナダはふん、と鼻息ひとつ。

こほんと咳払いして気を取り直す。

「箱組というのはですね」

一連の流れは無かったことにするらしい。

「正式には【騎士塾】の別称でして。といっても本当の騎士を育てるというわけではなくて、黒の時代にいたという『騎士』の名に肖ってそう言う名前にしたらしいのですが」

「それは学園とは別物なのか？」

「あはは、それは当然ですよ。騎士塾には三大権威に匹敵するほどの力はありません。とはいえ、元を作ったのが『三』の数字を与えられた【貴族】ですから影響力は無視出来るほど小さいものではないのですが」

ふんふんと真面目な顔で頷きつつ、半分も理解できていないミライ。

「詳しく説明すると長くなりますので、戻しますね。騎士塾というのは学園と違い、基礎的な部分からの育成を目的にしたものなんです。ですので対象も幼年期の者としてるんです。人間族で言えばだいたい七歳からで、期間は四年間。その間に基礎教養、オドの基礎運用、あとは基礎的な戦闘訓練など」

「基礎づくめだな」

「はい、元々が『可能性を導き示す』という理念から作られたものですから。と、それです、この騎士塾というのは学園と違い大陸に幾つか存在しているんです。ここセンチストフエリア大陸には、確か四つ」

「で、そこから来る奴らが箱組、と？」

「はい。天楼にある箱型魔術装置。上に上がる箱、というところからそう呼ばれるようになったんです」

「それって、明らかにいい意味じゃないよな？」

わざわざ上に上がるしか能のない箱呼ばわりするとか。

タルナダも分かっているのか、それに苦笑を返す。

「確かに、騎士塾の出身の者の中には箱組という呼び方を嫌悪しているものもいますし、そういう意味を込めて呼ぶものも少なからずいます」

「大体よー。あいつらそんなに強くもないくせに自尊心だけは無駄に高いから面倒くさいんだぜ」

むくりと起き上がったヘレーネが仏頂面で不満を零す。

「ああ、それは同感ね。何度焼き殺してやろうと思ったか」

暗い笑みを浮かべて同調するタルナダは、呆れたようなミライの視線に気付いて頬を染めつつ話を続ける。

「はあはあ、えっと、次は野良組でしたね。こちらは逆に騎士塾に通わず、独力で力をつけたものや身近な人物に師事したヒトのことを指します。私やヘレーネなんかも野良組ですね」

「あー、もしかしてその呼び方って」

呆れたようなミライの言葉にタルナダは頷き返す。

「はい。最初にそう呼び出したのは箱組です。首輪の付け方も知らない犬、とかいう意味らしいですけど」

頭の悪い名づけ方だと鼻で笑うタルナダ。
それに、ヘレーネが続く。

「タルナダはそういうけどよ、私はそれなりに気に入ってるんだぜ、その呼び方。だって、首輪をつけられてないってことは、何処にで

もいけるってことだろ？ 冒険者目指してる私達にはぴったりだよな」

そう言っただけで笑みを浮かべるヘレーネに、タルナダもミライも釣られて笑みを浮かべた。

一通りの説明を受けてうんうんと納得したように頷くミライ。

「なるほど。そういう意味なら、確かに俺は野良組だな」

「けど、そうすると個人的な才能とかは別として、試験では箱組のほうが有利な気がするんだが？」

「確かにそうですね。一部を除いたら、野良組はほとんどの者が磨きかけの石ですから。知識面は言うまでもないですし、戦闘面でも箱組のほうが上手いでしょうね」

「ほう、そこまでか？」

「ですね。騎士塾自体にもランクはありますが、特に上位だといわれているような場所だと毎年かなりの実力を持った人材を揃えてきますから」

「所謂エリートの中のエリート。……スーパーエリート、ってやつか」

「ぶはっ、お前まじめな顔して何言っただぜ！ あはは、エリーターって、エリーターって！！ あはははは」

「——雷槍（弱）」

バチンッ！！

ぶぎゃっ！

「話が逸れましたね。これは先生からそれとなく聞いた話なんです

が、学園もそれを考慮して試験では箱と野良で合格枠を分けているようなんです。まあ、理由はそれだけではないようですけど。で、話は戻りますけど、一日目は筆記試験とその年だけの特別な試験が行われます。後者については、毎年異なるのでなんともいえないのですけど、昨年は突発的な出来事が起きたときの対処能力を見られたみたいですね。なんでも、二十人ずつに分けて小さな部屋に押し込んだところにいきなりワイバーンの幻術で襲い掛かった時の反応を見たりしたらしいです。二日目はオドの測定と基礎的な体力検査。三日目が模擬戦闘試験です」

「ほうほう。ん、確か、全部のテストの合計点が合格値を越えてたらしいんだっけ？」

「はい。筆記試験の上限点数は最低で、合格値の二割程度、測定検査は四割にしか設定されていないらしいですが、模擬戦闘試験の上限点数だけは合格値と同じ点数に設定されているんです。特別試験は対応次第で点数が変わるみたいなので気にしないでいいかと。ミライ様なら測定検査と、見せ方次第では三日目だけで合格することもできますよ。間違いありません、ミライ様ですから」

「見せ方ねえ」

ふむ、と思索するミライ。

「模擬戦闘は全部で二回戦。そうですね、普通に勝つだけよりもある程度のインパクトがあつたほうがいいかもしれませんがね。なんせ学園側は何千試合も見るわけですから。まあ、ミライ様はその存在だけでも子宮がぬれるくらいにイイ意味で衝撃的ですから気にしなくてもいいかもしれません。しかし、だからこそっ、よりインパクトある勝利でミライ様のすばらしさを衆人の目に焼き付けるっ」

「ふん」

——人差し指と親指の力の拮抗から生み出される莫大な反

発エネルギーを、点で放出することによる圧縮爆撃的攻撃術。

つまりデコピンで暴走するタルナダを沈めたミライ。^{ヒートアップ}

「さて、しかしインパクトね。アルさんにもフリーエさんにも目立ち過ぎない方がいいっていわれてるしなあ……」

ん、じゃあ、戦い方変えていくか？

そうだな。いい機会だし、腰が軽いままなのもいい加減気になってきたし。

前使ってたお鶴ちゃんのお古のまでとは言わんけど、それなりのものが見つかればいいんだが。

とりあえず。

ヘレーネとタルナダが目覚ますのを待つ間、昼飯終わらしとくか。

目をしょぼつかせながら食堂に入ってきたフェイトに小さく手を振りつつ、ミライはかじりかけのパンに手を伸ばすのだった。

「武器屋ですか？」

目覚めたタルナダとヘレーネの二人が食事を済ませるまで待つ間、午後の予定について話すミライ。

曰わく、いい武器屋を紹介してくれ、と。

「ああ。弓が置いてるところ、出来れば短弓がいいんだけどな。使い慣れてるから」

「あらあら、ミライ君ったらわんぱくそうに見えて意外と器用なのね」

口の端にパンのかすを付けたままフェイトがコロコロと笑みを浮かべる。

「よ、よりによって遠距離武器かよ。近遠距離タイプでしかもあの強さとか、勝てるビジョンがまったく浮かばないんだぜ……」

昨日の戦いの一部始終に今朝の悪夢のような追いかっこを思い出したヘレーネが力無く呟く。

「なに、血反吐撒き散らして魂すり減らす程度に訓練すれば案外なんとかなるもんだぞ？」

「……遠慮しとくぜ」

冗談でも何でもなく、素の顔で言ってくるミライからそつと視線を外すヘレーネ。

「ハアハア、その話には非常に興味ありますが、まずは武器屋ですね」

ナニを想像したのか淫猥に体を震わしながら話を戻すタルナダ。

「『裏』に知り合いの職人がいるのでそこに案内させていただいてよろしいでしょうか？」

「うげ、その職人つてもしかしてミスティーアさんか？」

「もちろんよ。このあたりだと彼女が一番腕がいいもの、あんただって知ってるでしょ？」

「う、確かに、腕もいいし、いい人だけど。……私あの人苦手だから留守番しとくぜ」

「おい、なんだその会話。不安しかないんだけど」

「無問題ですミライ様。この不肖タルナダめにお任せください。少しばかり気難しい面もありますが、彼女の創る作品は確かなものばかりですから必ずやミライ様もお気に召してくれるはず！　むしろお気に召さなかったときのお置ききもどんとこいつ！！」

テーブルを乗り越えて近付いて来るとや顔にイラツとして思わず手刀を浴びせてしまったのはしょうがないとして。

タルナダはどうしようもないほどの変態ではあるものの、しょうもない嘘をつくような小物ではない。

多少不安は残るものの（主にタルナダの知り合いという点で）、行ってみる価値はあるだろう。あると思う。

だらしない笑みを浮かべて悶絶するという器用なことをしているタルナダを見ると、正直自信は無くなってくるのだが。

「フェイトさんはどうします？」

一応。

隣の席でグラグラ頭を揺らしているフェイトに顔を向ける。

「……ふわあ？　あふう、んん、こんなにポカポカしてるものお、わたしはあ、ここでゆっくりしてるわねえ」

半分閉じたままの瞳でミライを一瞥し、平常時より三割り増しで緩

い笑みを浮かべたフェイトは台詞が終わると共に電池が切れたかのように額からテーブルに突っ伏した。

「うん。なんだかこの流れにも慣れてきた。じゃあ後は頼んだヘレ―ネ」

タルナダ脇に抱えて立ち上がったミライは、友の姿にドン引きしているヘレ―ネに後ろ手を振りつつそのまま宿を後にした。

昼食はパン、スープ、サラダに肉でした（後書き）

説明回でした。ぐだぐだですいません。

もう一話だけ挟んだら試験に突入。
ようやく区切りが見えてきたっ！

俺の射線上に入ると怪我するぜ？ と彼はニヒルに微笑んだ

ヘレーネとの追いかけっこ。さらに朝帰りをマルア夫人に見つかりどきどき尋問。汗が気持ち悪かったので夫人に許可をいただきヘレーネとの背中の流れっこで、そのあとは朝食を軽くいただき部屋に戻って二度寝。起こしに来たタルナダといっしょにヘレーネも交えて食堂で楽しく昼食。

と、一部誇張している部分はあるが、大体そんな流れで昼食を終えた俺はタルナダを伴って宿屋を出る。

「ほれ、タルナダ。もう自分で歩けるだろ？」

「あ、はい、もう大丈夫です」

荷物のように抱えられていた余韻からか、にやけ切ったままの顔でタルナダがミライの脇から這い出て地面に降りる。

「ふう。至福の時間でした」

額の汗を拭い、熱い吐息を零すタルナダにミライは無言で案内を催促する。

「ああっ、そんな虫けらを見るような蔑んだ瞳で、くうっ、感じちゃうけど、駄目よわたしっ、今はミライ様を案内するのが最優先事項なんだから！」

震える体を抱き締めて煩悶するタルナダ。

ミライが我慢できずにコブラツイストを喰らわせたのはそれから直ぐのことだ。

顔を青くしたり赤くしたりしながら、腰を抑えて歩くタルナダの後ろについて行くミライ。やがて一軒の建物の前でタルナダが足を止める。

それらしいのは『ミスティック工房』と書かれた味気ない看板が、入り口近くに申し訳程度に掲げられているだけ。とはいえ、職人通りはどこもこれと似たような外観をしていたりする。

然もありなん。

彼らは創る人であって売る人ではないのだから。

「ここが？」

「はい。『表』の店にもほとんど品を卸さずに、気に入った相手にしか作品を売らない変わり者ですけど腕は確かです」

「職人気質ってやつか」

ミライの呟きを背に、タルナダは鉄製の扉を押し開ける。

「それでは参りましょうミライ様」

ミスティック工房に足を踏み入れたミライは想像していたものと違う光景にあたりを見回す。

石造りの部屋。奥に設置されたカウンター以外、ものの見事に何も無い。もっと乱雑としたものを想像していたのだが。

そんなミライを横目に、「この奥が工房です」と手馴れた様子で部屋を横切って奥の扉に向かうタルナダ。どうやらそちらが仕事場であるようだ。

鉄製の扉をくぐり、通路を抜けた先でミライを出迎えたのは肌を叩くような熱気と鉄と鉄をぶつけたような甲高い音。

そして。

「あちきがっ、噂の美少女、ミスティーアよ！」

こちらに背を向け、奇っ怪な掛け声と共に部屋の中央、大きな作業台に向けて金鎚を振り下ろしているミスティーア某に、タルナダは臆することなく近寄っていく。

「久しぶりねミスティ」

金槌の音が反響するこの場所でも不思議と響くタルナダの声に、手を止め振り返るミスティーア。

「あら？ タルちゃんじゃないのよん。どうしたの、鎧のお手入れはこの前してあげたばかりでしょう？ まさか昨日あげた双剣、もう潰したとかいうんじゃないでしょうね！」

「違うわよ。客は私じゃなくて、こちらの方よ」

「あらん、そちらの可愛い顔した男の子がお客様だったのん？」

ようやくミライの存在に気づいたのか、くりつとした瞳を向けてくる。

「そうよ。私の大切なお方だから失礼のないようにしなさいよミスティ」

腕を組んでふんぞり返ったタルナダが偉そうに鼻を鳴らす。

「あらそれはステキねん！ ついにタルちゃんの魅力に気づいてくれる男の子が現れてくれたわけ？ いやん羨ま〜！」

キャピキャピと巨体を揺らすミスティアからついつと視線を外すミライ。

——しまった、油断していたと。思った以上のメンタルへのダメージに目眩を覚える。

この世界に来てから出会った人達。アリゼルに始まり、ロゼッタ、フリアリーエ、タルナダ、キュオルにヘレーネ、エクレアと美形揃いだっただけで知らぬ間に心が油断していた。

「ミライ様紹介しますね。こちらは」

「あらん、それは無粋よタルちゃん、あちきに言わせてくれなきゃ」

タルナダの言葉を遮り。

あはん！ と、右手を頬に。左手を腰にやって胸を突き出すようにポーズを取る。

「あちきが噂の美クリエイター、ミスティアよん！」

三つ編みお下げにした緑色の髪。タルナダに負けず劣らず露出の多い服装。というかミニスカートと三角の布切れをくつつけたようにしか見えないブラジャー的なナニカ。

その下には、はちきれんばかりの筋肉の塊。見事な逆三角形。腹筋は八つに割れ、盛り上がった胸筋、丸太のような腕、スカートからはタルナダの胸より太い足が覗いている。

本願寺の筋肉馬鹿に負けず劣らずの暑苦しさ。吹き出た汗が光り、さらに不快感を増している。

「あちき、一気にあなたのことが気に入ったわ、よろしくねん」

肌を刺すような熱気の中、遅しい肉体から漂ってくるフルーツのよ
うな甘い匂いに、無駄にいらつとしてしまったミライだった。

「あらん、ミライきゅんは弓をお探し？」

「出来れば短弓がいいんだけど」

工房から出た三人は最初の石造りの部屋へと移動していた。

「あふん。あちき弓は専門外なんだけど……」

んー、と人差し指を唇に当てて考えるミスティア。

「ああん、そう言えばあれがあったわ。ちょっと待っててねん」

そう言つて、尻を振りながら工房へて消えていく。

「なあタルナダ、聞いてもいいか？」

「はい、なんでしようミライ様。はあつ、まさか私の休日の過ごし

方について」

「それはどうでもいいんだが、お前、宿出る前にミスティさんのこと『彼女』っていつてたよな？」

「あ、はい。ミスティのことですか？　彼女がどうかしたんですか？」

「あー、つとだな。あの人、体は男、心が女とか、そういう感じなのか？」

「？　ミライ様ったら。それだとただの男じゃないですか」

「ああうん、そうなんだけどね。……あれ、俺がおかしいのか？」

ミライがタルナダとの心の距離を測りかねている間に、桐箱を抱えて戻ってきたミスティーアがカウンターの上にそれを置く。

「昔あちきが趣味で創った試作品なんだけど、キワモノ過ぎてお蔵入りになってたのよねん」

蓋を取り外し、中から取り出したのは錆色の薄い板。長さは七十センチ、幅は五センチ程度。中心より下部分に握りの部分として黒い皮がまかれており、全体は緩やかな弧を描くように湾曲し、両の先端と中心部分には赤い魔術刻印が刻まれている。

「ちよつと、それ大丈夫なんでしょうねミスティ」

「あはん、大丈夫よタルちゃん。心配しなくても持つだけで死んだりするような呪いの品じゃないからん。はい、ミライきゅん」

眉を寄せて詰め寄るタルナダを軽くいなし、ミスティーアはそれをミライへと手渡す。

「んん、これが弓？」

見た目と違いそこその重さ。握りしめた感じで言えばそれなりの頑丈な素材を使われているのが分かる。が、矢をかけるための弦がこの弓には無い。

「そうよん。本体はアダマントインとミスリルの合成素材から、頑丈さと魔力の伝導率を追求したものでねん」

なあつ、あんた、たかが趣味にそんな希少石を！？と目を見開くタルナダを置いて続ける。

「それというのも、『マナを用いた非物質武装』の研究の過程で創り出した一品なのよん。といってもマナを自由に運用するなんてことはまだまだ空論の域を出ないから、変わりにオドを代替エネルギーとすることにしたんだけど。握りの上に出っ張り部分があるですよ、それを押しみてん？」

言われた通り確認すれば握りの少し上が半円場に窪んでおり、そこに魔術の刻まれた三日月型の出っ張りが見える。

それは、現代で言うところの銃のトリガーに酷似していた。

ミライはそこに人差し指を引っ掛け、押し込むように力を入れる。

その瞬間。

両端の魔術刻印を繋ぐように黒い光の線が引かれる。

「おお、これは」

「持ち主のオドを用いて初めて完成する武器。銘はまだ決まっていнойよん」

「なによミステイ、普通に凄いやない。非物質武装って、迷宮の^{ドロップ}アイテム発掘品でしか再現できない代物って話でしょ？」

「だからん、キワモノって言ったでしょうタルちゃん？ 確かにあちきが目指した最終地点は過去の遺物でのみ実現している非物質武装。でもあれらが用いてるのはマナか、あるいはオドの超効率的な運用なのよ。あちきが試したのは後者なんだけどねん、出来てみれば運用効率は本物の十分の一にも届かずじまい。一で十の運用を目指したんだけど、どうしても無理なのねん。今の技術でパーペキに再現するのは」

「ミステイ、もっと分かり易く言いなさいよ。あんたの言うことはいつも小難しいのよ」

「もっくん、我が儘ちゃん。つまりねん、とっても疲れるのよ。説明してなかったけど、矢もオドを使って復元するようになってるのよん。冒険者の平均的なオド保有量が百だとしたら、弦の復元には毎秒一オドを消費するの。さらに矢一本は大体十オドの消費。最小でも一回の攻撃に十一オドも消費してたら戦闘どころじゃないでしょう？」

「うっわ、あんた、そんなもんミライ様に薦めてんじゃないわよ！」「んもっ、だから最初にキワモノだっていったじゃないのよん！」

ばしばしと上腕二頭筋を叩くタルナダに、唇を尖らせて腰をくねらすミステイア。

そんな二人を無視したまま、ミライは感触を確かめるように弓を構え、何かに納得したのかひとつ頷き視線を上げる。

「なあ、これ試射できない？」

「もちろん出来ますミライ様！ さあ、こちらへどうぞっ！」

ふんっ、とミステイアを押しより、ミライへと駆け寄るタルナダ。

「あふん。やんなっちゃうわん、見せつけてくれちゃって。すっかり女の子になってるじゃないタルちゃんったらん」

ミライを引き連れ工房の裏にある試験場へ向かうタルナダを見ていやんいやんと筋肉を震わすミスティーアも、すぐにピョンピョン飛び跳ねるようにして後を追いつけた。

工房の裏手に造られた試験場。広さはおよそ十かける二十五メートル、周囲はドーム状の壁（鉄板が打ちつけられたそれはもはや隔壁のような堅牢さ）で覆われており、僅かに差し込む日差しが異様さを際立たせている。

武器職人がこんな物々しい場所で一体何を試すつもりなんだ？と首を捻りつつ、ミライはタルナダに促されるまま、壁際中央へと案内される。

反対の壁際には、ミスティーアが工房から持ってきたフルプレートメイルを着込んだ案山子を設置している。

「——うふん。準備万端よん、ミライきゅん」

案山子から離れ、ミライの横にやってきたミスティーア。

「大切なのはイメージよん。弦の強さ、矢の強度、創るのは全てあ

あなたの魔力なのだから。でもでもやりすぎには気をつけてねん。あまりにも最初の設計思想、本来の弓という武器からかけ外れたものだと再現できないし、それでなくとも莫大な魔力をもっていけるわよん」

説明の言葉を無言で耳に入れ、ミライは己の世界に埋没していく。

体の正面に掲げた弓の中心。

菱形の魔術刻印に右手で触れる。

その瞬間、ミライの体内魔力を燃料に魔術が発動。

親指、人差し指、中指の間に魔力で編まれた一本の矢が生まれる。光すら飲み込むような闇黒色。ミライの内に宿る力の断片。

「……凄い、こんな力強いオドの色は初めて見たわん」

胸筋をびくびくんと震わし戦慄するミステリア。

「……これが、ミライ様の色」

タルナダはどこか恍惚とした表情でミライの横顔を見つめる。

それら一切の些事を捨て置き、ミライは弓を構え、矢を引き絞る。

——弦の抵抗が緩い。矢の強度が足りない。

——これでは何者も打ち抜けやしない。

もっと、もっとと固く堅く硬く。

何者も打ち抜けないような情弱な矢に意味はなく、何者も殺せぬ矢に意味は無い。

それこそが一矢必殺の心構え。

弦と矢から溢れ出すオドの色が周囲の光を浸食するかのよう膨らむ。

引き絞った右手が体の横でぴたりと止まる。
狙い定めるは前方。

そこに在るのはただの木偶ではない、己の敵と認識を仮定。
そこに敵が在るなら、他の一切の些事など無用。
ただ、必殺の意志を込めて――。

――唐突に、埋没した意識が浮上する

が、時すでに遅し。

「あ、しまっ」

呟いた時にはすでに矢は解き放たれた後。
真っ直ぐ、空気の壁を突き破り。

刹那。

矢に内包されたオドが、闇となって爆ぜる。

ずん、と地を揺らすような振動。
視界の真ん中が黒く染まる。

が、それも一瞬。

瞬きの間に色が戻ってくる。

そうして現れたのは、歪な爆心地。

フルプレートメイルなどすでに塵芥と化し、試験場の壁は半壊。さらに衝撃の余波は壁を突き抜け隣の家屋にまで及んでいるようで、何か叫び声のようなものが辺りから聞こえてくる。

これには流石のミライも冷や汗を流す。

啞然としたのはミスティア。

顎をかくんと落とし、目を見開く。

『攻性』の下位魔法の一撃ならたやすく防げるくらいの頑丈な壁。近所では要塞工房とすら言われているそれが、見る影もないくらいに壊れているのだ。

見た目は妖怪のような姿をしているミスティアも、中身はヒトの子なのか。

「あ、あちきの試験場が……、ミライきゅん、あなた一体何したのよん？」

「や、あはは。ちょっとやりすぎた。正直反省してる」

「あふん、やりすぎたって……。それより、ミライきゅん、あれだけオド使って平気なのん？」

「ああ、うん。そう言えば何ともないな」

しかし、初めて魔法らしい魔法使ったけど。

これ、『奥義』とか『技』を使うときの感覚に似てるな。つてことは、あれも魔法に近い現象ということか？

確かに、いくら人外と言えども体から火出したり雷出したりするのは常識だとは思ってたけど。

いや、まあこれに関しては俺も人のことは言えないんだが。

「と、そう言えば随分静かだけどタルナダは――」

考えを打ち切り、先程から一言も喋っていないタルナダの方に振り返り。

「おい。お前に一体何があつたんだ」

呆れた様な言葉が口を突いて出る。

返ってきたのは「……己の未熟さを恥じていました」と、そんな絞り出したような言葉。

「は？」

まるで頭を垂れるように地面に片膝をついてうなだれたまま。

「新たな力に目覚め、少しでもミライ様の頂に近付けたと勘違いしていた己に恥じていました」

え？ 急に真面目？

えっと。どんな反応を返せと。

しかも言うだけ言って黙り込んだ、だと？

振り返ってミスティアに視線で助けを求めようとしたミライだったが、その姿はどこにもなく。よく見れば工房に続く扉の影で揺れ

る緑のおさげ髪。

野郎、逃げやがった。

憎しみに歯を鳴らしたところで意味はなく。

いつものように冗談で流せるような雰囲気もない。

——正直な話、ミライはタルナダが少し苦手だ。

今まで彼は自分のことを強いと思ったことなど一度もなかった。

前の世界では戦う相手が自分より強いのは当たり前。そんなやつらに追いつくために死ぬほど努力したけれど、それでも彼らの持つ本物の強さに届くことはなく。

最期の戦いも、結局は殺しきる前に殺された。

『自分は結局どこまで行ったところで弱者でしかなく、故に何も守れないし変えられない』

ミライの根底。無意識の場所にこびりついた想い。

大事なもののさえ守れたらいいのだとどれだけ叫び声を上げて、その汚れが自身の声を枯らし、心を疲弊させる。

そうして訪れた限界が、たまたまタルナダとの出会いだったというだけ。

そして、全てを無くしてからようやく、映し鏡のように、いつまでもたっても変わらない己の弱さを自覚させられた。

それなのに、彼女は彼を慕った。

彼の持つ強さが本物だと囁いた。

あなたのおかげで私は救われたと、なんの打算もなく、嬉しそうに。

だからミライはタルナダが苦手だ。

まるで、本当に自分が強く在れたのだと、彼らと同じ強者なのだと錯覚してしまいそうになるから。

普段は馬鹿なことをやっているだけの彼女の、時折臭わせる毒にも似た甘い誘惑の言葉を信じてしまいそうになるから。

「……ミライ様」

タルナダがゆっくりと顔を上げる。

ピクリと眉を動かし、視線を向けるミライ。揺れた視線は彼の心中を現したかのように。

しかして、そこにあるのは花が咲いたかのような満面の笑み。

「ん、今度は何だ？」

何時ものように。そっけない振りで、言葉を返す。

「今はまだ、私にはあなたの足元すら見ることが叶いません。ですが、いつか、いつか絶対にこの手を届かせてみせます。だから、その時は私の願いを聞いてくれますか？」

——返ってきたのは、懐かしい言葉だった。

『今はまだ、てめえの足元這いつくばってるだけの弱者だがな、見てろ！　いつか、絶対にこの拳で、そのすました顔ぶち抜いてやる、その時は、精々命乞いして見やがれ！！』

今よりなお弱者だったころの自分。その言葉がいかに滑稽か理解す

らできず、ただただ、進むことしか選べなかったころの話。今はもう遠い日の残響。

だからだろうか？

「んー、そうだな。あんまり無茶な願いはやめてくれよな」

自然、口元が緩むのが分かった。

彼が矢を番える。

光すら拒絶する黒い色は、しかし、見る者わたしにこれ以上の無いほどの安心感を抱かせる。

だってそれは、あの夜の最後に見た、己の赤を力尽くで従えた彼が纏っていた色だから。

感情を全て排した彼の横顔はしかし、その瞳にだけは、隠しきれないほどの『動』の気配が渦巻いていて。

それはまるで、一枚の絵画を眺めているようで。どうしようもないほどに、視線も心も釘づけにされる。

——ああ、そうなのか、と。

あの夜から、初めてこうしてちゃんと彼のことが出来た、
今。

ようやく、気付いた。

なんと間抜けな話だろう。

これが、アリゼルに向けるものと同じ物だと思っていたなんて。
違う、違うにきまっている。

ようやく、気付いた。

ようやく。

ようやく？

なんと、馬鹿な話。

あの瞬間から始まっていたはずなのに、この三日間、私は何を見て
いたんだ？

彼の横顔を眺めながら、どんどんと思考が巡る。

そして、そんなくだらない考えごと。

彼の放った黒い光が搔つ攫っていった。

そこからは、まるで、流れ出した水のよう。

彼とミステイの会話も耳に入らない。

顔を伏せるように、一生の忠誠を誓う騎士のように、彼の前に膝を
つく。

「おい。お前に一体何があったんだ」

と、彼に問われ、口から出てくる己の言葉すら、遠く聞こえた。

それどころではなかったから。

内から溢れる歓喜と恋慕、そして己の全て、————肉体と魂の全てを、彼に無茶苦茶に犯してもらいたい、隷属されたいという被虐心。

もはや、内に留めるのも困難な感情を吐き出してしまわないように。

「……ミライ様」

「ん、今度は何だ？」

いつものように呆れたような彼の表情。

そんな些細な表情ですら、今の私には愛おしくて仕方がない。

「今はまだ、私にはあなたの足元すら見るのが叶いません」

彼の背中にはまるで、天上のように遙か遠く。

「ですが、いつか、いつか絶対にこの手を届かせてみせます。だから、その時は私の願いを聞いてくれますか？」

私の愚かなこの願いを口にする資格を、あなたは認めてくれますか。

「んー、そうだな。あんまり無茶な願いはやめてくれよな」

そう言って口角を緩めて笑う彼。

答えになってない答え。

でも、そう。

今はまだ、この距離でいい。

花開いたばかりのこの気持ちも、未だしっかりと形をなしたもので

はないから。

今少しの間は、私の英雄^{ヒーロー}でいて欲しいと。

ふっと視線を切り。

遠く、こちらに背を向けて先を歩く彼の後を、自分の歩調でゆっくりと追い掛けていく。

俺の射線に入ると怪我するぜ？ と彼はニヒルに微笑んだ（後書き）

シリアスとコミカルの配分が最近分からなくなってたorz
まあ愚痴は置いといて。

タルナダがようやくメインヒロインに昇格。

純粹な恋というには歪んではいるものの、ようやく自分の気持ちに
気付いたタルナダ。

というか、正ヒロイン差し置いて、モブから昇格したタルナダが一
番最初に惚れるとか。……アリゼル

次回もう一話（今話のおまけエピソード）挟んでから入学試験に突
入。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0815u/>

BASARAで足軽大将やっていました

2012年1月14日17時33分発行